

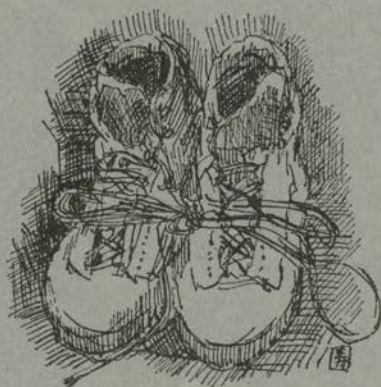


山岳

第七十年

創立七十周年記念号

山 岳



LXX

好日山莊

EDELWEISS
MARK

●東京店

東京都中央区銀座3-5-7 〒104

☎03(561)3600・(567)9031

スキーショップ ☎03(561)0966

●吉祥寺店

東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 〒180

吉祥寺近鉄5F ☎0422(21)3331(内線3318)

●苗場店

苗場国際スキー場 ワールドカップ・ロッジ内

●大阪店

大阪市北区曽根崎上1-47 〒530 ☎06(364)0933(0)

登山プロショップ芳沢ビル1F

スキーショップ マルビル1F

豊中市千里中央“セルシー”1F 〒565 ☎06(833)0123

●三越店

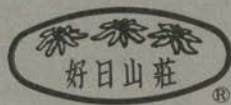
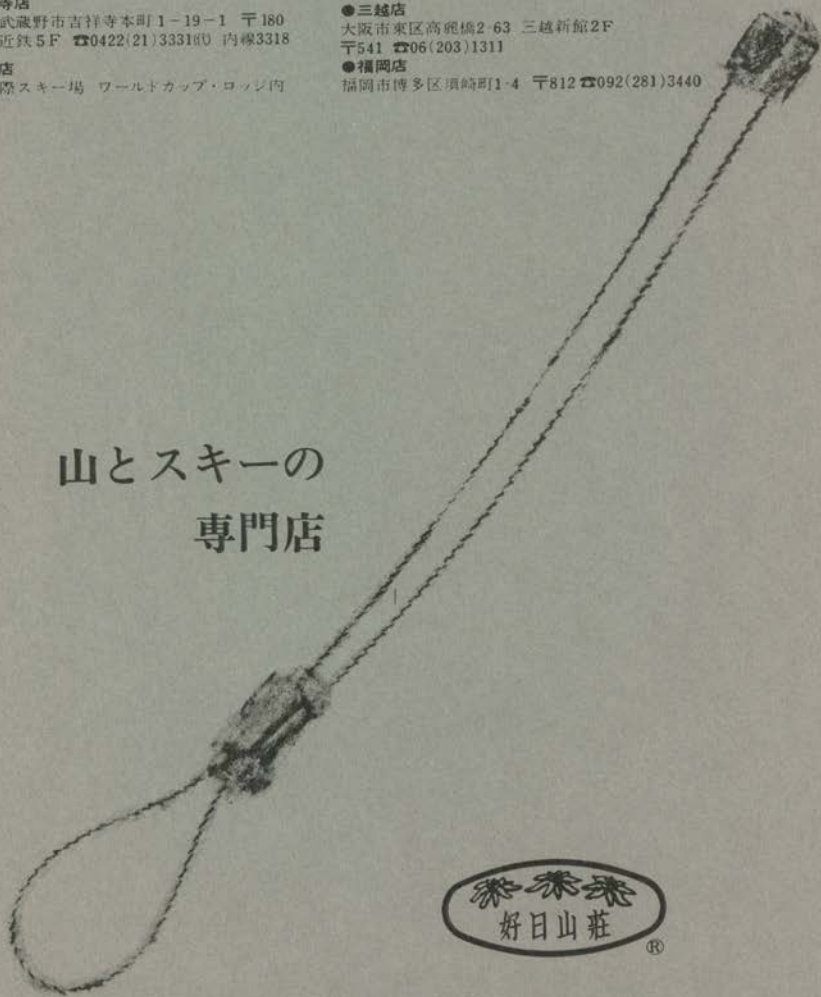
大阪市東区高麗橋2-63 三越新館2F

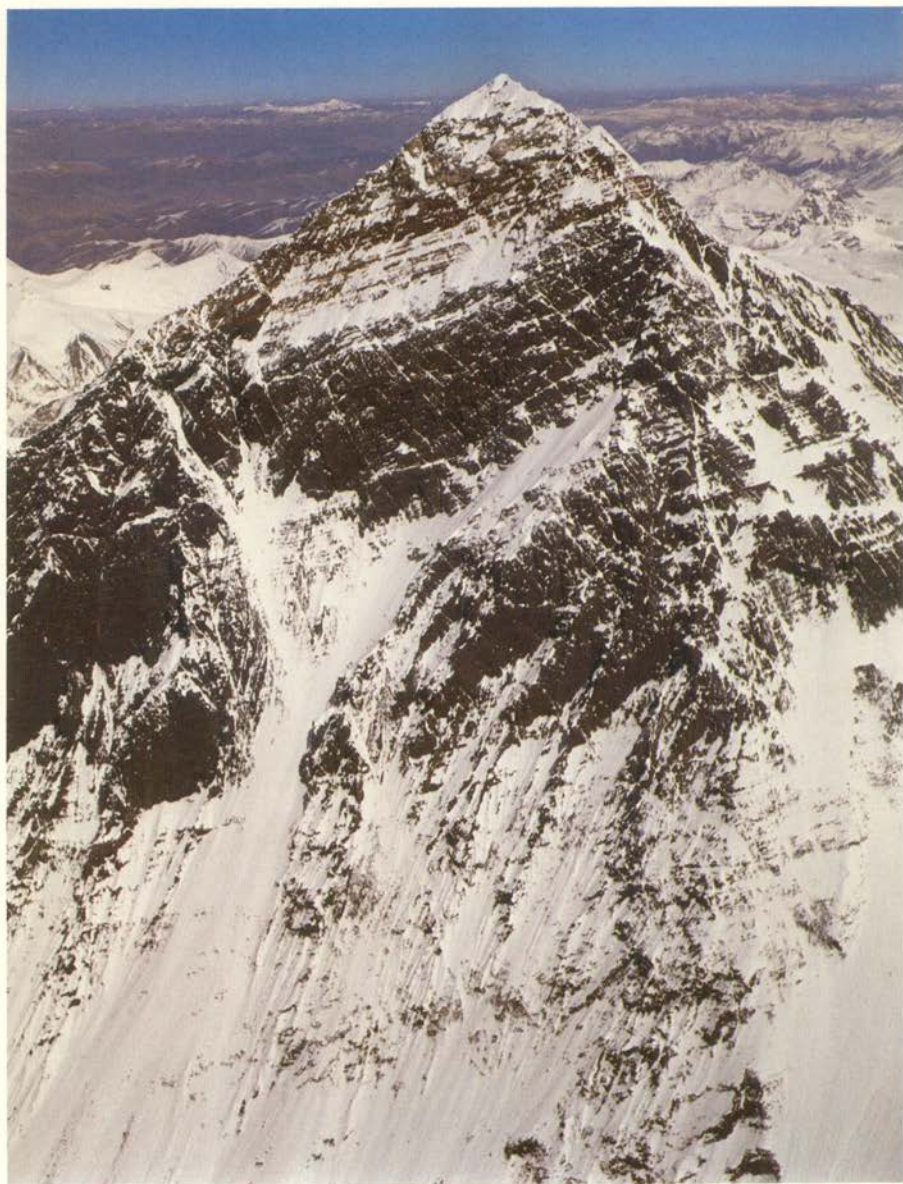
〒541 ☎06(203)1311

●福岡店

福岡市博多区須崎町1-4 〒812 ☎092(281)3440

山とスキーの
専門店





エベレスト南西壁（撮影・山田圭一 「山岳航空写真覚え書」参照）

山
岳

第七十年記念号

山 岳 第七十年記念号 目次 (一九七五年度)

《創立七十周年記念特集》

私における登山の変遷……………	今西錦司	七
山への回想(講演)……………	榎 有恒	七
高所肺水腫について(講演)……………	中島道郎	三
創立七十周年によせて……………	日高信六郎	四
濃霧の箱根にて……………	三田幸夫	五
ノートファークスを訪ねて……………	田 中 薫	五
「六根清浄」をめぐって……………	辻 莊 一	五
日本山岳会での五十年……………	吉沢 一郎	三
上高地山岳研究所改築報告……………	山崎安治	六

※

三枝守博氏(成瀬岩雄) 山岳史懇談会における三枝さん(近藤信行)

中原繁之助氏(津田周二) 伊藤英三郎氏(望月達夫) 山田力氏(望月

追悼

達夫) 小林義正氏(望月達夫) 村尾金二氏(望月達夫) 中司文夫氏

(渡辺公平) 伊集院虎一氏(榎有恒・佐藤久一朗) 佐藤達夫氏(日高

信六郎)

松方三郎著『山で会った人』ほか(中島寛) 『今西錦司全集』(水野勉)

日本山岳会編『高所登山研究』(小原和晴) 日本山岳会編『覆刻 日本

図書紹介

山岳名著『解題』(坂戸勝口) Edmund Hillary: Nothing Venture, No-

thing Win (島田巽)

会務報告(一九七四年七月〜一九七五年十二月).....

英文梗概.....

写真

マナスル、P 29、ヒマルチュリ(表紙カバー)

撮影・山田圭一

エベレスト南西壁(口絵)

撮影・山田圭一

上高地山岳研究所 一枚

エベレストに関するもの 七枚

ダウラギリV峰に関するもの 四枚

K 12峰に関するもの 一枚

テラム・カンリに関するもの 四枚

カンジロバ・ヒマールに関するもの 七枚

チューレン・ヒマールに関するもの 五枚

△追悼V名誉会員三枝守博氏 名誉会員中原繁之助氏 小林義正氏

伊集院虎一氏 佐藤達夫氏 山田力氏 伊藤英三郎氏 村尾金

二氏 中司文夫氏

図版

「ノートファークスを訪ねて」に関するもの 四点

ダウラギリV峰に関するもの 一点

K 12峰に関するもの 二点

テラム・カンリに関するもの 一点

カンジロバ・ヒマールに関するもの 一点

チューレン・ヒマールに関するもの 一点

『栗駒山紀行』とその解題」に関するもの 八点

表紙カット 山里 寿男

私における登山の変遷

今 西 錦 司

表題に「私における」というような、へんな前置きをつけたわけは、いずれのちほどわかることとして、はじめに私は、日本山岳会の七十年にわたる歴史をかえりみながら、それぞれの時期における登山の特徴をとらえ、それによってわが国における登山史の、いわば一種の時代区分を試みておこうとおもうのである。

時代区分といっても、ごく大づかみに分けて、近代登山技術導入以前の前近代的登山時代、それから近代登山技術の導入によって、近代的登山時代にはいり、岩登りや積雪期登山はさかんにおこなわれるようになったけれども、戦争のためヒマラヤまで出かけることの困難であった時代をへて、最後に今日見るようなヒマラヤ時代を迎えるにいたった、という三区分だったら、おそらくこれに反対する人はいないであろう。

しかし、もすこし細かくみて、それでは時代の区切りを、年代的にどの辺にひくか、ということになると、ここは人によって意見のわかれるところでなからうか。たとえば私は、第二時代、すなわちわが国における近代登山のはじまりにかんしては、一九二一年における榎さんの、アイガー東山稜の初登攀を重視したのであるけれども、そのこ

ろすでに国内にあって、横さんとはインデペンデントに、近代登山を志向していた方もなかったとはいえないから、登山ということにあまりとらわれないで、登山史をむしろ世界史に照応さし、第一次世界大戦のおわりをもって、わが国近代登山の幕あけとみなしたのである。

近代登山のはじまりを、第一次世界大戦と結びつけたことには、私なりの理由がある。わが国は第一次世界大戦では連合国側に加担して、ドイツと戦ったのであるけれども、たいした損害もこうむらずに、その間はむしろ輸出の増大によって好況であり、富を蓄積することができたのである。そして、この富の一部が、わが国の近代登山を育成したのであるという、たいそうに聞こえるかもしれないが、なにしろ当時は、ピッケルもアイゼンもみな外国製品を買わねばならなかったし、また冬山は日数がかかり、それだけ人夫衆に払う賃金もかさんだ。つまり近代登山には金がかかった、ということである。したがって、一九二〇年代に勃興したわが国近代登山の担い手たちのほとんどが、親のすね嚙りの学生で、金と暇とにめぐまれた連中であつたということも、これである程度まではうなづけるのである。

第三時代、すなわちヒマラヤ時代のはじまりにかんしても、これと同じような見方が成りたつ。この場合は、第二次世界大戦のおわりをもって、わが国ヒマラヤ登山の幕あけと見なそうとするものであり、私はその幕あきとして、一九五〇年におけるエルツォーグのアンナプルナ第一峰の初登頂、いわゆる「最初の八〇〇〇メートル」を、とくに重視したい。もちろんヒマラヤはそれまでから登られており、わが国からも立教隊がナンダゴットに成功しているのであるけれども、このフランス隊をとくに重視するのは、その成功を確実にした彼らの装備であり、その点では当時の技術革新が今日のヒマラヤ時代を招来した、とさえいえないことはない。

わが国は第二次世界大戦ではドイツ側にまわって、惨敗を喫したものの、朝鮮戦争ブームころから産業界もようやく立ちなおりはじめた。とりわけ化繊工業の優秀さが、ヒマラヤ登山にさいわいした。一九五三年のマナスル隊は、

すでにフランス隊に劣らぬ装備を、用意することができたからである。繊維製品にかぎらず、酸素ボンベも軽くなつたし、トランシーバーもその性能がよくなった。各種のインスタント食品も、ヒマラヤで役立つている。

しかし、ヒマラヤ時代がほんとうに定着するようになるためには、その後の経済成長が進み、一般社会人の収入がある程度まで増加するのを、待たねばならなかった。そして、そこには戦後民主主義もひと役買っている、といえるのかもしれないが、とにかくこうしてわが国のヒマラヤ登山は、いまや各県各地に散在する登山者によって、計画され、組織され、実行されている点で、すでに全国的現象とみてよく、送りだされる登山隊の数も、ここ何年かにわたり、世界各国のなかで一ばん多いといわれている。近代登山のはじまりでは、欧米諸国にくらべてはるかに後れをとっていたわが国が、ヒマラヤ時代のはじまりでは、諸外国とほとんど同時のスタートを切って、ここまで実績をあげてきたのである。一九五〇年代のはじめごろには、想像もつかなかったようなことが現実におこっているのである。

私は時代区分の背景に、政治的・経済的事情を取りこんでみたのだが、もともと登山というのは趣味に属する行為であるから、暇がつくれ、金が使えるのでなかったならば、成りたつはずがない。だから、かりにもし、また戦争にまきこまれるようなことがあったとしたら、もはや登山なんかしておれなくなるといことは、戦争体験者なら十分承知のはずであろう。また、こういう考え方からいうならば、暇と金とに恵まれた時代というのは、登山にかぎらず、魚釣りでもゴルフでも、あらゆる種類の趣味を助長してよいのである。

私が現在をヒマラヤ時代と呼んだのは、わが国登山界の第一線の活動に、焦点を合わせたからであって、ヒマラヤに登る人はいまでも最優秀な登山者であり、エリートである。ヒマラヤに登る人が多くなったということは、こうしたエリートが多くなったということであり、エリートが多くなったということは、登山が全国に普及して、一般登山者層の厚みがふえてきた、ということにつながるのであるまいか。登山史の立場からいえば、世界的にみて、いまはたしかにヒマラヤ時代にちがいないけれども、これだけヒマラヤ登山を盛りあげているわが国の登山界に着目するな

らば、わが国における「ヒマラヤ時代」は、同時にまたこれを「大衆登山時代」と呼べないこともない。

さて、わが国登山史の時代区分というようなことについては、だれかにもすこしきめのこまかい研究をしてもらうことにして、この辺からいよいよ「私における登山の変遷」に、接近してゆくことにしよう。いままで述べてきたことは、いわばこのテーマを取りあげるためのまえおきであり、一種の舞台装置にすぎなかったのだから。私はもちろん、前近代的登山時代に登山をはじめたものである。しかしそのころでも、山登りにはなにほどの仕きたりがあった。まず足には平素はかないわらじをはき、すねには脚絆をまいた。弁当は梅干のはいった三角の大きなにぎりめで、それが焼いてあったことをおぼえている。間食は水砂糖で、嚙まずに最後までなめている、と教えられた。家を出るまえには、頭の上で火打石をカチカチと打った火で、身体を淨めてもらった。私の登山はそうした土着文化の中から、生まれてきたのである。

そのころの私は、夏休みに山岳部の計画で日本アルプスにゆく以外は、もっぱら京都の北山を歩いてきた。北山のいちばん奥まったところにある棧敷ヶ岳などは、高さは一〇〇〇メートルに満たないけれども、往復に十二時間かかるというのが問題だった。バスのまだないころであり、山登りはまず歩くということであった。あるとき私は、芹生峠を越えて丹波路にはいり、魚谷峠をこえてかえってくる、という山歩きをやった。この日も朝早く出てかえりは暗くなったが、このひとつもいただきを踏まない山歩きがいまでも忘れられないのは、そこになにかその後にはじまる私の探検と、結びつくものがあるかのように思われるからであろう。

この山歩きのあとで、山岳部長のお宅を訪ねたところ、そこではじめて『山岳』を見せてもらい、また日本山岳会なるものを知ったので、さっそく手紙を書いて入会を申し込んだ。しかし、会員二名の紹介がなければ入会できない。『山岳』が読みたいなら本屋に注文しても入手できるだろうという、剣もほろろの返事を受けたので、

出鼻をくじかれ、十六歳の少年は入会を断念するのである。

同級生に藤江永次というのがいて、のちに北大へはいり、ニセコで死ぬのだが、彼は早くから関でスキーをはじめていた。やがて西堀栄三郎もスキーをはじめ、私もすすめられたが、スキーは軽薄だといって応じなかった。そのうち新聞で大島亮吉が、スキーで白馬岳へ登ろうと企てたという記事を読んで、翻然と悟り、三高（旧制第三高等学校）へ入ってから私も関の合宿に加わった。関の宿は朝日屋で、ここに慶応も明治も合宿していたが、われわれはとくに明治の連中と親しくなり、彼らからの耳学問で近代登山とはどんなものかを知るとともに、さっそくわれわれもピッケル・アイゼン・ザイル等を買求めたり、山やスキーの本を丸善に注文したりしはじめた。

こうしてわらじ・脚絆の前近代的登山者が、あつという間にスキーをあやつる積雪期登山者に、あるいはトリコンニ―紙の登山靴をはいたロッククライマーに、早変わりしたのだが、その服装もご多聞にもれず、バドミントンスタイルというのか、ソフトをかぶり、チョッキをつけ、マドロスパイプをくわえることになる。もっとも私はニッカーがきらいで、それだけはいまだにはいたことがない。またソフトはゆえあつて、京大三年のあいだも、角帽をかぶらずに、黒いソフトで押しとおした。

一九三六年の白頭山冬季遠征は、探検的要素を多分にふくんでいた。山そのものの広大さもとよりだが、多量の荷物の梱包・発送・運搬といったことや、現地人を大勢ポーターに備ったことなどを、指しているのである。そして、さききのべた時代区分だと、わが国の近代的登山時代は、戦争が終わるまでつづくことになっていたけれども、私にとってはこの白頭山遠征が、私の近代的登山時代のおわりとなるのである。というのは、私どもは時代にさきがけて、ヒマラヤ遠征をねらっていたにもかかわらず、それがなかなか実現しないのに業を煮やして、その翌年は蒙古にゆき、それからのちも満洲や蒙古で、探検あるいは探検じみた仕事を追い求めることになるからである。

戦後のネパール・ヒマラヤも、はじめに考えていたのは、やはり学術探検だった。しかし、ネパール政府のアドバ

イスもあって、交渉に出かけた西堀は、目的をマナスル登山一本にしぼってかえてきたのである。ついで私の参加した一九五二年というのは、マナスルの登路偵察を主目的とはするものの、まだその登頂はしなくてもよいというので、どことなく気楽なところがあり、私の気持からいえばむしろ探検的であったといえないこともない。そのあとで私は、一九五五年の京大カラコラム・ヒンズークシ探検隊のカラコラム支隊に参加するが、これははじめから学術探検を名乗り、戦後国費の補助ももらって海外へでかけた最初の隊であったから、登山とは一応関係ないといえらるのであるけれども、それでもヒスパークスを越え、バルトロ氷河をコンコルディアまでいって来たということが、その後の登山隊に、なんらかの貢献をしていないともかぎらない。

マナスルやカラコラムでのびのびになっていたアフリカの類人猿調査が、一九五八年からはじまる。そして、一九六一年からそれがようやく本格化した。本格化したということのなかには、基地を設け、また、われわれの足として、二台の自動車を所有できるようにした、というようなこともふくまれている。ヒマラヤや大興安嶺では、もちろん私も足で歩いたのだけれども、蒙古では自動車の便がえられないので、馬車や牛車の世話になり、ウマやラクダに乗って旅を重ねた。そのころすでに、アンドリュースやヘディングが、大がかりな自動車隊で、内陸アジアを探検していたのである。借りものでなくて、探検のために使う自分の自動車をもちたい、というその頃からの私の夢が、内陸アジアでなく東アフリカにおいて、実現することになったのだ。

探検には広大な土地が必要である。また広大な土地のひろがりやを相手とするからこそ、自動車のスピードが必要になってくるのだともいえる。そしてこれは、私の縮尺論になるのだけれども、そうした広い土地を、快速でカバーするときには、比較的小梯尺の地図で十分である。むしろ、小梯尺の地図でないと間に合わない、といってもよい。小梯尺の地図でなければ、戦略上役に立たない、ということである。ところでそういう小梯尺の地図上では、よほどの大山脈でもないかぎり、山はどうしても小さくならざるをえない。山は広大な土地のなかのみこまれ、もはやそ

の一部分となってしまっているのです、たとえその山に登ったとしても、それは広大な土地を対象とした探検のなかで一つのエピソードにすぎず、あるいは一つのアクセサリーにすぎぬ、といったことにもなりかねない。

それでも探検の対象となっている土地に、適当な山があったならば、それに登るような計画を立てないかぎり、私の探検にはならないのである。アフリカにだって山がないわけではないから、そのようにして私は、ルエンゾリは失敗したけれども、キリマンジャロ、エルゴン、ハンナンなどに登ったが、この傾向は自動車を用いない探検の場合でも、やはり同じように現われているのであって、それが大興安嶺探検のときのオーコリドイ登山であり、マナスル偵察のときのチュール登山なのである。

ところで、はじめて自分の自動車を持ち、その中にキャンプ用具一式、食料および水を積みこんで、自分の計画どおりに走り、日が暮れば泊まって、翌日もまた走りつづけるということが、予期したとおりたいへん私の気に入ってしまった。そのころたまたま国内においても、家用車ブームのはじまろうとしていたときだから、よしかえったらおれも、自動車の運転を習おうか、とおもったほどだったが、それはおもいとどまることにした。

機械をあつかうのが至って不得手である、ということもあつたであらうけれども、それよりも私自身は運転しないで助手席にいて、しょっちゅう地図を見ながら、走っている車の現在位置を確認する、という仕事を引きうけたほうが、適当でなかるうかとおもったからである。それはまさしくリーダーに課せられた仕事である。あるいは計画の立案者に課せられた仕事である。予定のコースをことなくおわったとき、彼の地図上に鉛筆で引いてあつた予定線が、赤いマジックインクで上塗られることであらう。

地図に赤線をひくことに、興味をおぼえるようになったのは、もうだいたいぶまえからのことである。地図にひかれた赤線を見て、この辺にもう一本ほしいな、とおもうこともあるし、この赤線とあの赤線とを、どのようにしてつないだらよいか、と考えることもある。赤線はあまり粗であつてもよくないし、むやみに密であつてもよくない。地図の

一隅だけに赤線がかたまっているというようなのは、むしろみにくい感じがする。地図にえがかれた赤線は、行動の忠実な軌跡であるにもかかわらず、私はそれを芸術視しようとしているのであるか。赤線をひくために行動しているといわれたのではちょっと困るけれども、赤線は私の行動のモチーフでありうるとともに、またそれをコントロールすることのできるものでもある。たとえば奥美濃に、私のまだ登っていない若丸山という山があるが、赤線の関係上、私は美濃側からでなくて、越前側からでなければ、この山に登ろうとはしないのである。

さて、私は時代区分でいうなら、戦後にはじまるヒマラヤ時代の幕あけに、ちよつと顔をだした。その後もヒマラヤへゆく気があるなら、京大学士山岳会(AACK)の計画したエクスペディション、チゴリザ、ノシヤク、サルトロ・カンリの、どれにでも、隊長となって参加することができたかもしれないけれども、私はアフリカに執心していたから、その後はついにヒマラヤへ出かけることのないままに、老齢をむかえることとなった。いまではもうヒマラヤのキャラバンに耐えることさえ、おぼつかないであろう。しかし、ヒマラヤ時代だといっても、ヒマラヤへ出かけるものはなお少数で、登山者の大多数は国内の山に登っているのである。私も国内の山へ登っていたらよいのではないか。

けれども、一度探検が身にしみついた男には、もう一度バドミントンスタイルの昔にもどれといっても、もどりようがないのである。そうかといって、ヘルメットをかぶったアフリカスタイルというわけにもゆかぬので、ハンティングをかぶったり、ベレーをかぶってみたりしていたこともあったが、私はいつしか無帽になった。山へ登るときは帽子がわりに、タオルで鉢巻きをする。ひところはエクスペディションスタイルといって、乗りものの中は平服にスーツケース一つ。そのスーツケースの中に山靴はじめ、登山用品一式をつめこんでいたこともあったが、いまでは重量を分担するために、左の肩からショルダーバッグをさげ、右の手でビニールバッグ——観光客がだれでもさげているあの土産物入れのバッグだが、本名をなんといいのかわからない——をさげること、ほぼ定着したようである。

これを観光スタイルとでもいおうか。

そのスタイルで山に出かけるのだが、できることなら家から友だちの車に乗せてもらおう。この年まで山に登りつづけていると、生憎くなことであるが、もう近廻りには登りのこしている山がほとんどないので、いきおい遠出することになる。どんな田舎でも、たいていの道はありがたいことに舗装されているから、車ですいすいゆける。車だと広い地域がカバーできる。私は助手席にのって、地図をひろげている。その地図は小梯尺の二十万分ノ一である。それを見ながら現在位置を確かめ、進路を定めている。こうなるともはやこれは探検していたときと同じである——ただその場所に、アフリカのサバンナと国内というちがいが、あるというだけで。

赤線のもつ比重も、多少変わってきた。地図上の赤線は、はじめは五万分ノ一図を対象としたものだった。五万分ノ一図をみて、記入された赤線の配置が、妙をえているといって悦に入っただが、それがこのごろは、どうやら二十万分ノ一図に、移ってきたようだ。登山用には二万五千分ノ一のほうがよい、といっだされていることをおもうと、たしかにこれは逆行である。登山のために、しだいに自家用車やタクシーが使われだしていることは、事実であるけれども、登山だけが目的なら、道中は最短距離をとったらよいのだ。それを、わざわざ迂回して、どうしてもここを通らないことには赤線が乱れるなどといってみても、納得してくださる方は少ないであろう。

それでいて、もちろん山にも登りたいのである。しかし、山の数は国内だけでも無数にあって、なんとも始末にわるい。私の家の応接間には、国土地理院の「一等三角網図」がかけてあるが、それは、全国にわたる一等三角点本点のうち、せめてそのあるめぼしい山だけでも登りたい、というこのごろの私の願望を現わしたものであって、すでに登った山には、赤丸がつけてある。ところで一等三角点というのは、その補点を入れても、だいたい五万分ノ一図一枚に、一つぐらいの割りでしかないのである。だから一等三角点を一日に二つもかせごうとおもえば、どうしても車の世話にならざるをえない。

そういう山行の一例をあげると、昨年の十月、私どもは秋田支部のご協力をえたうえ、第一日は長駆して津軽の岩木山に登り、第二日田代岳、第三日森吉山、第四日太平山と、一等本点のある山四つに登ってきた。去る五月の連休には、こんどは岩手支部のご協力をえて、岩手山は天候の都合で断念したけれども、その翌日には物見山、翌々日には五葉山、室根山、束稲山ヌズネと、再度一等本点のある山四つに登ることができた。二十万分の一図の「弘前」「秋田」「盛岡」「一ノ関」などは、これでもうひと押しすれば、赤線が仕上がるというところまで来た。

いまはまだヒマラヤ時代であるから、若い人たちはどしどしヒマラヤに登ってほしい。しかし、中年から探検に踏みこんで、山と探検のあいだをやり動いてきた私が、いまや最後のステージで、国内にいなながらも、こうして山と探検とを、もう一度結びつけたような行動をとることができているというのは、私にとってこの上なくしあわせなことである。それが、私のような過去の経歴をもったもののみ許されたしあわせでないことは、私と行動をとっている何人かの仲間のいることでわかるのである。私はさきにヒマラヤ時代は大衆登山時代であったが、同時にこれは登山の多様化時代であり、私たちのような登山もまた、この多様化の一つとして現われた、登山の一つの新しい型式であるのかもしれない。

(一九七六・五・二二)

山への回想

槇 有恒

近代的登山は、アルプスに始まると言われていますが、ド・ソシュールが、一七八六年、モンブランに初めて登ったときとか、またオーソドックスな登山史では、アルフレッド・ウィルスが、一八五四年、ヴェッターホルンに登ったときをもって、この新時代の発端としております。この両者の登山の動機は、それぞれに違っておりますが、十九世紀の科学的思想は自然と人間の二元的な対立関係に立つ見方の強いときでありましたので、黎明期のアルプス登山では、未踏の高峰に初登頂するということは、人間の自然に対する勝利として重視されたものであったらうと思われま

す。

アルプスは初登頂の華々しい時代を迎えましたが、未知の境地とて探検的登山でもありませんでした。したがって用具も技術もほとんど開発されておらず、登山者の夢と努力とを偲ぶとともに、その健闘に打たれるものであります。その頃のスケッチや版画に残っている登山のありさまは興味深いものがあります。例えばド・ソシュール一行はクレヴァスに落ち込むのを防ぐためにめいめいが長い棹を持って氷河の上を登っています。またツェルマットの山岳博物館に

はウイムパーがマッターホルンに初登頂したときに使った靴や、悲劇の切れた縄もあったと記憶しますが、靴の底に打った釘は簡単な夜光釘にすぎません。こんな装備で今日の登山者は雪線以上の山や険しい岩壁を登れるであろうかなどと思いました。私がアルプスに登ったのは、今から五十年あまり前のことですが、その頃、アルプスはすでに山小屋も整備され錚々たるガイドたちに導かれて、安全に且つ十二分に登山を楽しむことができました。靴の釘にしても登山専用のクリンケルがあったり、新しくイタリアで作られたトリコニーなども出始めていました。また氷壁やクラストで使うかんじきもありました。しかし、ガイドたちは決してかんじきを使いませんでした。例えばメンヒから西へ落ちる氷河が、途中で急に落ちて、文字通りの氷壁になります。ノッレンと言われる悪場ですが、ここはエミール・ストイリの得意の舞台で、特製の柄の短いピッケルを振り上げて足場を切ります。そのわずかな足場に、彼の足は吸い付いたように確実に着きます。私は百パーセントの安心感をもって彼に続くのでした。アルプスのガイドたちは決してかんじき（シュタイグアイゼン）を使いませんでした。何か自分たちの使う用具に限界を設け、新規な便利なものへ移ることを潔しとせず、自力に対する確信を守っているように思われました。ガイドが岩壁にハーケンを打って登るのに出会ったことはなかったように思います。その頃でもあまりに人工的な登山技術に対してテクニカル・パーバリズムと非難する声もありました。

アルプスの初登頂の時代が終る頃から、登山はより難かしいルートとか、今まで顧みられなかった岩壁の登攀を求めようになり、同時に世界の高峰へと向うようになりました。ただヒマラヤなどは、そのスケールの大きさから必然的に、いわゆるエクスペディションの規模をとる大掛りなものとなりました。戦後、ネパール国の登山者へヒマラヤの解放などにより、英国隊のエヴェレスト登頂などを始めとして一段と盛んになりましたが、殊にわが国登山界の海外遠征の活況とその技術、装備、食糧などの著しい進歩はまことに目覚ましいものがあります。このことはとりもおさずわが国登山界累年の訓練研究のいたすところでもあり、その世界の舞台への成長を示すものであります。

さて、御承知のごとく、何人が何時、如何なる登山をしたかという業績は世の高い評価を受けます。このことは未登の高峰への不撓不屈の健闘を讃えますとともに、その業績は他の人々にとっても可能性を実証するからと思いません。概して申すならば、私たちの生活は絶えず前進し更新するものと見るかぎり、登山においての勝れた記録も理解され尊重されるものと思います。しかしその業績の値打は、その登山者にとって外的な功名手柄の評価も貴重なものであるには違いありませんが、心底に把握する幸福は、厳しい登山に己れの全力を傾倒して得た自信力ではないでしょうか。

ひるがえって思いますのに、登山におきまして、未知の山頂に立つとか、未登の岩壁に登攀するとか、あるいは目指した山の頂に立つとかは、大きな目的とも言えましよう。しかしもしこの目的への希求だけが登山のすべてであると申すならば、山との関わりを忘れたものと言えましよう。私たちの経験するところでは、登山の興味とか楽しみは、その経過し豊かに変化する自然の中に、しかも手近かに存在し語りかけられ語り合うところに無限の魅力があると思います。むしろ登山の性格とか動機の主たるものは各自の内的な嗜好や、能力の違いを認めながら、その目的を自由に選ぶことができ、行動にも独自性をもつことができることです。このような性質から何人にとっても入りやすいスポーツでありまして、その楽しみ方も不羈自由であります。登山の方法にしても初歩的なもので満足することもできれば、また高度の技術を喜ぶ途もあれば、自然科学や芸術的に観察する人もあります。殊に近來、余暇が一般に定着するとともに健康増進や身心鍛錬の場としてとか、都市化に伴う自然環境からの疎外に対する反省とか、厳しい登山行動を通して自己実現を求めるとか、まことに多種多様であります。

しかし、どのような登山でも必ず自然の理法を守り順応して行わなければならないことだけは一貫した掟であります。このことは、登山は終始自然との関わりをもつことでありまして、他の競技との違いでもあります。この自然との関わりは、登山に際しては、登る山の科学的な知識とか、登るときの気象上の要因とか、または登山者の医学上の

知識とか広汎な知識を必要とします。これらの基礎的な知識の上に更に年季を入れて登山技術を修練することによって、始めて自分の力量に相応しい安全な途を無理なく選ぶものと思います。これらの山との関わり方は主として論理的なものでありますが、老年の私が生涯をかけて、この上もなく山を愛し山に親しむのは何がそうさせるのでありましょうか。運動による健康の喜びを味い山の純粋壯麗な自然の懐に抱かれての感動は何時も清新であります。そしてこの原生的な自然に囲まれるとき、心は世俗的な一切の境地から解放され自由となります。そして自分もこの自然から分離した存在でなく、その一員としての発見と体験であります。言わば山と心の交流による幸福の時であります。

この情緒こそ絶えず山へと私を駆り立てるあこがれであり、山との深い関わりなのであります。繰り返して通る峠路も、幾度か登る山も何時も新しく語りかけ、活力を与えてくれます。山で亡くなった深田久弥さんは『日本百名山』という立派な本を著わしておられますが、百といわず何と美しい山々にわが国は恵まれていることでしょう。山好きにとって故国の山の大切なことは素より、アルプスもヒマラヤもロッキーもみなあこがれの山々と言えましょう。

先年、ヒマラヤのマナスルに登りましたとき、帰途カトマンズで、思いがけない盛大な歓迎をネパール国官民各位から受けました。そのとき私が謝辞の終りに語った言葉を、レッツヒェンベルクというドイツの登山家が、その著書の中に記していると、中央大学教授福田宏年先生から伺いました。それは「隊長のマジが下りてきてこういう挨拶をした。われわれ日本人は山を征服する、戦いとるという考えはしない。われわれは山と合一するんだということを隊長はいつたけれど、われわれヨーロッパ人には感銘深い言葉である」と。この自然との親密な感情は何も私にかぎったものではありません。むしろわが国一般の精神的風土の一面であるように思われます。富士山に何万の人が登っても「日の本のやまとの国のしずめともいえず神」なのであります。また「一切衆生悉有仏性」という言葉があります。が、天地宇宙に存在する一切のものは対立でなく一であるという感情であります。これに近いと思われる感情をゲーテも『ファウスト』の中で語っております。「一切を抱くもの、一切を支えるもの、それはお前をも、私をも抱き且

つ支えているではないか」と。また近くは歴史学者トインビーは「宇宙の背後にある究極的な存在への愛」を説いています。みな自然と情意的に一つになる体験であり、深層にあって共通する人間性と思われれます。

この体験こそ山岳愛好者をしてオロマニアとまで呼ばしめる魅力であり、また私にとって生活の大きな部分となっている不可思議の世界でもあります。以上、私見を御披露したに過ぎませんが、登山にはいろいろと思想内容が秘められていると思うものであります。

粗雑なお話に終り恐縮ですが、御清聴ありがとうございました。

高所肺水腫について

中島道郎

第一章 はじめに

近年ネパールヒマラヤをはじめ、世界各地の高山に登る人達の数が増加して来ているが、それにつれて高地で不慮の死を遂げる人の数も増えて来た。ことにネパールでの「トレッキング」がはやって来てからは、その数はもはや数えきれないほどになってきたと云えそうである。場所が場所だけに、彼等の死因の多くは不明のままに処理されてしまっているが、そのほとんどが肺水腫によるものであるとしてまず誤りはなからう。また死亡に至らずとも、幸いにもその一步手前で危く免れることが出来た肺水腫患者の数は死者の十数倍、あるいは数十倍に達していよう。ところがこの高所肺水腫は、何もヒマラヤやアンデスのような、遙かな海の向うの土地での出来事ではなく、日本内地の山でも毎年数人の発症があることが、最近報告されるようになった。そこで、そのような実例を種々の報告例から紹介し、高所肺水腫の病因、症状、対策法などを検討することから、本症が我々の身近かで起り得るものであることを知

っていただき、その発症防止のために少しでも参考になることがあれば幸いと考え、ここに小論をまとめてみた次第である。ここに肺水腫としたが、これは肺浮腫も同義語である。浮腫とは細胞と細胞の間(細胞間隙)に体液が貯溜する状態を指すが、肺以外の組織や臓器に起った場合は、浮腫と呼ぶのが普通で、たとえば脳浮腫というふう言う。脳水腫といってもよいのであるが、特に肺だけ肺水腫と慣用される理由は、おそらく肺の場合は体液が肺胞細胞間隙に止まらず、更に体外である肺胞腔にまで溢れ出てしまうことが多いので、そういうニュアンスをふくめての表現かと思われる。

なお小論の主旨の一部は昭和五十年十月八日、大阪毎日新聞ホールにおいて催された日本山岳会七十周年記念講演会の席上で述べたものである。

第二章 症 例

症例(一)

三十歳男性。シエルパ。発症・ヤルンカン峯C I。五九五〇メートル。発病・一九七三年四月九日。朝。それまでC IとC II(六四七〇メートル)の建設に従事していたのに、急に顔がむくみ目まいがして歩けなくなった。夕方。激しい咳と血を混じた痰。時々意識混濁。排尿朝一回あったのみ。脈搏一〇八。血圧一四二/五六。体温三七・八度C。夜十一時、呼吸困難強く半起坐位(上体をやや高くしてねた姿勢)をとる。両胸背側下方で小水泡音聴取。酸素毎分一ノ吸入。デキサシエロソノ十mg注射。症状やや好転。翌四月十日、抗生剤(セファメジン一g)デキサシエロソノ十mgを含む電解質液一〇〇〇ml点滴静注。酸素毎分〇・五ノ吸入で尿量は一八〇〇mlに達し、食欲も出、胸部小水泡音は消失、意識もかなりしっかりして来た。十一日。ジュラルミン梯子にくくりつけてBC(五三一〇メートル)に下山。十二日、自力歩行出来るまでに回復。一週間BCで休息した後、C IからさらにC IIへの荷上げに従事した

が無事であった。五月八日、C III (七〇〇〇メートル) からさらにC IV (七五五〇メートル) への荷上げの途中再び同様な症状を起したので引き返し、C III から酸素吸入させつつ九日はC II へ、翌十日BC へ下山させた。BC で六日間休息した後、再びC I 撤収作業に従事出来た。

本症例に見られた症状は、倦怠、めまい、悪寒、発熱、咳、痰、呼吸困難、関節痛、尿量減少等で、頻脈、呼吸促進、胸部小水泡音聴取を認めた。時々意識混濁が起った。あふれるような大量の水様泡状の痰をガラガラ云わせながら喀出するというようなことはなかったと記載されている。それに対して、酸素、抗生剤(セファメジン)、皮質ステロイド(デキサメタゾン)、強心剤(ジギトキシン)、利尿剤(ラシックス)、ソルコセリル、電解質液、糖液が投与され、さらにBC へ担ぎ下ろされた。BC の高度は約12気圧であったが、そこでは何もしなくとも休息だけで病状は回復している。

症例(三)

自験未報告例。四十三歳日本女性。大学助教授。一九七五年九月三十日、学術調査の目的でルクラ(二七〇〇メートル)へ飛行機で行った。そこから約一五キロメートルのジョサレ(二八〇〇メートル)まで三日かけて調査をしながら徒歩で行き、十月四日、そこから一気にクムジュン(三七五〇メートル)まで歩いて登った。途中三九〇〇メートルぐらいの峠を越えねばならなかった。翌日は一日休養をとったが、食欲なく、夜になって二回嘔吐した。翌六日、朝から元気がなく全く食事をとらなかった。夕方より様子がおかしくなり、三九度Cの発熱を来たし、クムジュン・ヒラリー病院の下クターに往診してもらったところ、背側に水泡音がきこえるから直ちに下山さすよう忠告された。七日午前二時意識混濁し、朝六時シエルパに背負われて三八〇〇メートルの高度にある飛行場へ向い、八時飛行機に乗せて、九時、カトマンズの病院(二三〇〇メートル)へ運ばれた。機内では酸素吸入をうけたが、病院では大した処置は受け

ることなく、翌八日正午になって意識が回復した。九日には普通に食事が出来るようになり、十三日退院した。十一月一日までポカラ（八〇〇メートル）付近の、次いで再びカトマンズ付近の調査に従事した後、十一月二十四日帰国した。筆者の外來診察室へは十二月八日に見えたが、臨床検査所見は次の諸点を除いて正常であった。すなわち、血清カリウム量が 5.0 mEq/l で正常値の上限スレスレであった点、動脈血中の酸素分圧が 76.5 mm Hg で正常値よりは大体 10 mm Hg ほど低値であった点、ならびに脳波上、双極誘導で 6% 程度の徐波が認められた点などである。これらの諸点の意義についてはあとで検討を加える。

本症例はいわゆるヒマラヤ・トレッカー達によく見られる高所肺水腫の典型である。ヒマラヤでは海拔 3300 メートルぐらいから発症した報告もある。これはたまたま飛行場の近くで発症したため事なきを得たが、そうでなければ大変なことになったろう。

症例(2)

十九歳。アメリカ白人男性。一九七二年一月、北カリフォルニア州の海岸町からコロラド州の海拔 2700 メートルにあるスキー場へ飛行機で行き、翌日一日中精力的にスキーを楽しんだところ、その翌日の朝から意識が朦朧として来て、翌三日目には昏睡状態に陥った。呼吸数は減少し、チアノーゼを呈し、針で突いても反応を示さない。救急車で毎分 $7\frac{1}{2}$ の酸素を吸入させながらデンバーの病院へ運んだが、着いた時には意識を回復した。脈搏数 120 、血圧 $120/60$ 、白血球数 $17800/\text{mm}^3$ 。動脈血酸素分圧 48 mm Hg 、胸部X線上両肺下野に細かい肺泡浸潤像撒布を認めた。約二四時間酸素吸入を続行したところすべて正常化したので三日目に退院した。二年後の一九七四年一月、同じスキー場へ今度は車で行ったが、到達して四八時間後に再び同様症状を呈して来た。救急車で前回とは別の病院へ運ばれたが、車中で酸素を吸入しているうちに意識は回復した。白血球数 $16600/\text{mm}^3$ 。動脈血酸素分圧は 53

mm Hgであった。退院後同じスキー場へ行き、すぐにはスキーをせず、三日間ホテルで過した後、スキーを始めたところ今度は症状が起きなかったという。

本症例は、呼吸困難、咳、痰という呼吸器症状が出現する前に、いきなり意識障害という神経症状から発症している点の特異であるとされている。(その点はさきの症例(3)も同様である) 発症高度が僅か二七〇〇メートルであること、再度同じ所で同じように繰返し発症していること、しかも激しく熱心にスキーをやって誘発されていること、などは注目すべき特徴である。後述するように、一般論に照らせば本症例は高所肺水腫の特殊例ではなく、むしろ典型例といふべきかも知れない。

症例(4)⁽³⁾

三十歳。日本女性会社員。一九七二年八月、約三十kgの荷物を負い、雨の中を木曾福島から駒ヶ岳へ登った。初日は四合目泊。第二日は海拔二九〇〇メートルの中岳に幕営したが悪寒、息切れ、呼吸困難が始まったため夕食をとらずに就寝した。この時、軽い咳と痰があった。夜中二、三回息苦しかったことは憶えているが、以後のことは全く憶えていない。翌朝同僚が、意識なく口唇にチアノーゼを来たしている彼女に気付き、救急隊に頼んで、麓の病院(海拔七〇〇メートル)に運び降した。病院で酸素吸入をうけて間もなく意識は回復した。入院時脈搏数一〇八、呼吸数三六、血圧一一〇/五八。体温三六・七度C。意識混濁し、口唇にチアノーゼ。両肺全野に湿性ラッセル音聴取。動脈血酸素分圧六六mmHg。胸部X線左上肺全野、右肺下野に綿状影を認める。心電図上P波尖鋭化、ⅢV_FでT波逆転あり。咳は軽く痰はない。第二日目には意識は正常となり、第二日目には酸素吸入をやめた。一週間後の心電図上T波逆転がV₁、V₂、V₃まで出現したという記載は注目される。

第三章 症 例 の 検 討

中村等⁽⁴⁾は高所肺水腫の臨床的診断基準として次の三点を条件としている。いわく、(一) 発病二、三日前に三〇〇〇メートル以上の山に登った。(二) 急性呼吸器症状(呼吸困難、咳、痰しばしば血痰)、循環器症状(心悸亢進、心電図上の変化)、消化器症状(悪心、嘔吐など)、脳症状(頭痛、意識障害、傾眠、譫妄など)のあるもの、とくに呼吸器症状は必発とする。(三) 胸部X線像でいわゆる肺水腫様の陰影を呈するもの、というわけである。また彼等によると、メノン⁽⁵⁾(Menon)は、咳、息切れ、胸部不快感、胸部捻髪音ありX線像で確認したもの、という基準を作っているということである。病院にいて、運び込まれた患者だけを診断する立場の医師としての診断基準はかくあるべきであらうが、現地で患者を診る場合にはそんな悠長なことは言っていられないし、第二章で見たように高所肺水腫の症状は多彩であって、この三点に合わないものは「高所肺水腫」と診断すべきではないなどとはとても言ってはられない。すなわち症例(四)にみるように、呼吸器症状を全く欠いた肺水腫例もあり、それは決して例外ではなく、むしろそういう症例の方が多いのではないかとも思われる。つまり高所肺水腫の症状は非常に多彩であるということをしかりと認識していることが大切である。

それはつまり、こういうことであらうと考えられる。すなわち、われわれが普通「高山病」とか「高所障害」と呼んでいる病気は、その中に「高所腎不全」とか「高所脳浮腫」とか「高所肺水腫」とかをそれぞれ独立してふくめていいるというものではないということである。もっと詳しく述べてみよう。われわれは高い所に登ると息が苦しくなり、激しい呼吸をするようになり、脈搏数は増え、胸はむかついて何も食べたくなくなり、頭痛や不眠に悩まされる。しかしこれらはほとんどが自覚的な症状であって他人にはわからない。ところが同時に顔が円く膨れ上り、眼もふくれて目が細くなる。排尿回数は極端に少くなる。というようなことは他人の誰にでも目につくことである。そしてこ

の高所に登ると顔が膨れて尿が少くなるということはほとんど例外なく誰にも起ることであって、これが住吉等⁽⁶⁾のいわゆる「高所反応」である。高所において体内の酸素分圧が低下すると、細胞一箇一箇の働きが変化して来て、おそらくは細胞膜の水分透過性がよくなるのであろうが、細胞の中の水分（細胞内液）が細胞の外へ滲み出てきて、細胞と細胞との間の隙間（細胞間隙）に溢れてくる。これがつまり浮腫と呼ばれる現象である。細胞間隙の状態によって多少臓器間に差はあるものの、まず体中全体に浮腫が起って来るものと考えるのが妥当であらうから、高所で顔が膨れて来たなら、これは顔面ばかりでなく、脳にも肺にも或は胃腸にもどこにも浮腫が来ているのだと判断すべきである。あとは量の問題で、一定限度以上に細胞間隙に水が貯って来ると症状が出て来る。その際臓器によって多少の現れの強弱の差が起るから、脳症状が主として出たものを脳浮腫といい、呼吸症状が激しいものを肺水腫と呼ぶのである。脳浮腫と肺水腫に本質的な違いはないし、一方が他方の原因となるものでもない。すべては同時に進行しているのである。だから肺水腫に意識障害はほとんどつきものであるし、また呼吸器症状を全く現さないで脳症状だけの肺水腫とというのがあっても不思議ではない。また肺水腫が起つたため低酸素状態が増強され、そのため脳の機能が低下して意識が障害されるのだという風にだけ考える必要もない。繰返しになるが、高所肺水腫は「高所反応」の程度の進行した状態のことであって、頭痛は脳浮腫の反映であるごとく、咳、胸痛、息切れは即、肺水腫の反映と考えてほぼ間違いない。

そういう次第であるから、高所肺水腫の症状は、いわゆる「高山病」の症状そのものであって、全く多彩であるから、心不全の患者に見られる典型的な肺水腫の症状と同じでない場合がある。後者にほとんど必発的に見られるところの、ガラガラという音と共に喀出される、水のような泡立った大量の痰というようなことは高所肺水腫には見られないことが少くない。一応中村等⁽⁴⁾は日本アルプスでの発生例から、自覚症状として、食欲不振、吐き気、咳、痰（時にピンク色痰ないし血痰）、胸痛、息切れ、呼吸促進、空気飢餓感等をあげ、他覚的には、顔面浮腫、チアノーゼ、意

識障害（時に昏睡）、脈搏数増加、呼吸数増加、三八度C程度の発熱、白血球增多、両肺野水泡音聴取等があると述べている。

インド陸軍のシング(Singh)はさきの中印国境紛争に際し、インド側に発生した肺水腫患者三三二例を観察して、その症状を次のように記載している。

急性高山病型。倦怠、呼吸困難、空咳きなどを症状としたもので三三二例中二六一例はこの型であった。

潜伏進行型。前兆として倦怠、ふくらはぎの筋肉痛、頭痛、不眠、不安、亢奮などがあり、ついで呼吸困難、空咳き、心悸亢進などが来るもので、あまり目立たないので見過がれていたというのも少なくない。普通に仕事はしていたが、二三日前から夜中あるいは安静中でも息苦しいことがあったという。急性呼吸性型。進行性の咳と呼吸困難に特徴づけられた急性発症。顔面にチアノーゼ。両側肩甲骨の間に水泡性ラッセル音聴取。極急性型はショック状態に陥り、喘息様のゼレゼレという呼吸音が全肺野に聴取される。こういうタイプは生命の危険がある。

腎不全型。少数例であるが尿量の減少するタイプ。

脳症型。これも稀であるが、神経症状が主症状となるタイプ。めまい、幻覚。周囲に対して無関心になる。次いで意識混濁に至る。その間のことは全く記憶に残らない。

以上のような分類は、事の本質とはあまり関係がない。要するにいわゆる高山病のいろいろな症状そのものであるといえよう。

シングは肺感染症、つまり肺炎の徴候すなわち発熱や白血球增多を認めないと言いきっているが、中村や北原など、本邦発症例の報告ではその多くに発熱や白血球增多を認めている。

シングは感染の存在を否定し、メノンにはそれはストレスによるものであって、感染が肺水腫の引き金になるのではないとしている(中村)ようであるが、そう断言してよいものかどうか、私には自信がない。呼吸困難や痰や咳や胸

痛があり、発熱があり白血球增多があれば、それは肺炎そのものの症状である。肺水腫と肺炎とを現地で鑑別することは困難というよりは不可能に近い。そういうわけだから、フルタド (Turado)⁽⁸⁾ が、一九三七年、南米高地住民の十五歳の少年がリマ市へ遊びに行つて、一週間後に村に帰つて来たら発病した肺炎のような病気に對して、これを肺水腫であると診断し発表してから、一九六〇年ハウストン (Houston)⁽⁹⁾ が同様の症例について報告し、これを高所肺水腫と呼ぶことを提唱するに至るまで、誰もそれを「肺炎」と信じて疑わなかつたのも無理はない。かくして、高所肺水腫ということが常識となつてゐる現在においても、現地でそういう患者を見た場合、多分高所肺水腫と診断して間違ひなからうが、それでもなおかつ用心のため抗生剤の投与を考慮しておく方が安全であらう。

高所肺水腫が発症する高度についてしらべてみると、出典は明かでないがシング⁽⁷⁾によれば、ペルーアンデスでは三六〇メートル、ヒマラヤでは三三〇メートル、北米では二六〇〇メートルで発症してゐることである。症例は北米コロラド州二七〇〇メートルで発症した例であり、症例は日本の二九〇〇メートルで発症した例である。ここに見られるように、赤道に近い地点では発症高度が高く、北へ偏るにつれて、その高度が下がつてゐるのは、注目すべき現象である。シングやハウストンは、それは肺水腫の発症が寒冷と関係があることの証拠だと説明してゐる。北へ行くほど寒くなるから発症高度も低くなるのだというのである。若しそうならば季節変動も認められるはずで、冬期には肺水腫はより低い高度地点で発症するはずではなからうか。ところが誰もそういった事実を指摘したものはない。ここで私はテリス・ムーア (Teris Moor)⁽¹⁰⁾ の説を思い出すのである。彼によれば、地球は赤道部が膨らんだ形の回転楕円体であるが、地球をとりまく大氣の層の形は大地の形より更にいびつで、赤道上の大氣の層の厚さは極地上の大氣の層より厚いのだという。当然大氣圧は赤道上で高く極地で低い。ということはずまり、極に近い山の上は、同じ高さの赤道に近い山の上よりも氣圧が低い。換言すれば、高度の影響は北へ行くほど強くなる。彼のこのような説が正しいとすれば、南緯一〇度のペルーアンデスの三六〇〇メートル、北緯二八度のヒマラヤの三三

○メートル、北緯三五度の日本アルプスの三〇〇メートル、北緯四五度のロッキーマウンテンの二六〇〇メートルは、人体に対する高度影響としては、それぞれ同値であると言えるのではなからうか。人体に対する高度の影響は気圧の低下によるものであるから、高山病を論ずる場合の高度は単なる海拔高度ではなく、気圧高度すなわち生理学的高度ともいべき高度でもって論じなければならぬというのが、ムーアの主張であるが、どうやらこの説の方がシングやハウストンの寒冷説よりは説得力があるように思われる。

次にいささか専門にわたるかも知れないが、臨床検査所見について述べておきたいと思う。これは病院へ運ばれた時の所見であつて、発症の現地ではこういうことについては何もわからない（知る手段がない）のであるから、知つていても役には立たぬことであるが、本症の理解の一助にはなるはずである。

胸部X線像。シングによれば、肺門から放射状に血管影が増強しており、しばしば肺動脈拡張像を認め、上肺野から中肺野にかけて浸潤ないし結節撒布像が出現し、それも右側に強いという。時に胸水像を伴う（これは肺水腫と同時期に胸膜浮腫も起つているのであるから胸水貯溜が起つても当然であろう）。手当てによつて症状が改善するにつれて、六時間から四十八時間で以上の所見は消失する。中村も本邦症例の観察において大体同様所見であると言つてゐる。浸潤像は非常に細かい粒状影の撒布で、いわゆる磨りガラス様（ground glass-like）であるが、肺胞細胞間隙に水や細胞が浸潤していることを示すものである。

心電図。肺水腫における心電図上の変化は、要するに肺高血圧症ないし右心負荷状態の反映である。シングは右軸偏位、時計方向回転、 V_1 、 V_5 におけるT波逆転、 V_{aR} および V_1 におけるR波増高、尖鋭化P波をあげ、心筋前部の低酸素状態が示唆されるとしている。彼の観察によれば、これらの状態からの回復に三〜六週間を要する例もあるといふ。ほかの報告者の所見もほぼ大体こういつたものである。しかしこれら心電図上の所見は、何も高所肺水腫を起した症例に特異な所見というのではない。それらは筆者等が一九七〇年、日本山岳会エベレスト登山隊に参加して、そ

の全隊員三十九名についてその心電図をしらべた際、すべての隊員に共通して見られた心電図上の特徴的所見としてあげたものとほぼ一致する。しかも誰もその心電図を採録した時点において肺水腫症状は呈していなかった。したがってここにシングがあげている心電図上の特徴的所見は、彼自身が述べているごとく、あくまで右心負荷状態の反映としての所見である。

T波の逆転現象で興味のあることは、シングもそれに触れ、ペナロサ (Penalosa)⁽¹¹⁾ が詳しく述べているごとく、肺水腫の盛期よりは回復期の方に逆転T波傾向が強く、しかも深対称型逆転T波と呼ばれるパターンが出現するという事実である。深対称型逆転T波は一名冠性T波とも呼ばれ、冠不全、つまり狭心症の時に見られる波型とされるが、つまりは心筋の低酸素状態の反映である。肺水腫があれば低酸素状態があるのであるから（いずれが先きであるかどうかはともかくとして）心筋の低酸素もあってしかるべきであろうが、それがどうして肺水腫の回復期に出現するのかはよく判らない。実は一九七〇年のエベレスト隊における観察の中で、この深対称型逆転T波は高いキャンプでとった心電図によりもむしろ一つないし二つ下のキャンプに下ってからとった心電図に出現することの方が多いことを知り、その説明に苦慮したものであるが、肺水腫の回復期の心電図と同じであるところから、その隊員はそれらしき症状は呈していなかったが、実は肺水腫が起っていたのではなかったかというふうに想像出来る。ヤルンカンでも心電図上全く同じような観察を報告していることとひきくらべて大変興味深い。

その他の臨床検査所見。中村らやメノン⁽⁴⁾は発熱と白血球増多症が見られるのが一般的であると述べているのに、シング⁽⁷⁾はそういう感染症を思わせる所見はないと断言している。いろいろな報告を見ると、どうも白血球は増多するのが普通と思われる。しかしそれはストレスによるもので、感染によるものではないとされている⁽⁵⁾。どうして感染が関与していないと言い切れるのか知らないが、実際その場に臨んで感染ではないと診断し切れる者は誰もないのであるまいか。ともあれ、肺水腫の発症には感染がその原因ではないというのが一般的な見解とされている。

動脈血ガス分析所見。全例動脈血酸素分圧、炭酸ガス分圧共に低下し、pHは上昇して呼吸性アルカローシス（アルカリ血症）状態であることを示している。状態改善と共に急速にもとの状態に戻るようであるが、筆者の経験した症例（ \Rightarrow ）においては、二箇月後も動脈血酸素分圧が七五 mm Hg で、正常値よりかなりまだ低い状態にあった。もともとそのようなか（それ故に肺水腫になりやすかった？）、あるいは肺水腫を起した後遺症としてそうなのかは、今のところまだわからない。

第四章 肺の構造と本症発症機序

肺は外界から空気を取り入れ、空気中の酸素を血中に取り込み、血中の炭酸ガスを外界へ吐き出すための臓器である。その酸素と炭酸ガスの交換が行なわれる場合は肺胞と呼ばれる組織であるが、肺胞にまで空気が送りこまれる途中の部分は気管・気管支・細気管支などより成り、気道と総称される。他方肺胞から酸素を受取る血流の側は肺循環系と総称され、右心室・肺動脈・肺細動脈・肺毛細血管・肺細静脈・肺静脈・左心房というふうに区分される。肺毛細血管は、血管内皮細胞という一層の非常に薄い細胞の膜で出来ており、その内径は中に赤血球が一箇だけやっと通れる程度の太さのもので、肺胞と肺胞の間を網目状をなして分布している。フィッシュマン (Fishman)⁽¹²⁾によれば肺胞と肺毛細血管との間には基底膜という薄い膜があるが、これが一層しかない側と二層になっている側があるという。この二層になっている基底膜と基底膜の間のことを肺胞間質腔と呼ぶ。肺毛細血管には本来二つの作用がある。一つはガス交換であり、それは基底膜が一層の側で行なわれ、いま一つは肺胞細胞に潤いを与える役目である。これは血管からの水分が肺胞間質腔に漏れ出て来ることによって行われる。肺胞間質腔に出て来た体液は適当に肺胞表面に潤いを与えた後、リンパ流となって、リンパ管を経て静脈系にかえる。肺水腫はこの肺胞間質腔への水の漏れ方が、これを排除するリンパ流の能力に較べて大きすぎるか、あるいはリンパ流がどこかで停滞させられている場合に起る。毛細

血管から体液が漏れ出て来る機序としては二つの場合が考えられる。血管壁自体の透過性が高まる場合（透過性型）と、肺循環系に停滞が起って毛細血管腔に血液が一ぱいつまったため溢れ出て来る場合（血行力学型）である。後者は心不全型とも云って、つまり心臓の働きの低下した場合に見られる。高所肺水腫は主として前者の「透過性型」である。つまり酸素分圧が低下することによって血管内皮細胞自体の活動力が衰え、水分保持能力が低下するのである。これは何も肺組織内のみ起る特殊事情ではなく、全身の毛細血管レベルで起るのである。その上に血行力学的な要素が加わる。即ち低酸素刺激は肺血管の収縮を招く。フルトグレン⁽¹³⁾は肺静脈が収縮することを強調しているが、それにはヒスタミンが介在するようである。⁽¹⁴⁾低酸素状態になると肺内でヒスタミンが遊離し、末梢細静脈収縮を起し、肺循環系に血液が停滞し、毛細血管での水分の漏出が起る。血管収縮は動脈系にも同時に起っているので肺動脈圧は上昇しているが、それは細静脈収縮とあいまって更に持続する。一方では低酸素刺激は化学受容体（大動脈弓および頸動脈球にある）を介して心拍出量を高める。ところが肺の循環は今述べたようにつまっているから、肺動脈圧はますます亢進する傾向にあり、右心室はそれだけ負荷が増大する。このことが心電図上の右心負荷パターンとして現れて来る。このあたりのメカニズムは非常に複雑で理解に苦しむが、要するに、毛細血管内皮細胞というものは、それ自体の働きとして、血管壁を（壁といっても内皮細胞それ自体の膜にすぎないが）水分や電解質や蛋白質などを選択的に通過させているのであるが、そういう作用自体にはかなりのエネルギーを要し、低酸素状態に陥るとそういうエネルギーが低下するため水分保持のコントロールがきかなくなる。かくして血管外への水分の漏出が増加することによって肺水腫への第一歩が始まると考えれば理解は少し容易になる。ただ毛細血管外への水分漏出は身体全体に同時に起るのであるが、臓器によって差があり、肺はその構造上そういうことが起りやすく、しかも一旦起れば低酸素状態を更に悪化させるため全身への影響が大きいために目立つのであろう。さらにまた同じ肺内でも浮腫の起り方にムラがあり、そのことが低酸素症を助長するのである。

以上は筆者が自分の想像を交えての解説であるが、詳しくはシング⁽⁷⁾、フィシュマン⁽¹²⁾、カールライナー⁽¹⁵⁾、ヴィスワナサン⁽¹⁶⁾ (Viswanathan) などの解説を参照されたい。

第五章 対策と予防

第二章の症例(四)の所でみたように、日本アルプス二九〇〇メートルで発症するということがあるわけであるが、中村によれば、彼の経験例ではいずれも三〇〇〇メートルの槍ヶ岳や穂高岳へ登った後、涸沢(二一〇〇メートル)とか徳沢(一六〇〇メートル)まで下山して来て発症したという症例もあり、こうなるといささか首をかしげたくなるが、それが事実であるから仕方がない。まさかこの高度で？ という、この「まさか」が診断を誤らせる最大の要因であるから注意を要する。つまり心得の第一、高所肺水腫はヒマラヤの病気でなく、日本内地で、しかも二〇〇〇メートル級の高度で発症するものであると知ること。心得の第二、激しい体動とか労作が誘因であることは間違いない。無理な行動はいずれにしても慎むこと。心得の第三、一体どんな人がこれに罹るのか、罹ってみるまで全く誰にもわからないということを銘記しておくこと。体格・体力の優劣、生来健康であるか否かは全くあてにならない。したがって、自分にかぎって高所肺水腫なんぞにかかるはずはないなどという保証はどこにもない。ただし、一度本症を経験している人は再発する例が極めて高いので、そういう人は以後の登山は慎重であることが望まれる。

ここで素質(体質)という問題についてちょっと述べておこう。第二章症例(一)や症例(四)でみたように、同一人が繰り返し肺水腫をおこす例は非常に多い。中村の報告でも、七例中二例は再発であった。しかし再発する素質であるかないかを登山の前に検出することは極めて困難といわねばならない。症例(四)を報告したラクシュミナヤン⁽²⁾ (Lakshminayan) はその患者を検査して、低酸素刺激に対する化学受容体の感受性が普通の人より低いことを指摘しているが、ヴィスワナサン⁽¹⁶⁾ は肺水腫に罹る人は、遺伝的に低酸素刺激に対する肺細動脈の収縮の起りやすい体質なのだと言

べている。高所に登っても肺水腫になる人は極く一部であり、なった人は繰返すことが多いのであるから、素質的な要因があることは否めない事実であつて、どうしたらそういう素質であることが見抜けるかといふことは、これから問題の一つであらう。

高所肺水腫の診断を現地でつけることは必ずしも容易ではない。典型的な症状は第三章で述べたように、呼吸困難、起坐呼吸（横になると息苦しいので上体を起した姿勢をとる）、咳、喘鳴（呼吸音がヒーヒー・ガラガラなどとかましい）、大量の泡のようない痰（それは時にピンク色であり、あるいは血液そのものを混じている）の喀出、胸痛、というようなものであるが、このような典型的な呼吸器症状を示すより先きにまず意識混濁、昏睡といった神経症状を起してしまう場合が少くないことは症例(イ)や(ロ)でみたとおりである。しかし多くの場合は、その前に頭面浮腫や尿量減少、倦怠、食欲不振、不眠、頭痛、吐き気、嘔吐、あるいは酒に酔つぱらつた時のような精神異常などの前駆症状（これはつまり皮下組織や脳膜や脳に浮腫が来ていることの現れであり、そろそろ肺胞にも浮腫が起つてきているといふこととの証拠である）が出現するので、そういう時期にはお互に注意し合つて肝要である。そうしているところへ急に異常な呼吸困難とか、意識障害が起つて来たならば、直ちに本症を疑つて対処すべきである。

まず患者には起坐位をとらせる。すなわち背にリュックとかシュラフを丸めたものなどをあてがうか、壁や柱に背をもたせかけるようにする。手許に酸素があれば酸素吸入を行なう。シングは一〇〇％純酸素を吸入させるといっているが、それは言うべくして実行不可能であるが（もし可能であっても純酸素は肺胞細胞にとつては有害である）、出来るだけ高濃度の酸素が望ましいことは言うまでもない。登山用の酸素マスクは病人にとつては大変な労作を要するものなので不向きなように思う。それよりは餛飩位の太さのゴム管かビニール管（医療用にそういうものは市販されている。ディスポーズブルなので安価なものである）を鼻孔から約一五センチほど挿入し、鼻の頭か頬のあたりに絆創膏で固定し、毎分一〜二ℓの酸素を吸入するようにすれば、流量の割に高濃度の酸素を与えることが出来る。（た

だし酸素濃度はせいぜい四十%位までしか上らないであろう。そうして次は出来るだけ早く身柄を下へ降ろすことを考えねばならない。馬とか人の背、担架、檣、等々出来る最良の手段を講ずるべきであろう。とにかく出来るだけ空気の濃い地点まで降しておけばその効果は絶大で、あとは何をしなくても自然に回復する。とは言え、それでは海拔何メートルまで下ろせばよいかとなるとそれは一概には言えない。症例(1)のシエルパは五〇〇〇メートル付近で酸素吸入なしで十分に回復した。日本の例では徳沢小屋(一六〇〇メートル)まで下山して発病した。あとどこまで降ろせばよいか、どうも海拔高度だけでは論じきれない因子がほかにあるように思われる。

ハウストン⁽¹⁷⁾によれば利尿剤のラシックスは少しは効果があるが強心剤のジギタリスは恐らく役に立つまい、といっている。シングは肺水腫に対するオソドックスな治療法であるところの、アトロピンやアミノフィンやモルヒネの投与ならびに利尿剤の使用を提唱している。多分シングは山から病院へ運ばれて来た患者だけしか見ていないからこんな暢気なことを言っているに居られるのであろう。筆者のエベレストでの経験に徴すれば、症例(1)に対して斎藤が行なったように、大量の電解質と皮質ホルモン剤を点滴投与しつつ、同時にラシックスを静注して利尿を図る方法が一番優れていると思われる。若し医師が同行して居らぬ場合には、暖めた水分を口から摂らせつつ、皮質ホルモン剤とラシックスを口からのませてもそうしないよりは遥かにましである。しかしあくまでこれらは一次的な対策であって、それによって患者を下山させずにすむというものではない。あくまで下山させるまでのつなぎにしかすぎない。

予防であるが、発症の誘因も、高度も、体質も、皆まぢまぢであって、どう注意したらよいというまとまった線はないので、はなはだむづかしいと言わねばならない。要は、本章のはじめの方に「心得」として三ヶ条を示した、あの事項によく留意することであろう。しかし症例(1)にみるごとく、シエルパといえども本症にかかる。しかも繰返している。またアンデスの高地住民が、一週間ほど海岸の町へ遊びに行つて村へ帰つて来たところ本症にかかったというフルタドやフルトグレンの報告を読むにつけても、「高所順応」とは一体どういふことを考えさせられて、

甚だ落付かない気持である。一度本症にかかった人は再発し易いことは確かであるから、そういう人は再度の登山に際しては注意した方がよい。そうして症例(三)のようにゆっくり登った場合には再発せずすんだという報告もある。しかしそれでよかつたかどうかは常に結果論でしかあり得ぬところに問題がある。今のところ、一九七三年京大ヤルンカン隊の隊員の行動と彼等(一)の体調とを較べ合せて考えるとき、古くはチョオユーのリボリエ(18)が提唱しているような登山法、つまりある程度登っては下山し、休息。そして再び前回よりは少し高く登っては下山、休息。というような繰返し(1)の登り方が、これは今では古典的な登り方になってしまつて、もはやヒマラヤでは流行らなくなつて来つたものとは、やはり安全な登り方ではあるまいか、と改めて認識している次第である。

第六章　む　す　び

高所肺水腫は、ヒマラヤやアンデスなど、海の向うでの出来事などでは決してなく、この日本の山でも毎年何人も登山者がこれにかかつているという事実、しかも「高所」という形容詞から想像されるほどそんなに高い所にかかつているのではなく、わずか二七〇〇メートル付近ですら、すでにこれにかかつてあり得るということを、広く知つていただく意図でこの小論をまとめた。

日本で観察され、報告された高所肺水腫の症状は、咳、痰(時に血痰)、息切れ、胸痛、発熱、食欲不振、悪心、嘔吐、意識混濁などであった。発症は高所到達の二日目、三日目に現れることが多いが、ヒマラヤなどでずっと後になつてから発症したという報告もある。ハウストンは、低酸素に寒冷と労作のストレスが加つて発症すると言っているが、高所での過労が大きな発症要因であることはほぼ間違いない。また個人の素質も重要な因子で、これにかかり易い人は発症を繰返す場合がある。発熱や白血球増多症を来たす例も少くなく、そうなると肺炎との鑑別は、少くとも臨床診断的にはつけ難い場合もある。

対策は何はともあれ一刻も早く下山させることを考えるべきであり、それまでのつなぎとして、あるいは補助的手段として、酸素吸入、強心剤、利尿剤、電解質液、皮質ホルモン剤などの投与が考えられる。肺炎との鑑別が困難な場合は抗生剤を投与して差支えない。予防法としては特に決定的な手段はなく、ヒマラヤ登山などの場合には、従来から言われて来たところの、昇降を繰返しながら高度を上げて行くという方針で登山計画が樹てられるべきであり、日本内地での登山の場合は、無理なスケジュールで行動せず、過労に陥る一歩手前の所でその日の行動を打切るといふことが大切である。

〔参考文献〕

- (1) 斎藤惇生・中島道郎・高木真一。医療・高所医学報告。ヤルン・カン、一一七。朝日新聞社、一九七五。
- (2) ラクシュミナラヤンほか
Lakshminarayana, S., Pierson, D.J.: Recurrent high altitude pulmonary edema with blunted chemosensitivity. *Am. Rev. Resp. Dis.*, 111: 869, 1975.
- (3) 北原多喜、高地性肺水腫の一例。日胸、三三、二八九、一九七三。
- (4) 中村善紀、中川昭三、久保田和子、井口欽之丞、松本文夫、宇都宮光明、木村靖夫。高山肺水腫の臨床的研究、日胸、三三、四五八、一九七四。
- (5) メノン
Menon, N.D.: High-altitude pulmonary edema. *New Engl. J. Med.*, 276: 6, 1965.
- (6) 住吉仙也、中島道郎、広谷光一郎、大森薫雄、辰沼広吉、長尾悌夫。医療・高所医学部門報告。一九七〇年エニレスト登山隊報告書、第二部学術班報告、日本山岳会、一、一九七一。
- (7) シンブツほか
Singh, L., Kapila, C.C., Khanna, P.K., Nanda, R. B., Rao, B.D.P.: High-altitude pulmonary oedema. *Lancet*, 229, 1965.
- (8) フルタド
Hurtado, A.: Aspectos Fisiopatologicos Y Patologicos de la Vida en la Altura. Lima, p. 30, 1937.

(6) ハウスマン

Houston, C. : *New Engl. J. Med.*, 263 : 478, 1960.

(10) 中島道郎 / 大気圧と山の高度。岩と雪。三二〇。二〇〇。一九七三。

(11) ナロキ

Penalozza, D. : *Circulatory dynamics during high altitude pulmonary edema*, *Am. J. Cardiol.*, 23 : 369, 1969.

(12) フィッシャー

Fishman, A.P. : *Pulmonary edema, the water-exchanging function of the lung*, *Circulation*, 46 : 390, 1972.

(13) ハルトグレン

Hultgren, H.N., Crover, R.F., Hartley, L.H. : *Abnormal Circulatory responses to high altitude in subjects with a previous history of high-altitude pulmonary edema*. *Circulation*, 44 : 759, 1971.

(14) ハウゲ, A. : *Role of histamine in hypoxic pulmonary hypertension in the rat*. I. Blockade or potentiation of endogenous amines, kinins, and ATP, *Circ. Res.*, 22 : 371, 1968.

(15) カーネル

Karlner, J.S. : *Noncardiogenic forms of pulmonary edema*, *Circulation*, 46 : 212, 1972.

(16) ヴィスマナサン

Viswanathan, R., Jain, S.K., Subramanian, S. : *Pulmonary edema of high altitude*. III. Pathogenesis, *Am. Rev. Resp. Dis.*, 100 : 342, 1969.

(17) ハウスマン

チャールズ・ハウスマン・吉沢一郎訳。高山における肺水腫および脳水腫の問題。岳人三二三号、八二。一九七三。

(18) リボリエ

Rivolier, J. : *Expéditions françaises a l'Himalaya*, *Aspect Medical*. Hermann, Paris, 1959.

創立七十周年によせて

日 高 信 六 郎

七十年前に生まれた日本山岳会の発起人をみると、社会人としての城数馬（弁護士、東京市会議員）、小島鳥水（銀行家、文士）、高頭式（越後の豪農）のほか、武田久吉、梅沢親光、山川黙、高野鷹蔵の四氏は、いずれも学生であった。この仲間の日本博物学同志会が中核となり、小島氏の熱意と文章力と、高頭氏の財政援助と、ウエズトン師の強い誘導があわさって出来た活気にあふれた団体であった。初期『山岳』執筆者の顔ぶれをみると、興味深いものがある。

その頃、私は福岡の中学に居たが、町の本屋で出会った『山岳』第二年第三号の縁で、山岳会に入れてもらえることになった。紹介者も入会金も要らず、会費年額一円というのだから、十五歳の田舎の子供でも入会を申し込む気になれたのである。おそらく最年少会員だったろう。爾来六十三年間、日本山岳会には大いにお世話になった。『山』に開眼してくれたのも、たくさん山の先輩や仲間を与えてくれたのも、あらゆる山の種々相を観察描写した記事を読ませてくれたのも、みなわが日本山岳会であった。

私は筑前若松町（現北九州市若松区）で育った。いつから山が好きになったかハッキリ覚えていない。幼いときから読書が好きで、手当り次第に濫読した。むずかしい本もあったが、惹きつけられて読みふけた『ロビンソン・クルーソー』をはじめとして、ジュール・ベルヌその他の西洋の探検漂流譚のたぐいに興味をおぼえたのであった。それ

らは森田思軒、桜井鷗村の筆になって、少年の胸をおどらせたのである。その頃、博文館発行の『少年世界』に江見水蔭の「戸隠山探検記」が発表され、山の怪異を描いた、そのかなりオーバーな記事は少年の探検気分をおおったこととおぼえている。ついで私は押川春浪の武俠小説なども愛読した。いずれもそれらの探検、航海、漂流、潜航などの物語はいずれもスリルに満ちていて、遠い国やめずらしい秘境に対するあこがれをかきたてられた。しかし山に縁のある話ではなかったようだ。

両親の住んだ家（現在は西日本ホテルになっている）は、町はずれの山裾にあり、見晴しがよく六連島から山口県にかけての海山の眺めはすばらしかった。私は子供のころから近くの丘陵を駆けまわっていたが、中学に入ってから旅行好きの仲間が出来て、福岡近郊の一千メートル級の山を歩きまわり、だんだん歩をのばして鶴見、由布から九重、阿蘇、祖母、市房、霧島へ、そして四国の石鎚とまわったが、そこにはお花畑も雪渓もなくて物足りなかった。その頃高山へのあこがれを満たし山への開眼をほどこしてくれたのは『山岳』と『日本山嶽志』の記事であり、それに志村鳥嶺の『やま』など数多からぬ著書であった。とりわけ小島鳥水の文章には完全に魅了された。『扇頭小景』から『山水無尽蔵』（町の貸本屋から譲りうけた）など、中でもその頃出版された袖珍版の『雲表』はすっかり気に入って綴じが乱れるまでくりかえし読んだ。

その頃、在京の兄が送ってくれた日本山岳会総会の記念絵ハガキと地理学会の招待で来朝したスウェン・ヘディンの講演録によって、私はタクラマカン沙漠とトランス・ヒマラヤなどの存在を知った。河口慧海師の『西藏旅行記』が新聞に連載されたのも、この頃のことかと思う。

だから大正元年に上京した私のよるこびと期待とはたとえ難いものがあつた。実はその夏には地学協会の主催で小笠原、硫黄島まで二週間の団体旅行に兄と二人で参加しようとしたところ、二人しかいない男子を危険な船旅に送り出すことに母が強く反対して、立ち消えになったのは今から考えても惜しい。次男坊一人ならいいでしょうと、がん

ばればよかったと思つたが後の祭り、いわんや同船には辻村太郎さんや同級の高橋善一氏が乗っていたことを後から知つたので尚更らであつた。

九月に東京して一高の寮に入った。最初に名乗りあつたのは府立三中出身の中塚癸己男君であつた。私が『山岳』などを本箱に並べているのを見て、彼は「君も山をやるのですか」と悦びをかくし切れなかつた。聞いてみると、彼はすでに中学同級の芥川龍之介と槍ヶ岳に登っている。爾来、一高では旅行部の委員をつとめ、一緒に山に登り今日まで山を通しての友情は尽きない。

中学同窓の守島伍郎君が独法二年生で、府立四中出身のランニング選手大木操さんと同室だったのは幸運だった。入学まもなく十月下旬に恒例の発火演習（旧式銃による模擬戦）が宇都宮郊外で行われた。二日目の中休みを利用して守島、大木氏らの企画に加わり、夜討ち朝掛けで中禅寺から男体山に登り、志津小屋に下り、戦場ヶ原をぬけて歩き通して夜半に宇都宮に帰りついた。

さらに数日後には、守島氏と芦安から日帰りで刈安峠經由地藏鳳凰に登つた。

こうなると私の山歩きは止まるところを知らず、年末には葦崎から塩尻峠を越えて浅間温泉に出、武石峠を狙つたが、大雪に阻まれた。翌三年春には赤城、榛名から雪深い菅沼を訪ね、秋には甲斐駒、仙丈と足をのぼし、暇さえあれば赤城山を訪ねて山上を歩きまわつた。これらの山歩きをよく見ると概して山岳会の諸先輩が歩かれたみちを辿つたことがわかる。この頃は守島、大木両氏と出かける事が多かつた。

山岳会では、三会堂で催される私的の会合と講演や展覧、時々催された山岳絵画展（中村清太郎さんの清新な油画に惹つけられた）など私を悦ばせた。小集会や先輩方を訪問するのは気がひけてなかなか足が進まず、片隅から眺めて先輩たちの山の知識の断片を吸収する程度であつた。

一高では大木、守島両氏が山岳会の設立を企て、陸上運動部の附属として認められた。私も多少そのお手伝いをし

て走りまわったのでその間に山岳会の諸先輩を知り、そのお世話になる機会を得た。

まず一高の先輩で、神伝流の大家梅沢親光さんの手引きで高野鷹藏さんのお世話になった。

大木、守島両氏の努力によって一高山岳会は大正二年六月発会式を挙げ、中房から燕、大天井、槍、前穂高、上高地に四班の登山隊を送り出し、講演会に高野、辻村伊助、小島烏水諸士を招き展覧会を開いて登山気風の啓蒙と実行に踏み出した。ご両人が一高の山仲間からイザナギノミコト、イザナミノミコトの尊称を奉られた所以である。二人とも歳はとつても山に対する熱情を失わず、守島さんは昨年逝去したが、大木さんは今日も矍鑠たるもので、先頃は「日本山岳会会員として死にたい」と云って、昔の会員番号に復帰され、数々の写真や蔵書などを会に寄附されることになった。まことに珍らしく胸うたれる美談である。

二人が大学を去ったあとを引き受けさせられた私どもは、一高山岳会を校友会の一部に独立させる念願の達成に奔走し、「旅行部」として認められることになり、部費年額五十円を受けることになって大喜びした。大正三年三月のことであった。委員は日高（法科）中塚癸巳男（農科）上條秀介（医科、のちの昭和医大学長）の三名だった。さっそく日枝神社境内の貸席に集まっておられた日本山岳会のお歴々のところに参上して、指導と援助をお願いして快諾を得、前途に光明を認めて一安堵した。この席で目立ったのは、柱にもたれて長い髯すげを立てている人と頬髭を生やしズングリとした和服すがたの人であった。南日（田部）重治、木暮理太郎の御兩人であった。前年、二人きりで槍ヶ岳から立山まで縦走されたことは、若い連中を大いに刺激した頃のことである。このお二人、特に木暮さんとは一高の連中が大へん親しくなつて度々夜おそく迄お宅に伺つて夜をあかした。

それから大活躍をはじめ、校内で展覧会、講演会などを開いて旅行部の存在と登山趣味の普及に努めた。展覧会には丸山晩霞画伯の水彩画十数点、山崎直方博士から写真、標本、装備、日本山岳会から写真その他と各方面からの出品を列べて、委員たちは説明に大わらわ、学校からも来会者が相当あつて、一同をはげましてくれた。

― 當時はまだ登山の風潮が起らず登山者も少なかったもので、われわれの仕事は校友を啓蒙して山好きをつくり、山行を奨励するため団体登山を行い、天幕や装備を貸出して個人またはグループの登山を指導し援助することが主であった。(秩父破風山で遭難した一行も、このテントを借りた組であり、部としてはその捜査や後始末に力を尽した。)

夏には団体登山を企て、木曾御嶽、駒ヶ岳、常念山脈から槍、上高地、白馬岳、針の木峠から立山へ六組を送り出し、数回にわたって講演会、展覧会、談話会、懇談会等を開いた。高野さんには特にお世話になった。おかげで小島烏水、丸山画伯や新設東大地理学科の山崎直方博士、伊東忠太博士などの大家が講演に懇談に加わって下さった。欧州アルプスから帰朝早々の辻村伊助さんの当時としては珍らしいカラスライド入りの講演はいつも聴衆を魅了して我党の士を増やすのであった。その頃、山崎博士の教室でたしか伊豆七島の研究に没頭しておられた辻村太郎さんは熱心な指導援助をつづけられた。氏はその後も学問と山に対する熱情を失わず、その後私がバリにいた時、学会出席のため来られたので駅に迎えにいくと和服の夫人とならんで、リュックザック姿の氏がすぐ見つかった。マルセイユに上陸後、ジュネーヴに直行し、採集された堆石(モルシ)を見せて弁じ立てておられた。会期後半の旅行ではマツシフ・サントラルのピュイ・ド・ドームなどをめぐって大喜悦だったが、今日まで学界の進歩におくれず、立山その他に登って採集をつづけられる熱心と元気に頭が下がる。

一高先輩の関口泰さんは大学生のとき、南アルプスの黒法師や大無間、小無間に先鞭をつけ、武田久吉さんに次いで尾瀬を訪ねた先覚者であるが、ずいぶん親切な指導を受けた。氏は朝日新聞に入り、戦後まで自然公園審議会委員として日本各地の山岳地帯を踏査したが、その都度克明な通信を寄せて私の遊意をそそった。氏の歿後、私もはからず委員となって、北海道から中国、四国までずいぶん幅広い山歩きをする機会を得て、その都度氏のことを偲んだのである。辻本満丸さんは醸造専門で工業試験所技師、地味なタイプだったが、後立山や穂高、岩菅其他に先鞭をつけ精緻な報告を『山岳』に寄せた。いろいろの教えを受ける事が多かった。武田久吉さんはこの頃、英国で研究中だったと

思う。帰朝されてから一高旅行部では大へんお世話になり、亡くなられる直前までわれわれの会合には、つとめて出席し、先生一流の弁舌で後輩を指導激励された。忘れ難い人である。

一高旅行部の仲間には他人の世話だけでは飽きたらず、先鋭的登山を試みるものが少くなかった。例えば大正三年、大木操、山口成一両氏の後立山八峯キレット通過（当時は直行出来ず下部の急崖を捲いた）と剣の三窓登攀（ここから剣登山を目ざしたが悪天候で中止）、大正五年、伴野清、大島永明君らによる最初の槍穂高逆縦走など。

私も学校を怠けて山歩きに熱中した。病欠の届けを出して真黒な顔を教室に持ち込むのだから、教師は顔をそむけて知らぬ振りをするか、ニヤリと薄笑いを浮べ、ワザと大声で「ヒダカシン六！」と出欠簿を読み上げクラスの爆笑を買うなど、我覚にはありがたいご時世であった。

いま考えてみると、その頃の私の山歩きは『山岳』などに所載された先輩の足跡を辿ったもので、観山旅行、峠越えから山のぼりという風に、歩いた末に山に取りつき、歩いて帰るといふ風に実によく歩いた。当時の交通事情の所為もあるが、世界中どこもこの要領だったらしい。ウエストンは勿論、ウインパーやマママリーなどを読むと、彼等は実によく歩いているし、そのスピードには驚かされる。しかも山ではしばしば文字通りの野宿で困苦欠乏に耐えているのに敬服させられる。

この頃、しばしば一緒に出かけた仲間は守島伍郎、中塚癸己男、又木周夫、森喬など一高旅行部の仲間だった。藤島敏男君とは大正三年、針の木越え立山登りを途中まで同行したのが最初だったと思う。森君は今日も健在、中塚君また然り、年は取っても山を忘れず、又木君は静岡支部の会員として昨年秋には山住神社の紅葉会に参加し常光寺山に登って参会者を驚かした。

私は大正十年、外務省に入り、フランス在勤となって渡欧したので、暫時日本山岳会とも山仲間とも別れることになった。私にとってはアルプスやピレネーに近いところで働けるようになったことが嬉しくてたまらなかった。ヒマ

ラヤにあこがれて、印度關係の商社に入った三田幸夫さんの最初の任地がなんとマレーシアだったことと較べると、うれしかったのは無理もなからう。

私の山あるきはずっと続くのだが、この東京の十年たらずは、私の心の中に登山の真髓の一片を打ち込んでくれたと思つてその頃の山岳会の先輩や学校の同窓に対し、深い感謝と愛着を覚えるのである。

山は觀賞の対象であつたが、漸くその境内に参入して谷間の靈氣を呼吸し、山膚にふれ変転きわまりない氣候と相俟つてあらわれる種々相を体験するにつれ、山がわれに近づくと共にこちらもその中にとけ込むような氣持になるが、甘く見てはいけない。突如としてその峻巖きわまる一面をむき出しにして、巖の大塊の体当り、荒れ狂う樹林帯の怒濤に叩かれては到底叶わぬ相手と諦観せざるを得ぬ。山の本性の然らしむるところだろうか、われらの体力と氣力と技術の限界の然らしむるところだろうか。

山は一生の友であり、一生の師であると思う。得意の時には適切なシゴキを与えて静思と反省をあたえ、不遇の時には世俗の煩わしさを里に残して落ち付きとなぐさめを与えてくれる。こんな時の一人旅は心の安らぎを与えてくれるし、山のこと以外に興味をもたぬ案内者を相手に「世間ぬき」の山話しを山歩きの相間に交わすのも有効である。氣の合つた山仲間とテントの前で酒を酌んで、四方山の話に興ずるような心理状態のときは羨しい限りである。山に登らなくても、適当な展望台や山小屋の前から好きな山との對話は楽しい。いろいろな想いが空を馳せめぐり、それがそこはかと思ひに凝結するのは、やはり山の所為か、こちらの胸の想いが昇華するののか。これらの想ひは敗戦後、日本に帰つてから山に対し、山を歩いた間に感じたことが多いのは事実である。

日本からマルセイユまで五十日近い船旅の後、パリの大使館に着任すると、すぐジュネーブで開られる國際連盟の代表団に加わつて、翌年一月末までレマン湖畔の事務所で働いた。晴れた日には臥牛のようなサレーヴの岩山のむこうはるかに銀色にそそり立つモンブランを眺めるのは、思ひがけない楽しみであつた。たまたらなくなつて同僚の三

谷隆信君(のちの侍従長)と二人、元旦の列車に乗り込み、トゥーン湖畔からインターラーケンを通り、ミュッレンから谷越しに夕映えに輝くユングフラウを眺め、ウエンゲンに泊まった。この旅も辻村伊助さんの足跡を追ってグリンデルワルドにまわる観山旅行のもりだったが、登山鉄道が動くと聞いて気が変わり、山靴を買い込み、英人大学生からガイドを借り、ユングフラウヨッホで装備を借りて氷河に下り立ったのは、午後二時過ぎだった。迫る夕暗にロツターザッテルの少し上部から敗退、夜から吹雪、翌日の夜半ジュネーヴ駅に帰りついた。

その頃、英国留学中の東龍太郎君がウエンゲンでスキーをやっているうちに、前年ユングフラウに登った日本人がいたと聞いて、名をたしかめると三谷、日高、アイツらが登ったのなら、オレたちも登ると同じガイドをつれて頂上を踏んだ。

翌一九二一年八月には、シャモニーに出かけ、モンブランに登った。はじめての一人旅だから慎重をきわめ、近くの低山や三千メートル級の山で足ならしをした。町の博物館には遭難関係の展示があるが、これらには見向きもせず、墓地参詣も後まわしにしたのは、今考えると、一途に山をもとめつづけていたからであろう。二人のガイドにはさまれて二日ばかりでボツソン氷河から登り、エギーユ・ド・グーテからテートルースに降り、全部歩き通した。

宿に帰るとモンブランに登りたいという日本人のお客がいた。郵船会社ロンドン支店の人であった。それではと、私の全装備を貸し同じガイドを世話して、同氏は翌朝出かけた。この日も快晴、庭の籐椅子に寝そべて大型の双眼鏡を手に、昨日の登路をたどり豆粒のような登山者の行動を追った。わが人生最良の日であった。その後同氏とは音信もなかったが、戦後同氏と文通がはじまり再会を約したが、まもなくなくなられた。未亡人の便りで、お二人の令息が相次いでモンブランに父の足跡をたどったということを知った。

その翌年の夏はピレネーに出かけ、仏領の最高峯ヴィニマルに登りガヴァルニーの大圏谷に下りスペイン領に入つて、最高峯モン・ペルデューに登った。その間隙を見てはマツシフ・サントラル近辺の丘山を歩きまわった。一九二

三年にはスエーデンに転勤になったので、六月夏至の頃、ノールウェーノルウェー峡湾峡湾巡航船に乗って欧州最北のノースケープまで出かけ、次の年はスエーデン最高のケブネカイザを目ざして準備していたが、関東大震災に次いで帰朝することになった。第一次の滞欧は短かったが、山歩きが出来、氷河や岩壁などアルプスの山容の一斑を知る事が出来たのはありがたかった。

日本に帰りついた翌日に登ったのは嫩草山、夏には森喬君と十和田、男鹿、田沢湖、牛首、松島と汗を流して、故国の夏旅を楽しんだ。その後段々帰国の仕事が忙しくなり、虎の門のルームにも顔を出せず、山岳会の先輩同僚とすっかり御無沙汰したのは、申訳ない次第であった。

一九二七年から再度のフランス勤めは六年に亘ったが、この間欧州には戦敗国ドイツの荒野からヒトラーの拾頭、ソ連の国際連盟進出、軍縮会議の行づまり等大問題が続出し、遂に満洲事変勃発にいたり、日本の連盟脱退とあわただしい日々を送った。それでも夏休みを利用してユングフラウヨッホ、リギ、ツェルマツト（ヘルンリ小屋まで登って秩父宮様一行の署名簿を見る）、東部ピレネーのカニグーに登り、アンドラの秘境を徒歩縦断、グランサンベルナル峠などを訪ねることが出来た。

日本に帰ると、すぐ南京勤務となつて、江南の名所旧跡や近所の丘山をめぐつて楽しんだ。一年余りで東京に帰ると早速守島、山口両君と赤城に登つて上越の山に対面した。

一九二三年に又ぞろ南京在勤となつたが、間もなく日華事変となり、私どもは日本軍空爆下の興南から脱出上海で待機。南京陥落後、同地に復帰した。それまで邦人立入り禁止だった城壁のあたりや、紫金山が自由に歩けるようになったのは唯一のなぐさめであった。北京へ帰り飛行機が泰山の頂をかすめて飛んだのは思わぬ儲けものだった。戦局は拡大して遂に世界大戦となり、私も現地と東京とを飛びまわつた末イタリアに向うことになった。

この頃、内地では、戦時気分横溢でわが山岳会員の中には勇壮な行軍的登山に精進する人があつたが、一方白眼視

されながらも我が道を山登りと楽しむ人もあったようだ。

出征した人たちの中にも渡辺公平さんは五台山の一角をふみ、深田久弥君も山に登って気を吐いた。大町のガイド丸山充嘉は北支の前線で毎日看視役を引きうけ、山上の静けさを味った。欧州では第一次大戦のときは、塊伊間ドロマテ岩峯をめぐる山岳戦（英のノーベル平和賞受賞者ノエル・ペーカーは此の方面で戦い、傷いた山仲間のウィンズロップ・ヤングを担いで敗走した、第二次は仏伊間のスキー戦だったが、コーカサス戦線ではエルブルズに登ったドイツの士官がいたという。私もシベリヤからトルクシブ線を通りコーカサスをぬける五十二日の間に、天山、アララットなどを眺める機会を得た。戦争末期には北伊に移ってドロミテを歩きガルブ湖畔の山に登る機会を得た。

敗戦翌春、日本に帰ってからは新設のお茶の水のルームに出かけ、藤島敏男君から多くの旧新人たちを紹介された。公職追放になった私には何も仕事がないから、いつも足はルームに向いた。ふたたび日本の山に登ってみようとおもい、団体や小パーティに加わって山歩きを始めた。日本の山のよさを満喫したが、実力は如何ともならず山上では常にヘトヘトになって、私にはヒマラヤ登山の倍の苦しみと楽しみを満喫したと云えるだろう。

別宮会長の急逝により全く思いがけなく会長の職をけがすこと三年五カ月。山に取り得のない私が出来たことは全国をまわって支部のかたがたと接触すること、本部の企画の実行を推進することぐらいのものである。会員から選ばれたヒマラヤ計画や登山の実行、全岳連との融和による体協への加盟（賀屋理事の好意的御協力により変則的な加盟が出来た。スツキリしたのは、全く松方会長の偉大な指導力によるものである。）などが仕事であった。

いずれは山歩きが出来なくなると予期していたが、思ったより二、三年早く到来した。高原越えの暗夜山行に小さな崖から落ちて、腰を痛めたのに続いて、ヒマラヤ・トレッキングに出かけルクラでポニーから落ち、名実自称落馬天神となったからである。

実力もないのに話したり書いたりさされ、その大半は“受け売り”に過ぎず、講習会を主宰しても、ザイルの結び

方やカラビナもピトンの使い方も知らない私は、現場では「反面教師」以外の何者でもなかった。

今日登山の実行からはなれて静かに省みるとき、人々に買いかぶられて、いささかいい気になり、人々に講釈したり書いたりしていたのは、何ともおしつけがましく、会員諸士に相済まぬ気がしてならない。

いま日本山岳会は七十年を迎えた。むかしから山岳会および大ぜいの方々のお世話になり、共に楽しませていただいた事を思い、わが山岳会に心からの祝意と謝意を表したくなるのである。

濃霧の箱根にて

—いくつかの回想—

三田 幸夫

かなり前から真夏の二三日を箱根の仙石原で過そうと楽しみにしていた。幸い、知合いの商社の保養所に泊れる事になったので一家はその準備に忙しかった。長男一家四人、僕と家内とその妹という総勢七名のグループだが、そのうち孫の男の子二人は数え年四つと二つという賑やかな構成だから、車で行くとなると相当大型の車でないと具合が悪い。その上運転手役の長男は、オート・クラッチでないと危なっかしいのだ。所が運好く、そんな条件を充たすトヨペット・クラウンを羽田の外人客をよく扱う貸自動車屋から借りられる事になった。

出発を控えた三日前の夕刻、鎌倉在住の時田詢氏から突然電話がかかった。時田氏は僕と同じ神中（神奈川県横浜一中）出身で、北大水産学部出身の名誉教授、内村鑑三の流れを踏む独立教会に属する敬虔な基督者である。

電話の要件は、先日札幌へ赴いて市大病院に入院中の館脇操君を見舞った。握手をしたが、解ってくれたようだ。が、兎に角危篤状態らしいから、子供の頃からの仲の好かったあなたにお知らせする、自分も一日二日中に札幌に行くから何か変化があったら直ぐお知らせする、という事であった。

館脇の病状に就ては、先日も北大出身の林和夫君から甚だ悪いという事を聞いていたので暗澹たる気持でいた訳である。

僕達一家が箱根へ出かける前日、七月十八日の午後七時頃、玄關のブザーが鳴った、家内が立ち上り「はい」と返事をし乍ら硝子戸を開けたが誰もいないと言う。勝手口の方へ廻ったのじゃないかと僕も出かけてみたが誰も人の気配はない。居間に戻った家内が不安気に呟いた。「館脇さんからの悪い知らせではないかしら？」と。僕は「さあどうかな？」と冗談めいた口調で軽く返事をしたものの何か胸にひっかかるものが残った。

翌朝出発の支度も一応終ってほっと一息ついてる時札幌からの電話を家内が聞いた。奥さんらしい方からの電話で、館脇が昨夜九時亡くなったという事を僕は洗面所に居て聞かされた。

昔から、近親者に何か異変があった時、何等かの形で知らせがあるという話をよく聞かされたり物の本で読んだ事があるが、僕にとってそんな非科学的と思われるような事は信じられない。誰かが押さなければブザーは絶対に鳴る筈がない事は確かだけに、何とも不可解な思いに駆られざるを得なかった。

十九日は朝からの雨で、東名高速に入る前からどしゃ降りになり、当初考えていた午前中に天城高原に着き、景色の好い樹陰に持参の弁当を揚げようといった計画は明日に延ばし、兎に角先ず仙石原へという事に予定を変えた。

豪雨の中を車は好く走り、一時半に無事仙石の宿舎に着いた。なじみの部屋で浴衣に着換え、持参の弁当を揚げたが空腹の故だったか握り飯が殊の外うまかった。

窓外の雨脚は依然激しく、目前の台ヶ岳も下半分きり姿を見せていなかった。負け惜しみではないが、山の雨はいつも夫々の趣きがあつて好きである。飛驒の人夫衆がよく細引きのような雨が降ると言った。豪快な雨を評し得て妙である。この日の雨もそれに近い激しいものだった。

夕食後、雨も稍々小降りになったので、近くの俵石閣に電話して御主人は在宅かと聞いた処、社長は今新居の方に

居る筈だから連絡致しましょうという番頭さんらしい声の返事であった。折返えし社長の田畑からの電話で、在宅中だから直ぐやつてこないかと迎えの車を寄来した。

田畑隆は登高会の古い山仲間の一人で、曾つては好い呑み相手だったが、近年酒も煙草も断ち到つて健康的な静かな毎日をこの山中に送っているという。そして今日では、目前の相手が如何に呑んでいても何にも感じないと強がりを書いていた。三年前、一緒にカナダ・ロッキーの旅をした時にはウイスキーの罎を仲々離しながらなかつた彼が、大患の後見事禁酒を断行し得た意志の強さには敬服の他ない。

この秋、登高会の連中が国分貫一を団長に大勢エベレスト見物、ポカラでの満月を愛でるといふしゃれた旅に出るといふ。田畑もその中の有力なメンバーである。

昔僕達仲間が秩父の将監峠に月見の旅を試みた事がある。大島亮吉、早川種三、大賀道長、外多士濟々で、各自靴付きの大ぶりの鋸持参であった。鋸は倒木を短く切つて大きな焚火を築しようといふ目算からであった。生憎毎日雨に祟られたが、峠での豪勢な焚火は満喫でき甚だ楽しかつた。五十年の隔りがあるとは言え、登高会観月行のスケールも秩父とヒマラヤでは大變な違いである。

禁酒禁煙の彼との再会ではあつたが、一時間余りの歓談は誠に楽しかつた。

二十日の朝は、雨も小降りになり、時々明るい空も出そうな気配を示したが、今度は箱根特有の濃いガスが間歇的に襲つてきた。それでも予定通り朝の九時には宿を出た。

湖尻峠にかかる頃は芦の湖の水面も見えて、家内の「あれは湖水の水よ、海の水ではないのよ」といふ甚だ不思議な説明だったが、孫は眼を輝かせ少々元気になつた。孫は大きな水面を見ると海と聞かされていたので。

車が県境のスカイラインに出ると、又視界ゼロという状態になつた。三國山の辺で路幅が少々広くなつた処で車を止めてみたが、周囲は濃い霧の扉で何も見えない。皮肉にも傍らの、「日本で富士山の一番よく見える所」という立

派な標識が眼についた。

数年前の真冬の或る朝、山岳会の神崎忠男、須田紀子両君と僕は、二度目の来日中であつたテンジン・ノルゲイを案内し、ここに立つて富士山を眺めていた。真白に雪化粧した靈峯富士は朝の陽光に全身を輝かせて気高く美しかった。エベレストの勇者テンジンは、寒風に凍える手をたたき乍ら僕を顧み「サウス・コルを思い出したよ」と一言つぶやいた。

この湖尻峠から箱根峠へかけての尾根筋は箱根中でも甚だ景色の好い所だが、昔は藪がひどく、僕も箱根は大概歩き尽していたものの、ここは最後迄残されていた。大正半ばの頃で、雪が降つた数日後、独りで半日近くもかけて通り抜けた。今日は十分もあれば車で通過してらう。日本のどんな山へ行つても、大同小異同じような事が言えるだろう。

僕の中学時代には、仲間内に植物に傾倒するものがかなりいた。その中の代表的なのが館脇であつた。胴乱をいつも肩から離さなかつた彼とはよく箱根を歩いた。後年の一時期、牧野富太郎さんや武田久吉さんを師匠格にその道に突き進んでいき、只我武沙羅に自分の山には入つていつた僕とは一緒に永い旅をするような機会はなかつた。只先年、楨さんと二人で彼の案内により、二週間程北海道の旅を楽しませて貰つた。たしか、知床が国立公園に指定された時で、羅臼岳にも登つた。彼のお陰で各地の営林署や山の会の人達とも一緒になれて本当に楽しい旅であつた。

去年の夏札幌に遊んだ時、彼は一日を割いて彼の最後の仕事場であるという江別の森林公園を案内してくれる事になつてしたが、身体の調子が好くないという事で実現されず残念であつた。お宅に彼を見舞にいつた処、態々寢室から起き出して客間のソファに横たわつたまま話込んだ。脚の具合が悪く、外出は困難だという事だったが案外元氣相なので一応安心した。

その時の話で、伊藤秀五郎が手術後の経過は順調で目下自宅療養中だと聞かされた。そこで同行の芳賀の車で豪雨

の中を伊藤邸に駈けつけた。伊藤は案じていたより顔色もよく大患の手術の後とは思えない程に思われた。

彼はこの予後の期間を利用して、書き貯めた沢山のエッセイ、紀行、詩等を整理して本に纏めたいと眼を輝かせていた。既に発声の機能を失っていた彼はその言葉を伝えるのに書いては消す動作を伝言板に頼らざるを得ない状態にあった。

一時間余に亘る会談の間、伊藤も傍にいた夫人も終始明るく朗らかに見えた。そして又会おうといつもと同じように手を握り合って別れた。伊藤も館脇と同様、同じ中学の少年時代からの山を通しての親友の一人である。

車は猶も走り続けて箱根峠へ出た。雨に薄汚れたガソリンスタンドや、土産物屋等が人影もまばらで、僕の眼には何か、西部劇のゴーストタウンの一角を思わせるように見えた。

ここも昔は、道幅こそ広がったが草ぼうぼうのなだらかな峠であった。中学生の頃、一年下の宮脇嘉石と二人、ここでひどい雨と風にたたかれた苦い経験がある。甲州路を終え、富士川を下り、三島から箱根へ抜ける途中であった。手痛い山の雨を思い知らされた最初の経験であったろう。

彼とはその後も同じ慶応の山岳部で一緒になり、小さな山へも登った。が、どうも雨には縁が深かったようだ。

晩秋、丹沢山塊の蛭ヶ岳に登った時の事である、玄倉川の河原に野宿し、沢をつめて蛭ヶ岳の頂上に達した頃から雨も風も強くなり、丹沢の尾根筋では熊笹の切り分けが判らず随分苦労した。

一行は宮脇の他、一橋山岳部にいた弟の泰彦と岩崎。皆同じ神中からの仲間であった。文字通り全身ずぶ濡れのまま辛うじて札掛けの部落に下り着いた。幸い木樵の一家が泊めてくれる事になり、濡れたものは焚火で乾かし、乾いた仕事着迄皆に貸してくれた。生れて間もない幼児を抱えたこの新婚の木樵一家は、僕達を弟の様に温かくもてなしてくれた。

十年程前、丹沢山麓のある町の小学校で先生達の集まりに講演を頼まれた事がある。その時、後で札掛の親切な木

樵一家の写真を示し、その所在安否を調べて貰いたいと頼んだが解らずじまいに終わった。その赤ちゃけた古い写真には、（まぎ） 杣衣を着た坊主頭の僕達が一家と一緒に写っている。

箱根峠を過ぎて鞍掛山にかかる頃には濃霧は益々ひどくなり、車を運転する伴は顔をワイパーの傍迄押しつけ、道路の黄色いセンターラインから外れないよう緊張の連続である。そんな最中にも、僕の頭の中には後から後から色々な思出が鮮明に甦ってきて眼をつむったまま陶然たる状態を続ける。

鞍掛山は、館脇と一緒に歩いた箱根では最後の山であったように思う。一行は僕を除いた三人が胴乱を肩にした北大予科生の館脇と一高生の二人朝日奈貞一ともう一人。皆植物に打込んでいた神中の仲間達だった。

この時は僅かに残存しているというハコネサンショウウオを探るのが目的であった。その生棲地に詳しい箱根宿の老人を案内に、僕達は鞍掛山の裏側須雲川の水源となる小さな溪流にその群棲地を見付け、かなりの数のサンショウウオを掴えた。そして昼飯の時、老人の奨めで各自数匹宛呑込んだ。生きたままのは大変効き目があるという事だった。皆瘦せ我慢でもあったろうが、僕自身も咽喉を通る時何か趾を突張ったような感じがした事を今でも思い出す。後年館脇と会ってその時の話が出ると、「あの爺さんの顔は、どうもサンショウウオに似ていたような気がする。君はそう思わないかい？」と。そういえば、奇妙に口吻の突き出た爺さんの顔をはっきりと今でも思い浮べる事ができる。

十国峠では瞬時空が明るくなった様に思われたが、それも束の間、更に濃い乳白色の霧は視界ゼロに近い状態にしてしまった。亀石峠付近のカーブでは、立派な高原道路なのに標識を見損い、ユーターンを余儀なくさせられた事も幾度かあった。山道を豪雨や濃霧の中でドライヴするのは怖い。

大分前、独りダージリンを訪れた時、途中の一番高いグームの切り通し少し手前でひどい霧に閉ざれて動けなくなつて了つた。左側の深い谷が鋭く切れ落ちた崖ふちの道に、僕の乗ったオンボロタクシーは一時間も立往生させられ

た。真冬の最中さなかの事とて、夕闇は迫ってくるし寒さもきびしさを加え、いつダージリンの薪が燃えさかる温いホテルの部屋に辿りつけるかと心細い思いをした事が思い出される。

又大戦中の事、マライ半島の山中でひどい目にあつた経験がある。イポーからクアラランプールへ向う途中、ある峠を越えなければならなかつた。そこは共産ゲリラの出没する地点で相当警戒の必要があつた。雨は激しく降り続いてしたが、視界はそれ程悪くはなかつた。峠は屈折が多く、下りにかかつてからは、カーヴを切る毎に雨に濡れたタイヤがずるずると横にりを繰返えしてひやひやさせられた。僕は急な凍雪面をステンボーゲンで下降している時、制動が効かないで横にりに悩んだ経験を思い出していた。

峠は無事に下り切つてゲリラの心配もなくなりほつとした。道は街道の直線路になり、車はかなりのスピードで飛ばしていた。道は一キロ程先で直角に左へ曲つていたのだが、マライ人の運転手はぼーつとしていたのか、その曲り角近く迄ブレーキを踏まなかつたようだ。はつと思つた瞬間には曲り角を突破して傍らを流れる小川に落込んでいた。

幸い水は浅く、車は横倒しになつたまま左側側面を水面上に出していた。僕達三人は微傷も負わず車から這い出した。同行の若い社員は、なす事もなくぼんやり突立つたままの運転手を殴りかねない勢いで叱り飛ばしていた。

僕達は持てる限りの物を車から取り出し、地図を手頼りに、一番近い部落に辿り着き、小さな警察分署の空いていた留置場に泊めてもらった。そして翌朝、親切な部落の人達の一人は現場に駆けつけ、無事車を引き揚げてくれた。

亀石峠付近で、天城高原に居る登高会の山仲間の人佐竹に会う事を最後迄楽しみにしていた伴も、流石にこの執拗な濃霧に匙を投げ、前進をあきらめて東海岸の宇佐美に下りた。

下界は明るく爽やかで、海からの潮風も涼しく、大雨続きの直後のせいもあつたらう、小田原を経て東名高速の国道も比較的空いていた。

途中後ろをふり返えつてみると、依然、伊豆や箱根の山々は黒い雨霧にすっぽりと包まれていた。

ノートファークスを訪ねて

田 中 薫

一 パタゴニアのブナに似た樹

私がパタゴニアに行く機会を得たのは、思いがけない縁からである。一九五六年（昭和三十一年）にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで、第十七回国際地理学会議が開かれたとき、私が部長をしていた神戸大学山岳部の諸君から、面白い山を見つけてくれと頼まれて旅立った。

学会の後、南米各地の日本人移住地を視察する仕事をかかえていた。その忙しい旅の中で、最初に訪ねたのがサンチアゴのチリ山岳会で、たちまちパタゴニアの山の魅力にとりつかれてしまった。神戸大学山岳部およびそのOBと、チリ山岳会と協力して、パタゴニア・アンデスの未登峯アレナレスを試みる計画ができ、やがてその登頂と、既登の最高峯サン・ヴァレンティンをふくむパタゴニア北氷陸の氷河周辺を探索することができた。一九五八年（昭和三十三年）のことであった。（田中薫編『大氷河を行く——南米チリ・パタゴニア探検』毎日新聞社 1968、参照）

私はこの山旅で、生まれて初めての経験をいくつもしたが、中でも、針葉樹だとばかり思っていた見たパタゴニアの樹が、ほとんどみな、広葉樹であったのには全く驚いた。その幹から枝ぶりまで、日本の山で見なれたモミヤトドマツとそっくりで、みごとに純林をなしているのである。

私は登攀隊長の故高木正孝君らの本隊と、しばらく別行動をとり、南米のスイスといわれるチリ湖沼地帯に行ったが、そこで、その最も代表的なコイウエ (Coinue) にまずお目にかかった。スイス人やドイツ人が住みついて、森林を切り開き、牧場を営んでいるのだが、適当に立木を残して見事な公園景観 (Parklandschaft) を展開していた。その亭々たる巨木がコイウエなのである。チリの国花コピウエ (Copihue) も同じ湖沼地帯に自生する蔓植物で、名が似ているので初めはよく混同した。湖沼地方は地味が肥えており、平地も多く、気候も穏かなので、コイウエは高さ数十メートルに及ぶものが多い。

チリの南端プンタアレナスあたりに行くと、ここは典型的なパタゴニアの強風地帯で、マジェラン海峡に臨む丘陵の陰に身をひそめて生えているこの樹は、日本のハイマツのような姿をしていた。ここではロブレ (Roble) と呼ばれていた。ほかに樹らしい樹はないせいか、日本の松や杉のように住民に親しまれていて、Los Robles という名をつけた邸宅がいくつもあった。丘陵の表面には低く這うようにへばりついたロブレがひろがっていて、これも日本庭園の刈込みのようで見ごとなものだった。このような種類のものは Roble antarctica (南極ロブレ) とか Los Robleijos (小さなロブレ) とか呼ばれていた。

それから山に入って、北氷陸の東側の湖を渡り、アレナレスから東に出ているコロニア氷河の末端近くにベースキャンプを設け、私は一カ月の間そこで暮したが、このあたりでも、レンガ (Lenga) と呼ばれているものと、ニレ (Nire) と呼ばれているものを見かけた。パタゴニアの森を歩いて、素人の私にもすぐ区別のつくものが以上四種類あるように思う。

これらの樹はノートファークス (*Nothofagus*) の仲間で、日本を出るときには、パタゴニアには、ニセブナまたはキツネブナという、カシ、クルミ、カバの仲間でブナに近い種類の純林があるとだけ聞いていたのである。

チリに行ってきた Otto Urban: *Botanica de las Plantas Endemicas de Chile*. Rector del Colegio Aleman de Osorno. Soc. Imp. y Lit "Concepción", Concepción, 1934 という本を見つけた。それによると、私が観察したのは次の三種類であるらしい。

1 *Nothofagus Dombeyi* Blume

(*el Coihue*; *el Roble*)

2 *Nothofagus Obliqua* Blume

(*Lénga*)

3 *Nothofagus Antártica* Oest

(*el Roble*; *Roble antártica*; *Los Roblecitos*)

私は現場 (アレナレス B II) で柘本をとって見た。

二 ノートファークスの化石

私がベースキャンプに在る間に、ノートファークスは化石の姿でも私の眼の前に現れた。天気の良い日の午後三時すぎになると、たいいてい毎日、氷河の末端の高さ一〇メートルもある氷壁の下から、突然、水が湧き上って来て、小洪水となり、一時的に小さな湖となって氾濫する。やがて水が引くと、そのあとに、親指の頭くらいの大きさから、その三倍くらいの大きさまでの円礫が、いくつも砂地に投げ出されている。潮干狩で蛤をひろうように私たちはそれを集めた。試みにビッケルで割ると、よく真二つに割れる。円礫の中心には何かひとつ異物があり、それを核とし

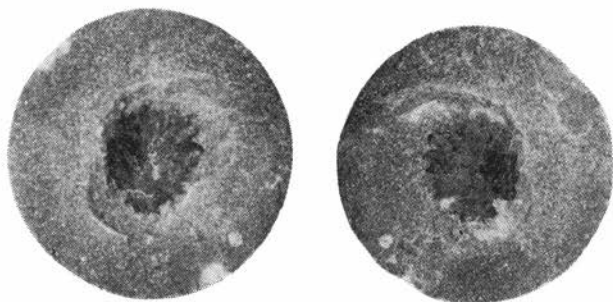
て、核を中心にこの礫は結石したものであることが判る。この礫が滑らかに丸いのは、流水の研磨も受けているにちがいないと思われる。ところで、その中身であるが、十個のうち四個くらいまでノートファークスの化石なのである。この化石は新しいものにちがいないが、それでも現代と同じ種類のノートファークスなのかどうか。

私は、実はこの小洪水が、この探検で発見したファルコ湖 (Fargo Lake) の氷河洪水と同じようなメカニズムで起る小形の氷河洪水であろうという想像に夢中になっていて、今まで化石の方は専門家に鑑定も乞わず放置していたので、ここに書き止めておく。

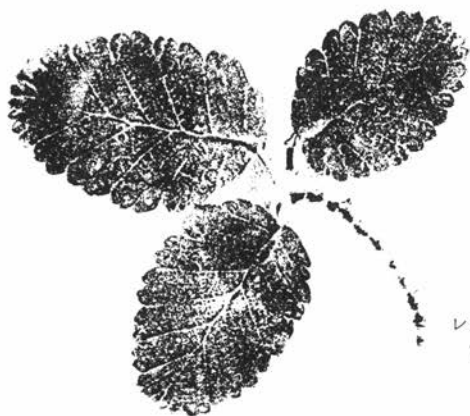
三 ニュージールランドのノートファークス

一九七四年(昭和四十九年)、私はニュージールランドで行われた国際地理学連合の地域会議に参加した。その時、南島を巡るエクスカージョンを選んだ理由は、氷河のある山を見たいのとは別に、ノートファークスに再会できそうな望みがあったからである。パタゴニアのノートファークスの続きが、オーストラリア・ニュージールランドにもひろがっていて、南アメリカとオセアニア両大陸が別れるとき、水をあけてしまったもので、大陸漂移説の根拠のひとつに数える人もあると聞いてたからでもある。

このエクスカージョンは十二月十四日から十五日にかけて、クック国立公園を横ぎったが、東側から西側の海岸に越えるハース峠 (Haas Pass) の東麓一帯にみごとにノートファークスの原始林が保護されているのを見た。ハイウェイがその純林の中を通りぬける。私は小休止のとき、森に入り、その小枝を手にとって見て、遠くパタゴニアの空を思い浮べ、この樹々の再会をひそかに喜んだ。バスに乗りあわせていたカナダのフランス系植物学者ダンセロー教授 (Pierre Dansereau) に、小枝を示して確かめたところ、私の気持が通じたらしく、たいへん親切に、バスの揺れにペンを取られながら、いちいち葉の形を紙に描きながら次のように教えてくれた。ノートファークスはパタゴニアには四



一個の円礫を割ると核になっているノートファエーグスの化石が現れる (BC II パタゴニア) 実物大



レンガ (BC II パタゴニア) 実物大



ニレ (BC II パタゴニア) 実物大



コイウエ (BC II パタゴニア) 実物大

種類あって、内、二種類が落葉で他の二種類が常緑である。ここには五種類あって、みな常緑であるという。オーストラリアでは、タスマニア島の中央山地にも見事な純林があるそうだが、私はニュージーランドでのこの再会で充分満足した。

四。パタゴニア研究所について

一九七四年（昭和四十九年）九月、外務省文化部から電話で、パタゴニア研究所 (Instituto de la Patagonia 所長 Mateo Marinic 氏) ができたという知らせを受けた。なんでもチリ駐在の遠藤又男大使がプンタアレナスを視察のとき、訪ねられたそうで、この新設機関に日本人の手によるパタゴニア資料を、なんでも寄贈してほしいと頼まれたよきであった。私はとりあえず、手元にあった次の二書を送っておいた。

1. パタゴニア北氷陸の氷河周辺地形について（予報）田中薫、辻村太郎先生古稀記念地理学論文集、一九六一・三・一〇。

2. Kaoru Tanaka: On the Glacial Flood as a Disaster to Frontier Settlement in Chilean Patagonia (Kobe University Economic Review 7, 1961 (神戸大学経済学部))

私はその研究所のことをもっと知りたいと思っていたが、遠藤大使は今年（一九七六年）五月病没されてしまった。私達のパタゴニア探検の最初の手ほどき書であった Alberto M. de Agostini: Andes Patagoniche Viaggi di Esplorazione Alla Patagonica Hustrale 1949 の著者アグスティニ神父が一生をかけて集めたパタゴニア資料がドン・ボスコ博物館 (Don Bosco) としてプンタアレナスにあって、私は一九五八年、これを見ている。神父の没後、どうなったか、もし、新設のパタゴニア研究所に引き継がれているなら幸いだかと思つて、それが確めたい気持である。いまは遥かに遠くなった高木正孝君の霊に、カラファテの果を共に食べた思い出をこめて、この一文を献げる。

「六根清浄」をめぐって

辻 莊 一

六根清浄——これは言うまでもなく、修験道の行者たちが験者にひきいられて、靈山に登拝するときとなえる祈りのことばである。これに「お山は晴天」「お山は頂上」などのことばをつけ加えることが多い。六根とはもともと妙法蓮華經、略して法華經のなかにあらわれている言葉で、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つのものを指す。これらはみんな人間にそなわった、広い意味での認識の道であって、眼は視覚を、耳以下のものもそれぞれ感覚を意味する。この六根のうちでいくらかわかりにくいのは身であるが、これは權威ある法華經の解釈によれば皮膚の感覚すなわち触觉であるとのことである。意は五つの感覚や知覚を総合して行為を規制する心のはたらきと解されている。今でも行者や登山者がたずさえる金剛杖はもともインドの武器であった独鈷が法器となり、もろもろの塵すなわち清浄ならざるものを追いしりぞけ、それらをうちほろぼす力や方法を象徴するものとなり、かたちが少しづつかわって金剛杵と名づけられたものとなり、それがやがて金剛杖になったと言われている。金剛杖の上端を白紙で包み、麻のひもでそれをしばるのはそれを清浄化するためである。しかしその杖が六角でなく、八角である理由は今のところ不詳である。靈山登拝にあたって、行者はどのような心持で六根清浄となえるのであろうか。かれらは登拝に先きだっているの方法で潔斎をすませているから、自分たちの六根はすでに清浄であり、靈山に登って頂上にいる仏あるいは神

「六根清浄」をめぐって

にまみえる資格がそなわっているとの、よろこばしい自覚を表現しているのだと解されなくはない。すなわちこのとなえごとは宗教的かちどきであり、法悦の告白である。秘密仏教が唱導する即身成仏の理想にちかづいているよろこびの声である。

とは言うものの六根清浄はふもとでの潔斎や参籠によって達成され得るであろうか。煩惱の犬は追えども去らずとある上人が言ったことである。潔斎は雑念を払い去り、神仏にまみえる資格を与えおわるものではなく、精進の決心の象徴にすぎない。この清めの行事はみずから清浄でありたいとする意思の、かたちのうえのあらわれである。それゆえ山頂に向いつつ唱える六根清浄は、ほんとうに清浄になり切っていないこの身を、さらに清らかなものにして下さいとの神仏への祈りである。祈りのところがあるゆえに、六根清浄のあとに「お山は晴天」や「お山は頂上」などのねがいや希望のことばが、なめらかに続けられるのである。けわしい道をあえぎ登ることはほんとうの清浄の境地——これは神仏がいます山頂をも、清浄な心境をも意味する——に近づくための試練である。この試練に耐えないものはその信仰集団から排除される。排除のもつとも極端な例は大峯入り行者の谷行タニウチである。これは能楽にもなっているのだが、峯入りの途中に病気になったものは、簀巻きにして谷へおとすことである。病気は六根が未だ清浄になつていないか、あるいは清浄を願う心の過怠によるものだから、神仏の意にかなわぬと見なされるのである。このようなことが行われるほど、霊山の登拝という行事はきびしい。しかし、このきびしさに耐えぬいたものは神仏にまみえることが許されるのである。

霊山への登拝は常識から見ても祭祀であつて、そのほかの何ものでもない。この行為が祭祀であることを觀念として規定するためにはホイジンハの所説を援用するのが近路であろう。すなわち処と時とに限定され、一定の儀典にのっとり、神秘的な存在に対して祈る行事である。霊山と見なされる山は数多くはなく限定されている。御岳山、月山、英彦山その他を数えあげることができる。また実際にこれらの山に登る機会が与えられない人のためには、その

山のミニアチユアを造顕する。関東各地にある「お富士山」はその好例である。登拝行事はそこにおいてのみ正統視される。これらの霊山は山開きの式が行われたのちでなければ祭祀としての登山とは認められない。

元来山岳は水源である。そこから流れ落ちる水があつて稲作が成就する。奈良盆地南辺には吉野山の水分神社をはじめとし、多くの水神がある。室生寺の近くの竜が住むと伝えられる洞穴もそのひとつである。この種の神社が関東、東北地方にすくないのは、この地方の稲作農業がおくれて行われるようになったからであろう。このような経済的側面からの山岳神聖化を助長するのは、山岳の物理的大きさ、それに登ることの困難さなどである。また山中にはいったときに会おう予期せざる天候の急変なども数えられるであろう。また山中に住む人たちの特異な風姿や所行も平坦地に住む人の眼には奇異にうつたてたであろう。吉野山奥深くに住んだと伝えられる国栖^{クニノスミ}、山間を自由に移動する山籬なども同じ作用を平野に住む人にとっては別趣の存在と思われたであろう。このように日常から切りはなされ、恩恵と恐怖、理論的には捕捉できない対象、それに対する人間は無力、無価値の感に満たされるものは聖という性格を与えられることは、オットーによって明らかである。このようにして山岳は聖なるものとみなされ、この聖なるものに近づくには祭祀によらねばならぬとされる。

ここでわれわれはふたたびホイジンハの門をたたきたくなる。と言うのは聖なる山岳に近づくためには祭祀という厳肅な行事、それにとりまなう特異の心組みを要することが明らかになったゆえに、近代の登山も往古の霊山登拝と同じ心組みでなされるべきであると考えられるが、事實はそうではなくてスポーツになつてしまつてゐる。どうしてこのようないちじりしい変化が起つたのであろうか。この問をたずさえて、この多識犀利な碩学の教えを請いたいのである。ホイジンハは先輩である文化形学研究者フロベールニウスの所説を踏み台とし、これを補正して、祭祀は要するに現実にとつてかわるものを生み出す行為であるとする。その行為はおのずから劇的にならざるを得ない。思い出すままに実例をあげるならばオーストラリアに住むある種族は狩猟にでかけるに先立って、村の広場に集まり、動物

のかたちを砂上に描き、それをめぐって人々はあるいは槍で突く動作、矢で射る身構えをする。これはものまね的舞踏である。この舞踏が劇に進化するのには容易である。穀物の豊饒をいのる祭祀は、太陽、風、害虫、雨などあらわす人たちが、耕地のまわりでおどる。このおどりをする人、見る人はほんとうにゆたかな収穫が眼の前に出現したかに感じる。このよるこびがただちに宴会に続くのである。万葉集にもあらわれている歌垣、特に第九卷にある柿本人麿の長歌が美しく歌いあげている筑波山の嬉^カ歌^ヒ会はその歌からもわかるように乱婚であり、それが同時に豊作を祈る祭祀でもある。同種の例はディオニソスの祭祀においても見られる。このように祭祀と遊びとの結びつきについて、ホイジンハは遊びと言う台木に祭祀がつぎ木されたのだと言う。別のことばで言うならば祭祀は遊びに養われているのである。フランスの学者カイヨワはこのオランダの学者の所説をかなりの程度に補正していて、祭祀と遊びとの関係を逆に考え、祭祀があつてそれが遊びに転化したのだと主張する。この学説のちがいについての省察は今必要でないが、どちらにしても祭祀と遊びの不可離の関係は認めなければならない。いずれの学説をとるにしても登山は聖なるところへ踏み入れと言う祭祀であることにかわりはない。

今ではよほど少なくなったが、関東の富士講、大山講、関西の大峯講など、信仰を動機とする登山者の団体が残っている。これらの団体は端的に言うならば一種の社交団体であつて、純粹の信仰登山を目的とするものではないように思われるが、すこし立ち入って考えるとそれはやはり信仰登山団体とみなすべきであることが明らかになる。現代では信仰は個人の精神の問題を考えられがちであるが、これは宗教の反面であるに過ぎず、その社会的側面を見落した考え方である。信仰を個人の問題に局限するようになったのは西洋でも日本でも近頃のことと、それまでは宗教は生活共同体のうちにあつた。この宗教のありかたは今でもかなり強力に自己主張していて、それで信心会、講等を保持しているのである。それで講は社交団体としての面を持つ。この面は宗教、信仰の質を低下させると考える人もあるが、それは近代のイデオロギーに捉えられているので、宗教の本質を認識しない考えである。社交を兼ねた信仰

登山は断じて祭祀の枠の外にはみでるものではない。

今まで書きしるしたことがらは現代のスポーツ的登山と言う現象から、あまりにもかけはなれていると思う人が多数であろうと推察されるし、そう思うのももつともである。現代の登山はスポーツ、遊びで、登山者の心ぐみは富士講、大峯講の行者の心ぐみとは全く無縁であるが如くに見える。六根清淨のとなえごとが持つ禁欲的意識は消滅し、アルピニズムは人間の能力の発露のひとつの形にかわり、山は人間の能力によって征服されるべくそこに立つ物理的存在と考えられているようにも思われる。山はその聖なる性質、すなわち恐るべき、気味の悪い、近づくことの許されない性質を失ったがごとくである。この変化は人類が地球を離れて、宇宙を航し、月面に立つことができる現代においては当然のことで、同じ地球上にある高山はことごとく人間の足で踏まれるべく、そこにあるように見なされるのは自然の帰結であろう。この著しい変化を遊びの持つ性質の一面を強調して、根拠づけるのは比較的容易のわざである。しかしこの根拠づけは遊びのある一面にかかわるにすぎず、もうひとつの面が見落されるか、あるいは軽視されていることを自省すべきである。

すでにドイツの詩人、哲学者シルラーは子供の遊びを省察して、そこにまじめさ、今一步で厳粛とも言うべき心のはたらきがあらわれていることに気がついて、それを出発点として芸術および芸術家の類型、ひいては人間の類型を明らかにすることができた。これとは関係なくホイジンハは遊びの条件を探究したばかりでなく、それが文化推進の大きい力であることを説いた。その説の体系的な祭の遊戯的性質を見出したのである。人はこれらの諸説は未開人や往古の文化についてであって、現代には妥当しない文化人類学の成果にすぎず、まして現代のアルピニズムを根拠づけるのに全く無益だと考えるであろうが、事態はそんなに簡単ではない。人間の心は月面の到達に成功したことを知ったことぐらいで変ってしまうものではない。六根清淨のとなえごとをする行者の心ぐみはたやすく失われてしまうものではない。

われわれは日常生活においては社会の秩序の枠のなかで、何人によっても許容せられる言動をして生活している。社会の秩序の枠は実はその社会を構成している個人のコンセンサスによってできているもので、それは社会のものであり、個人のものでもある。この状態において各個人はその精神の表層のはたらくで動いている。しかし天災、戦争などによって、社会の秩序が平静を失い、恐慌状態になったとき、個人の心も平静を失うし、また極度の精神の衝動または薬物によって精神はバランスを失う。このとき精神の深層が表層のコントロールを突破して、個人の言動を支配する。ちょうど火山が爆発して溶岩が地表を掩うのと同じである。精神の深層は大きく見るならば人間が単細胞から今のようなものになるまでの経験の集積であって、平静な状態においては表層の制御作用によって、そのはたらくは閉じこめられている。しかしたとえ平静な状態にあるときでも、深層は無意識のあいだに表層にはたらくかけている。自分に都合の悪いことは忘れ、良いことはよく覚えているのはこの種の作用のあらわれのひとつである。

現代の登山者がどんなに現代振りをしているも、一皮むけばその精神の奥底に山を神として拝したり、潔斎して六根を清淨にして靈山に登拝する行者の心が潜んでいる。山が聖所であり、登山は祭祀であることが再認識される。きわめて手近かなところに現代の登山者の心の奥底をのぞかせる窓がある。登山者は山の魅力にとりつかれていて、自分が何のために時としては生命を賭して、より高く、よりけわしい山に登る。魅力は未知で、知力をつくしても捕捉できず、従って恐ろしく、気味の悪いものが、人をひきつける力である。人はたとえ恐ろしくとも、それを捕捉せずにはいられなくなるのが魅力のものである。このような力にうながされて山に登るのがほんとうの登山である。宗教哲学者オットーはこれを聖と名づけた。この概念規定は今でも改変を受けてはいない。たとえ人智がいかに発達しようとも聖なるものは永久に存する。もし聖なるものが無くなったとするならば、人はもはや生きては行かれない。人生は聖なるものが到底捕捉できないと知りながらもそれにむかって進むところである。山が聖なるところであること

をやめれば、それは山でなくなるのである。無限のものにむかって有限の存在たる人間がはたらきかけるところにロマンティズムがある。ロマンティストは未知、無限のものの捕捉に生命を賭している悲劇の主人公である。現代の登山者は登山という祭祀の遊戯的側面を見て、その厳肅な側面、死に近づく誘惑を忘れがちである。われわれはふたたび山岳宗教の行者の六根清浄をねがう心ぐみに立ち帰って畏敬の念をもって山に向わねばならない。たとえすでに道がひらかれ、多少の努力さえ払えば登り得る山であっても、それが自分の先祖たちによって聖なるものとされていたことを憶い出して、六根清浄を念じつつ足をこばねばならぬと思う。

日本山岳会での五十年

吉 沢 一 郎

どういう風の吹き廻りか東京朝日新聞の「論壇」士から電話がかかり、山のことで何か書けということなので求めに応じたのが次のようなかたちになって昭和五十年の三月三十一日付朝刊に掲載されてしまった。私にはてんで縁のない場所なのであるが、ともあれ光栄なことになっている。この内容は普段私の考えていることの全部ではないにしても、私のような人間の頭にどんなことがあるのかと疑問をお持ちの方々にとって多少の御参考にはなることと思う。

誰でも自分のやっているスポーツが一番で最高のものだと思っている。テニスでも野球でもそうであろう。だから私がわれわれの山登りを凡ゆる意味での最高のスポーツだと自負しているとしても一向差支えはあるまい。お互いさまだからである。

では何故われわれは登山を最高のものと考えているのか。それは相手が人間でなく、悠久にして時には仮借なき大自然だからだ。私には高級な理屈は解らないし、書けもしないが、洋の東西を問わず、自然を相手とする登山界や探検界からは、私の狭い知見の範囲においてさえ、如何に多くの、そして素晴らしい芸術や科学や文学、更に最もよいことには、豊かな人間性に恵まれた人達が現われて来たことか。自然を相手とする登山とは、それほどに影響力の大き

い、啓示的な、幅も広く深さも深いスポーツなのである。

ずっと以前から私は、登山家とは「登り、読み、聴き、書く」（飲むこともよいと思うが私には縁がない）ことを信条とすべきものと考えて、機会ある毎にこれを若い岳人達に吹き込んでいた。この四つの信条を「吉沢語録」と言っている人もあるが、別に中国の毛沢東主席に教わったものではない。

又、私は山登りをしている人を、登山家と登攀家と登山者に区別している。私の定義によれば、登攀家とは所謂クライマーのことで、金物や綱をしこたま用意し、急峻な岩や氷の壁を殆んど専門に攀じている人である。然し残念ながらこの中には山を知らない人も沢山いる。

登山者とはアルピニズム論などという難しい理屈は抜きにして、素直に自分の山を楽しんでいる人を言い、その人達に、何故山に登るのかと聞くと「山がそこにあるから」（マロリーがそう言ったというのは作られた伝説であるという人もある）などと気取ったことは言わずに、「好きだから」と簡明卒直に答える最も純心な人々のことをいう。

従って登山家は原則として山では死なない。登攀家は岩で落ちなくとも、山で死ぬ場合が時々ある。登山者は謙虚だから、一般には自分の山で死ぬことはない。

では一体、ヒマラヤなどへ、貴重と言いたい若い生命を簡単、無惨に棄てに行く人達は、私の分類では何れに属するのであろうか。勿論一概には言えないが、これらの人は登山家にも登攀家にも又、登山者にも収容しにくい人々である。物議を醸すといけないうので瞭きり言うことは避けるが、こういう人たちは自分のことだけしか考えられない、要するに思慮、分別が足りず、心にゆとりのない人々なのである。彼等は「吉沢語録」のようなものには全然無関心な、面倒のみきれないお手あげ人種で、結局、山にも社会にも適応出来ないものであるから、ダーウインの法則に従うことになるのも止むを得まい。

日本人、特に所謂指導者階級の中には「千載一遇」の好機は逃さない反面、心の余裕というものがない輩が多い。

それは登山とか探検とかいう一見バカバカしいものにはまるつきり興味が持てないお人、ということからでもよくわかる。

同じ島国でも英国などは、貧しくても鈍せず、苦境を心の余裕で乗り切ってしまう。これは善悪を別にすれば、冒險精神を尊び、海賊にまで爵位を与えた英国のゆとり(?)のある伝統によるものであろう。

日本の海外遠行隊(遠征は不可)や無法で無茶なトレッカーなどから毎年可成りの遭難者が出ていることは、今やそのアニマル性と共に世界的な問題になっている。成功率の高い少数精鋭主義の外国隊に比べると、日本隊には隊そのものに内在する、いやな問題が数多くある。日本山岳協会の推薦状がなければ、ヒマラヤ一つ行けないようでは、外国に対してもみつももないし、いろいろの面で自らの四等国民であることを、世界に表明しているようなものである。

東京市京橋区宗十郎町という役者の名前みたいところで生れたらしい(明治三十六年十一月六日)。私は、その後麴町の元園町へ移り麴町幼稚園へ、次いで小学校へ入ったのだが、それまでのことは殆んど覚えていない。ただ家の裏の土手の上に沿線(山手線)が走っていたことを記憶しているが、それは渋谷のどこかにいた頃のことであろう。それにもう一つ、母に連れられて八王子の駅から漆の剝げた人力車で郊外の河岸近くに住んでいた母の父親を訪れ、麦飯を出されて一口も食べられなかったこと。

幼稚園は通りを距てて家の筋向うにあった。見えや外聞で入れられた訳ではなく、家の商売が忙しくて邪魔だからであったのであろう。でも武藤先生という優しい先生がいて私たちをとてても可愛がって下さったこと、それは先生のお名前をいまだに覚えていることだけでもお解り頂けるかと思う。

幼稚園の隣りにあった麴町小学校時代の遊び場は半蔵門から四ッ谷見付の間で靖国神社、東郷元師の家あたり、甲

武線の通る上の長い土手、今の上智大学あたりの堤とお堀の斜面、清水谷公園、英国大使館の周辺あたりとなっていた。悪いこともいいことも皆この縄張り内で行なわれたのである。清水谷公園の小池にはよく目高をとりに行つたが、細いみみずは公園の前の大きなドブに沢山いた。この池の前にある茶亭で将来山の会が開かれる度に来るようになるとは夢にも思わなかった。海水浴は月島や新小安、遠足は高尾山や鴻の台であった。遊びほけておそく帰ると親父は私をよく裏の石炭置場へほうりこんだものだ。

一中を受けて二日目のに落ち、開成では初日ではねられ、やつのことで駿河台にあつた明治中学へ入ることが出来た。元園町から駿河台までは相当歩きがあつたが、この辺からそろそろ足が鍛えられはじめたのであろう。だがまだ山のことなどで頭には浮んで来なかつた。学校と家の手伝いで一杯だったから、それどころではなかつたのである。

中学二年になつて親父が言った。お前は長男だから家の商売を継げ、それにはソロバンが大事だから商業学校へいけと。私は素直に編入試験をうけた。そして入つてしまつた。不思議なことである。というのは当時大倉商業といえばなかなか難しい学校として通つていたからである。次に親父は勝手なもので、家の都合がよくなつたからお前は行きたければ商科大学へ入れと。うけたが一年目は暗記ものが化学で見事に落ち、二度目は暗記ものが好きな地理だったのでよかつた。数学も漢文も藤森先生の日土講習会に真面目に通つたので可なり出来た。神田先生のヒアリングは消防ポンプの話だったがこれもどうやら無事だったらしい。慶応と一橋の両方に番号が出ていたが、私は一橋を選んだ。月謝が安かつたからである。母親は涙をポロリと二、三滴おとしていた。

組がきまつてそろそろ顔なじみが出来てきた頃、皆に聞いてみると大概どこかの中学や商業の一番ばかり、とんでもないところへ入つたものだと一時はガックリきたが、段々とつき合つていくうちに私同様運がよくて紛れこんできたようなのもいたので、これなら大丈夫と一まずホツとという訳だったのである。「今度山岳会をはじめたから希望

者は入れ、山はいーぞ」といったことの書いてあるポスターがそこらに貼ってあるのを見つけ早速申込んだ。そして今でいう一橋山岳会の第一期生となった。五十三年前の話である。これはある意味では運のつきと言えたかも知れない。大正十一年四月のことであるから私の十九歳の時である。その後弓道、馬術、ボート部などにも入ったり入れられたりしたが、山が忙しくなるにつれ、皆やめざるを得なくなってしまうた。その時の最初の山行は飯田町駅を出発点とした燕槍の縦走であった。私はこれですっかり山のとりこになってしまった。われわれの山岳会をつくってくれた三人の先輩たちには今でも心から感謝しているのである。それにしても十五、六人もいた第一期生がこの間、村尾金二君が死んだのでたった二人しか残っていないのは何としても淋しい。

日本山岳会には一九二五年に入れてもらった。これは榎さんたちのお口添えの賜物と覚えている。アルバータの五十周年と私のJAC入会五十年が同じなのも何か不思議な因縁があるようだ。われわれの最初の燕槍縦走の時リーダーの一人をつとめた中川孫一氏は早川種三氏の従弟で槍からおりて「五千尺」に泊った夜、たまたま早川氏が上高地におられたので宿の二階の石油ランプの下でわれわれに山を語って下さったこと、これなども不思議な因縁のはじまりの一つになっていると思う。

私は日本山岳会の古い時代のことはよく知らない。事務所が虎の門の不二屋ビルにあった頃、私の家は桜田本郷町（今の西新橋、日石ビルのあるところ）にあったのでよく遊びに行ったり、本を読んだり調べものをしたりしていた。主として塚本繁松さんがいた頃である。事務所の階段を下りて外へ出たらB25が銀体と銀翼を白雲と青空に輝やかせながら編隊で悠々と飛んでいた。ボンヤリ眺めていてお巡りさんにおられたことを覚えていた。その頃黒田孝雄氏がガルワールの地図をくれたことをいまだに忘れない。あの人も早く死に過ぎたものだ。それからお茶の水、原宿、錦町河岸、そして湯島、それぞれの場においての思い出も沢山あるが一々述べているヒマもない。これらにおいての先輩方からの教えと導きは直接、間接を問わず広くかつ深い。

前に言った通り、私は一橋大学山岳部の第一期生であったから山を教えてもらう直接の先輩はいなかったが、当時の先輩である早大、慶大その他の学校山岳部の人々とともに日本山岳会の先輩方との触れ合いは、私のために口言えない筆につくせない大きな力となった。その後の会合も同じだが今から思うと清水谷公園での幾度かの小集会は特に懐しい。軍人であった当時の大島亮吉氏の丸坊主頭。小島鳥水さん、武田久吉さん、木暮理太郎さん、冠松次郎さん、楨有恒さん、それぞれにくせ者で山男らしい一本気なところもあり面白かった。当時は畏れ多くてとてもそばへも坐る勇気がなかったが、それらの人々も楨さんを除いてもうこの世にはおられない。

日本山岳会において私は幹事、理事、評議員、副会長などを歴任してきた。その間殆んどこれといって自慢の出来るような事は何もして来なかった。誠にお恥しい次第である。私の最も印象深かったのは日本山岳会から国際山岳連盟(U.I.A.A.)のロンドン総会に出席させてもらったことである。五十日がかりの世界一周となったが私のためには随分役に立った。それが今だに尾を引いているという事は日本山岳会その他の人々のお蔭である。夢々忘るることなかれというところであろう。ビュール・ホテルからエベレストをこの眼でみた時と同様、世界のエベレスト的存在の各国の登山家に直接その家で、あるいは山岳会で会えた時は実に嬉しかった。こんな好機会に恵まれた人はそう滅多にあるものではない。それらの人々からは時々便りがある。これも私にとっては大きな財産である。

お蔭様と言えば私にはまだ幾つかのハイライトがある。一九七〇年にエド・ヒラリーとルイーズが来て一緒に立山、高山を一週間旅したことで、『アルパイン・ジャーナル』の一九七四年号に私の書いたものが三つも出たこと。「山と溪谷」社から山岳賞をもらったこと。それに奥アマゾン探検隊の本部長として十三年振りに南米の中北部の国を飛び歩き、ボリビアの旧知、ベネズエーラのカラカス、オリノコ河、コロンビアのボコタ、ペルーではイキートスでアマゾンの本流、ワラスへ行って車で谷川さん御一家を訪ねたり、日本隊のお墓詣りやヤングヌコ湖畔のわれわれの旧跡を見たりしたこと。

ヒラリーらとの立山、高山部分における費用の一番のスポンサーは富山の中山勇吉（清兵衛と改名）さんだったと思うが富山の人々には大変なお世話になってしまった。日本に来て公式な席に出ることの多かった二人には小人数での、こんな悠たりした山登りをやったことは彼らにとっても嬉しかったようである。そのルイーズが今年突然（三月末）ネパールで飛行機事故のため死んでしまった。私がこんなに天を恨らんだことは滅多にない。私はエド宛に「ノー・ワーズ、アーメン」という弔電を打ってもらった。他に言いようがなかったからである。近くヒラリーの自伝を訳すことになったのも不思議な縁で、エドも大変喜んでいるが、それにしてもルイーズが生きているうちにオークランドを訪ねえなかつたことが如何にも心残りである。

次に一九七四年の『アル・パイン・ジャーナル』に載った記事の一つは長文のもので（地図と写真入り）「日本の山登り」というのであるが、私も随分苦労して書いたもの、編集長のパイアット氏が手を入れてくれたので大分立派なものになった。二番目は三男の岳夫が上智大隊の一人として一九七一〜七二年に行つた。パタゴニアの大陸氷南部を縦断し運よくプエルト・エデンに帰えりついた時の記録である。地図に記入しておいた「アルティプラーノ・ハボン」が消されていなかったのは有難い。三番目は松方三郎氏の追悼記である。字数が四〇〇〇字と制限されていたので困つたが横さんの御意見なども入れて送つたら字数は少し多くなつたがそのまま載っていた。今年の『アル・パイン・ジャーナル』にはパイアット氏に頼まれて佐藤京子（黒石恒）隊の女性初の八〇〇〇メートル峰（マナスル）を訳しておいたが、この原文を英文に直すのは可なり難かつた。どんな風に出てくるかが楽しみである。この次は何を書くか。ここに書いた短文をそのまま英語にするのも面白からう。もし出してくれば、たとえ幼稚なものであつてもフランスのルネ・ディッテールの希望の一端を満すことにはなるう。

田中栄蔵氏と相談して、私は現在の日本ヒンズークシュ・カラコルム会議をつくることにし、深田久弥氏を副議長

に迎え、第一回の会合を宮森君らの努力で裏磐梯で開いた。以来今年で七回目の福岡大会を持つことになった。若い同志が次第に集まってきた。私はこの同志たちがどう育っていくか、それが楽しみである。山をそして山男を純粹に愛する山男が育ってくれることを祈っているのである。技術やタクティクスは各自の属する山岳会で主としてやればよい。HKTでは心の繋がりを深め広めたいのである。

また田中栄蔵氏や安川茂雄氏その他の人々の好意で私があかね書房などから山の古典を幾つか訳して出してもらった。これはまだそう古いことではないが、私にとって随分勉強になったし、精神、肉体の衰弱防止にも大いに役立ったので、これからも益々頑張っていきたいと思っている。本と私のことは四谷竜胤氏の『山と雪』にも書いてあるが、次の「結び」の中でちょっと触れておくことにする。それにしても振り返ってみて私が最も残念に思うのは若い時の時間をもっと有効に使っておけばよかったということである。心がけさえあれば少なくとも日本語を含めて五カ国語ぐらい一応の水準まではいけたはずである。中でも私が最も手がするのは日本語である。日本人で日本語の文章が自由に書けないほどやりきれないことはなからう。私は自業自得ながら適切な語彙を駆使した文章の書ける人が羨やましくてならない。

友達と本を取上げられたら私には何も残らないとは時々雑筆に書いてきているが、友達のこととは別扱いとして本は身分不相応なほど買ったし現在もなお買っている。買ったものを全部読む訳には勿論いかない。いつか何処かへ寄付するために買っておくものもある。それでいいのだと思っている。従って貸したものが戻って来なくともそう残念には思わない。とに角お蔭様で年をとるほど忙しくなり（自分から忙しくしている傾きがないでもない）、また年甲斐もなく大きな望みも持っているので国外を含む友達への義理や人情を欠くこともある。勘弁して頂ければ幸いであ

る。もう私もこの十一月六日で七十二歳、人生の半ばは確かに過ぎてゐる。明日死んでも悔いのない人生ではあるがこの世にある限りは「山」のことをやり続けていきたい。藤島敏男さんではないが、幸い週休七日制なので雨の時には靴がダメになるのでなるべく外へ出ない。無用足しにはお天気の時を利用することになっている。睡眠時間は夜六時間、昼二時間、たまには本物の山にも登りたいが今のところ時間がない。とに角忙しいにつけのんびりにつけ充実した毎日を過していただけることは本当に皆様のお蔭だと思つてゐる。ここに厚く御礼を申上げる次第である。

上高地山岳研究所改築報告

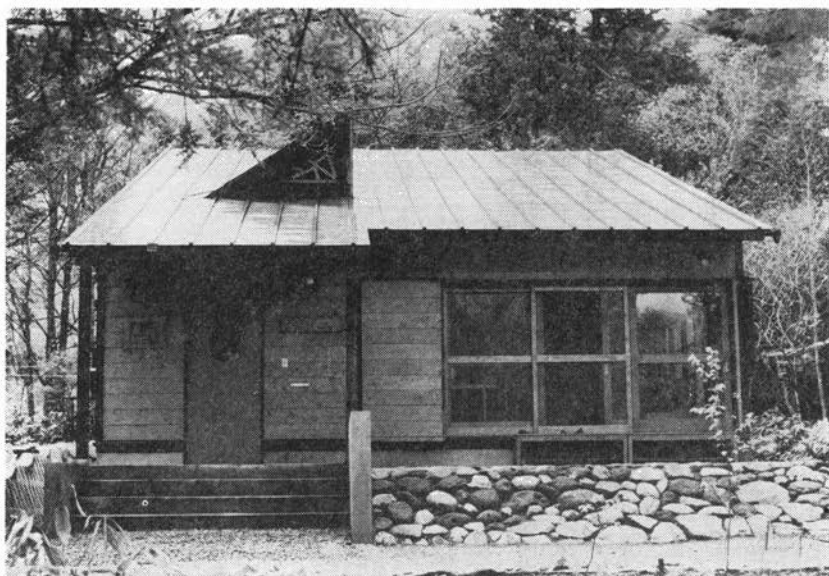
日本山岳会で山小屋を持ちたい、というのは昔からの念願で、古く、昭和七年にも山小屋建設委員会を設け、穂高の涸沢に作ることを決定、同年十月松本営林署より許可を受け積雪状態の調査を行なう時点まで来たが、建設予定地が雪崩の危険性が多いため、昭和九年七月の臨時役員総会で中止と決定されたいきさつがあった。その後この問題は表面に出なかったが、昭和三十六年、上高地河童橋から岳川への道を約五分ほど登った左手の森林中（正式には長野県南安曇郡安曇村上高地国有林一四イ林小班）にある案内人組合の小屋を日本山岳会でゆずり受けることになり、同年五月二十五日、松本営林署より正式の承認を受けて同年十月二十九日、ささやかな落成式を開き、まがりなりに日本山岳会上高地山荘が発足することになった。

この間のいきさつについては、『山』三六二号に当時の日高会

長が記されているので省略するが、山荘といっても普通の平家建ての民家で、とても山岳会のクラブ・ヒュッテとはほど遠いものであった。しかも老朽化がひどく、昭和四十四年、ついに閉鎖しなければならぬほどになった。

そこで早速、増改築ということになり、いろいろな案が検討された。場所も現在地の裏手の台地はどうかという松本営林署の提案などあり、また資金的にも山岳会独自では無理だから、どこか大企業に寮のようなものを作ってもらい、その一部屋を会のものにしたら、といったことも提案された。また増改築にあたってはかなり大規模なものをというので、会員石原憲治氏に仮りの設計図と約三千万円の見積りを作ってもらったのは、昭和四十六年の三月であった。同年五月十一日、担当理事として山崎と高山評議員が松本営林署に出頭し、協議の結果、現在の

山崎 安治



上高地山岳研究所正面

敷地の拡張申請は無理で現状のまま増改築すること以外にないことを確認し、設計もやりなおして準備を進める方針を山荘委員会にはかることとした。昭和四十六年六月六日、ウェストン祭の前日には三田幸夫会長、松方三郎名誉会員、島田巽評議員、中屋健次、藤井運平、山崎常務理事、塚本信濃支部長、高山評議員の八名が上高地厚生省管理事務所に出頭し、太田技官と増改築について懇談し、至急新しく設計図と増改築願いを当時の厚生省に提出することを説明了解を求めた。六月十一日の山荘委員会では林和夫委員より一階三十坪、中二階二十坪程度の山荘とし、芸大建築科教授山本学治氏に新しく設計を依頼する提案があり、従来の計画は白紙に戻すことに話がまとまった。また今井田研二郎委員より日本自転車振興会からの補助金申請などの話も出て、ここに山荘の増改築はようやく軌道に乗ってきただのである。

七月三日、四日、山崎、林、高山および設計者山本は上高地に行き、設計の下見をし、厚生省太田レンジャーと再度話し合いをした。

基本方針として、まず予算一千万円（日本自転車振興会からの補助金四百四十万円、会員募金五百万円、外部寄付金六十万円）とし、早急に準備に取りかかった。増改築とひと口にいっても、いざとなるとまことにやっかいで手を焼いた。①自転車振興会への交付金要望書、②環境庁への増改築許可申請、③文

化庁に対する天然記念物地域への建設許可申請と三段がまえの書類作りから仕事を始めねばならない。しかも①の書類締め切りは昭和四十六年九月三十日、今井田、村山評議員らの口ぞえで文部省関係から内々に話をしてもらい予定通りの金額は交付される見込みがあった。九月十五日、山崎、高山、山本は上高地の環境庁管理事務所再度太田技官と話し合い②の書類の内諾を取り付け、十月七日、山崎、高山は②と③の添付書類入手と書類作製要領を知るため島々の安曇村役場、豊科保健所、地方事務所、松本営林署へ出張し、必要書類を入手し、②は十月十一日提出、文化庁への③の書類の松本営林署からの同意書をそえ、十二月九日、安曇村教育委員会を通じ文化庁長官あて提出した。これで関係書類の提出は全部終了したが、何と云ってもこうした仕事は不慣れなのでなかなか思うようにいかない。十二月二十一日には三田会長と中屋常務理事に文部省体育局長と会ってもらい、自転車振興会の交付金について、協力方を依頼してもらおうなど舞台裏の動きもしなければならなかった。

年が明け昭和四十七年二月、環境庁自然保護局企画調整課から村山、丹部を通じ、五十坪から三十坪へと規模縮小を通告され、二月二十三日、新しい設計図を再び環境庁、自転車振興会、文部省へ提出し、また文化庁、長野県庁、松本営林署への変更届と大忙し、一時自転車振興会の四百四十万円の査定はゼロとの情報もあり、復活要求をするなど、まことに手に余ることば

かりであった。

しかし三月十五日、環境庁から認可の内示があり、次いで松本営林署の認可もあり、文部省からの強いバックアップで四月五日、四百四十万円の補助金交付の内定通知が自転車振興会からあり、四月には最後の文化庁からの正式認可も下ってようやく見通しがあった。昭和四十七年から伊倉剛三常務理事が山荘委員に加わったことはまことに心強く、そのため事務的な仕事もきわめてスムーズに進むようになった。

六月三十日、松本で、高山、伊倉、山崎が立合い業者の入札を行い、島々の安曇建設が落札し、正式に契約を終了。ここに研究所工事がスタートすることになった。七月七日、現地で三田会長以下が出席し、地鎮祭を行い、十月中完成を目標に工事が進められることになったが、現地は河原だったため、基礎工事のため掘り起すと、巨岩が多数露出したり、また大雨などのため工事は延び延びとなって、十月八日、ようやく上棟式を行った。中屋、林、伊倉、安彦、高山、早乙女、奥原らが出席した(山一三三九号参照)。十一月二十四日には、林、伊倉、山崎が現場を検分し、八分通り完成した山研の戸じまり、外囲いをして、一応四十七年度の作業を打ち切った。外装はほとんど完成したが、内装の一部と給水工事、浄化槽、電気工事、電話架設工事が翌年まわしとなった。

昭和四十八年六月二日、三日のウェストン祭には中屋、伊倉、

安彦、坂下、山崎らがまた現場を視察した。七月の理事会ではオイルショックのため建築資材が高騰し、電気工費などを含め、当初の予算を三百万円オーバーすることが判明し、募金五百万円の目標額をそのまま百六十パーセント達成することにした。待望の竣工式は十月八日ようやく行われた。この夏に伊倉理事が数週間泊りがけて仕事を督促してくれたのも書き落せない。会からは三田、中屋、林、伊倉、安彦、藤井、佐藤（久）、小原（晴）、山崎、信濃支部高山、奥原（教）、蒲生、早乙女の各氏が出席、福島安曇村村長以下地方関係者を招き、三田前会長のテープカット、林山研委員長の経過報告などあり、中屋副会長から安曇建設小西平八社長に感謝状が贈呈された。（『山』三四二号を参照）。昭和四十六年の春から足かけ三年、やっとここま

で漕ぎつけたときは感慨無量であった。十一月二日、伊倉、山崎でまた入所し、冬期閉鎖をした。

山研の給水は、善六沢からビニール・パイプで三六〇メートル導水し、飲料水にあてる計画になっている。これも文化庁、環境庁の工作物新築許可が必要であった。この水路敷使用許可は昭和四十九年四月に正式認可され、五月、伊倉、山崎が山研開きに出張し、六月のウェストン祭から正式に一般会員に開放し、梓川村在住の津村蒼治、はるの夫妻が管理人と決まり、宿泊者の世話をしてもらっている。

上高地山岳研究所などという名称はまことにいかめしい。私

たちもそんな名称は使いたくなかったのだが、関係官庁から許可を得るための方便として止むを得なかった。まだまだ不満な点は多々あるにせよ、自分たちの立派なクラブ・ヒュッテがここに誕生したことは、何といっても喜ばしい。会員各位は十二分に利用していただきたい。

終わりに、いちいちお名前はあげないが、山研改築に当り多数の方々のお骨折りをいただいた。ここにあらためて感謝すると同時に、なお資金的にもかなり不足なので、御協力をいただければ幸いと思っている。

日本山岳会上高地山岳研究所改築日誌

昭和四十七年

四月五日 日本自転車振興会より公益事業振興補助金交付内
定通知書受理

四月十三日 文化庁より文化財保護法第八十条第一項にもと
ずき、特別名勝および特別天然記念物上高地の現状変更（建物
増改築）許可

五月十二日 日本山岳会理事会において日本自転車振興会交
付申請書を提出することに決議

五月二十二日 中部山岳国立公園管理事務所長、特別地域内
工作物新築許可

五月二十九日 日本自転車振興会へ、体育事業その他公益増進を目的とする事業に関する補助金交付申請書提出

六月二十日 指名業者五社により競争入札を行い、安曇建設工業株式会社が六百四十八万円で落札した。

七月五日 安曇建設工業株式会社と請負契約を締結し、同日より着工、旧家屋解体作業開始

七月七日 地鎮祭を行う。

七月十三日 建築基準法による確認通知書受理

七月二十日 安曇建設と、石積工事、基礎工事につき、工事

変更請負契約締結

八月十日 日本自転車振興会より補助金交付決定通知書受理、同日石積工事完了

十月八日 上棟式

十一月二十四日 工事降雪により中止

昭和四十八年

五月一日 工事再開

六月十六日 電話引込み工事を中部電力松本営業所と契約

七月三十日 電話架設工事、京王デパートより備品を搬入

八月一日 ガス供給工事

八月二日 浄化槽検査

八月十五日 電気工事

八月二十五日 京王デパートより備品搬入

九月十三日 建築基準法による工事完了検査済証受理、第五十七号

九月十五日 暖房設備、給水仮工事

十月七日 安曇建設より引渡を受ける

十月八日 竣工式

十一月二十五日 登記完了

実施内容

イ、建物 木造（一部鉄筋コンクリート）造り、一〇九・三
五平方メートル 一階、玄関、厨房、ホール、手洗所（水洗）、
浴室、倉庫、管理入室六四・八〇平方メートル 二階 研究
室、研究予備室四四・五五平方メートル

ロ、暖房設備、浄化槽設備

ハ、什器、備品の設備（電子レンジ、ガス・コンロ、大型電
気冷蔵庫、応接セットなど）

収容人員 二十名 電話 〇二六三九五―二五三三番

上高地山岳研究所使用規定

第一条 社団法人日本山岳会は山岳知識の研究と登山の向上を図るため上高地に山岳研究所（以下山研という）を設置し、その使用についてはこの規定によるものとする。

第二条 山研を利用出来るものは、本会々員（団体会員にあ

つてはその代表者)を優先し、非会員にあっては会員の同伴者であることを原則とする。但し本会が開催するウェストン祭、研究会、講習会等の諸行事の場合はその使用を断ることがある。

第三条 山研使用者は原則として使用予定の一月前から申し込みを受け付ける。但し当日宿泊可能の場合は、山研直接申し込みでもよい。

次の事項を往復葉書で本会に連絡し、許可を受けなければならない。また使用日一週間以内に宿泊予定を取り消した場合、一人一律五〇〇円(切手代用可)を支払うものとする。

1、使用者氏名、会員番号

2、使用目的

3、使用予定期日

第四条 山研使用者は到着と同時に当該年度の会員証を提示し、備付名簿にその氏名、会員番号を、また非会員は紹介者を記入しなければならない。万一不都合なことがあった場合、紹介者はその責任を負うものとする。

第五条 山研使用者は管理運営費として次に定める料金を支払うものとする。

会員 一二〇〇円(団体会員にあってはその代表者一名とす)

非会員 二三〇〇円

就学前子供 五〇〇円、小学生八〇〇円

但し本会職員は会員と同様の料金とする。

第六条 山研使用者は運営をよりよくするために別に定める事項を厳守しなければならない。

第七条 この規定の改廃ならびに細則の制定は、山研運営委員会にはかり、理事会の議決によって行うものとする。

付則

1、山研開設期間は毎年上高地バス開通時期より閉鎖時期までとする。

2、この規定は昭和五十年七月十日より実施する。

なお使用料金には食事代は含まれていない。また、その後改訂増額されている。

ヒマラヤン・ノーツ75年

片山全平

カラコルム登山が再開されて二年、インドのインナーラインのオープンも加わり、ヒマラヤ登山の場がこの両国の山域に転じられた。しかし、なお依然として、七五年はネパール・ヒマラヤでの活動がより顕著であった。八千メートルへのバリエーションがさまざまなかたちで演じられていたことが強調され、特にエベレスト南西壁の一応の完結、ヤルンカン南壁の九人登頂、マカルー南壁のソロ登はん、まだ困難なローツェの南壁を残すにしても、ネパール・ヒマラヤ壁の時代に一線を引いた。

まず英國クリス・ボニントンのエベレスト南西壁における十四人の絞られた精鋭が早い時期に完璧な成果をあげた。登山の評価はさまざまであろうが、一つにはそれに投入された物量との相対関係からも評価されてしかるべきであろう。登山者の増大、限られたピーク、限定されたシーズン、そして制約された自然条件の克服が、準備段階からの大きなテーマであったし、今後の登山にも強く要求される要素である。そのことの代表的な旗手として、突如この年にラインホルト・メスナーがカラコルムのヒドン・ピークに登頂した。敢行した少数短期即決登山の新鮮味は、ボニン

トンのエベレストとくらべた場合、世界最高の大登はんですらくラシックの座に引きおろすほどのすざましさが見られた。

そして、七五年は日本女性隊の田部井淳子さんがエベレストで果した女性最高峰記録の樹立が光り、また期を一にして北方からは中国隊が二回目のエベレスト登頂を行い、そのなかには女性一人が含まれていた。ともかくこうした登法の多様さと、拡大される山域の組み合わせが登山をさらに今後とも多様化へと導くことになる。

エベレスト南西壁

七五年最大の成果だったポニントンのエベレスト南西壁（ポスト）についての大きな関心事は八千メートル上部のロック・バンドであった。同隊は従来の右雪田経由を捨て、左へと踏み入れた。これまでダグ・スコットが指摘していたものとはいえ、一行は九月二十日プレイスウェストとエストコートが見通しをつけ、二十二日ドウガル・ハストーンがロック・バンド上部にC6を建設した。その登頂の様子はすでに一部報道もされ、ポニントンの著書も刊行されることになっているので略す。ここでは、「壁」「縦走」のバリエーションが主流として世界の八千メートルの座の先端で展開され続けることになろうが、エベレスト南西壁の完結をみて、いま改めてその座を目標とした場合の基本的姿勢が問われるのである。ポニントンが七二年ポストのエベレスト南西壁で失敗に終わったあとものした「EVEREST SOUTH WEST FACE」からそれ以前の南西壁隊に加えられた批判と彼の持論を引用しておく。回顧の意味も含めて。

JAC隊（一九七〇年）に対しては「強力で、組織立った点では疑問の余地はない。しかし、チームを南東稜と南西壁の二つに分割した。あの隊では二つの試みを支えるには十分ではない。結果的にはいずれを優先すべきかの決断に迫られ、論議のすえ、ただ頂上に立つという目的のために南東稜ルートに比重を置いた」と。その後一九七三年南

西壁を目指した第二次RCC隊に対しても、彼は同様の批判をくだしてくるだろうと思う。

デーレンファースの国際隊（七一年）に対しては、JACよりも弱少でありながら、困難な西稜と南西壁の登はんを同時に行ったこと。登高なかばにして襲った悪天候が国際チームの脆弱な紐帯にゆさぶりをかけたことをあげ、「リーダーが前回の遠征隊を分析すれば、回避でき得るようなミステークを繰り返している。」

ヘルリヒコッフアーの欧州国際隊（七二年）は南西壁に絞ったものの、隊は英トリオと独塊の二つに色分けされ、危急のとき、「事前準備の不足と、登はん期間中の二つの間のミゾが避け難い弱味となつて」と予測していたが、残念ながら現実のものとなった」と。そしてメンバー選考には、無欲で、イージーゴーイングなクライマーよりも、「野心的で、エゴイステイックなタレントこそ頂上への道を開く」と結んでいる。みずから失敗した南西壁の報告書に他の隊の批判をも加え、一貫して英メンバーだけに絞ることを公言、ポニントンを含め、六人の南西壁経験（ハストン、スコット以上登頂者、マツキネス、エストコート、バーク遭難死）の十四人（ほかにBBCスタッフ）で再び七五年ポストの南西壁に切り込みをかけたのがポニントンの南西壁登はんであった。

ヤルン・カンとマカルー

ネパール・ヒマラヤでは、こうした流れのなかで成功したヤルン・カン、マカルーがある。少数でネパールの八千メートルに遊撃的な登山を試みるオーストリアは西ドイツとともに、プレのヤルン・カン（八五〇五メートル）の南面の新ルートを開拓した。ローツェ・シャルル初登頂（七〇年）に成功したときのジークフリード・エーベルリが隊長。第一次登頂はダッハー（西ドイツ）、ラクナー、ワルター（以上オーストリア）によって五月九日に、第二次は十二日にバウアー、フォクラ（以上西ドイツ）、ワーグナー（オーストリア）が、さらに十三日、第三次はマイエール（オーストリア）、シュトルム、ツィントル（西ドイツ）の三人がそれぞれ登頂した。マイエールとワルターはロー

ツェ・シャルルについて二度目の八千メートルである。同隊には西ドイツの高山生理学研究所の四人の医師がBCで医学研究を行っており、エーベルリはこの登山の結語として「今後カンチエンジュンガ東壁（シツキム）に関心をそそる」と会報に述べている。

ポストのネパール・ヒマラヤの圧巻は一九七二年について二回目に果したマカルー（八四八一メートル）南壁である。アレク・クナーベル隊長ら二十一人。十月六日ベラク、マンフレダが登頂、二日後コトニク、グロセリ、そして十一日にロンカールが単独で登頂した。ポニントンのエベレストとともに高く評価されている。過去には七二年のユーゴ隊のほか、ナイルツの率いたオーストリア隊（メスナーも隊員）、七四年スタムベルガーの率いた国際隊の計三隊が南壁に挑戦していた。南東稜（JAC東海支部）、西稜（フランス）とそれぞれバリエーションが開拓された。

プレにローツェ南壁に挑んだのはイタリアのカシンであったが、どうにもならなかった。英陸軍は、七六年のエベレストを目指し、この年はスプツェ南壁に挑戦したが、四隊員を失った。今後の話題の中心はここに集ろう。

女性隊の活躍

この年は国際婦人年でもあった。エベレストは日本女性隊の田部井さん、中国隊はパントグさんがそれぞれ登頂した。またカラコルムではポーランド女性隊が活躍した。ポーランド隊は男女十七人で構成、ガシャールブルムII（八〇三五メートル）、GIII（七九五二メートル）を目指し、GIIIでは、残されたヒマラヤ巨峰の最高峰に女性を含めたパーティーが登頂。さらにGIIでは女性だけのペアで登山史上初めて八千メートルを越えて登頂した。これら中国、ポーランドの女性登山隊の活躍をまとめておく。

中国隊は一九六〇年の登頂時隊長、史占春が再度隊長となった。陳榮昌、パントグ（女子登頂者）の両副隊長。前回の登頂者王富洲は登山隊党委員会書記として七〇〇七メートルのC4から登頂指揮をとった。そして女子隊員は新

五人を含む三十六人が参加。種族的にはチベット族、回族、オウエンク族、漢族に分けられ、職種は労働者、人民公社員、解放軍戦士、国家幹部、学生である。

B C (五〇〇〇メートル||ロンブク寺)、C 1 (五五〇〇メートル)、C 2 (六〇〇〇メートル)、C 3 (六五〇〇メートル)、C 4 (七〇〇七メートル||ノース・コル頂部)、C 5 (七六〇〇メートル)、C 6 (八三〇〇メートル||八二〇〇メートルから移動)、C 7 (八六八〇メートル||八六〇〇メートルから移動)。

パントグを除く女子隊員の主な顔ぶれは次の通り。ゴツサン(女子隊長)、チャンチョオ、チャサン(以上八六〇〇メートル地点に到達)。ツェリン・パチュン、ワンム、シャリー(以上八二〇〇メートル)、パサン、パイチェン(以上七八〇〇メートル)、ツェダン・チョマ、ツェリン・ヤンチン、周懷美、邢玲玲、ミマ・チョマ、ダツサン、チョガ(以上七六〇〇メートル)(漢族の周、邢を除いていずれもチベット族)。

五月十七、八の両日、男子十五、女子三人の登頂隊が二手に分かれてB Cを出発した。隊長はソドナム・ノルブ(登頂隊党支部書記、人民解放軍チベット駐とん軍某部隊電気技術員、二九)。女子隊員はパントグ、チャンチョオ、ゴツサン。二十、二十一日にC 5に到着。二十五日、ソドナム・ノルブら四隊員は午後二時になってC 7に向かつて出発。到着後さらに一部は第二テラスを乗り切り、頂上へのルート選定にあたった。登頂隊十八人のうち、女子二人、男子七人の計九人は体力的な理由で後退、女子隊員はパントグ一人となつて、ローツェ、候生福、サムドル、ガボ・キンの五隊員がC 6入りした。二十六日(十級||每秒25~26メートル||の強風)午後三時から、C 7組は上部のルート仕事を、C 6組はC 7へ強行し、それぞれの任務を終えて両パーティはC 7で合流。その夜十一時、ソドナムはC 7で党支部拡大会議を招集、二十七日の登頂計画をねる。二十七日(三、四級||3~8メートル||の風)登頂隊九人は八時出発。パントグは酸素ボンベ一本と羽毛シユラフをかつぐ。九時三十分第二テラスの頂部へ。午後一時、頂上まで五十メートルに迫る。氷壁に阻まれ、北にまき、さらに岩壁をトラバースして西に向かい、そのあと真つすぐに

頂上に向かった。到着時刻は午後二時三十分、一時間十分頂上にとどまった。

パントグ(三七)はチアンタ県の農奴の家庭に生まれ極貧の生活だった。一九五八年ラサの国营農場ではたらく。五九年中国登山隊に参加、七月、パミールのムスターグ・アタ(七五四メートル)の登頂に成功した八人の女子隊員の一人。六一年コングール・チュービエ(七五九五メートル)の登頂で当時女子登山の世界記録を更新した。六三年には北京の中央民族学院に学んでいる。三児の母で現在政府職員、中国共産党員(以上中国通信参照)。

ガシャーブルム登山はもともとポーランド、アメリカ女性の合同とし国際婦人年を記念して行われる予定だったが、英マウンテン誌49号に掲載されている。その後ポーランド男子隊が合流するかたちとなり、ポーランドだけの男子十人、女子七人で構成、そのリーダーはワンダ・ルトキエビッチ(女性)があたった。

一行はG II、G IIIのユルを拠点とした。当初は未踏のG IIIに重点が置かれていたが、G IIへの意欲にもかられ、まず八月一日北西面、ついでオーストリア隊(五六年)のモラベック・ルートからそれぞれ三人ずつの隊員がG IIを踏んだ。さらにハリナ・クルーガー・シエロコムスカ(三八)はアンナ・オコピンスカ(二七)と組んで八月十二日女性だけの八千メートルピークの登頂を行ったのである。これが女性だけのパーティの八千メートルである。一方、未踏のG IIIへは、G IIへの登頂が漸次行われているなかで、ルート開拓が進められていたが、八月十一日、ワンダ隊長(二二)、オニシケビッチとその夫人アリソン(英、三三)ら四人が初登頂を記録した。

ポーランドの女性登山界は、G IIのハリナ、G IIIのワンダの二人が開拓、主導的な立場にあった。二人はアルプスの岩場からノルウェーのトリロゲン(一九六九年)まで足跡を残している。ワンダは、レーニン峰、コルゼニエフスカヤ峰、ノシヤックとG IIIの七千メートル級を越えること四度にわたり、各種のスポーツ賞を獲得した。アリソンは一九六三年イギリスで登山を開始し、一九七二年のポーランドのノシヤック登山隊に招かれ、そのまま現夫君と結婚している。

ダウラギリ山域

ダウラギリIV（七六六一メートル）はブレに大阪府山岳連盟（野村哲也隊長ら十六人）が登頂した。しかし不幸にも河津士郎、安田悦郎の二人のサミッターが帰路行方を断った。しかしポストにカモシカ同人隊（高橋和之隊長ら四人）が十一人の登頂者を送って結末をつけた。一九六二年、ロバーツが西面から偵察を開始して以来、カベ氷河、南西のコーナボン氷河、北面のチョルテン・リツジ、南面ミヤグデイ・マータに至る尾根とさまざまな角度から十隊が挑戦していたもので、ここでは少なくとも十四人の犠牲者を出したことになる。

同時期ダウラギリV（七六一八メートル）は岡山大隊（棋木栄一隊長十四人）の森岡政明、チェリンが初登頂、またチューレン・ヒマール（七三七メートル）西稜ルートは明大隊（中島信一隊長ら十人）の長谷川良典、河野照行の二隊員が初登はんした。これでダウラギリ山群の未踏峰がすべて消された。ブレのダウラギリI峰（八一六七メートル）南岩稜に挑んだ東京都岳連隊（雨宮節隊長ら十七人）にみられるバリエーションの時期に至ったダウラギリであるが、しかしこの隊はなだれ遭難で中断、また予定されていた日イラン合同のダウラギリI峰北西稜も中止され、これらの難稜が残されている。

カラコルム

メスナーの欧州スタイル登はんの導入はカラコルムの持つ陽性にあっただかも知れない。ネパールと異った、岩と氷と光がある。七五年のガシャールブルム（G）山群で展開する登山はそれを裏付け、メスナー方式はさらに跳梁をほしいままにするだろう。この年、ヒドン・ピークでは、メスナーについてオーストリア隊が、G II（八〇三五メートル）ではフランスについてポーランドがと、一国一峰のルールはここにはなかった。そして、そのポーランドが、残

された未踏の最高峰GⅢ（七九五メートル）登頂の榮譽を勝ち取った。しかも女性を混えて。少なくともG山群では、クラシック・ルートに新ルートを混え、表と裏の組合わせて登頂へのしのぎを削った。パキスタン山域の登山解禁二年目を迎え、昨年の四十隊はさらに増加したとも伝えられ、少なくとも、カラコルムは、ラワルピンディの空港を通過した隊が三十二隊。ネパール・ヒマラヤからカラコルムに世界の登山界は舞台を移していった感すらする。そのための絶望的な飛行機待ち。さらにバルチ・ポーター特有の、取り引きをからませたストライキは各登山隊が避けて通ることのできない入山第一歩の障害となっている。

メスナーのヒドン・ピークはローツェ南壁（イタリア隊）からの転進であった。ペーター・ハベラーを帯同して挑んだ。南ガシャールブルム氷河から同峰北西面を目指した。五八年のアメリカ隊初登頂時のルートとは逆の新ルート。約六千メートル、七二〇メートルとピークを重ね、千メートルの氷壁を克服、八月十日登頂、そして前夜の七二〇メートルに三回目のピークをして降下した。このペアはマッターホルン、アイガーの各北壁を驚異的な時間で登はんでおり、その延長上に今回の登はんがあったといえる。もちろんメスナーはローツェで高度順化がなされていたろうが、ハベラーはこれがヒマラヤの初体験である。そのあと、十一日南からハンス・シエル（隊長）、ヘルベルト・ツェツフェラー、ロベルト・シャウアのオーストリア隊が頂上に立った。

GⅡ（八〇三五）へはフランス隊（ジャン・ピエール・フレサフォン隊長ら十五人）。やはり新ルートによるもので、五六年オーストリアのモラベックがたどったルートの右寄り南東稜で、第一次隊ヤニック・セニエール、マルク・パターが八月十八日登頂した。しかし第二次隊の一人が遭難死したため早々に引き上げた。このあとに残った男女合同のポーランド隊（前出）のGⅡ、GⅢの登頂が展開されている。同隊はGⅡへは計八人まで登頂しており、カラコルムではもつとも着実な登山を行ったといえる。

さらにポーランド隊はブロード・ピーク中央峰隊（ヤヌス・ワエレンスキー隊長ら十五人）を送り、百五十人のポーターが、結局BCに達したのは六人だったという障害もあったが、西面からグラゼク、ケジツキ、シコロスキ、クリス、ノワチクの五人が初登頂に成功した。しかし深夜の登頂で降下に難渋、帰還したのはグラゼクとクリスの二人という悲劇に見舞われた。

カラコルム東部で日本隊は静岡大隊（片山一隊長ら十三人）が最深部のテラム・カンリ（七六四六メートル）に挑み、八月十日、小林靖宣、小高和夫の両隊員が初登頂、中国領の山なみを望見して胸をとどろかせた。また七四年京大隊が登頂後サミッター二人を失ったK12（七四六八メートル）へは三度目の勝負として市川山岳会（山本良彦隊長ら八人）が挑んで、登頂に成功した。サミッターの川名茂、太田末男、竹山勝の三隊員は、不幸にして持ち帰り得なかった初登頂者に代わって頂上付近の写真を得、これで日本隊によって第一、二登が行われた。広島山の会（圓田慶爾隊長ら六人）はカンピレ・デイオール（七一四三メートル）の初登頂に成功。これは森榮、寺西洋治、林泰英、高見和成の四隊員によるもので、待機していたイタリア隊は転進を余儀なくされた。

またマルピティン中央峰（七二六〇メートル）はJAC岩手支部（笠原潤二郎隊長ら十人）が八月一日初登頂した。が隊員一人を失った。この同じチヨゴ・ルンマ氷河入りした碧稜山岳会隊（石川富康隊長ら九人）はライラ（六九八六メートル）に、京都カラコルム・クラブ隊（堀田真一隊長ら八人）はプリアン・サール（六二九三メートル）にそれぞれ初登頂した。しかし、パキスタンの山域ではいづれも申請通りの入山許可が得られず、許可されても短期間の準備に当惑、あるいは逆に幸運のクジを引き当てて直行する隊もあり、再解問のないパキスタンではまだ受け入れが整わない状態が続いている。

この稿を終えるまえ、七六年プレ、山学同志会がねらったジャヌー北壁ではその初登はんに成功、またJACがイ

ンド登山財団と合同して企てたナンダ・デビイ双耳峰では、東峰から主峰への初縦走を完成した。

予測されていたとはいえ、着実に登山の多様化が実現され、これに対応してネパール、パキスタンでは登山規約の改正が打ち出されている。また七五年秋、カトマンズではユネスコ主催の人間と生物圏に関する生態系研究の南アジア地域会議も行われた。参加国はインド、パキスタン、アフガニスタンのほか日本など多数が参加、いま問題となっている山地生態系の環境、土地利用、人口面の諸問題を合わせ、ヒマラヤの山地生態研究所設立の勧告もあったが、ヒマラヤ登山とのかかわり合いも深く、今後その活動が注目されよう。



ヌブツェからおちる雪崩がしばしば第2キャンプ(6300m)をおそ



第2キャンプをおそった雪崩の後始末



雪崩のあと、隊員の一人をBCに下す



雪崩のあと、鯉のぼりをたてて意気を上げる



ローツェ・フェース（7500m）附近を登る

エベレスト頂上に立つ田部井隊員
(1975年5月16日)



頂上より中国側の山々を見る

エベレスト登頂（一九七五年春）

久野 英子
田部 井淳子

女子登攀クラブによるエベレスト登山の計画は一九七一年に始まった。アンナプルナに登ったら、八〇〇〇メートルの山を」との意向であったので、アンナプルナIII峰（一九七〇年）に登頂し、報告書もその年の内に書き終える」と、早々に次の計画を話し合うようになった。どの八〇〇〇メートル峰を選ぶか、これといった決定的な山を選び出し得なかった私たちは、

（一）過去に登頂した隊の記録が手に入ること、

（二）日本山岳会隊の登頂により、経験者が身近にいること、

（三）八八四八メートルの高さに問題があるものの、（一）（二）により比較的に組しやすい、

ということ、エベレストを選んだのだった。七一年五月に、都岳連に申請書（七四年春）を提出したが、六月に日山協より不許可の知らせがあった。RCC隊が七四年を申請済みであったからである。もし、RCC隊が七四年の許可を得たら、七四年、七五年と、日本隊に許可が続くことは難しいと判断して七六年に変更した。ところがその後、RCC隊に七三年の許可がおりたため、再度予定通りの七四年に変更した。このときはもう十一月になっていた。

七二年七月、ネパール政府はエベレストの登山許可を次のように発表した。

七四年春 スペイン隊

七四年秋 フランス隊

七五年春 日本女子隊

七五年秋 カナダ隊（のち英国隊に変わる）

こうして、私たちは女子隊としてはじめて、エベレストに踏み入るチャンスを得たのである。のちにこの年が、国際婦人年に制定され、ネパールで、インドで、日本で……ご婦人方に大いに喜ばれる結果になった。

七四年三月から五月にかけて、四人の調査隊を出した。アイランドピーク（六一八九メートル）に登って高度を体験し、本隊のための事務折衝を行なった。調査隊帰国後、本隊がルクラまでのキャラバンをやるべきか、でないかが問題となり、体力を消耗するだけで益なしとの外部からの意見も多かった。実際に歩いてきた調査隊員も反対の意見が強かった。キャラバンの時期が四月だったので、暑さにまいったらしい。が、出発前は忙しさのため、山からは遠ざかるし、疲れ気味の体には、キャラバンは体調整に益ありとみて歩くことにした。事実、歩いて、食べて、眠るだけの生活は、心身ともに安堵し、ベースキャンプに着くまでは、全員体重はふえきみで、ズボンがはちきれそうだと悲鳴をあげる者もいた。最高の体重増は五キロだった。が、登山が終わったときの最高の体重減は十二キロであった。

（久野英子）

高所順応状況

当初、隊員決定の一つの条件として「低圧実験室における客観的なデータ」を考えたこともあったが、ヒマラヤ経験者のはなしや、海外登山研究会などで聞いた話によると、それは必ずしもあてはまらないということであった。ま

た実験そのものも、それほど結果を出し得るほど研究は進んでいないということであった。そこで隊員決定の資料にはできなかったが、出発前に四人一組になり、三組が一日半ずつ名古屋大学環境医学研究所で実験をうけ、六〇〇メートルを経験した。実際には、隊員十五名中、七〇〇メートル以上の経験者は二名、五〇〇メートル以上の経験者が六名であった。高所医学研究の一端にと、実験室に入ったので、帰国して間もなく実験室に入り、一年後も再び実験をうけることになっている。

エベレスト登攀の最大のポイントは高所順応にある。まず全員が元気にBCに入ることであった。隊長、ドクターを除けば、十三名の登攀メンバーの順応に大きなバラツキがないよう、キャラバン中に順応する必要があった。そのためキャラバンには約四十日という日程をとったのである。途中のルクラまで荷物を空輸するために、二名がルクラへ飛び、二名がカトマンズに残り、あとの十一名はラムサングからBCまでの三六〇キロを歩いた。先に書いた通り、このキャラバンの是非については意見が分れたが、キャラバンを終えた隊員の感想は、ほとんどが歩いてよかつたと言っていることから、是非についての結論は出たと思う。

二月二十八日から三月十二日まで、三八〇〇メートルのタンボチエに滞在し、高所順化のためのトレーニングを三回行なった。

第一回は、全員で四五〇〇メートルまで一日ハイキング、第二回は、タウチエとミンボ・コーラ方面の二組に分かれて、一泊二日で四九〇〇メートルまで。第三回は、全員で二泊三日でタウチエ方面へ。結局、一度も五千メートルを越えることがなかったので、BCまで荷物とともに、途中一泊ずつで入る組と、二泊ずつして入る組とに分け、それぞれ三月十六日と十八日に、全員がBCに入ることができた。

やはり、五三五〇メートルのBCは高所であった。はじめは、隊員テントから食堂テントにゆくだけでも、呼吸が乱れた。顔のむくみなどが出た三名は、一〇〇〇メートル下のペリチエまで下り、一週間後にはすっかり元気になっ

てB・Cに戻った。

アイスフォールを抜け、C1建設までに十四日かかった。五三五〇メートルから六〇〇〇メートルの間を十四パーティが往復することになったが、これが順応には良かったことだと思う。幸い事故がなかったからよかったものの、危険なところなので、あまりパーティを出したくないという気持と、ここは順応には一番大事な高さだということだが、いつも心の中でぶつかりあっていた。

十三名のうち三名がペリチェへ下ったとき、十名の隊員で五組がほんとうにフル回転であった。係の仕事でもB・Cに残っていないなければならない人、ルート工作にはちよつと無理な人、体の調子などを考えると、折角C1はできたがどの組を上げようかと苦しかった。C2、C3は短期間でルートができたため隊員の順応が間に合わなかった。人は誰でも順応する能力がある。しかし、短期間で順応する人と、かなり時間がかかる人がいる中で、限られた時期に登山活動をするとなると、どうしても短時間で順応する人に無理がゆく。この無理がなおその人の順応を強くするようにも思える。

C2をもっと充実させてからC3へのルートを作るべきではないか……という声もあったが、キャンプを充実させてからルート工作にあたるには、人も時間も少なすぎた。はじめてできたキャンプに泊った人には生活用具、食糧などの荷上げ不足で大分不自由な思いをさせたが、私たちの状態では、テントを建設させたらその充実と並行してルートのをばすことにして良かったのではないかと思っている。C3ができたころには、ペリチェに下った人たちもC1に上り、C2への荷上げにせいが出るようになった。しかし、C3からはじまるローツェ・フェイスは手強く厳しかった。酸素なしで登る限界の高さでもあり、私たちにとっては、アイスフォールにつぐ大きな障害であった。このローツェ・フェイスのルート工作には六十本の酸素使用計画をたてたが、実際にはC3で睡眠中に毎分〇・五リットルずつ吸う分の量しか荷上げが追いつかず、隊員はむろん、シェルパも酸素なしの行動であった。C4に達し泊った

者は四名という少人数であったことは、ローツェ・フェイスの厳しさを物語るものだと言える。さらに、C4からサウス・コルまでのルート工作は、隊員はイエロウバンドの下まで行っただけで、サウス・コルに達するパーティを出し得なかった。四月三十日、C4隊員の交代の日、風が強く、C3から上っていった隊員はC4に達せずC3に戻って、翌日C4に上った。この日、C4にいたシエルパのみで、ルート工作に出したが、サウス・コルへのルートを完了してしまった。

このあと、C2にて雪崩による事故のため、七日間が雪崩のあと始末に費やされてしまい、登頂隊だけが、サウスコルに達することになった。

四月上旬、C1付近が陥没の恐怖におそわれ、上部にテントを移動させるというようなことも重なりシエルパの休日や、頭痛などの連絡がうまくゆかないこともあったりして、荷上げ輸送は苦しかったが、ドクター以外は全員C3の雪を踏みしめていけたことは、ほんとうによかった。欲を言えば、C4に四パーティは入ってほしかった。そのチャンスはあったはずだった。もっと時間をかければ、登れる人は多くなるかもしれない。しかし、時間にも限りがある。やはり個人差は大きく、山も大きかった。

雪崩

五月四日、午前〇時三十分、今回の登山中最大の事故が突発した。ヌプツェの上部から大音響とともに氷の雪崩がC2を襲ったのである。そのときC2には、隊員七名、シエルパ二十二名、報道班三名がいた。氷塊はクレバスを越え、小高い台地に張ってあったテントをなめ、エベレストの西稜側に達するほどの大規模のものであった。もしC2の位置があと数十メートル下にあつたら、それこそ三十二名全員が埋められたことだろう。

このC2の位置を決めるとき、私たちはエベレストの西稜とヌプツェ側からの雪崩については、まず心配のないと

ころと思つた。前年のスペイン隊のC2のあとには、缶詰の空缶や、ダンボールの破片などが、雪上に見えていたため、これじゃ少しきたくないということもあって、例年の隊のC2より少し上部にC2地を決めたのだった。ヌプツェよりに隊員テント二張、食堂テントを中にC2、西稜よりにシエルパテントが四張、隊員テントの上部に報道班のテント二張が張つてあつた。この九張のテントのうち、隊員テント二張、報道テント二張、隊員テントに近いシエルパテント一張が、のし上つてきた雪崩にぶつかつたのである。隊員テントの一つには、中、荒山隊員が、もう一つのテントには、隊員五名が、たがいちがいに寝ていた。詳しく言えば、ヌプツェに近い方から奈須、真仁田がローツェの方を頭にして、三原、田部井、渡辺がプモリの方を頭にして眠っていた。シュラフが一個足りなかつたので、田部井と渡辺は一つのシュラフに足だけ入れ、上半身に羽毛服をかけておいた。ものすごい音と同時に、渡辺がムックリと上半身を起した。だがその瞬間、どうにもならない大きなブロックの流れがテントごと隊員をつつみこんだ。その大きな動きが止まつたとき、身動き一つできない状態になつていた。渡辺は出口からとび出してブロックにはさまれていた。テントの中では、下から田部井、三原、真仁田、奈須の順におし重なつていた。中と荒山隊員は、半分つぶれたテントの中で、目の前の内張を歯でかみ切ろうとしていた。その夜、サーダーのアン・ツェリンは、第一グループのシエルパテントの中でまだ眠れずにいた。いつもとは違うすさまじい音に、テントのシエルパを起し、ポールやフレームを六人のシエルパが立つておさえた直後、ブロックがそのテントの上を、うなり声をあげて越えていった。その時電気が手に走つてものすごい痛みを感じたそうだ。動きがおさまり、すぐに外にとび出してみると、目の前の隊員テントがない！ 彼らは真暗な中で隊員テントを探した。渡辺の叫ぶかすかな声に気がついた。十五メートルぐらい下方にブロックに交つてつぶされているテントを見つけたのである。ナイフでテントを切り、一人一人引張り出してくれたのだった。もう少し発見がおくれたら、何人かの人が窒息死していたかも知れない。六五〇〇メートルの高さは、じつとしていても胸苦しく感じるころだ。なのにテントにくるまつたまま、ブロックの下になつただか

ら、たまらなく苦しかった。目の前にいるんな色が見え、もう時間の問題だなと思った。この夜半の大雪崩はショックだった。ひどいショックだった。しかし「全員無事」と判ったときは、みんな生きているのだ、もうそれで十分だと思った。登山はこれで終りだとは少しも考えなかった。とにかく「無事だ」というこの一言、「生きている」というこの事実がうれしかった。

朝の定時交信でBCの隊長と連絡をとっている報道班の人の声が聞えてきてびっくりした。「エツ、下りるって！だれが？」これで重傷だというなら大丈夫だと思った。また全員が無事だということが大きな活力となった。山に来たんだ。雪崩だってあるさ、これくらいで下りれるかという気持と、いま下りたらもうダメだという気持と、この昂奮状態の隊員に行動させる方が危険かなという思いが交錯していた。そして私は絶対ここから下らないぞと思ったのだ。

登 頂

五月十六日、C6（五時五十分）南峰（九時四十分）頂上（十二時三十分）C6（十六時三十分）C5（十九時三十分）

寒さで何度か目を覚ましたが、時計をみたのは二度だけだった。十一時三十分と三時五十分だった。それと起きるとすぐにボタンに火をつけ水をとかす。風はないようだ。シュラフをまるめてその上に座り出発準備をする。アン・ツェリンに8ミリとカメラ、ビスケット一箱、テルモスを持ってもらい、田部井は、カメラ二台とトランシーバーを持つ。チョコレートと飴は二人のオーバーズボンのポケットにおしこんだ。狭いテントでかがんだり立ったりの出発準備はそれだけでかなり疲労してしまう。朝食はコーヒー二杯ですませ、テントの外に出る。気味悪いほど静かだ。アイゼンをしめ、五時五十分出発。酸素は三リットルに調節した。二十メートルのメインザイルにつながって、

サーダーがトップで出る。テントの前から、ひざ上のラッセルである。細いリッジをラッセルしながら進む。雪はだんだん深くなり腰までもぐる。サーダーとラッセルを代る。ひざで雪をおしかためてから足で踏む。急な雪面なのでマスクが雪だらけになる。自分の息づかいの方が荒く、酸素の流れる音が止っているような気さえする。

岩が出てきて岩稜となった。うす紙を何枚も重ねたようなグスグスの岩と雪のミックスで登りにくい。二十メートルごとに確保して七ピッチぐらいあったろうか。またかたい雪稜になった。ラッセルこそなかったが足首が痛くなるほど急なので一步一步が苦しい。あそこが南峰か……と思うと、また上がある。二人ともノロノロとした登高が続いた。何度も休もうと思った。少し登りがゆるくなったなあと思ったところが南峰だった。九時四十分、C6を出てから三時間半もすぎていた。一段おりと二人が並んで立てる場所があった。前の隊の酸素ボンベが半分雪に埋っているのが見えた。二人もここで新しいボンベととりかえる。C6から使用してきたボンベには、サーダーのが一一〇気圧、田部井のには四〇気圧が残っていた。

トランシーバーをとり出して、C2の隊長と交信する。サーダーがテルモスの紅茶をついでくれた。まだほんのりと温みが残っていた。その紅茶にビスケットをひたして四枚食べる。みるみる紅茶は冷たくなった。

南峰から一度ガクンと切れおちて、また続く登りの果てにエベレストの頂上はあるのだ。目の前にゾツとするほどすさまじいナイフリッジがあった。さあまた行かねばならない。ゆっくりと、しかし一步を確実におりてトラバースを開始する。ラクパ・テンジンが話していた危険なところである。首はチベット側、足はネパール側で、胸のところにするどいナイフリッジがあった。アイゼンの出歯をけこみながら、一步一步を横ばいで下る。チベット側は五、六〇〇メートル下まで一気に切れ落ちていた。この一步をミスしたら、二人とも終りだ。確実な確保ができる場所ではない。下りきったところからヒラリーのチムニーが始まる。チムニーという名でよんでいいのかわからないが、最初の五メートルは新雪を払いのけての岩登りで左斜に抜ける。出口がかぶり気味でホールドがなくなるとこ

ろだ。そこから片足の股がやっと入るような狭い岩の割れ目に右足を入れて静かに体重をかけてまわりこむ。そこにやっと両足で立てるほどのスタンスがあった。そこから真下にC2のテントが豆つぶのように見下ろせた。すごい高度感である。体中の緊張で気が狂いそうだ。また左斜めに岩と雪のクラックを七メートル登るとヒラリーのチムニーは終わった。

また急な硬い雪の稜線が続いていた。さあ、また登れ、一步、一步が苦しい。しかしいつか必ずこの一步が終るときがくる。かってここを登った三十七人の人たちのことを、ふと思った。彼らもこうして登ったんだ。松浦、植村、平林、石黒、加藤、まだ会ったこともない人もいるけれど、この五人の日本人もここを登ったんだ。一步ずつ歩けばいつかは着く。ピッケルに頭がつくくらい首をたれては休みまた登る。雪のふきだまりのような、足首までもぐる雪になり、ふと首をあげると、白と茶のチベット側の山々が目に入った。

「タベイサン、チョウジョウダヨ！」

と、アン・ツェリンが叫んだ。あつ、もう登らなくていいんだ。もう歩かなくていいんだ。とうとう来た。十二時三十分、C6を出てから六時間半が過ぎていた。

ネパール側の山々には雲が浮び、チベット側はカラリと晴れ渡っていた。左から、ジャヌーが見え、目の前にはマカルー、ローツェ、ヌプツェ、アマダブラム、カンテガ、タムセルク、タウチエ、ガウリサンカール、チョオユー、ギャチエンカンが見えた。

(田部井淳子)

登山隊とお金

海外登山の費用を、全額自分のお金でまかなう人たちが、ふえているようですが、まだまだ多くの隊は、どこからかお金を集めて出てゆくことが当然のこのように考えられているようです。ヒマラヤ登山隊の三分の二は日本隊で

あると言われていますが、もはや海外登山は珍しいことではないし、登山を目的で出かける登山隊は、趣味の登山でしかない筈です。それを何かと理由をつけて、自分のふところをいためないで、人のお金で行こうなどの考えは改めたいものです。

私たちは丁度物価高騰の折に物資調達の時期となり、経費五割増の苦しさに直面しましたが、各自五十万円を追加して、個人負担百八十万円で切り抜けました。隊員の募金希望を絶った以上は、計上外の出費負担は覚悟しました。二、三年で返せる額であってほしい、と内心、大変な心配であったのは事実です。予定外の出費はなく、むしろ帰国後、収入があり、五十万円の追加額は消えてしまいました。目先だけで百八十万円を考えるから、いかにも大変のように思えるのです。長い目で見たら百八十万円は決して大金ではありません。エベレストを体験することの方が、よりはるかに高価なものです。エベレストの体験は、一人一人がお金では買えない何かを得た筈です。

登山隊の人間関係

隊長は自分の考えを隊員に徹底させリードしてゆく。隊員は隊長に全幅の信頼をよせ傾倒してついてゆく。隊員同志は、互いに思いやりをもってたすけ合うならば……これは理想でしょうか。

こんなことを頭の中に描き夢みているが、実際にはそうはゆかない。三回も隊長をつとめたのに、結局はダメである。隊長を経験したので、今度は隊員になったら、良き隊員になれると自負しているのだが、もうおそすぎたようだ。

こんな登山隊をつくるには、社会的訓練を積んだ常識ある人間の集りであるか、でなければ、常日頃親交があり、意思の疎通のある人たちの集りであるかが、必要であると思う。私たちはこのいずれにも欠けている。それは何故か。前者については、個々の人間性の問題であり、後者については、女子登攀クラブが「目的のために集ったクラブ」だからである。でもこんな方法でもとつたればこそ、アンナプルナもエベレストもあったのだし、エベレスト隊

はアンナプルナ隊よりも数段の進歩であった。「上出来だ」とよい点数をつけることができるけれども、いまひとおしの満足感を味えないのは、やはり「目的のために集った」のであって、相互の信頼性に欠けるものがあったのではないかと思う。

登山の価値は、登山を終えて何が残ったかによって決まる。非常に難かしいことであるが、真底から満足のゆく登山を求めて、歩きつづけるつもりである。

(久野英子)

行動の概要

十二月二十二日 先発隊二名羽田発

一月二十九日 本隊十三名羽田発

二月 七日 隊荷十五トン、ルクラへ空輸開始

九日 カトマンズを出発、隊員十一名、ほか十五名、ポーター五十七名でキャラバンへ。

二十日 隊荷の空輸完了

二十一日 隊員、シエルパ、報道、などルクラに集合(七十名)

二十五日 ルクラを出発、ポーター五百七十名

二十七日 タンポチエ着、高度順化のため、三月十二日まで滞在

三月十三日 タンポチエ出発(二班に分れる)

十六日 一班BC着

十八日 二班BC着

二十一日 アイスフォールにルート工作開始

- 四月 三日 C 1 設営（六〇五〇メートル）
 八日 C 2 設営（六四〇〇メートル）
 十三日 C 3 設営（六九〇〇メートル）
 二十七日 C 4 設営（七六〇〇メートル）
- 五月 一日 サウスコルへのルート完了
- 四日 C 2 に雪崩
- 六日 登山続行を決定
- 十一日 登頂隊、田部井、渡辺、アン・ツェリンの三名、C 2 を出発
- 十三日 酸素の荷上げ不足により、渡辺 C 4 より下る
- 十四日 サウスコルに C 5（七九八五メートル）設営、田部井、アン・ツェリン C 5 入り
- 十五日 C 6 設営（八五〇〇メートル）
- 十六日 十二時三十分、登頂。
- 十九日 全員 B C に下る
- 二十三日 B C を出発、ルクラへ
- 二十七日 ルクラ着
- 二十八日 全員カトマンズに帰る

隊の構成

隊長 久野英子（四十一歳）

エベレスト登頂

	副隊長	田部井 淳子 (三十五歳)		
	隊員	真仁田 美智子 (三十三歳)		
		奈須 文枝 (三十三歳)		
		渡辺 百合子 (三十二歳)		
		永沼 雅子 (二十七歳)		
		平島 照代 (二十六歳)		
		塩浦 玲子 (二十八歳)		
		三原 洋子 (三十三歳)		
		荒山 文子 (二十五歳)		
		中 幸子 (二十七歳)		
		種谷 由美 (二十五歳)		
		北村 節子 (二十五歳)		
		藤原 すみ子 (二十六歳)		
	医師	阪口 昌子 (二十九歳)		
	サーダー	一名 シェルパ	二十二名	ローカルポーター 一〇名
	コック	二名 キッチンボーイ	四名	メイランナー 二名
報道班		七名 報道シェルパ	七名	リエゾンオフィサー 一名

以上七十一名

ダウラギリV峰初登頂

武田昌策

はじめに

ヒマラヤ遠征は岡山大学山岳会（現役山岳部、OB山岳会）創立以来二十数年間の夢であった。未知への憧憬を秘め、タムール川源流の山へ、カラコルムの山へその思いを馳せ何度か計画をたてたが実らなかつた。月日は流れ、未踏地域（峰）はどんどん消えていった。しかし私たちの胸に宿った夢は消えることなく、その機会がくるのをじっと待った。

一九七二年十月、山岳部顧問高畠彰先生に私たちの思いを話したところ、谷口澄夫学長にとりついでくださり、非常に深いご理解をいただいた。そして岡山大学国際文化交流振興会の行事として、登山隊だけでなく學術隊も派遣したらという学長自らの提案により、振興会の中に関係学部長から成るネパールヒマラヤ學術登山実行委員会が発足、大学あげての強力な推進母体ができあがった。

学術隊は地学・農学・医学の各班に分かれ、登山隊のキャラバンルートを中心に地質、作物・畜産、寄生虫の調査・研究を行なうことを目的とした。

登山隊は七〇〇メートル級の未踏峰がやりたいということであったが、会員の中にヒマラヤ経験者一人という当時の状況の中で、ヒマラヤを膚で感じてこようと、一九七三年二月と五月に踏査隊六名が、ダウラギリ山群、ガネシユ・ヒマール、ランタン・ヒマールに入った。その結果、ガネシユ・ヒマールII峰（七一五〇メートル）を強く希望、ネパール政府とかけあったが、未開禁地域のためあきらめざるを得なかった。ダウラギリV峰（七六一八メートル）ならずぐにでも許可をおろすとのことであった。ダウラギリV峰は私たちの手に負えないという危惧の意見もあったが、この機を逃がしたら永遠に遠征はできないのではないかとということで、全力をあげてダウラギリV峰にとりくむ決意をした。

登山隊の構成はつぎのとおりである。

登山隊長 榎木 栄一（三十七歳） 山岳部顧問

登攀隊長 定金 司郎（三十六歳） 岡大OB

隊員 石原 謙（三十四歳） 岡大OB

〃 山崎源三郎（三十二歳） 岡大OB

〃 小倉 英郎（二十九歳） 岡大OB

〃 功野 勝（三十一歳） 岡大OB

〃 青木 重夫（二十八歳） 岡大OB

〃 平塚 広志（二十七歳） 岡大OB

〃 川口 憲二（二十六歳） 岡大OB

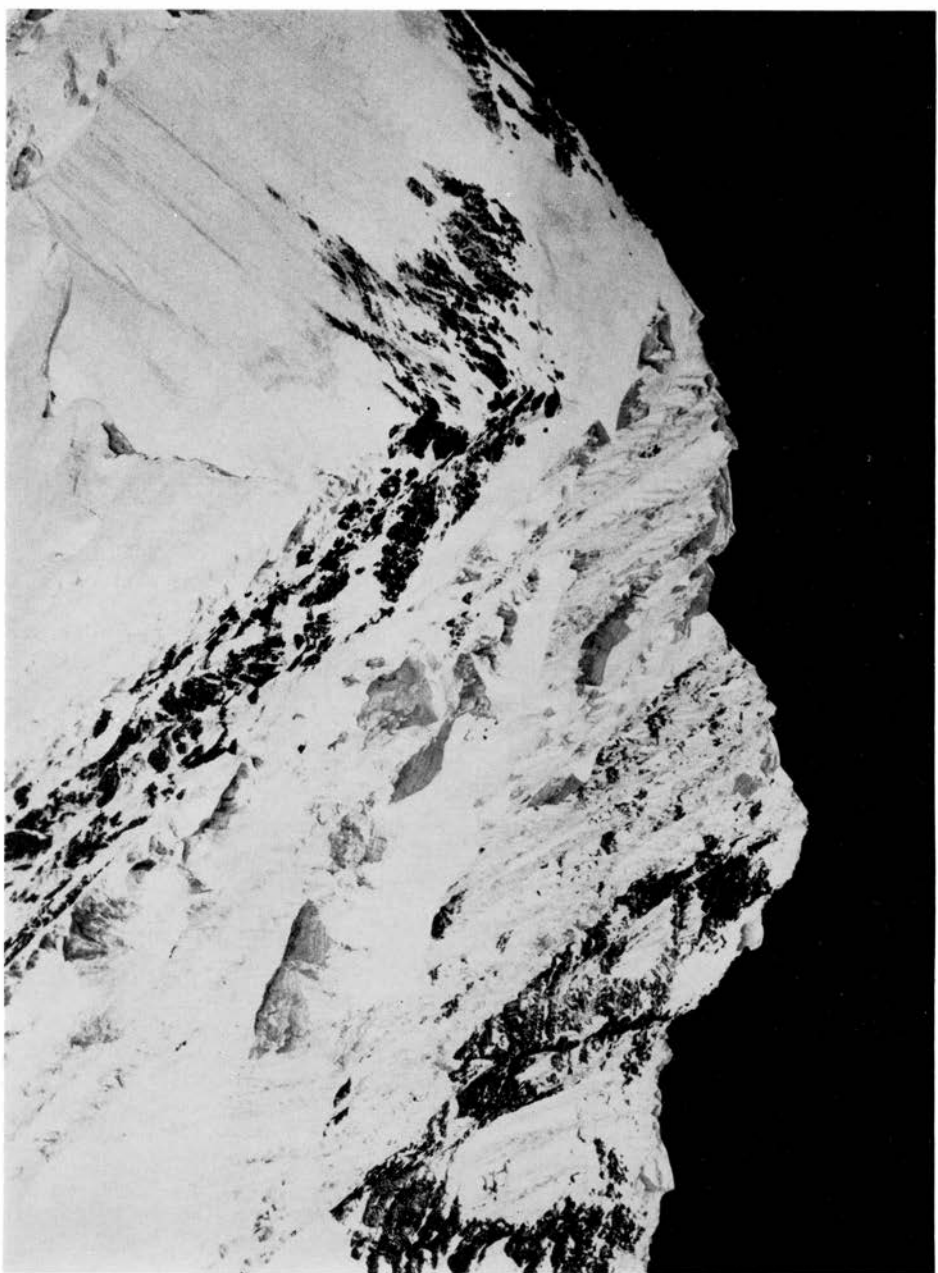
隊員	森岡	政明(二十六歳)	岡大OB
"	市川	徳和(二十五歳)	岡大学生
"	黒田	治久(二十三歳)	岡大学生
"	溝畑	宏道(二十二歳)	岡大学生
医師	湯本	泰弘(三十八歳)	岡大OB

計 画

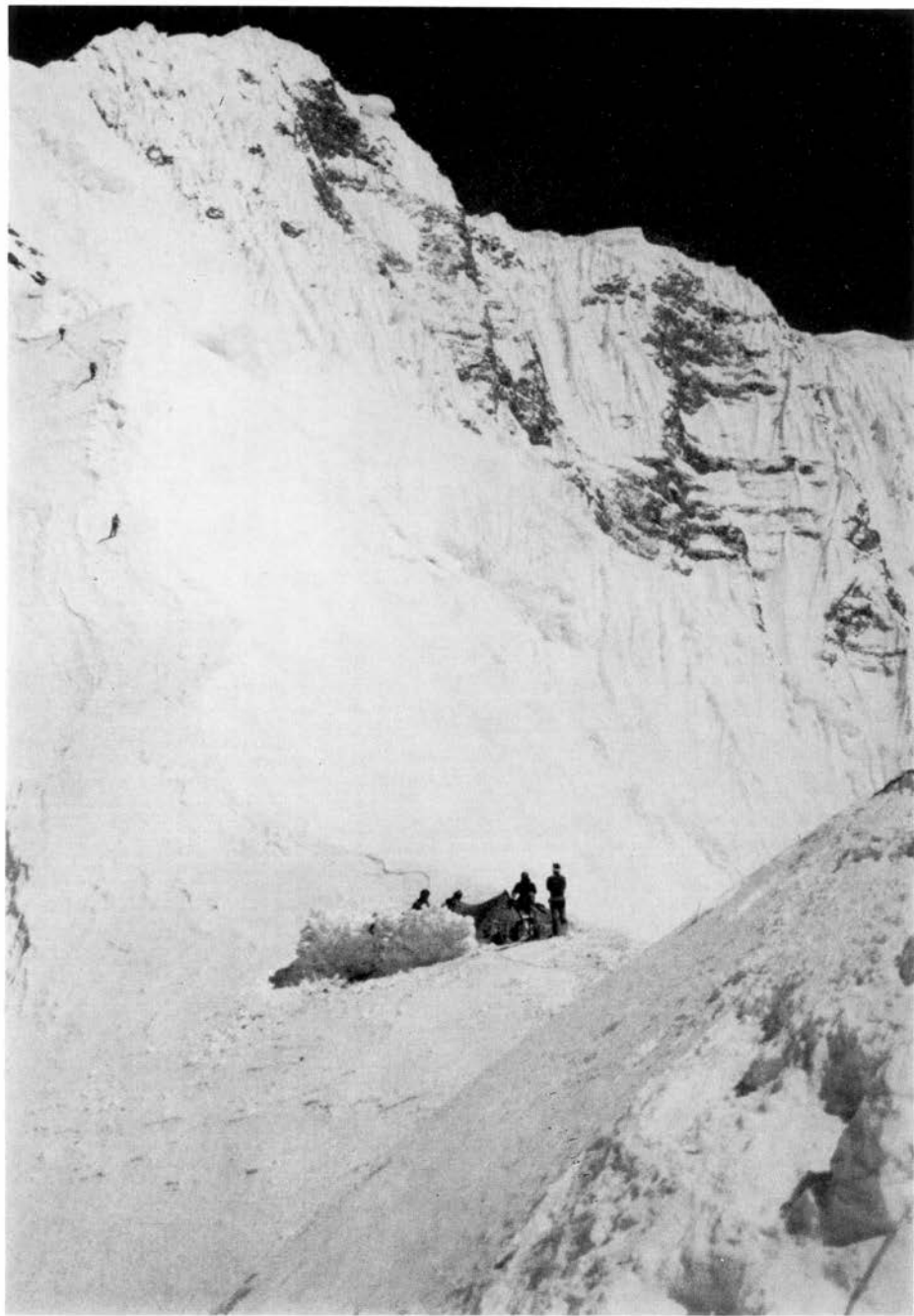
ダウラギリV峰のルートとして北面と南面が考えられる。北面こそ未知の要素は多いが、そのキャラバンに私たちの解決できない問題があり、南面にルートを求めた。頂上より南東にのびる尾根(南東尾根)はツォーラボン・ピーク(六三九五メートル)にいたり、そこからミヤグデイ・コーラに千数百メートルの急な岩壁帯となって切れ落ちていく。尾根の両側はコーナボン谷、ツォーラボン谷へ急峻な雪壁、岩壁、雪稜となっているが尾根の六四〇〇メートルのピーク(ホワイト・ピークと命名)よりツォーラボン谷に派出する比較的顕著な支尾根がある。私たちはミヤグデイ・コーラから岩壁帯をのりこえツォーラボン氷河に出、支尾根よりホワイト・ピーク、南東尾根のルートが頂上への唯一の安全な登路と考えた。ダウラギリV峰へは、過去、長野県稜山岳会、九州大学隊が挑戦をしている。両隊とも岩壁帯にルートを開き、ツォーラボンを基地にして、頂上により近い南東尾根上に出るべく急な雪稜を登っている。私たちは少々遠まわりにはなるが、雪崩の危険性の少いホワイト・ピークよりのルートを選んだ。

ルート図について

上記支尾根、ホワイト・ピーク、南東尾根がルートとして適当かどうかを調べるため、偵察隊(石原隊長、山崎、市川)



ホワイト・ピークから見た南東尾根
The south-east ridge of Dhaulagiri V seen from White Peak



第3キャンプから見たダウラギリV峰
The summit of Dhaulagiri V seen from Camp 3



第4キャンプから見た南東尾根上部

The upper part of the south-east ridge seen from Camp 4



ダウラギリV峰頂上よりダウラギリ主峰を望む
Dhaulagiri I seen from the summit of Dhaulagiri V

を一九七四年二月～六月に派遣した。偵察隊はナワン・サムディン（本隊のサーダー）他少数のロウ・アルティテユウド・シエルパと共にホワイト・ピークまで登り、南東尾根をくわしく観察・記録した。のみならず、ヒマラヤ登山の仕方、シエルパのこと、カトマンズ状勢等の数多くの資料をもち帰った。

これらの資料を基に隊員数、シエルパ数を決定し、つぎのようなタクティクス上の原則をたてた。

(一) 岩壁帯のとりつきにT・B・C（仮のベースキャンプ）を設け、岩壁帯の途中にデポジットキャンプを、岩壁帯、アイスフォール帯をのりこえたツォラボン氷河上にベースキャンプを、支尾根のロックバンド上にキャンプ1、さらにキャンプ2、ホワイト・ピークをこえ、南東尾根上にキャンプ3、キャンプ4、キャンプ5を設け、キャンプ5を最終キャンプとして頂上を往復する。

(二) 隊員は隊長、登攀隊長、医師を含めて十四名とする。シエルパ等はサーダー一名、ハイアルティテユウド・シエルパ四名、ロウアルティテユウド・シエルパ十名、コック二名、キッチンボーイ二名、ウッドカッター二名、メーラ・ンナー二名、カトマンズポーター五十名とする。

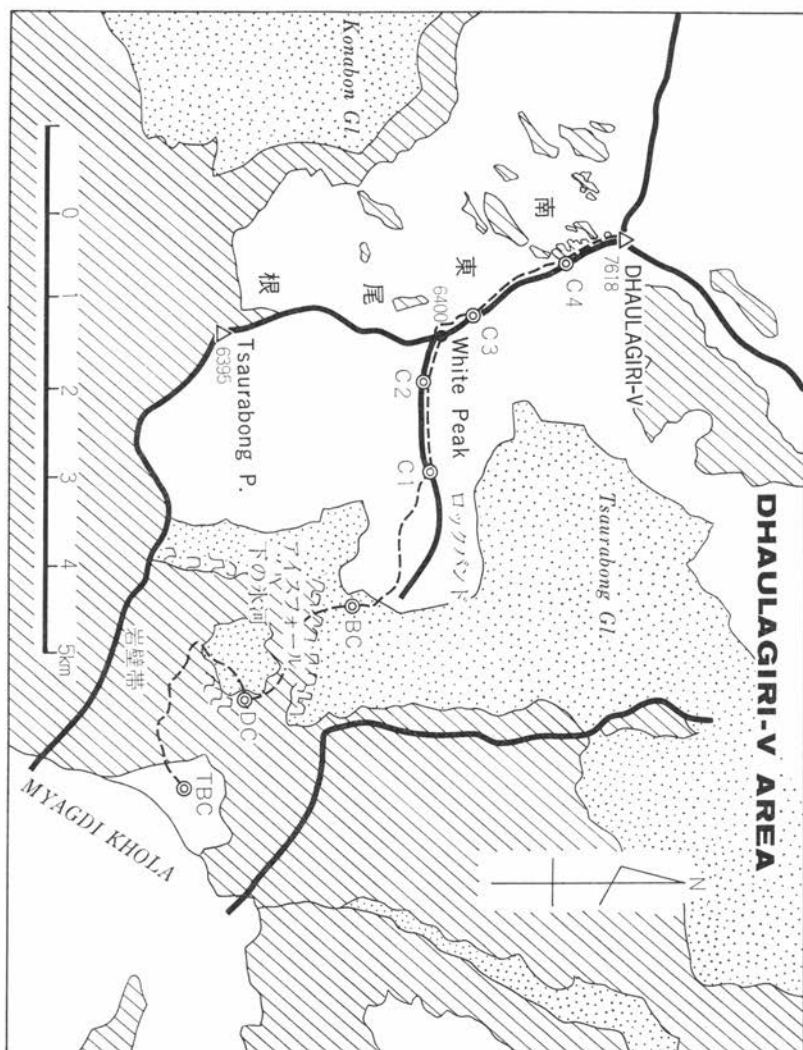
(三) 隊員は上部テント地点を最低二回往復した後上部テントに入る。翌日はさらに上部テント地点まで登り、その日は一段下のテントまで降りて休むといった型で高度順応、ルート工作、荷上げをする。ルート工作は一日百メートル以上、四パーティ・四ローティションとする。

ハイアルティテユウド・シエルパは最終キャンプまで、ロウアルティテユウド・シエルパはホワイト・ピークまで、カトマンズポーターはデポキャンプまでの荷上げをする。

(四) 荷上量は隊員十キログラム、ハイアルティテユウド・シエルパ十五キログラム、ロウアルティテユウド・シエルパ、カトマンズポーター二十キログラムとする。テント移動のときは個人装備、ルート工作のときは登攀用具のみとする。

(五) 隊員は五日毎、シエルパは七日毎（南東尾根上は五日毎）に一日の休養を与える。

(六) 登攀隊長、サーダーは主としてキャンプ1で指揮をとる。



(七) 酸素は最終キャンプで睡眠時に使用する。

この原則で隊員、シェルパの行動表を作成した。食糧・装備計画はこの行動表にもとづいて作られた。したがって行動表が変更されると全計画が変更されるということになる。

タクティクス上重要なことは、高度順応、ルート工作、荷上げをいかにうまく組み合わせるかということである。高度順応は前記原則のパターンを守ること。ルート工作はキャンプ2以上で徹底したフィックスをすることで、荷上げ、高度順応に安全性と確実性を増すこと。荷上げについては、荷上げ可能量(行動表から算出)に0.8(キャンプ3以上は0.5)を掛けたものを荷上げ安全量とし、実際の荷上げ量(各係より出された重量の累計)を安全量に近づけるよう徹底した物資チェックあるいは行動表の修正を行なった。

出発・キャラバン

一九七五年一月十二日、功野、川口隊員が先発隊としてカトマンズに向かった。現地購入の食糧、装備の調達、シェルパの雇用等が彼等の主な仕事である。そして二月四日、本隊も先発隊に合流、全隊員がカトマンズに集結した。昨年の偵察隊が使用したナワン・サムディンをサーダーとし、シェルパはこの遠征に情熱のある者、できるだけナムチェ以外の村の出身者(ナムチェ以外の者は遠征ずれしていない)であること、条件をつけて、候補者はサーダーにまかせた。彼がつれてきた候補者に身体検査と面接をし、合格者との間で雇用条件のサインをとりかわした。ヒマラヤン・ソサエティより送られてきたメールランナー一名以外はすべてサーダーの意向がかなえられた。

コロネーションのため、役人不足ということで、リェゾンオフィサーにはサーダー格のソナム・ギャルチェン氏が決定した。彼はエベレストの登頂者で、遠征経験も豊富、責任感、統率力にすぐれ、私たちにとって願ってもない人であった。

トレッキング・パーミッションがなかなかもらえず、予定より一日おくれて、二月十三日、二台のトラックと大型バスでポカラに向かう。日が暮れた雨の中を坂本ドクター宅に着く。ダウラギリ工峰の東京都岳連隊が私たちより一日早くキャラバンを開始した。その後でポーターが集まるかどうか懸念されたが、ヒマラヤン・ソサエティのケサン氏の尽力により、二三五個の荷物の内三十個を残して二月十六日ポカラを出発することができた。残りの荷物にはアンペーマをつけ、翌日ポーターを集めて出発させることにした。

本隊が仮のベースキャンプに到着次第、カトマンズポーターをデポキャンプへの荷上げに使うには、それまでにデポキャンプまでのルート工作が完了していなければならない。その任を負って、石原、青木、シエル。三名が先発隊として本隊より一日早く出発、二日早く仮のベースキャンプに着いた。

キャラバンルートは、ポカラ、ヤンザ、ノーダラ、ギザン、クスマ、ベニ、ダラパン、シパン、ムリ、ボガラを通つてのコースである。天氣に恵まれ快適なキャラバンが続いた。ノーダラ、パンドラ付近から見るとアンナプルナ、マチャプチャレは茶色の段々畑の向こうに真白い水晶のような姿を紺碧の空に浮き彫りにしている。畑には菜の花が咲いている。

ドビィ・コーラのつり橋のところでポーターが動かなくなった。「工峰隊が日当を十八ルピーにしたので我々も同じにしてくれ」と田んぼの中にすわりこんでしまった。工峰隊の真相を確かめたいうえで、値上げすることで納得させる。工峰隊の手紙によると岡大隊が値上げしたからというポーターのストによりやむなく値上げしたという。巧妙なポーターの策略にひっかかってしまった。

ダラパンの校庭でキャンプした朝は特に冷えこみが強かった。まだ暗闇の谷のかなたに朝日に輝く真白い山が見えた。ダウラギリV峰である。私たちが登る南東尾根がこちらに向いている。今までどんな資料にもなかった尾根のコーナボン谷側がよく見える。尾根はナイフリッジとなりコーナボン谷にほとんど垂直に近い傾斜である。身震いしな

がらわかるがわる望遠鏡を覗いた。

高原の村ダラパニに上がると、グルジャ・ヒマール、IV峰、V峰の壁が巨大な白い屏風となってたちはだかっている。その雪明りで部落が照らされているようだ。

最奥の村ボガラは数軒の家が灰色の山の斜面に散らばっている。枯れたトウモロコシの枝がちらかる段々畑のあちこちを犬や子供がかけまわっている。ミヤグデイ・コーラの谷沿いに細い道がそれでも確実に続き、ところどころにカルカ跡が残っている。谷に降りたせいか木々が豊富になった。木の間からは雪のついた山の斜面が見え隠れするようになった。

仮のベースキャンプ到着二日前より雪が出はじめ、大部分のポーターが仮のベースキャンプの一日手前で帰えってしまった。残ったポーター、隊員、シェルパにより荷物をピストン輸送する。全荷物が仮のベースキャンプに集結したのは予定より二日おくれた三月三日であった。仮のベースキャンプはミヤグデイ・コーラとコーナボン・コーラの出合、三千七百メートル地点の岩壁帯直下の灌木が散在する広々とした草原上である。

登山活動

〔岩壁帯をこえてベースキャンプへ〕

仮のベースキャンプからは千メートルに近い岩壁帯が行手を阻み、岩壁帯の上にツォーラボン氷河がある。氷河の舌端が岩壁帯の上部にのぞき、アイスフォール帯となって崩壊、岩壁帯の中腹にある「下の氷河」に落下する。

岩壁帯は左斜上に走る岩棚がいく段もあり、これに沿って登る。行きづまると上の棚に上がるといったルートのとおり方で「下の氷河」まで達する。この氷河をトラバースし終えた岩棚の上四千四百メートル地点にデポキャンプを設ける。このトラバースは前記アイスフォールの落下により雪崩の危険があるため、最初、デポキャンプまでの別のル

ートを捜したが、荷上げルートとして適当なところがなく、先人の開いたこのトラバースルートに細心の注意を払いつつながら通ることにした。デポキャンプまでは昨年 の偵察の時には雪がなかったので、カトマンズポーターの五十名に運動靴を与えて荷上げする計画であったが、今年 は岩棚に多量の積雪があり、運動靴では危険なため隊員のキャラパン用の靴をあつめて、やっと十七名のカトマンズポーターを確保した。このため荷上げはおくれたが、隊員が積極的に荷上げに参加し、デポキャンプまでを何回も往復したことは高度順化に役立ったように思われる。

この頃、仮のベースキャンプでは悪性のカゼが流行、ハイアルティテュウド・シエルパのアンペーマは肺炎となりやむなく解雇する。かわりにロウアルティテュウド・シエルパのロブソンを昇格させた。

デポキャンプより上部の岩壁帯は完全に雪におおわれていたために、かえって歩きやすい。アイスフォール帯にはアイスビルディングが林立し、昼夜を問わず大音響と共に崩壊している。崩壊の少ないところにルートを開く。アイスフォールをのりこえると傾斜のゆるやかなツォーラボン氷河上に出る。この瞬間、今まで岩壁帯に阻まれて見えなかったダウラギリV峰の全容が突如として目にとびこんでくる。堂々と羽をひろげた白鷹のようなV峰が氷河の向こうに立ちほだかっている。神秘的な感激の一瞬であった。

V峰のよく見える広々とした氷河上四千九百メートル地点にベースキャンプを設営したのは三月十四日であった。この頃はまだ冬の吹雪が荒れ狂い居心地はよくなかったが、集会用テント、炊事場を設けてやっとベースキャンプらしくなった。

「支尾根からホワイト・ピークへ」

氷河上をしばらく進み、ホワイト・ピークよりの支尾根の末端がふくれあがった部分（ロックバンドと命名）にとりつく。この部分の上部は高さ二、三十メートルの細長い岩壁があり、岩壁の下の斜面をトラバースするように登っ

ていく。新雪のあとには表層雪崩の危険がある。ロックバンドを登りきると尾根は広くゆるやかな雪原状となる。ここにキャンプ1を設営する。V峰のヒマラヤひだは屏風のように眼前に迫り、ホワイト・ピークへの雪稜を見上げると首がいたくなるほどだ。キャンプ1は、風のないおだやかな日は暑くて身のおきどころに困る。朝五時頃、V峰の壁が銀色にかがやく。キャンプ1以下はまだ暗闇だ。陽が昇り主峰の壁が黒びかりする正午頃より、あちこちの谷から雲がわきはじめ、やがて白い霧におおわれると雪が降りをはじめ。荷上げから帰ってくる頃である。一寝入りし「メシだぞお」の声で外に出ると雪はやみ、主峰の頂が夕日に染まっている。せまいキッチンテントで食事をし、それぞれのテントに帰る頃はもう真暗闇、寒さで思わず羽毛服のフードをかぶる。見上げるホワイト・ピークのむこう第三キャンプ予定地点に非常に大きな星がかがやいている。一日の記録をつけ、シュラフに入るが、寒さと明日への不安と期待でねむれない。これが天気の安定した日の一日である。

三月二十三日、キャンプ1に入った石原、黒田はその夜から降りはじめた吹雪のため孤立してしまった。明けても暮れても降りつづける雪はロックバンドに大量の新雪を積み重ね、雪崩の条件が完備した。何度か彼らをベースキャンプに収容すべく行動をするが、雪崩の産声が聞えどうしてもおりられない。二十六日久しぶりの好天となった。雪崩を避けるため、ロックバンドの上部の岩と雪の接点部分をアンザイレンでくだけることにし、ベースキャンプからトランシーバーで誘導する。黒田が接点部分の雪面に足をつっこんだ瞬間「ドーン」というにぶい音、彼の足もとの雪は板状にづり落ちていく。まわりの雪をささい、最初はスローモーションで、やがて雪煙をあげ、雲のようにもくもくとスピードをあげて下の私たち目がけて音もなく迫ってくる。もしや彼らが一緒に落ちてくるのではないかと目を凝らす、雪煙につつまれて何も見えない。雪煙がおさまり上を見ると黄色の二つのかたまりが、もとの斜面にへばりついていて。急いでトランシーバーで呼ぶ。「今日、雪を落としていないと明日このルートが通れないぞ。」元気な声がかえってきた。

キャンプ1からホワイト・ピークへは斜面がだんだん急となる雪壁といった感じの雪稜である。キャンプ2はこの支尾根の中間点、五九〇〇メートルの急な斜面に雪をけずり、スノーバーを杭にして雪の棚を作って、四張りのテントを設ける。四月三日であった。キャンプ1からは手がとどくように見えるが実際登るとはてしなく遠い。高度の影響も現われ、近づかないキャンプ2に根負けする。

キャンプ2からは六十度近い傾斜となり、尾根も非常に細く、尾根の右左の側壁を登る。氷壁となっており、安全を期するためキャンプ2以上は徹底したフィックスを行なうことにした。これに用意したスノーバーは岡大工学部で特殊加工したアングルのアルミ製である。キャンプ2からホワイト・ピークに向けてルート工作に出る隊員も高度障害のためつぎつぎにキャンプ1においてくる。それでも少しづつルートは伸び、四月十二日やっとホワイト・ピークに達した。

翌、十三日から天気がくずれてき、十五日になってもおさまらなかつた。キャンプ2のテントが雪崩の危険にさらされるのではないか。キャンプ1にいた登攀隊長は一時間おきに交信し状況をきく。午後の二時、雪崩の危険がでてきたという。すぐキャンプ1におけるよう指示し、キャンプ1にいた全シエルパと共に迎えに行く。一メートル先が見えない。猛烈な吹雪が荒れ狂っている。トランシーバーは開放のまま行動するがなかなか連絡がとれない。一時間ほど登ったところで、おりてくる石原等に会う。やれやれと思つた時、彼のことばは「山崎等に会つたか?」「しまった!!」彼等は単独行動でルートを失つたのだ。山崎、森岡、チェリン、アンブタの四人が石原等と離れてしまったのだ。サムディンはすぐ、そこにいた全員にザイルを結びせ、赤旗を基点に横隊をつくり、吹雪の中をくだっていった。依然として視界はゼロ、時間はどんどんすぎていく。口もとにはつららがさがりコールする声は吹雪に消されてしまふ。とりかえしのできない事態が刻々と迫ってくる。アンブタの弟のサンゲイも悲痛な顔をしている。雪面と空間の区別ができない灰色の世界に吹雪はますます強くなるばかりだ。「一瞬でいいから晴れてくれ」祈るような気持

でふと見上げると、ぽかっと明るい部分が空にできた。風も若干弱くなり、あたりの視界がすーと広くなった。ほんの三〜五秒間であつたらうか。この時、ツォーラボンの源頭をさまよう四人を見つけたのである。数秒後、再び視界は閉ざされ、猛吹雪が再開された。果敢にも吹雪の中にとび込んでいったシエルパ達、「サムディン、ありがとう」心の底から熱いものがこみあげてきた。

こうして全員がキャンプ1に集結した。翌日は天気が回復し、ホワイト・ピークからキャンプ3にむけてのルート工作にとりかかるため再びキャンプ2に入る。いよいよ南東尾根に踏み出すことになるのだ。ところが私たちのこの挑戦を拒むかのように、十七日は快晴でありながら強烈な地吹雪となつた。ダウラギリV峰が最後の抵抗を示すがごとく、ゴウゴウと山全体が一日中揺れ動いた。

〔南 東 尾 根〕

四月十八日、天気は回復した。キャラバンに入ってから毎日の天気を整理してみると、天気が回復するとだいたひ十四日間は安定するという天気の周期をつかむことができた。今度のこの安定した期間に南東尾根にテントを進め登頂のチャンスをつかみたかった。そこで四月三十日を登頂日として全力をつくすことにする。仮のベースキャンプで足を痛めた小倉、風邪をこじらせた溝畑も回復して上部テントに入った。今までルート工作の主役をつとめた石原、山崎に加え青木、平塚、功野の中堅が調子をとりにどしてきた。ロウアルティテュウド・シエルパはホワイト・ピークまでの荷上げにあたることにしていたが、キャンプ3まで荷上げし、もしキャンプ3以上でハイアルティテュウド・シエルパに支障ができた場合には代つて行動をする。これからは定期的な休日は設けない。このことをサーダーもシエルパたちも快よく引き受けてくれた。

ホワイト・ピークからの南東尾根は三つの大きな階段状のふくらみを持っており、最後のふくらみが頂上である。

そのふくらみの間は鞍部状となっている。ツォーラボン谷側はほとんど垂直に近い雪壁、岩壁となり、この尾根にとりつけるところはない。コーナボン谷側はややゆるやかな傾斜であるが、途中から絶壁となるのであるう、その谷底は見えない。

ホワイト・ピークにあがると、赤茶け、荒れ果てた無気味なコーナボン谷の向こうにはグルジャ・ヒマール、ダウラギリVI峰が望まれる。また南東尾根と平行したように、黒々とした絶望的なダウラギリIV峰の岩尾根がV峰へつながっている。目を転じて、ミヤグディ・コーラの源流は氷河となり、フレンチ・コルに至っている。シタ・ツツラは雪からできたような山、ツクチェ・ピークはおにぎりのような山である。

ホワイト・ピークから三日間で、尾根が最初にふくれあがる手前までルート工作を終え、ここに四月二十日、キャンプ3を設営した。高度はホワイト・ピークとほとんど同じ、六千四百メートルである。ここまでは、雪庇がツォーラボン側に張り出した、南東尾根で一番のやせたナイフ・リッジである。

キャンプ3から尾根は大きくもりあがり、そのとりつきの五十メートル位は岩場となっている。この岩場にハシゴを用意してきたが、その必要はなかった。つぎの鞍部(キャンプ4)までは、比較的広い尾根である。このふくらみをのぼりきると、しばらくはゆるやかな雪尾根(氷がところどころに出てくる)がつぎのピーク下までつづく。キャンプ3からここまで五回のルート工作で、四月二十六日、キャンプ4を設営した。計画では、この地点の高度を六千八百メートルと予測していた。ところが高度計は七千五百メートルを示した。あと六百メートルで頂上だ。キャンプ5(つぎの鞍部を予定)をつくるかどうか、キャンプ4から直接頂上に行くか。一応、キャンプ5予定地点までルート工作をしてから判断することにする。

はりきっていたハイアルティテュウド・シエルパのテンバの調子が悪く、代りにロウアルティテュウド・シエルパのノルブ、サンガイ、アンニーマの三人がキャンプ3に入り、アンプタ、ロプソン、チェリンと共にキャンプ4への荷上

げにあたる。

キャンプ4からは再び尾根は急になり、そのピーク付近はナイフリッジとなっている。頂上はこのピークにかくれて見えない。このピークをこえることが最大の課題となった。

〔登 頂〕

最終段階をむかえ、全員の気持が上へ上へと向いてきた。一度上部テントに入るとなかなかおろたがらない。しかし、ローティション、休養、それに全員を最終キャンプ（七千五十メートル）まで経験させたいということから人員の入れかえを強行した。最後の決断をくだすため登攀隊長、サーダーはキャンプ3に入る。

四月三十日、キャンプ4から三回目のルート工作に行った石原、黒田、チェリンがキャンプ4に帰ってきた。「ピークの上は滝谷のころのようなナイフリッジだ。そこをこえたところまでルート工作は完了した。これ以上はルート工作の必要はない。キャンプ4から頂上まで八時間位だろう」と報告してきた。明日は好天になってから十四日目だ。明日のアタックをサーダーに相談するが異議はない。ついにくる時がきた。興奮する気持を押えて、アタック態勢を全テントに伝える。アタック隊には、この日キャンプ入りした森岡、それに三日連続してルート工作に行ったシエルパのチェリンを指名し、サポート隊には石原、小倉、黒田を決定した。小倉はサポート以外に八ミリ撮影もしなければならぬ。

五月一日五時、アタック隊、サポート隊がキャンプ4を出発する。下部テントからもそれぞれ上部テントに向かってサポート行動をおこす。テントに残った者も、いついかなる時にも出発できる態勢をとった。キャンプ1の湯本ドクターはどんな事故にも対応できるように医療器具を整えている。全テントのトランシーバーは終日スタンバイだ。アタック隊からは順調に高度をかせいでいる由の連絡が入るが、下から見ているとなかなか進まない。風の強さと谷に

わく雲を見ると時間はドンドン過ぎていくようだ。

十二時丁度、トランシーバーの「ピー」という音、急いでスイッチを入れると「頂上についた。ここより高いところは無い。I峰も低く見える」という森岡のとぎれとぎれの、うわずった声が入る。各テントのトランシーバーから歓声と泣声ひびき、しばらくは混信状態となる。ベースキャンプにおいて、終始私たちの行動を見守っていた榎木隊長、ギヤルチェン氏の音頭でバンザイを三唱する。

サポート隊は七千五百メートルまでフィックスをのばし、アタック隊を無事迎えた。彼等も頂上に行きたかったらう。いや全隊員が行きたかったのだ。午後五時、フラフラになってアタック隊、サポート隊がキャンプ4に帰った。

〔撤収・下山〕

翌五月二日、キャンプ4を撤収、アタック隊、サポート隊がキャンプ3におりてきた。キャンプ3からはシエルパ四人がむかえにいく。午後より天気が悪くなり早く下におりたかったが、キャンプ4からの隊員がかなり疲れているようなので、その日はキャンプ3にとまる。

五月五日には全員がベースキャンプに集まり祝杯をあげる。

五月七日、二ヶ月ぶりに飯のベースキャンプにくだる。雪は溶け、花が咲き、チョウが舞っていた。暖かい土の香りのする空気を胸いっぱい吸い込む。

五月十一日、一〇〇人のポーターにより帰路に着く。往時よりも二日早くキャラバンを終わり五月二十一日ポカラに着いた。翌日は一日荷物の整理をし、二十三日カトマンズに全員もどって、遠征を終了した。隊員の一部はそのあと、カラコルムの踏査をした。

(登攀隊長 定金司郎記)

政府連絡官 ソナム・ギャルチェン

サーダー ナワン・サムディン(三十九歳・ナムチェ)

ハイアルティテユウド・シエルパ ペンバ・チェリン(三十歳・オーシエ) アン・プタ(三十五歳・タメ) パサン・

テンバ(二十七歳・ベンカール) ロプソン(三十二歳・カリコーラ)

ダウラギリIV峰の登頂とアクシデント

—事故原因の究明と関連させて—

野村 哲也
西前 四郎

はじめに

私はこの報告を単なる記録ではなく、一風変わったものにしようと思っている。というのは、すでに御承知の通り、ダウラギリIV峰は、我々大阪府山岳連盟登山隊の河津、安田両隊員によって初登頂されたものの、帰途、七五〇〇メートル地点（推定）からコーナボン氷河側に転落死するという事故を起してしまった。その直接の原因は、両隊員が、最終キャンプの一つ手前のC6から、二晩のビヴァーク予定でラッシュアタックをするという、かなり無理と思われる行動があり、疲労による感覚の鈍麻から転落したと考えられるのであるが、その後事故原因の究明を深めるにつれ、間接的あるいは遠因的なのが数多く見だされて来た。また私自身についても、出発前からの無理がたり、胃病の再発を引き起して、途中で下山、あとを西前登攀隊長にゆだねるといふ不本意なことになってしまい、隊の指揮、運営、タクティクス等、今思い返して悔の残る点が数々ある。それらの責任を痛感するにつけても、事故原因を

可能な限り明らかにすることが我々の義務であると強く感じている。従ってこの報告は、準備段階および登山行動を通じて、常に事故原因と結びつけて考えて行くことにしたい。

計画から出発まで

ダウラギリIV峰は、私ならびに私の所属する関西登高会にとって悲願の山であった。

一九七〇年のプレ、解禁後いち早く、IV峰への登山を試みた我々は、同VI峰（一九六五年、J・ロバーツ等が登山を行った時、IV峰と考えられていた山）の初登頂のみに終らざるを得なかった。その時の模様は『山岳』第六十六年にも書いてあるように、VI峰に登頂した時点（四月十七日）では、まだモンスーンまで十分余裕はあり、食糧、装備等にも大きな不足はなかった。しかしVI峰から見るとIV峰は急峻な尾根と山稜の果ての遥かな峯であり、いささか我々の予想を超えていた。出発前、IV峰に関する写真も記録もなく、また登山を始めてからも、VI峰の肩にたどりつくまで、その姿すら見えぬ山であったため、一層手ごわいという感は深かった。さらにまた未踏のVI峰へ登ったという無意識の気のゆるみ等を考えると事故を起す危険性の方が多いのではないか。そう考えた私は、皆の心を抑えて撤収の命令を下した。

帰国後すぐ、再度挑戦のため、七二年春の登山の申請をしたが、群馬岳連隊と競合して同隊にゆずり、その後も、ネパール政府まで申請書が届きながら、外国隊と競合して先を越されるなど、いらいらのしどろしどろであった。こうした事が、VI峰のサミッターであり、今回の事故にあった河津や、登攀サブリーダーであり、アタックの決定をした村の心に無意識の執念や焦り呼び起したのではないかと考えている。

今回の隊は、大阪府山岳連盟の主催により組織された。物量、人員共に前回の関西登高会隊よりも強力な隊を送ることが必要であろうという判断のもとに、同会より山岳連盟に計画を移管したものであった。しかし結果的には、編

成された隊員十六名(別記)のうち八名は関西登高会によって占められるという、やや変則的な合同隊になった。このことは一面において、準備期間および登山行動の決定が、この山域の経験者四人を擁する同会のメンバーを軸として行なわれるという点で効率よく動ける利点はあったが、他方、他の会から加わった隊員が口をはさみにくいという点で、新しいアイディアの様なものが生まれにくいという欠点もあったようである。

ふりかえってみれば、今回の登山は準備段階から、数々の阻害要因があった。まず計画の中心であった野村が七三年夏から翌夏まで渡英して不在。もちろん渡英前に、七五年プレの申請書を作成し、サインも済ませて行ったのであるが、留守担当者の不慣れのため、実際にネパールに申請されたのは十一月。しかも折からの、ネパール政府火災後のドサクサの為、その申請書が一時紛失するという不運が重なり、七五年プレのIV峰の許可は、同年ポストを申請していた同人カモシカの登山隊においてしまった。何かの手違いとは考えられたのであるが、正式発表があった後では致し方ない。たまたま、日本山岳協会の丹部氏が他の要件で訪ネされると聞いて変更方を依頼したり、同人カモシカの人達と、時期の入れかえを交渉したりしたが、なかなかちがあかない。申請をして許可待ちという状態なら準備も進められようが、ともかく、いったん否の答が出ているのであるから、隊の正式な編成も出来ない状態なのである。

野村が帰国したのは、ちょうどこうしたさなかであった。九月に入ってすぐ準備委員会がもたれたが、タクティクスはもとより、装備、食糧の必要量の計算も、全くといっていい程不十分であり、おまけに隊員の選考についても、参加希望者は全員行かせようという考えが支配的であって、おおよそヒマラヤ登山がどんなものかという認識すら欠けているのではないかという状態であった。

さらにそうした問題を解決しつつ準備を進める過程において、スムーズさを欠いたのは、山岳連盟という大組織のもつ体質的弱点であった。もちろんこれは、個人の責任ではないが、何事も最終的には、実行委員会や常任理事会の

了承が必要であつて、しかも多くの人の中には、登山隊に抵抗的な人もあるため、隊としての準備にふらふらになりつつも、それらとの調整に余分の時間とエネルギーをさかれるなど、思うように仕事が進まない事があつた。もちろん組織という面から見れば、平常の運営では、一部の人の独断専行を防ぐという意味で大事なことであるが、ただでさえ登山許可のおくれから、十分態勢が出来ておらず大車輪で準備を進めねばならぬ時だけに、時間的、肉体的にかなりの負担となつた。

それらの中で最も困つたのは隊員選考であつた。二十数名の参加希望者全員を隊員にするという事は論外としても、山岳連盟の運営上の問題等がからみ、私の理想としていた隊員数を大幅に上廻る十六名に落着いた。しかも、それが最終的に発表されたのは七五年一月に入つてからであつた。登山許可内定の報がネパール政府から入り、野村が隊長に指名されたのは十月末であるから約二ヶ月おくれてやつと隊が正式に発足したことになる。もちろん、隊員候補中といえども、準備作業においては各自全力をつくすことは申し合せてあつたが、やはり人情として、正式の隊員に決まると、そうでないのでは意気込みも違う。私が今回の登山、特に事故原因との関連で最も残念に思つてゐるのは、この準備期間中における細かなツメ、特にヒマラヤ登山におけるタクティクス、安全限界、等の根本的な事に対する隊の基本方針の徹底と、各隊員の登山観をも含めた心理特性の把握が出来なかつた事である。そして私は遠征の準備というとき最も重要なのは、こうした人的、心理的要素におけるツメであると考えてゐる。我々の隊のように、日本からの持出し貨物約一トン、キャラバン出発時で二トン強、約七〇人のポーターという規模であれば、単に所要量を計算し、発注し、梱包するだけなら、数人の経験者がおれば二、三週間で十分である。しかし人間の要素とタクティクスを含めたパーティーシップの確立は、短期間では難かしい。事実、私は十二月初めに、一旦遠征の延期又は中止を考えた程であつた。

しかし、山岳連盟という組織が主催する隊であり、各方面からの援助を仰いでゐる以上そう簡単に中止するわけに

はいかない。最大限の努力をはらって、その障害を乗り切るといふことで、三月一日四名の先発隊を送り、続いて三月四日日本隊十二名が、伊丹空港を出発した。

カトマンズからBCまで

カトマンズでの仕事は、年々楽になる。ビザの延長、トレッキング許可証の交付等は、敏速にはいかないまでも、約束した期限にはちゃんと出来上っているし、空輸した荷物の受取りも簡単であった。ただシェルパの装備が、だんだん数を揃えるだけでなく、質も問題にするようになり、シュラフも羽毛のものを要求したり、キャラバン用の靴も、中国製の運動靴ではどうしてもいやだと云ってきかなかつたり、食糧も彼等の好みのものを大量に買付けようとしたりするなど、貧乏隊にとっては、次第にやりにくくなつて来たようである。しかし、何れも時が解決してくれり。あれこれ忙しく走りまわつたが、それでも結構各隊員は、見物半分で十分休養もととり、十一日、バスとトラックに分れてポカラに向つた。まる一日車にゆられるわけで、いささかうんざりするが、ローカル色豊かで、初めての隊員は結構楽しんでたようである。

ポカラでは、同じ山域に入る明治大学のチューレン隊が十三日にキャラバンを開始するので、ポーター集めや、途中での食糧買付けを考えて、我々は十五日出発ときめ、ノンビリ休養をとることにした。

キャラバンルートは特に取立てていう程のこともない。今やダウラギリルートとも云える位で、東京のダウラギリI隊、岡山大のダウラギリV隊も約十日間程は、同じルートを通るわけで、クスマ、ベニ、ダルバン等、物資も比較的豊かで人通りも多い街道である。

この間、我々は、さきの準備期間に十分ツメの出来なかつたタクティクス上の細かい事、特に安全確保とアタック態勢等に関して、何度かミーティングを行い、過去の経験等をふまえた幾つかの原則の周知徹底をはかつた。しかし

これはやはり付焼刃のであり、事故を含めた登山の最終段階において、ほとんど忘れられたものとなっていた。
三月二十五日、最奥の部落グルジャカーニを通過、BC予定地まであと二日というダルシングェカルカに着く。

ところが、その夕方より大雪となり、ポーターが行動を渋り出した。やむなく、用意した靴や手袋等の支給出来る三〇名だけにしぼり他は解雇。隊員、シェルパを含め総がかりで荷を運ぶことになった。峠（ブズンゲ・バラ）は約四五〇メートルあり、腹までもぐるラツセルと、峠近くの岩尾根へつりにかなり悩まされた。全長一六〇〇メートルの固定ロープを張るなど、思いのほかの作業を強いられ、七日間を要してやっとBCに着いた。四月二日である。なおこの間の輸送計画をスムーズにする為、トランシーバーが用いられたが、使用中に雷に見舞われ、持参した五台のうち一台が故障、他の二台も発信のみ可能という状態になってしまった。そしてこのことは、最終アタックならびに事故に直接つながる物的要因となってしまうた。使用上の注意の不徹底、台数の問題等、くやまれてならぬことの一つである。

またこの間、野村は出発前から懸念された十二指腸潰瘍再発の恐れが出たため、後事を西前登攀隊長に托して、急遽帰国しなければならなくなった。これもまた無形のうちに、登山活動への影響を与えたであろう。

BCよりアタック態勢まで

我々の計画では、登山期間を四十五日とし、第一期を、薬師氏の富山隊以来、この山域に入ったほとんどの隊が、前進基地としているグスタン北峰の北尾根上のC3（五七五〇メートル）への物資の集積とし、約二週間を予定していた。この間の行動については特に書く程のこともない。中村、河津という二人の経験者もおり、四月六日には、C1（四八〇〇メートル）に一トン近い荷が集積され、十三日にはC3建設。その後、いったん全員がBCに下って休養するという余裕あるものであった。

第二段階はC3より七〇年のD・VIの時のルートとは分れて、七〇年秋の福岡山の会の隊のルートを取り、VI峰の基部を西に廻り込むようにして、チューレン・ヒマールの東西につらなる氷河の一段上にある氷河台地にC5(六五五〇メートル)を建設。チューレンとD・IV、D・VIの三峰からの稜線のジャンクション付近にC6を作り、天候その他十分の余裕を見て、D・IVの西側コル(六八〇〇メートル)に最終アタックキャンプ(C7)を出すというものであった。

四月十八日、C1、C2、C3にそれぞれ六人パーティが入り、一斉に活動が再開された。しかしこの頃から、隊員の中に高度障害のあらわれが目立ち始め、加えてインフルエンザにかかる者がふえて展開の速度はぐっと落ちて来た。ルート自体はそれ程悪くはないがC4(六〇八〇メートル)を建設した二十一日前後から、午後はきまってホワイトアウトになるなど、まわりを白一色の壁にかこまれた中での苦闘が続いた。

C5付近からはルートが二つ考えられる。一つは、VI峰寄りのもので福岡山の会の拓いたものであるが、偵察の結果、稜線直下に大きく口を開いたクレバスが二本あって輸送に苦労しそうだということから、もう一つのルートすなわちジャンクションピークめがけて直上する氷壁に登路を開くことにする。氷は硬いが中央部以外は斜度四十五度程度で、がっちり固定ロープを張れば輸送にも使えそうである。

四月二十八日、河津、藤原、賀集のパーティが八〇〇メートルの固定ロープをのばして稜線に出た。胸のすくような直上ルートで、まず第一の難関は突破出来たわけである。二十九日、隊が最後の休養に入っている間に、西前、木村、山本の三人でC6地点の選定と、C7へのルート偵察に出かけた。ジャンクションピークをまいて通過できれば時間的には速いのであるが、北側は乾燥しきって崩壊の激しい岩壁となっており、とても通れたものではない。結局ピーク近くまで登って氷雪部をトラバースするよりほかはなさそうである。

なおこの第二段階には、もう一つ、思いもかけぬ悪条件が重なった。それは石油コンロの燃焼不良である。このため多くの隊員が咽喉を痛め、インフルエンザと共に、みなの体調を著しくこわした。篠田軍治先生からあとでうかが

った事であるが、一昨年の石油危機以来、インドでは値の安い高硫黄分の石油が多くなり、それがネパールに入ってきたものであるという事であった。西前登攀隊長は高所でのオーバーワークと石油の不燃焼から来る咽喉の疾患のため、この後C3からさらにBCへ下らざるを得ず、直接の指揮がとれなくなり、間接的には事故につながる結果となったのである。同時に又、アタック隊員のローテーションにも影響し、最良のアタック態勢が組めない状況を生み出したとも考えられ、これまた心残りの一つとなった。

アタック態勢から登頂、事故に至るまで、(中村、藤原隊員の手記から)

五月三日、河津、藤原、アン・プルバの三人がアタックならびに支援要員としてC5に入ったが、この間上部ルート工作に当たっていた木村が体調を悪くしたため、直ちにアン・プルバが付いてBCに下った。C5には賀集、山本とサーダーのペンパ・ノルブが休養をしており、計五名となる。C6では中村、小玉、大津がC7へのルート工作に死力をつくしている。

五月四日、朝より風強く、ガス、雪煙のため停滞。それでも午後の天候回復をみてC6隊は、C7への途中までボツカに出る。

五月五日(＜C6隊＞)既にトラバース地点にテント、食糧類を荷上げしてあるので個人装備だけで出る。昨日のトラバースが少し高すぎたので岩棚を通るコースに変更、岩棚の先の青水地帯にピッケルを振るう。足元はそのまま三千メートル切れ落ち、東チューレン・コーラの氷河湖が光っている。PP九ミリロープがなくなつたので、頂上攻撃用のナイロン六ミリを固定する。デポ地点で荷物をとったが、さすがにぐつと動きが鈍くなる。今日も十二時頃から吹雪となり、C6から八〇〇メートルあまり固定ロープをのばしたところで集合。この風ではコルにテントを張るのは危険と判断、ここをC7地点と決める。C6と同高度六九五〇メートル。氷鋸とピッケルで斜面を切り取ってテント

を張る。

〔C5 隊〕藤原、賀集、河津、山本、サーダーの五名で出発したが、賀集の体調悪く数百メートル歩いたところで嘔吐し引返す。十四時半C6につき、河津とサーダーがそこに留まる。藤原、山本はさらにC7に向い、十六時半、ちようど張り終ったテントに入る。

五月六日 一日のうち何時間か風雪に見舞われる天候が三日間続く。今朝も風が強くルート開拓に終るかも知れないが、藤原、山本を第一次アタックとして出し、中村、小玉、大津は休養兼待機とする。四時から起きて炊事するが出発は八時になった。アタックは一回のビバークを必至と見て、ツェルト、ガスコンロ、高所服上下、九ミリロープ四〇メートル、六ミリロープ一〇〇メートル、スノーバー五本、ハーケン類十二本、それに二日分余の食糧とかなり重い。コルまではコンティニューアス。コルは広いが雪は硬く、風の強さを思わせる。その先は徐々にやせた尾根になっており、コーナボン側に雪庇が出ているため、チベット側の急斜面を行く。天候は好転せず、むしろ視界は悪くなる一方である。

十一時、七二〇メートル地点で立止まる。スノーバー三本を残しているが、ルートの長さと同難さを考えると余りにも条件は悪い。思い切りよく引返すことにした。

なおこの間、C6から河津とサーダーが連絡のためC7に来て、またC6へ引返した。C6とC7間は空身で一時間半だとの由。

夜C7の全員で、明日以後の作戦を考える。中村他2名の第二次アタックは、みなの特内での動作の鈍さから考えて、かなり疲労が出ているように思われるので、この際、一たんC5に下り、休養後再び登りなおす方がよいように思われた。

しかし、夜半から吹きはじめた風は強さを増すばかりで、ついには、風上側を押さえなければならぬように

なつた。そのうちフレームがバラバラに外れ、夜明けごろ、あつという間に裂かれてしまった。なおこの間、前夜、睡眠薬を飲んで寝ていた二人は動きが極度に鈍くなっており、そのうち小玉は、手に二度ないしは三度の凍傷を負ってしまった。

五月七日、少し風のゆるくなった八時頃、C7を放棄して脱出。C6まで後退し、C6にいた河津と事後について相談する。西前登攀隊長は、つい先日までC5にいて活動していたが、高度障害と咳の発作の為BCに下っており、おまけにトランシーバーの故障（一方通話のみ）で十分な指示を受けることが出来ない。ここではサブリーダーである中村と河津が協議して決断を下すほかはない。河津によれば、安田の調子が非常によく、昨日もC5とC6間の懸垂用ロープをほとんど一人でセットしているほどだという。さらに河津が昨日C6からC7へ来た時、僅か一時間半で来られたのでC6からでも二晩のビヴァークを予定すれば十分だと云う。高所での二晩のビヴァークの可否、C7を再建してアタックする場合の時間的余裕（すでにモンスーンのはしりが来たとも考えられる）等を色々考えた末、無理をしないという条件で、河津、安田によるC6からのラッシュアタックを決定、中村他はC5に下った（凍傷を負った小玉は、戦列を離れBCから帰国を急ぐことになった）。またC5からは賀集とニマ・カンツアが支援のためC6に入る。

なお、この間、事故と直接的につながると思われる幾つかの手ちがいがあった。その一つは、前日風の為に破られたテントは、実はC7用として予定されたものではなく、風当りの余りないC3用に使うはずの、やや古いものであった。これは、最初C1で使い、キャンプの展開、隊員の高度順化の進行と共に、C1を廃してC3に張るつもりであったのが、そのままC7まで上って来てしまったのであった。手違いというには余りにも大きい。C7さえ破られていなければ、事態はもっと違っていたのではないかと思うにつけても、心残りでならない。そしてそうした事が十分周知徹底出来なかつたという点で、準備段階における余裕のなかつた事が悔やまれてならない。いま一つは、トラ

ンシーバーの故障である。それは、まずBCにいる登攀隊長との連絡がとれず、BCからは、いったんC5へ集結する様にとの指令を出したのであるが、作動不良の為か、どこにもキャッチされなかったのである。またアタック前夜、C7にあったトランシーバーは、一台はよかったが、もう一台は発信のみ可能のものであり、しかもそれをアタック隊が携行したのであった。

五月八日、八時十分、C6より河津、安田が出発、天候は晴、アタックには不足のない状態である。二人は、コルを越え、ナイフリッジが終り、岩場にさしかかる七三〇〇メートル地点に十五時五十分到着。ツェルトビヴァークに入る。装備はほぼ六日の第一次アタックと同じ。調子はよいようである。

五月九日、晴、時々くもり、七時半。C6にいた賀集のトランシーバーが送信をキャッチ、元気に出発すると伝えている。C6からは二人の行動がよく見えるが、七四〇〇メートル付近の岩場に苦労しているようである。四時頃雲の切れ間に二人の姿が見える。高度は七六〇〇に近いが動きは鈍く、まだかなりかかりそうである。次の交信は十九時半。待機中のC6に突然河津の声が飛込んできた。

「頂上には七時半に着いた。ガスで何も見えず、旗も風で飛ばされた。写真を二枚写しただけ。今、昨日のビヴァーク地点の三〇〇メートル上にいる。コーナボン側の岩の部分を下ろうとしたが登りなおしてきた。今夜はこの地点でビヴァークに入る。」

ツェルト、コンロ等を前夜のビヴァーク地に置いてきたらしく、何とかそこまで帰ろうとしたが、無理だったらしい。二十時十分、再び連絡あり「厳しいフォーストビヴァークになった。明日はコルかC7までサポートをお願いします。天候がもつてくれることを祈って下さい」で連絡を終り、以後消息を絶った。

五月十日、晴、七時十五分の定時交信の時間になってもアタック隊からの連絡はなく、ルート上に兩名の姿もない。賀集らが予定通りコルまでサポートに出るが、二人の姿は認められない。十三時半、コルから引返す途中、コー

ナボン内院側千メートルほど下に二人の遺体らしいものを発見。ベルクシュルントの線の下に二人一緒に倒れているのを双眼鏡で確認した。おそらく早朝に行動を開始し、七五〇メートル地点より高度差千五百メートルの氷壁を滑落したものと推定される。

五月十一日、中村、賀集がカメラを用意して、遺体の位置確認と遺体収容の可否をたしかめる為に向ったが、遺体の収容は、雪崩の危険、技術的困難さ、等々から不可能と断定せざる得ず、断腸の思いで全隊の撤収を決定した。

なお、一旦帰国していた野村は、遭難の報と共にネパールへ飛び、カトマンズおよびポカラで、ヘリコプター等による遺体収容の可能性等について種々交渉検討したが、高度の問題と折から始まったモンスーンのため、これ又断念せざるを得なかった。

おわりに

念願の山に登ったというには余りにも痛ましい犠牲であった。我々としては、むしろ悔恨の方が強く、いまだに申しわけなさでいっぱいである。ただ亡くなられた両君が（隊の初登頂という意味でなく）ダウラギリIV峰の頂に初めての足跡を残されたということが、せめてものなぐさめであった。

いまわれわれのなし得ることは、両君の死を無駄にしないため、今回の登山から得た反省を岳人諸兄にお伝えすることである。むしろそれは責任であり、義務であると云っていいだろう。その幾つかについては本文中にもお述べた。さらにこまかいことはいずれ報告書の中で明らかにするつもりである。ただそれら全体を通して云えることは、準備期間の重要性である。クライマーの数をそろえ、セオリーに従ったタクティクスを立て、それに基づいて物資を調達することは簡単である。二、三人の経験者がいれば、短い期間でも十分間にあう。しかし、生きた経験、それも年を積んだ経験者のそれを、隊全体に徹底させ、登山のイズムを中心とした隊員の心の一致が出来るために

は、相当の準備期間が必要である。そしてもしそれが十分出来ない場合は、勇気をもって登山の延期又は中止をすべきではないかということである。これは岳兄諸士への訴えだけでなく、自らへの戒めでもある。

隊長 野村 哲也 (四十七歳)

登攀隊長 西前 四郎 (三十九歳)

隊員 中村 久住 (三十一歳) 河津 士郎 (三十一歳) 小玉 利生 (三十歳)

西村 和夫 (二十八歳) 大津 幹夫 (二十七歳) 藤原 真介 (二十七歳)

安田 悦郎 (二十六歳) 木村 文典 (二十六歳) 賀集 信 (二十六歳)

山本 秀夫 (二十五歳) 吉見 哲 (二十四歳) 上川 鏡子 (三十三歳)

西村 和子 (二十五歳) 横山 忠信 (三十六歳)

リエゾンオフィサー ヒクマツト・B・チャンド

サードー ペンパ・ノルブ

ほかシエルパ三名、コック一名、メールランナー、キッチンボーイ各一名。

K12初登頂と遭難

岩 坪 五 郎

一九七四年八月三十日午後五時四十分、K12の頂上にたった高木真一・伊藤勤は同夜と翌三十一日の夜、七二〇〇メートル付近でビバークののち、九月一日早朝、わずかな雲の切れ目にC4にむかつてくだりはじめた。しかし、ふたたび天候悪化し、C4の手前数百メートルのトラヴァース地点からの連絡を最後に、消息をたってしまった。

わたしたち生物は生命をたいせつにしなければならぬ。すべての生物の行動の原点はそこにあり、かつそこに帰結する。二人の隊員を失なった隊の責任者として、私は痛恨のうちに隊長の義務としての報告を書く。なにが遭難につながっていったか、そしてそれを避けるためにはどうすればよかったと考えているかを書きたいと思う。やみくもに反省するといった態度はとりたくない。この報告が今後の登山の輝かしい成功にすこしでも貢献しうるなら、それはなくなった二人へのせめてもの供養であり、生き残ったわたしたちにとって救いであると考ええる。

C2建設まで

パキスタン航空から、同国政府が京都大学山岳部カラコラム遠征隊に、同隊の第二志望であるK12（七四七三メートル）に登山許可を発行したと連絡をうけたのは、四月十五日であった。わたしはただちに隊員を決定し、計画書の

作製をはじめた。そして具体的対外的な遠征の準備は五月連休あけ以後とし、空輸による荷物の発送を六月中旬、本隊の出発を七月二日として、連休あけまでにあらゆる計画をつくりあげることとした。

これにはいくつかの理由がある。まず在日パキスタン大使館に登山許可申請書を提出した一九七三年十一月二十日夜、北アルプス槍平で暮営していた京大山岳部員二十二名は全員なだれに埋められ、五名が死亡するという事故がおこった。山岳部は事故の後処理と、部のあり方についての検討反省にあけられており、わたしに隊長就任を申し入れたカラコラム登山を考える余裕はなくしていた。わたしは、もしカラコラムの未登峰への登山許可がきたときには、たとえ両手両足をしばられたような状態にあっても、なんとかそれに喰いつくべきだと考えつつも、静観の姿勢をとっていた。

つぎに、わたしはこれまで一度ならず、翌年登山許可がくるだろうと遠征の準備をはじめ、むこうさまのつごうでだめになった経験がある。準備は正式許可を得てからにしないと、トラブルが多い。しかし、出発の時期が登山の成否にかかわるなら、そんなことを言っておられない。カラコラムとくにその東部での登山は、八月から九月に入ってもよいとの考えをわたしはもっていた。

一九六二年、同じカラコラム東部のサルトロ・カンリにいったとき、往路六月中旬までの新雪とヒドン・クレバスに難渋したピラフォンド峠（五五〇〇メートル）は、帰途八月初旬には、ごく峠の部分を除いて、新雪は溶け、氷が露出して舗装道路のようになっていた。この時期にBCをつくれば、ポーターたちは簡単に入れるではないか。さらにC1までも強いポーターたちの手でつくれるかもしれない。BCを短期間に高い所につくれるかどうかは、小人数のパーティにとっては重大な問題だ。もちろん九月になれば気温はさがるだろう。しかしネパール・ヒマラヤでのポスト・モンsoonと比較すれば、たいしたことはないのではなからうか。わたしは七月中・下旬、雪どけのBC入りを狙うことにした。

登山隊員は、はじめわたしを含めて六人の予定であったが、なにぶん事故の直後のこととて支障のあるもの多く、結局五人でかけることになった。隊長岩坪五郎（四十歳）、副隊長金山清一（三十一歳）、高木真一（二十四歳）、伊藤勲（二十四歳）、奥哲（二十歳）の五名である。この他に登山隊とは別行動をとるが後日B Cを訪問し、遊軍として行動する学術班として、地質学専攻の能田成（三十一歳）。さらに経済的にも独立であるがB Cにいちばん近い村に定住し、医療活動に従事する医学班として医師川合仁（四十歳）、歯科医師岩坪玲子（三十八歳）の遊撃パーティを編成した。

小人数なパーティなのに、登山に直接関わらない部分を多くつくったことに批判もある。しかし、よく知らない土地にいく以上、できるだけ多くの方法・手段でもってその土地とかかわりあうというのが、遠征・探検登山のあるべき姿であると、わたしは考えていた。もちろん、それが登山の妨げになるようではいけないし、学術研究があるから、登山上の失敗は大目にみられるというのでは決してない。

六月中旬、一ヶ月そこそこの準備期間でもって先発の二人とともに荷物を送りだし、残りは七月二日、予定どおり羽田を出発した。ラワルピンディからわたしたちのカラコラム登山の玄関口スカルドへは、二十日間におよぶ高木の奔走がみのり、チャーターしたフレンドシップ機で、ナンガ・バルバットの横をかすめて空路到着した。この年スカルドへ空路を使用したのはわたしたちだけだという。スタート・ラインまで走っていくようなことはしたくないと、わたしは空路の確保を強硬に要請したのである。

学術班の能田は、パキスタン政府主催の西北地区科学エクスペディションの地質班への参加を招請され、ギルギットに飛んだ。

スカルドで食糧・ケロシンを買いこんで、インダス河沿いに砂漠とオアシスの谷間をジープでカバルへ。ここからキャラバンが始まる。ここでシヨーク河を渡るのだが、ひどい増水である。七月中旬には、五〇〇〇メートルあたりまで新雪はとけるといふ事実は、そのまま下流域の増水を意味していた。渡河と迂回のために、サルトロ・カンリ遠

征のときにくらべ、四日間を余分に消費することになった。渡河後、五日間のキャラバンでサルトロ川沿いの最奥の村、ゴマ(三二〇〇メートル)に着いた。ここで診療と医学調査をする医学班に別れ、わたしたちはビラフオンド氷河に向った。高度順応のために、ここで二、三日滞在したほうがよさそうである。しかしポーター賃の高騰に悩まされていたわたしたちは、ぶつづけに四七〇〇メートルのBCまで、三日間で登ることとなった。

カパルから、わたしたちは二日行程分先をいく先発隊をだしていた。金山と伊藤に、ハイ・ポーターのモハマッド・チュウが案内役をつとめている。彼は一九六一年、英・米・墺の混成パーティについてK12にいき、ステファンスンとともに最高所に達した男である。先発隊の任務は、ルートル開拓してポーターのBC入りを容易にすること、できるだけ高いところにBCをつくること、さらにできればC1までのルートを確認して本隊到着とともに一挙にC1をつくってしまえる態勢をととのえることである。

ゴマを出発して、その日はギャリ(三六〇〇メートル)泊り。ビラフオンド氷河のツングの下にひろがるゴマ村の放牧地、泉の湧きでるアルパイン・メドウである。ウェップ・バラが満開で、ヤナギが低木の林をつくり、川原をタマリスクが埋めている。パキスタン平野部からインダス沿いに砂漠・ステップといった乾燥気候下の地帯をとり、これから氷雪地帯へときびしい自然状態を通過するわたしたちは、わずか数時間だけ自然のつくった緑のゾーンを通過する。ポーターたちが、めざとく岩壁の上の緑に遊ぶアイベックスの一団を見つけ、双眼鏡を借りにくる。

翌日はビラフオンド氷河に入り、右岸から入ってくるチュミツク(泉)氷河の出合いをこえて、同じく右岸からの、わたしたちのめざすグラホモ・ルンバ(寒い谷)氷河の出合いにテントをはった。今回は、これが乾燥のカラコラムかと驚くほど、よく雨が降る。翌七月二十五日、雨からみぞれ。さらに雪に変わるなかをBC(四七〇〇メートル)に入った。この雪は翌二十六日一日降りつづき、BCで新雪量二十八センチメートルとなった。先発隊のトレースのおかげで、ポーターたちは前途に不安を感じずなんのトラブルもなく、スムーズなBC入りであった。

簡単にBCに入れた代償に、隊員たちは皆、多少高度影響をうけ、からだがだるい。ひどい者ほど体温が高く、最高三十八度数分。昨年ネパールのヤルン・カン(八五〇五メートル)にいった高木がいちばん元気だが、やはり三十七度少しある。発熱も高度影響の一種なのだろうか。頭痛組の岩坪、伊藤、奥はC1建設のためにBCに残留しているポーター特選隊の六名をつれ、チュミック氷河のあいまでヤナギの枯木集めに降りることにした。ヤナギの低木が、日本アルプスにおけるハイマツのように樹木限界をつくっているのである。その間に金山と高木はチュウをつれてC1の偵察にかけ、六一年のステファンズらの隊のC1より一キロほど遠方に、わたしたちのC1をさだめた。

BCは四七〇〇メートル、グラホモ・ルンバ氷河のいちばん左岸よりのモレーンの上はヤナギランやカヤの仲間がところどころにある。アプレーション谷には小川があり、水がとれる。モレーンの上はヤナギランやカヤの仲間がところどころにある。だが、岩壁にはベンケイソウの類がわりあいはえていて、天気の良い日にはアポロ蝶が舞う。

氷河はBCから大きく左に曲り、その間は勾配も急でアイス・フォールになっている。わたしたちはこれをさけて、右岸のがら場をよじ登り、さらに急なアプレーション谷をつめた。これを終えると、氷河盆とよんだ長さ七キロほどのひろくてゆるやかな氷河となる。右奥にK12が氷の岩のピラミダルな姿をそばだたしめており、頂上から北西にのびる尾根がピラフォンド峠に達して、この氷河の奥壁をつくっている。左側つまり右岸側はピラフォンド氷河とこの氷河をわける尾根で、そこから三つの支氷河が入ってきている。K12の北西尾根がつくるコルまで、このグラホモ・ルンバ氷河をつめあげるのだが、中央部には大きなクレパスが無数に入り、波うっているようにみえる。C1は氷河盆の端近く、標高五二〇〇メートル。すぐ近くに、高さ三メートルほどの転石があり、その下で昼間は水がとれる。

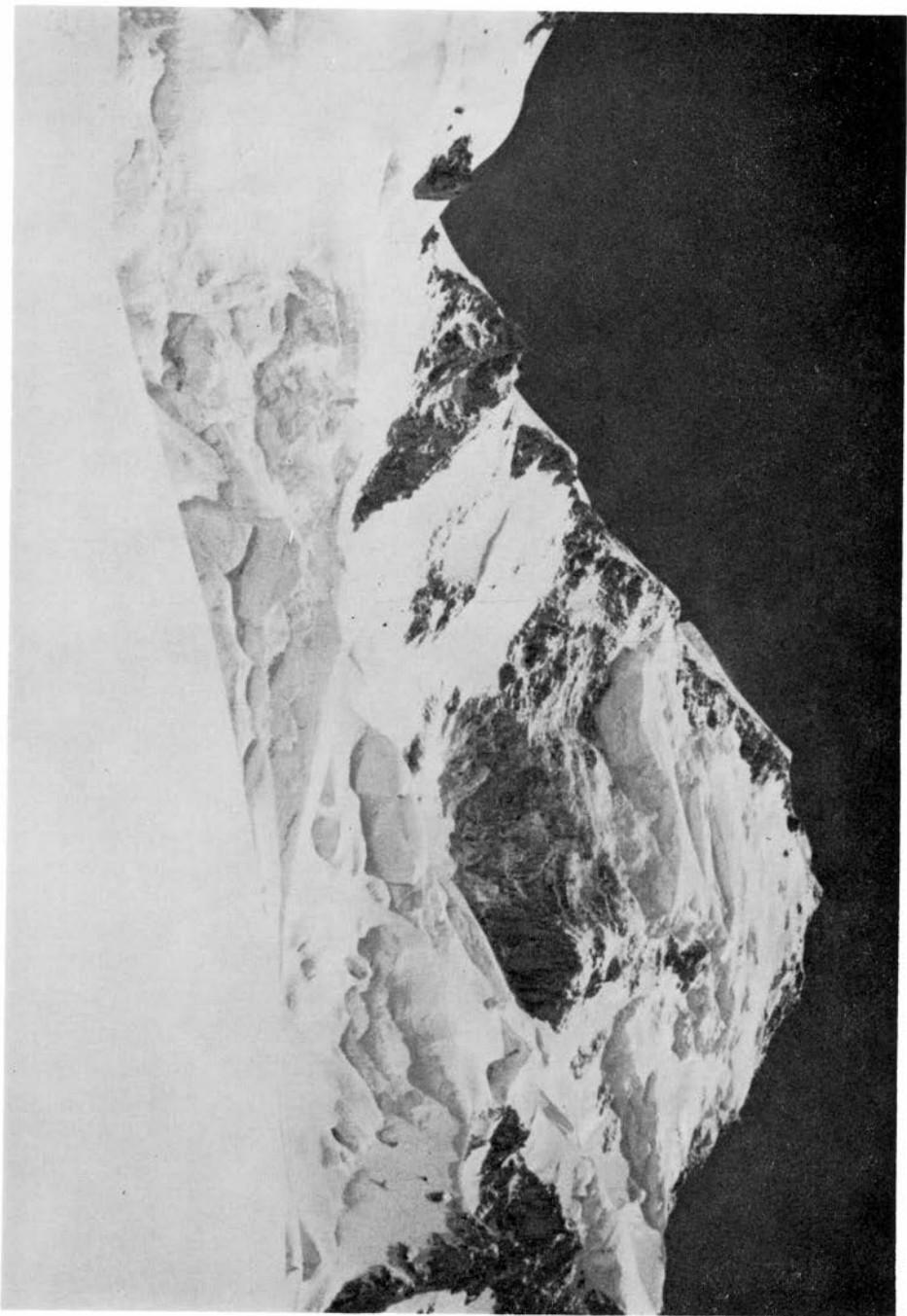
隊員五人、ハイ・ポーター四名、ポーター特選隊六名のピストン荷あげで、C1の建設は七月三十一日には完了した。C2へのルートも、金山と伊藤が山スキーを使って快適におこない、前途は明るいとおもわれた。ところが、す

ぐに終わるはずだったC2建設が難航しはじめた。一日めの荷あげで、荷物は十五キロのだが、ハイ・ポーターのアリ・ハッサンがへばってしまい、C1では回復してくれない。彼をBCに降ろした夜、酸欠事件Vというのがおこった。ハイ・ポーターたちがテントの換気孔を閉じたまま、石油ストーブをたいて夕食を始め、五人とも酸素不足でひっくりかえったのである。さいわい発見が早くて大事には到らなかったが、五人とも完全に士気阻喪し、BCにおいて一日休養しなければならなくなってしまった。

隊員にも障害がはじめた。岩坪は高度順応がまだよくできていないのか顔がはれ、他の隊員に比べ登攀能力に劣る。伊藤はふくらはぎが赤くはれ、兎脛部淋巴腺がはれてびっこをひきだした。二人はしばらくBCで休養することになった。五名の隊員なのに、二名が休養をとり、行動は一パーティになってしまった。さらに八月十四日から十六日まで、BCに入ったときのように終日雪が降り、わたしたちの前進はこの二週間のうち、半分は空転してしまった。

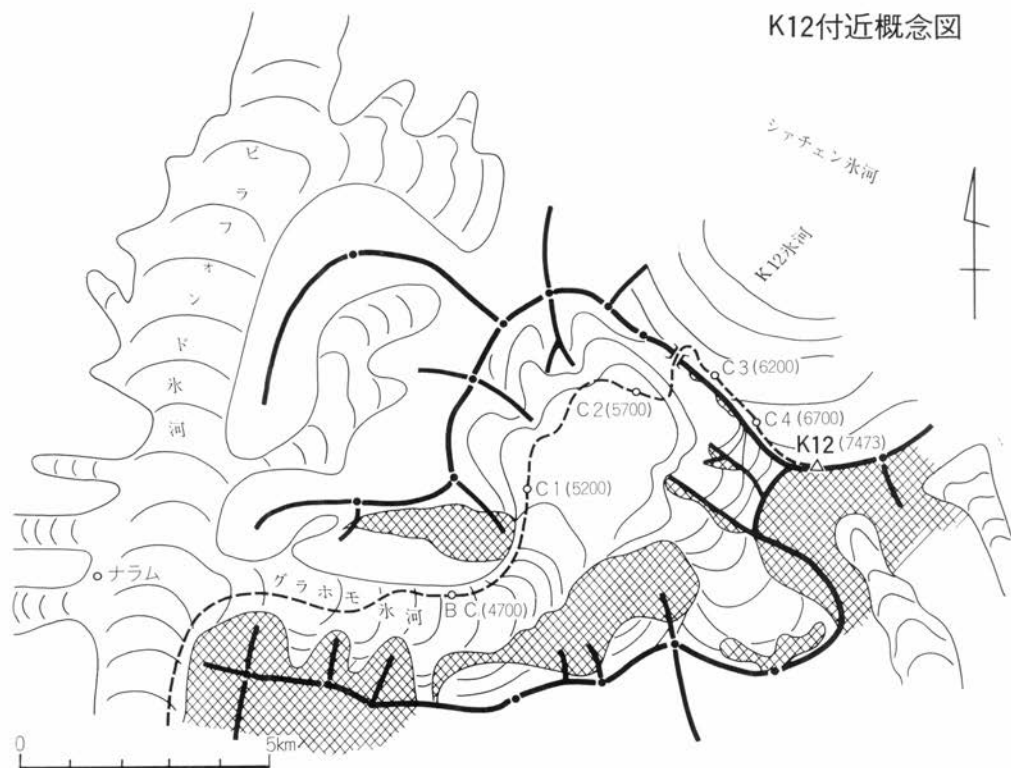
すでに八月十九日になっていたけれど、五人の隊員と四人のハイ・ポーターはC2（五七〇〇メートル）に集まった。コルを越えて西北尾根を二〇〇メートルほど登ったところにC3（六二〇〇メートル）を定め、ルート工作も終わり、荷物も少しあがっている。あす金山、高木はC3に入り、C4の偵察をする。その間にわたしたちはC3の荷あげを完了する予定である。予定は少々おくられているけれど、いよいよ本番だと皆はりきっている。

夕方六時の交信で、ギルギットでの地質調査を終わり、BCで留守役をやってくれている能田の緊張した声がきこえてきた。「頭痛のためゴマ村においていた連絡将校がBCにあがってきた。ゴマ村の医学班と例のヒステリーをおこして、けんかをしたらしい。彼らとは絶交したといきまいている。連絡将校の顔をみたたん、病気のルスタンが俄然、重病の態を呈しはじめた。驚いた連絡将校は、隊のドクターはBCにおいてきて、病人の手当てをすべきだ、と強硬に主張し、もしおりにこないなら全ポーターをひきあげさせると興奮気味である。」



C II (5700 m) 付近よりみた K12 (次ページの図版参照)

K12付近概念図



CII (5,700m) 付近よりみたK12

八月十四、十六日、C1停滞中、ハイ・ポーターのルスタンはかぜをひき、熱がさがらなくなった。連絡將校が帰ってきたら、前のアリ・ハッサンのときのように、彼につきそわせてゴマ村の医学班に看病を頼むはずだった。彼はそれを喜んでやるはずだった。ところがそのルートがつかまってしまったのである。たぶん大丈夫とはおもうが、もしルスタンが肺炎にでもなりそうなら、放っておくわけにはいかない。それに手続きの不備からか、スカルドの陸軍から能田を送り返せとの指令がきているらしい。高木は診療に、わたしはヒステリーの鎮静に、翌朝二人はとぼとぼとBCにむかい、金山、伊藤、奥と四人のハイ・ポーターはC3への荷上げにむかった。

翌朝、コルから上のK12の稜線はガスに捲かれている。また悪天の周期がきたようだ。これではC3から先の偵察は、しばらくできそうにない。不充分ではあるが、前期の終了とし、皆BCにくだってきた。

登頂・遭難

病気のルスタンの看病を医学班にたのみ、能田は不足のポーター賃を日本から受けとるため、BCを去った。BCの留守役は連絡將校をあてるとして、わたしたちは後期の作戦をたてた。食糧は九月上旬、食いのばせは十日ぐらいまではもつ。金山、伊藤、奥は二度、高木は一度C3にあがっている。この状況で頂上へのアタックができるかどうか。

六九〇〇～七〇〇〇メートルの地点にC4をつくるとして、そのためにはC3から二～三日かかるだろう。アタック隊二団の計画を一团にすれば、C4建設までにいちど悪天の周期がくるとしても、なんとかやれそうだ。

隊を三つに分けることにした。アタック隊に高木と伊藤。金山と奥はいちばん調子のよいハイ・ポーター一名とともにC4の建設と、アタック隊の収容にあたる。岩坪はハイ・ポーター三名をつれてC3を建設し、のちC2に滞在して全体をみる。金山隊、岩坪隊は八月二十四日、アタック隊は二十五日BCを出発する。わたしのC2で指揮をす

るというのには、二つの意味がこめられていた。一つはもちろん上部の指揮であるけれども他の一つは、C3から上で行動するパーティが足をひっぱれないよう、彼らの防波堤となることであつた。いつ何を言いだすか分らない連絡将校と、人は好いものだけれどいつ病気になるか分らないハイ・ポーターたちに、わたしはつねに気を配らねばならなかつた。もちろん彼らだけのキャンプなど、危うくてつくれたものではない。

八月二十六日、わたしははじめてコルに達した。途中、K12の中腹にかかつたアイス・クリフの直下を通過する。以前金山らがC2への荷上げをしているときに大崩壊をおこし、その雪煙はC2予定地までもおおつて、ハイ・ポーターたちが動かなくなつた。わたしたちがBCにおりているあいだに、また落ちたのだろう。あたり一面デブリの山だ。なんとカルートを変更できないかと探したが、だめだつた。金山に「それぞれの信じる神の加護を念じつつ、通過せざるをえないでしょう」と言わせた場所だ。コルへの登りは三十五度ぐらいか。新雪が膝を没する。その下は意外に固い氷だ。ちよつとスキーでくだるのはためらわれる。コルから見るサルトロ・カンリはいよいよ大きく高い。なつかしいシアチェン氷河、テラム・カンリ、アプサラサスの山山。氷河盆を見おろすと、C1から右岸沿いに延々とトレースがつづいている。高木、伊藤のアタック隊はもうC2に入る頃だ。このK12の西北尾根は、北アルプスの白馬主稜を大きくしたような感じだ。金山、奥、そして初陣ではあるが、陽気で運動神経の発達したイスマイルの三人、がんばつてC4をつくつてくれ。わたしは三人のハイ・ポーターとテント場をつくり、テントを張つて彼らと別れた。翌八月二十七日、金山隊はC4偵察に出発したが、強風のため雪が舞いあがつてすすめないようだ。この氷河盆のなかと、風の通り路になっているコル近くの稜線では、かなりようすがちがうらしい。午後は強風に備えて雪洞をつくるといふ。C2でもあられが降り始めた。一週間周期でやつてくる悪天がきたようだ。あまりあてにはならないが、天気予報も明日は降雪を告げている。わたしは金山に悪天の準備をせよと伝えた。ここで悪天の周期を迎えれば、つぎの一週間でアタックをすればよい。万事好都合だ。

翌日、この予想はうらぎられた。時間がたつほどに快晴となり、風もないでいく。金山隊はあわてて出発。高木、伊藤もC2を出発した。金山隊は難航しているようだ。股までもぐる雪の稜線は傾斜をまし、その下は固い氷。アイゼンはききにくく、粉雪がじゃまをしてステップも切れない。傾斜は五十度はあるだろう。午後二時、トップの奥がすずまなくなつた。トランシーバーで、そこがいちばん難所だと伝える。シアチェン氷河側を捲いていた彼らは、右側の岩のごつごつした主稜線へトラヴァースを開始し、ようやく岩稜の細長いテラスにでた。「ここから三メートルほどのチムニーを登りきると、突破できなかつた雪面の上にとられそうだ。きょうはここで引返す」と三時に交信してきた。三五〇メートルほどかせいだらうか。

八月二十九日、少し朝焼けきみだったが、風もなく雲ひとつない快晴となつた。軽装の高木、伊藤が先行し、C4建設の資材をもつた金山、奥、イスマイルが後続する。快調にすすみ、昨日三時になつたテラスに十一時に到着した。しかし、そこからの前進がはかどらない。チムニーの通過に四、五十分を要し、その上は傾斜五十度をこす岩・雪・氷の悪場である。先行の二人はワン・アト・ア・タイムですすんでいる。こぶ状の雪稜をのりこえて、わりあい広い雪の尾根部分にでたとき、すでに二時をまわっていた。高度は約六七〇〇メートル。ここは例の大崩壊をおこすアイス・クリフの上部にあたる。ルートは二つとりうる。一つはこのまま主稜線の岩稜をすすむものであり、もう一つは正面の岩稜の頂上あたりからシアチェン氷河側にのびる長大な雪の斜面にとりつくルートである。わたしたちはこの斜面を八布引き尾根Vとよんでいた。高木や金山は問題なく後者、八布引き尾根Vをえらんだ。しかし、いまから八布引き尾根Vにとりつくには時間が問題である。ここからみる限りテント・サイトはない。日没でビバークになるかもしれない。頂上まで標高差八〇〇メートル、不可能な高度差とは言えない。彼らはここを最終キャンプにしたいと交信してきた。

一瞬、わたしは「あつ」とおもつた。高度は六七〇〇メートル、七〇〇〇メートル近くまでいってほしい。下から

みる限り、C3から今彼らがいる場所までが難所であり、あとは高度を稼ぎやすいのではないか。すでに二時半、時間的にあまり余裕はないけれど、登頂の高度差はできるだけ少なくしたい。

しかしわたしは、現場にあるものもつとも正しい判断をなしうるとの考えを常日頃もっている。他人の意志に正面から反対できない性質のわたしは、つぎの一瞬またまた折衷的な指示をだしていた。「C4のテント設置は金山隊にたのみ、二人はあすのためにハシヨート・キーヴからハ布引き尾根Vにいたる部分を偵察せよ」。だが、彼らはヤルン・カンの登頂隊の出発が、前夜おそくなったためにおくれたことを考慮したのだろう。あるいは、いま疲れたからだで前進するより、睡眠用の酸素を吸って翌朝一気にすすむほうが得策と考えたのかもしれない。一〇〇メートルも前進しないで引き返した。金山隊のC3帰着は六時前、ふらふらになっていた。

たとえわたしになんの成算はなくとも、「六七〇〇メートルでは約束がちがう。もう二、三〇〇メートルなんとかしろ」と、しゃにむに goneていれば、事態はかわっていたかもしれない。もし前進を続け、ハ布引き尾根Vにとりついていたら、金山隊はC3に帰れなかっただろう。そのかわり、アタック隊は登頂のちC4にたどりついただろう。またこの地点に荷物を置き、一度引き返したとしたら、アタック隊を悪天をC4でむかえることになり、体力・食糧ともにつきて登頂できなくなつたかもしれないが、おりてはきただろう。さらにもうひとつ、金山隊をあすC4に移動させ、わたしはC3にあがる方法があつたはずだ。つかれている金山隊にはかなりの重労働であり、わたしも二十七日三十九度の熱をだし、まだ治らないモハマッド・チュウの処遇を考えねばならず、この対応はかなり困難ではあつた。だが、不可能ではなかつただろう。しかし、当時わたしはそのような行動方法にまったく気づかなかつた。このときのわたしの決定は、ただ時の流れにしたがつており、この時点におけるわたしたちの雰囲気という点からのみ、穏当といえる処置であつた。

アタック隊はいまごろ、酸素を吸って寝ているだろう。わたしは六人用のテントのなかで、ひとり天候について考

えていた。きのうきょうの好天で、七日周期説はくずれてしまった。好天の周期がのびているだけで、あすぐらいからくずれるのか。それとも、悪天の周期がかんたんすぎてしまって、またしばらく好天がつづくのか。ぜんぜんわからない。わたしたちのための特別放送、A点(ペシャワール)の五〇〇ミリの高度は、すこし高くなった。このままあがりだしてもおかしくはない。過去の天気グラフというものは、過去をみるかぎりうまく理屈がつくけれど、白紙の部分すなわち「あす」を考えると、お先まっくらである。悪くなりかけてもちなおした例も逆の例もある。「科学」とはこんなものさと情なく考える。

八月三十日六時、アタック隊と交信する。彼らは五時××分(ききとれず)C4を出発した。すでにトレースがハシヨート・ケーキVのほうに、斜め上にのびているのがみえる。

この日、K12の空は青空ながら、すごい朝焼けである。頂上にいたる稜線ぜんたいから幅広く、波状雲がかなりのスピードで吹きだしている。高層と中層の雲が乱れかう。常識的に、これは前線の接近を示す現象である。もし撤退しようとしているときなら、問題なくくだりはじめるだろう。しかし、アタック隊もわたしも、なんとか頂上へいきたい、いつてほしいと考えていた。雲の流れを理由に、青空のもとで引き返せと指示する決断は、わたしにつきかねた。二十七日には、あすからくずれるとみたのにもちなおした。前回の悪天周期のとき、早朝に降雪をみたが、午後には青空になった。そんなことが頭をはしる。

二人はハシヨート・ケーキVからハ布引き尾根Vに登りだした。主稜線からひとつ風下にはいつているせい、風あたりはそれほどではないらしい。十時の交信だったか「サルトロ・カンリ、チョゴリザはもとより、マツシャープルム、ナンガバルバートもみえる。わたしたちはしあわせだ」といつてくる。「意外にピッチがあがらないが」と質問する。「ブレイカブル・クラストで難儀している」とこたえてくる。

十二時までにはハ布引き尾根の頂上Vに着いてほしいと、わたしは願っていた。かれらがそこに着いたのは一時であ

った。もう一時間おそければ、わたしはきょうの登頂の可能性を考えなおしていたかもしれない。しかし今、ひきかえすのは早い。前進すべきだ。

この時点でもまだ、わたしのうつぶき手段がひとつあった。C3の金山隊を急いでC4にあげ、ビークをして帰ってくる可能性のある二人を收容させることである。たしかにBCでたてた後期の計画には、それはなかった。C4を七〇〇メートルちかくにつくれば、頂上への往復は容易であり、かつサポート隊はアタック隊にくらべて力量がおとるといのが、その理由であった。しかしいま、事情はかわっている。アタック隊の收容を考えねばならないはずだ。

だが、強力とはいいがたい金山隊の現状である。臨機応変、柔軟性をほこつたはずのわたしの頭脳は、凍てついたように動かず、善良なだけがとりえの翁のように、ただただ二人の健闘と天候がもちこたえてくれるのを願うのみとなっていた。

二時、ついにハコロッケ岩Vがガスで見えかくれしだした。ハ布引き尾根のビークVをこえてから、アタック隊のピッチはわりあい速くなり、三時にはハジャンクション・ビークVの左肩をまきはじめたのが、双眼鏡で確認される。「ここから雪の稜線が頂上に続いています」とはずんだ声を流してくる。「だいふ天候が怪しくなってきたが、前進をつづけるか」と、わたしはきいた。隊長としてこれはまことに愚劣な質問であった。敵軍を目前にし、たてていた槍を水平にかまえた槍騎兵に、やはり突撃するかねときく隊長があるだろうか。「当然すすみます。」かれらはりんとこたえた。退却させたいなら「とにかく退却しろ」と命令すべきである。判断がつかないなら、だまっているべきだ。

四時。「頂上直下とおもわれるところにいる。以後、C2のトランシーバーも、オンにしていってほしい。」なかなかつぎの交信がこない。頂上直下といったが、ピークをだまされ、おくにもうひとつあるのだろうか。

五時四十分。「ただいま頂上にいます。問題にしていたもうひとつのピークよりあきらかにたかい。」

わたしはおめでとうを連呼しつつ、最低限の写真をとリ、早急におりはじめるといふ。

六時。「頂上での儀式はすべて完了。これからくだり始めます。」七時四十分。「ハジヤンクシヨン・ピークVのシ
アチエン氷河よりの岩かげでビバークします。」

わたしは、風あたりのすくない適当なところでビバークするよう指示していた。二人がビバークの地をきめたとき、主稜線はすでにガスにおおわれていたから、これ以上の下降はむづかしかつたのだろう。しかし、もしわたしが「トレースのみえるかぎり、すこしでも下降をつづけよ」と指示していたら、あるいは事情は変っていたかもしれない。一九六〇年、ノシャックへいったときの七〇〇メートルでのビバークの経験が、ビバークにたいするわたしの警戒心をよわめていたのだろうか。

「すこしでも多く、水をつくつてのめ。恥ずかしがらずに、二人しっかり抱きあうのだ」などとわたしの経験をつたえる。

八月三十一日。C2のまわりは、雪がしんしんとふっている。六時の交信をじりじりしてまった。六時。「風強く、視界まったくきかず、動けない」「目はみえるか。凍傷にはなっていないか」ときく。アンナプルナでも、ヤルン・カンでも、ビバークのあと目をやられている。「大丈夫だ。固型燃料で生ぬるい水をつくって飲んだ。昨夜はわりあいよく睡った」と元気のよい返事をしてくる。

金山隊にC4にあがってほしい。しかし、テントが吹きとばされそうで、それを押えるのと吹きたまる雪を除くにせいっぱい、とうてい動ける状況ではない。

十一時。「もう一晚のビバークの準備をしろ。ビバーク地のいごちをよくしろ」とつたえる。午後になっても、雪はやんだが視界はきかない。かすかにいだいていた危惧は現実となってきた。あのBCに入ったときや、八月十五、六日の大悪天の周期がやってきたのだ。これにやられると三日ほど悪天がつづく。たいへんなことになった。なんと

か、なんとかあすは視界がきいてほしい。五時、また雪が降りはじめた。二人のことを考え、いてもたってもいられない。が、どうにもできない。ハイ・ポーターたちは、「バラ・サーブ、心配するな。きつと神様がまもってくださいるだろう」となぐさめ、静かに肩をもんでくれる。

九月一日。午前三時、まったくの曇天だが雪はやんでいいる。午前六時、二人のはずんだ声がきこえてきた「グラホモ・ルンパ氷河の下のほうまでみえます。いまアイゼンをつけています。」しめた。はやく、はやくおりてくれ。C3でも、出発の準備をしているという。上空は一面くもってはいるけど、C2からもハジャンクシオン・ピークVまでみとおせる。

七時すぎから、明るさはますますけどもまた雪がふりはじめた。十時、アタック隊との交信は雑音がひどく、まったく内容不明。C3は、ガスと強風で動いていない。

後日BCに帰ってから、「あのとき動けなかったか」とわたしは金山にきいた。口数のすくない彼は、「なんとかいかねばならないと考えました。わたしじしん、死ぬのはおそろしいとおもわなかったのです……」と口ごもり、やがて上空をみる彼の目から涙が一筋流れおちた。七〇〇メートルで、二晩のビバークをしたアタック隊は、かなり疲労した状態で降りはじめている。それを下のキャンプにいる金山隊が収容にでかけず、停滞している。金山にとって、これほど苦しいたまたまれないことはなかっただろう。しかし、金山隊の能力である状況のもとにC4にむかうことは、遭難の可能性というより、到着不可能を意味していた。

十二時、アタック隊が交信してきた。「いま、ハコロッケ岩Vとハシヨート・ケーキVの間、いくとき昼食をとったところにいる。」おちついたしっかりした声である。わたしは彼らがルートをまちがうのをおそれていた。「登りのトレースはわかるか。方向感覚にたよるな。あくまでトレースを探せ」という。なんとかわかり、それにしたがって下降をつづけているという。わりあい調子よくおりている。〈布引き尾根〉にはいって、風かげになったようだ。

二時。「C4についたか」ときりだす。なにをいうかと、いささかむっとした声でこたえてきた。「まだです。雪がとばされて氷が露出し、こわいくだりだった。いまは視界がきけばC4もみえ、コンティニユアスでくだれるところだが、まだ慎重にワン・アト・ア・タイムでくだっている。四時にトラヴァース地点、六時にC4に着けるとおもう。」

そうとう疲れているようだ。それにいくときには言っていなかったが、C4とヘショート・ケーキのあいだのトラヴァース・ルートに危険な箇所があり、フィックス工作が必要なようだ。しかしわたしは彼らのために、なにをしてやることもできない。ただ交信をつうじて元気づけ励まし、適切なアドヴァイスを与えるよう努力するのみである。

四時。「いまトラヴァース地点にいる。たいへんなことがおこった。アイゼンが靴ごとおちてしまった。靴下を重ねてがんばっている。」なぜそんなことがおこったのだろう。凍傷を気づかかって靴もオーバー・シューズもアイゼンもゆるく縮めており、転倒したはずみにはずれたのだろうか。それとも靴をぬいで足を暖めようとしておとしたのだろうか。しかし、今は原因をたずねていくときではない。「羽毛服のフードも使え」といったら「そんなことは言われなくともやっています。その上から細引をまいて歩いている」という。距離的には、あと数百メートルのはずである。以後こちらはトランシーバーを常時オンにして待機する。

六時すぎ。「最悪の事態になった。スリップして、アイスハーケンにぶらさがっている。」「がんばれ。なんとか窮地を脱してくれ。C4はすぐそこではないか」とわたしは悲痛に叫ぶ。「わかっています。わかっています」と冷静な声でこたえ、スイッチをきった。以後わたしは十分か二十分おきに二人をよびつづける。とうとう、九時になってしまった。滑落したのか。表面なだれにまきこまれたのか。無事であるのなら、どちらかが交信してくるはずだ。もうC2には乾電池の予備がない。わたしはスイッチを切り、十時と十一時に交信を試みたが、ふたたびあのききなれた声はきけなかった。

九月二日。六時から一時間ごとにアタック隊をよぶも応答なし。C3ではきのうと変わらず風が強い。金山はなんども外にでるが、この状況で「いこう」との決断はつけられない。奥はだいぶ消耗しているようだ。イスマイルは風が強いとか、寒いとかとべそをかきっぱなしだ。

九月三日。視界がききはじめた。六時、金山をよびだし、「なんとかC4にあげれ。連絡途絶後すでに三十六時間たっている。最悪の事態発生の可能性を考えざるをえない。四晩連続のビバークは期待できない。アタック隊の生存はいまやC4に到着しているばあいに限られるだろう。もし遺体が発見したばあいは、雪穴を掘って安置せよ」と連絡する。六時半、金山隊はC3を出発した。フィックス・ロープを掘りだしながらすすむ。びっぴつと足もとからひびが入り、板状なだれが頻発する。金山がトップにたち、奥が確保する。

十二時五十分、C4について。テントは外側から閉められたままである。付近をさがすが何も発見できない。約一時間半のち、わたしは搜索打切りと撤退を指令した。C4からトラヴァース地点へ前進すれば、なだれにやられる可能性はきわめておおきい。いまやわたしは再遭難をおそればならない状況になっている。

九月四日、快晴となった。金山隊はC2にくだりはじめる。コルからのくだりの新雪なだれが心配だ。わたしは三人のハイ・ポーターと縄ばしごのところまで迎えにいった。イスマイルが、金山と奥に確保されており。そしてわたしに抱きつき、泣きふす。金山と奥の肩をわたしはだまってたいた。

昨年来、うちつづく遭難に、つくづく生と死は隣りあわせだと感じていた。しかし、いま、隣りあわせともおもわない。わたしじしんが生きているのか、死んでいるのか。ただ肉体は生きていて、下へ下へとおりていく。夕方六時、氷河盆のはじまできた。高木と伊藤が初登頂したK12が夕空のなかにそびえている。わたしはトランシーバーをだし、アタック隊を呼ぶ。

生き残った、死ななかつた三人は、K12のほうに合掌した。

遠征をおわって

とほうもなくおおきな犠牲をだした隊の隊長として、わたしはつぎにまた遠征にでかける人に役だてねばならないと、わたしの失敗の検討をしている。

作戦の形式からいえば、オーソドックスなポーター・メソッドを展開するには人数がすくなく、ラッシュ・タクトックスをとるには、隊員の足並がそろわず、いたずらに日数をついやしていった。いずれにしても、長い頂上アタックにさいして、最終キャンプを無人にしたことが、致命的欠陥といえるだろう。登山隊の規模がいかに大きくても、小さくても、問題は最終段階での事態への対応のしかたにあり、それがうまくできなければ、どんなに余裕のあるはずのパーティも、結果は同じになってしまう。

登山後期になって、わたしの思考・発想が凍てついたように、柔軟性を失ったことにかんがみ、検討・フィードバックと行動のやりかたをシステム化すればよいとのコンピュータ的な考えかたもある。たしかに安全を期するという点からは、よい方法である。もちろん人間は自動的に、頭のなかでシステムの考えるものだし、そうでなければならぬ。しかし、規則のように紙に書いて固定化してしまうことに、反撥を感じる。それは、いままでわたしの考えていた遠征とか登山とかとはとまるでちがう。システム化された行動とは、予想されるあらゆる事態を考慮し、それぞれに対応する手段のすじみちをきめておく方法であろう。したがって予想されていなかった事態に直面したときには、行動を停止するか、プログラムをつくりなおさなければならぬ。

遠征のおもしろさ、特徴とは、予想しなかった事態がつきつきと現われ、それにいかに有効に対処していくかにあつた。もちろん原則というものはあり、たいせつにすべきである。しかし、原則は最小限のものである。複雑なプログ

ラムをつくるほど、それに頼って、あたらしく生じた重大な要因をおろそかにする可能性がある。有能な隊長とは、大原則をもとに、瞬間的なプログラムづくりの名人であるといえるだろう。

C4が六七〇メートルになってしまったとき、もしわたしが金山隊につかれてはいるだろうが、あすもC4にあらがれといていたら事態はかわっていただろう。なぜわたしにそれができなかったか、考えつかなかったか、リーダーの資質にかかわる問題として、具体的に検討する必要がある。

わたしは隊員たちに「諸君の意見はきくけれど、判断と決定はおれがやる。すべての責任はおれにあるのだ。多数決のような無責任なことはやらないぞ。独裁でいく」と宣言した。独裁をやる以上、わたしはつねに最前線にあり、もつとも苛酷な状況を身をもって把握している必要があると考えた。

チゴリザやサルトロ・カンリで登攀指揮をとった加藤泰安さんも、そのように行動していたとおもう。彼は任務を遂行するため、自分の体調をベストにもっていくよう努めた。若い隊員たちは、荷をかつぎラッセルをする隊員たちの最後尾に、からみでついてきてがみがみいう登攀指揮者に、少なくともその場ではかなりの反撥を感じた。当時の彼よりまだ若く、かつその反撥をおぼえているわたしは、先頭にたつてルートを探し、荷あげもしようとした。

しかし、残念なことにわたしのからだはそれを許さなかった。若い隊員よりあきらかに労働力において劣っていた。それがわかったときわたしは落胆し、ルート工作も荷あげもできないで、ただ隊長という虚名を与えられている人間が、登山者に価するだろうか、失望した。だがそののち、わたしはおもいなおした。「おれはいやでもリーダーなのだ。リーダーは全責任をもっている。体力が劣るといえるのは、任務を放棄する理由にはならない。」

わたしは荷物を軽くし、先頭でラッセルをせず、体力の温存につとめた。しかし、ここがわたしの資質の限界なのだろうか。隊員たちにひげめを感じ、彼らが行動しやすいうように環境をととのえるために努力をするが、彼らをひっぱり、尻をひっぱたこうといった姿勢は、無意識のうちに弱くなっていった。

C4決定後のわたしの行動には、指揮する姿勢よりも、適当なアドヴァイスを与え激励し、健闘と幸運を祈る弱気な姿勢しかみることができなくなっている。それは平時にあつては美德かもしれないが、非常時にあつては隊を破滅に導くものとなった。

最後に、これはわたしの立場としてはたいへんいいにくいことであり、隊長としての責任をまぬがれようとしているとおもわれる可能性もあるが、あえていっておきたい。登山隊には必ず登頂者が選ばれる。選ばれた人は全員の期待をうけ、重い責任を感じ、頂上をまえに血気にはやるだろう。事実、はやらなければいくらでなおしても、頂上にはいけない。しかし、どんな優秀な隊長のもとにあつても、べんりなトランシーバーがあつても、けっきょく最後に身をまもるのは、自分自身である。いかに隊長が責任を感じようとも、死者はよみがえらない。

〔後記〕 一九七五年、市川山岳会のK12遠征隊は、三人が登頂に成功された。わたしは、隊長、登頂者からわたしたちのC4から上の状況をきくことができた。やはり例のトラヴァース地点がいちばんの難所で、氷の上を表面などが頻発し、フィックス工作をかなりされたそうだ。トラヴァースをおわり、ハ布引き尾根Vにとりついたところに最終キャンプが設営されたが、雪深く頂上まで十二時間を要し、帰途ビバークになった。翌日は快晴でそのままC4地点まで下降したが、そのとき第二アタック隊は最終キャンプに入っていて、第一次アタック隊を收容している。确实な、しっかりした登頂態勢がとられたといえるだろう。

山岳航空写真覚え書

—『ヒマラヤを飛ぶ』余話—

山田圭一

やっとなを考へはじめると年頃になるかならないうちに、東京大空襲の地獄の中で半ば偶然のように命を拾ったときから、今年でもう三〇年もの歳月が過ぎてしまったことになる。丁度そのころからはじまった山行歴も何回を重ねたのか、最近では記録を残そうとする気持さえおこらなくなつてしまつてゐる。その長い間に、世の中も目まぐるしい程移り變つて來たし、自分の生き方もずいぶん遍歴を重ねてきた。今になつてふりかえてみて、学問の世界と、僅かな人々との出会い以外に、私を魅きつけ生きつづける勇氣を与えてくれたことからは、三つしかなかつたような氣がしてゐる。

いふまでもなくその一つは、山行きである。高度のクライミングはあきらめざるをえない現在でも、岩と氷の苛烈な世界で肌感じてきた、自然と人間の一体感や、死と隣りあわせた時

間・空間だけがもつあの充足感、私の生き方に大きな影響を与へつづけてゐる。

その二つ目は、初期ゴシックの聖堂である。一度も神を信じようとする氣持をおこしたことはない筈の身でありながら、留學生時代を過したドイツで、バッハが聴きたくて教会通いをはじめから、いつの間にかあの神聖な雰囲気にはひきこまれ、今ではそれが私の魂の憩いと慰めのために欠くことのできないものになつてしまつてゐる。仕事の都合でヨーロッパを訪れる度に、一番楽しみにしてゐることの一つは、週末の一日をさいて、教会堂を訪れることである。天上の世界に向かつてどこまでもそそり立つ尖塔と、それを囲んでひっそりとたたずむ聖像の前に立ちつくしたあとで、ほの暗い内陣に進む。ステンドグラスを通して、五色に彩られた神秘的な光の中で、パイプオルガン

やカンタータの響きの中にひたりつづけている間に、自分の心が浄められていくことを自覚しないではいられない。そのような経験が重なるにつれて、いつの間にか私は中世に暗黒時代というレッテルを貼りながら、いまだに平然と生きつづけているようにみえる。知識人々たちを信用する気持をなくしてしまっている。その上、長い間技術とは何か、ということを問いつづけてきた私にとって、イル・ド・フランスを中心とする初期ゴシックの遺産は、絶えず、芸術と技術、精神と物質、信仰と理性との間につくり出されたダイナミックな緊張関係と調和の具象化として貴重な示唆を与えつづけてきてくれた。

最後の一つは、空を飛ぶことである。セスナからジャンボまで、さまざまな機種をとりまわして、既に飛行回数は二二〇回を超しているにもかかわらず、滑走路から機体が浮き上がるときの軽いGのかかった感触は、いつも私の心に新鮮な興奮を呼びさましてくれる。機が上昇するにつれて、つい先刻まで自分をとり囲んでいた町角や道路などが、みるみるうちに小さくなってゆくとともに、新しい広いパースペクティブが広がり、それとともに、地上では大きなものに思われていた自分の存在が、紺碧の天空の中の一つの点となってとけ込んでゆく。そしてこのことは、毎日の生活を過ごしている狭い領域の外に、はてしなくひろがっている宇宙の存在を実感として把握することでもある。

結局のところ、これら三つの、一見して全く異質なものでしかないジャンルに共通して、私をこれほど魅きつけているものは、いとわしいことの多い日常生活の次元を超えて、はてしない高みにひろがる神聖な空間への憧憬である。そしてまた、一人ひとりの小さな人間はかない一生というような尺度をこえて、いつまでも存続しつづける、このような永遠の厳しい世界の中で、死ということを通視し、これを通じて自分が生きていくということの意味を、改めて強烈に体験する機会をもつことが、私にとってなによりも貴重なことなのであろう。

そしてアジアの諸地域をはじめ、ヨーロッパ、アメリカなど、あちらこちらの景観を空から見下してみたあとでも、結局氷雪をまとい、氷河裳裾をひいてそそり立つ峯々の神々しいプロフィールほど美しい対象にめぐり合ったことはなかった。

そして、山々がこのように最も魅力的なプロフィールを見せてくれるのは、遙かにはなれた距離を飛びすぎるジェット機の中から見下したときではなくて、安全限界ギリギリまで低空に下りて出来るだけ対象に近接したときである。とくに、ピークや稜線が背景にとけこんだりせず、くっきりとスカイラインを浮きたたせてくれることが、どうしても必要とされる。

そのような意味で、定期航空機からの撮影では、とても満足できず、一九六四年の初冬新雪をまとった富士の上空をとんで、とうとう山岳航空写真という新しいジャンルの洗礼をうけるこ

とになった。それ以来、北アルプス、ヨーロッパ・アルプスから、さらにカナディアン・ロッキー、アラスカと飛びまわっているうちに、いつかはヒマラヤを、という夢が実現することになった。しかし、茅野満彦氏、宮原巍氏など、たくさんの人々の御好意によって、やっと空撮の手筈がとこのうまでには、最初のフライトから、概に一〇年の歳月が過ぎてしまっていた。

この目的のフライトには最適のピラタス・ターボ・ポーター機が、カトマンズの空港を離陸したのは、一九七三年一〇月二六日、偶然RCC IIのエベレスト隊の登頂の翌日であった。上昇能力と高空での性能を重視して設計されたストール機だけに、みるみる高度をあげて、目の前の白い屏風のような山なみが迫ってくる。ずたずたに切断されたヤルン氷河のかかったカンチエンジュンガの前面から、ジャヌーの怪異なピークをかすめて、マカルー、エベレストまで文字通り圧倒的なジャイアントのオンパレードをファインダーにとらえながら、山岳写真家としての醍醐味を満喫する四時間であった。

次いで第二回目のフライトは、芳野氏と同乗して、ガウリサンカール、メンルンツェからゴザインタンまでを撮影した。エベレスト南壁をはじめ、八千メートル峰には、切りそいだような岩壁をむき出しにして、厳しいプロフィルを示すピークが多いのに比べて、七千メートル台の山々の中には、美しいヒマラヤひだのロープをまとめて、神々しい姿をもつものが多く、と

くにガウリサンカールとメンルンツェは、きらきら輝く氷壁が鋭いナイフ・エツジの稜線につらなつて、その凄絶さが強烈な印象を与える。

最後の第三回目のコースは、マナスル三山からアンナプルナ連嶺をかすめて、ダウラギリまでをカバーした。離陸前には、これらの山の南面を飛んだあとで、プタ・ヒウンチュリから右にまわりこみ、ダウラギリからマナスルまでの北側を経て帰投するようにフライトプランを作成した。しかしながら、もうかなり強まってしまっていたジェット気流のために、南面の同じコースを引きかえざるをえなかった。この飛行では、マナスル西壁、アンナプルナとダウラギリ南壁など、ヒマラヤの鉄の時代にフライトをあびる、すさまじい垂壁を手にとるように眺められたことが最も大きな収穫であった。

以上のような、十時間のフライトの間にカンチからダウラギリまで七〇〇キロメートルにわたつて連なるネパール・ヒマラヤの核心部の全域をまわり、シャッターを切りつづけて、四台のカメラで七〇本のフィルムを撮りまくったことになる。しかし帰国して現像が仕上るまで、そもそも写っているのかどうかさえ自信がなかった。九〇〇〇メートルという、成層圏に近い高空での極限的な状況の中で行なわれる写真撮影は、地上と異なったさまざまな困難をかかえている。その第一のものは三分の一気圧という低圧である。酸素ボンベを使用するにして

も、ファインターをのぞく毎にマスクを外さなければならず、何枚かシャッターを切ってあわてて酸素を吸うというような動作を繰り返さざるをえない。そしてエベレスト上空で、装置が故障したときには、危うくそのまま天国(?)に行きそうになるという目に合わされた。いずれにしても、高所ボケでフィルムのためかえさえ満足にできなくなるため、カラー・ポジも含めて、シャッター速度も絞りも全部地上でセットして、テープで固定してしまった。手ぶれを防ぐためシャッターは最高速をえらんだ。もちろん被写体によって明るさが異なるにしても、現場で誤った判断をするぐらいならば、フィルムのラチチュードに頼ることの方がまだ救われる可能性が大きい筈である。

その次の大敵はマイナス四〇度以下という低温である。グリースその他に注意しても、結局こんども三五ミリカメラで撮ったフィルムのかなりのものが使いものにならなかつたし、ブレやフィルム交換のミスなどをふくめると、持ち帰ったフィルムの三分の一は使いものにならなかつた。機内とはいっても換縦席のわきにあるヒーターは、後席まで暖めてくれるわけではない。カメラマンのシートあたりは、少くともマイナス二〇〜三〇度以下に下がっていたようである。途中で面倒になると、カメラを素手で扱っていたため、覚悟はしていたが、手の指はどうにか助かったものの、登山靴をはいていた足の指が凍傷にやられて、帰国するまで赤くはれ上ってしまったのは予想外のできこ

とであった。

それでもヨーロッパ・アルプスのような五〇〇〇メートルの空撮に比べて、大いに助かったこともないではない。烈しい乱気流の中でもみくちやにされて、酸素マスクをつけたまま嘔吐して、ボンベに通じるチューブにつまったまま凍結したりすれば、命にかかわる事故をおこすことになりかねない。しかし、心配はしていたものの、酸素不足で頭が麻痺すると、酔うことさえなくなってしまうようである。

いずれにしても、すぐれたパイロットの協力なしに航空写真を撮ることは不可能である。普通のパイロットならば、絶対に避けることになっている気象条件の悪い山岳地帯に飛びこんで、カメラマンの注文通りに超低空から山々に接近するというような芸当のできるベテランのパイロットは、めったにいる筈はない。その上、ほんとうに山が好きでなければとてもつとまる仕事ではない。ところが、世界中の主な地域には、それぞれ有名な山岳パイロットが遭難救助や空撮などに活躍している。今回のヒマラヤでも、モロー氏(フランス)、フェラー氏(スイス)がそのような役目を引きうけてくれた。

また写真ができ上がったあの地型やピークの同定もずいぶん厄介な仕事である。もちろん有名なピークはすぐわかることが多いにしても、以前にはエベレストやマナスルさえ見誤ったことがあるという話が伝えられている。そして撮影した本人にも

よくわからない数多くのピークについて、諏訪多栄蔵、五百沢智也、葉師義美の三氏のようなベテランが、詳しく検討して下さったことは、望外の幸であった。こうして得られた沢山のショットの中には、エベレスト南壁のアップをはじめ、今迄に撮られたことのない作品も少なくなかったとのことで、既に、ルートの解析のためにいくつもの登山隊から問い合わせがきている。それについても、このような資料を整理・保存して、多くの人々の研究や山行計画のために利用できるようにする情報センターを、日本にも早く設置する必要性の大きいことを感じている。

世界中のほとんどの山が撮りつくされてしまった現在でも、地表からの眺めとは全く異ったアングルから、氷雪の山々のより美しいプロフィールをとらえることのできる山岳航空写真には、まだまだ大きな可能性が残されている。そして、ネパール・ヒマラヤについても、今度まとめられた「ヒマラヤを飛ぶ」が最初の系統的な写真集であると思われる。

その上、はじめにもふれたように、私にとってこの仕事は、人間と自然、芸術と技術との関係について新しい目をひらく契機ともなってきた。最近のような反技術主義的な風潮の高まりにもかかわらず、航空技術と写真技術の極めて高度の進歩なしに、われわれがこのような自然の姿をとらえることは決して可能ではなかった筈である。その上、アルピニストとしての肉體

と精神の修練なしにはこのような苛酷な条件の中で、山々の新鮮な美しさをこのような形で把えることは、むつかしかったにちがいない。

しかしながら、成層圏に近い高空の、極度の低温で、酸素の稀薄な空間は、本来人間がそこにとどまって、生きつづけることの許されていない場所である。その上、秒速五〇メートルで飛びつづける飛行機からとらえた山々の姿は、幻のように一刻一刻と変化しつづける。あえてこのような禁断の世界に陶醉しようとするものたちは、絶え間のない危険にさらされて、大きな代償を払うことを強いられている。

未踏の登攀ルートの開拓と同様に、山岳航空写真の撮影も、人間の精神と肉体的な能力のすべてを極限まで発揮させるこのうえない人間的な仕事であり、それは生命の躍動と充足感を感じさせてくれる、創造的な営みである。しかし、ギリシヤ神話のイカルスのように、自らに許された限度をこえてどこまでも高く飛翔しようとする瞬間に、再び地の底まで引きもどそうとする陥穽が待ちうけているかもしれないのである。

私の限られた経験の中でも、あとになってよく生きて帰れたものだと首をすくめる出来事がいくつか思い出される。また飛ぶ直前から、飛行後の暫くの間までに、わかっているだけでも七機が墜ち、スイス一の名パイロットとしてうたわれたヘルマン・ガイガーさんをはじめ、三人のパイロットをふくめて、九

人の乗員が機と運命をともにした。そして私をヒマラヤに飛ばせてくれたピラタス・ターボ・ポーターの一機も、今年の春、ヒラリー卿の家族の方々をのせて、カトマンズ郊外でクラッシュしてしまった。これらの犠牲者たちに心から冥福を祈りたい。

(一九七五年九月)

テラム・カンリ初登頂（一九七五年）

山下 潔

一九〇九年、英国の著名な探検家であったロングスタッフ博士は、シオーク川下流のカパーから出発して、ピラフオンド・ラを越え、シアチェン氷河に出た時に未知の高峰群を発見し、その土地の地名にちなんでテラム・カンリ峰（七四六メートル）と命名した。

その峰に静岡大学山岳会は、一九七五年夏、山岳部創立五〇周年を記念して、遠征隊を派遣し、東部カラコルムの秘峰といわれたそのI峰とII峰の初登頂に成功した。

時に、ロングスタッフが当峰を発見してから六十六年目のことである。

カラコルムの東端、アジア大陸最長の距離を誇るシアチェン氷河（全長七五キロ）とテラム・シエール氷河との合流点にどっしりと構えた山容は、雄大である。

この山群への登山を企てた人々は数知れないものと思われるが、政治的理由からであろう、これまで試登すらされていなかった。

初登頂成功が新聞に報ぜられた時、会のルームで望月達夫氏から「ロングスタッフが生きていれば、電報を打つてやれば喜んでくれたであろう。彼はテラム・カンリの発見とシアチェン氷河の探検という見事な業績によって、英

国王立地学協会からゴールド・メダルを受けたのだから」とおほめの言葉をいたされた。ここで、簡単にこれまでの探検史（シアチェン氷河を含む）をふりかえってみよう。

探 検 小 史

シアチェン氷河はヌブラ川の源流に当り、ヌブラ川の上部を最初に探検したのは一八二一年レー在住の獣医で東インド会社の監督官をしていたモーアクロフトであった。

彼はラダークの大部分を探検し、その地図にカラコルム峠やサルトロ峠の位置を記入した。一八四八年、インド政府からレーの弁務官に任命されたストレイチーは、休暇を利用してヌブラ川を遡ってシアチェン氷河に達したが、二マイルほど遡っただけで終った。

この時、同行した外科医のトムスン博士はサセール峠を最初のヨーロッパ人として越え、カラコルム峠に達した。一八六〇年〜一八六五年にかけて、インド測量局はモントゴメリー工兵大尉をして、カラコルム地域での大規模な三角測量を実施させたが、テラム・カンリはいずれの方角からも測量されなかった。

しかし、インド測量局のシドニー・バラード卿は既に「この地域に重要な未知の山が存在する」と指摘していた。当地域の古い測量は一八六二年に、ライオールが遠距離から観測して略図を作成していたが、シアチェン氷河は一ニマイルに満たないので、シアチェン氷河の奥は空白になっていた。ついで登場するのが前記のロングスタッフ博士である。彼は、テラム・カンリを発見した時、概算高度を約二五〇〇〇フィート（約七六二〇メートル）と測定した。しかし、彼は正確を期するために短い基線を計り、その両端からコンパスと測斜計で観測した。その結果は何と、三〇〇〇〇フィートになんなんとする、まさにエベレストをしのぐ高度になったのである。

その後、彼は仲間と共にシアチェン氷河を探検し、その氷河の全長が七五キロに及んでいることを発見した。

この見事な遠征によって、旧地図の地形は全く改められ、後進に残された仕事は、彼の発見した跡を追い、彼が四ヶ月間という短い期間に作り上げたものに手を加えることだけになった。

そこで、一九一一年、インド測量局はテラム・カンリの位置と高度を決定するために、コリンズとマキンズの二人を派遣した。

コリンズは悪天候にもかかわらず、大変な苦勞を重ねて、五八〇〇メートル以上の山を一六も登り、ついにテラム・カンリの高度と位置を測定した。主峰は二四四八九フィートで、ロングスタッフ博士の概算高度はほぼ当たっていた。続いて、一九一一年と一二年にかけて、ワークマン夫妻がシアチェン氷河に入り、その全域を探検した。この時、インド測量局から参加したピーターキンによって、先年のコリンズの測量を含むインド測量局の測量基点からの三角測量で、シャクスガム川の分水嶺にある主要な峰々は全てその高度と位置が測定され、このあたりの地形がほぼ解明された。これも見事な業績として高く評価されている。

その後、シアチェン氷河及び周辺踏査に出掛けた隊は、

一九一三〜一四年　デ・フィリップ隊

一九二六年　メイスン隊

一九二九年　フィッサー夫妻隊、スポレット公隊

一九三〇年　ダイネリ隊

一九三五年　フィッサー夫妻隊

一九三七年　シプトン隊

一九五七年　インペリアル大学隊

など、いずれも、地域測量、地形地質学調査、植物学調査などの學術踏査隊で、登山を目的とした隊ではなかった。

はじめに

私とカラコルムの出合いは、山岳部の新人として山登りを始めたばかりの一九五八年に遡る。秋の大学祭にチョゴリザから帰られたばかりの加藤泰安氏をお招きして講演会が開かれた。スカルドウの飛行場はただの原っぱだと云う事と、羊の皮袋をつなぎ合せたザーク(筏)で渡河する話以外は覚えていないのだが、一九六〇年に酒戸弥二郎教授が隊長としてノシヤツクの初登頂に成功するに及んで、私の眼が海外へと向けられるきっかけとなり、ヘルマン・ブールの『八千メートルの上と下』などを部員の間で廻し読みをするようになった。

この様な背景のもとに我々の海外登山研究は、常にカラコルムに焦点をしばって進められて来ておりながらも、好機をつかめずに、過去二回パキスタン政府からの許可取得に失敗していた。それで、今回こそは何としても許可取得にこぎつきたいと祈る様な毎日であったが、突然、降って湧いた様な「カラコルム大地震」の新聞報道に気をもんだものであった。しかし、八方手を尽して集めた情報を検討した結果、どの山が許可されるかは不明であるが、許可は必ず出ると確信する事ができた。

山の選定は、来るべき八千メートル峰のバリエーション・ルートからの登頂を目指して高所登攀の経験を積み重ねるために、現在残されている処女峰中の最高峰であるガツシャブルムⅢ峰(七九五メートル)以下高度順にバツラ工峰、スキヤン・カンリ峰、テラム・カンリ工峰と第四希望まで申請した。

とにかく行きたい気持のよって来たる所以は、一つには十年以上も追いつづけた目標のカラコルム地域へ入山したいという執念と、今一つは私自身が三十七歳という年齢のハンディキャップを感じ始めていたからでもある。国内の山行で、いつも体力の弱さを思い知らされて来たが、今ならまだ他の隊員とほぼ同等の動きができるであろうし、ま

たそうありたいと願っていたからである。

各自、色々な障害を乗り越えてテラム・カンリ目指して結集したメンバーの平均年齢は三十五歳とかなり高齢であった。

- | | | |
|--------|----------------------------------|----------------|
| 隊長 | 長片山 一 (五十歳) | 静岡大学教授 |
| 副隊長 | 太田 欽也 (四十歳) | 静岡市立水見色小学校教諭 |
| マネージャー | 山下 潔 (三十七歳) | 科研化学(株)勤務 |
| 隊員 | 大石 惇 (三十七歳) | 静岡大学助手 |
| | 加藤 仁 (三十五歳) | ミナミ食品(株)取締役 |
| | 横井 孝恵 (三十一歳) | 静岡市役所勤務 |
| | 望月 正一 (三十歳) | 東洋インキ製造(株)勤務 |
| | 小林 靖宣 (二十九歳) | サウンドマスター(株)勤務 |
| | 小高 和夫 (二十九歳) | 山水電気(株)勤務 |
| | 大庭 俊司 (二十七歳) | 静岡県立磐田農業高等学校教諭 |
| | 浜地 克郎 (二十六歳) | 静岡市立高等学校教諭 |
| 医師 | 小久江 浅二 (四十七歳) | 大宮日赤病院内科部長 |
| 連絡将校 | シャウ・カット・ハムダニ大尉 (二十二歳) | |
| 高所人夫 | アブドール、アリフ、マハディ、ヘダール (四名ともにゴマ村在住) | |
- 太田、大石、小久江以外は海外遠征に初参加であった。

出発まで

パキスタン政府の登山隊受入れ窓口が国防省から観光省に移ったことは、即登山隊歓迎の姿勢への転換と見て、我々は年が明けると許可入手前から重い物・安価な物を先ず船便で送るための準備を開始した。一方「三月初めに船荷を発送する。許可は如何」とアワン氏へ電報を打ち続けた。かくして二月二十四日「テラム・カンリ内定」の電報が来たので、神戸から日本郵船の昌宝丸で予定通り荷物を送り出した。

ガッシャブルムⅢ峰の許可が得られなかったことに対して失望の色をあらわにする隊員もいたが、私はともかくにも予定時期の許可取得と高さこそ低いが今までに誰も入山した事のない全くの処女峰テラム・カンリを高く評価した。ところが喜びはつかの間で、その後送られて来た許可書とそれに付属した新しい登山規則を見た時には目の前が真暗になる思いであった。石油ショック後の不景気と物価高に直面して隊の台所は火の車であったところに、二千ドルの登山料（後に半額に軽減された）と人夫賃が一日当り三〇〜四〇ルピー（一ルピーは約三〇円）食費一〇ルピー（または現物支給）を公定価格として示しており、これは前年実績の二〜三倍で、我々に大きな負担増を強いるものであった。

フライト待ち二週間

連日四〇度近いカラカラ天気のパラパリンディで我々を待ち受けていたのは下痢であった。薬はほとんど効果が無い。しかし、この暑さの中ではどうしても冷たい飲物に手が伸びる。体力は日増しに衰えて行くので一日も早く、このピンディを抜け出したいのだが、スカルドウへの飛行機は来る日も来る日も飛ばない。今年は五十余の登山隊が入山するが、陸路使用禁止なので頼みはパキスタン航空だけと云うことで順番待ちである。

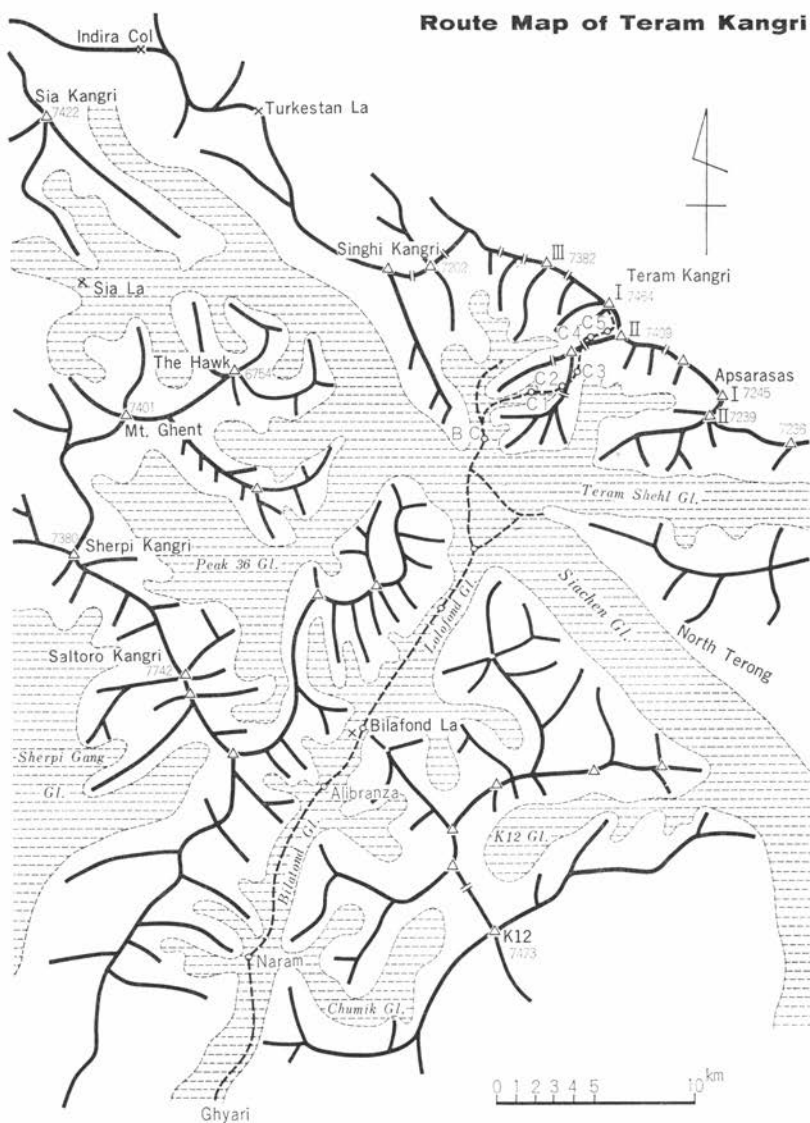
その上、運の悪いことに我々の隊の連絡將校に予定されていた大尉が病気になるたとかで、他の將校と交代したため、又一週間待たされて若いハムダニ大尉（二十二歳）がやってきた。彼は精力的に動き廻って色々な役所への手続や食糧の買付を手伝ってくれた。私は人夫賃のことが最も気掛りだったので、連絡將校と共に觀光省を訪問した際に「登山条件に明示してある三〇と四〇ルピーの人夫賃は高いと思うのでもっと安くできないか？」とチーフのアワン氏に質問したところ「これは最高額であるから、登山隊と人夫との間で話合って決めてほしい。安い賃金で折り合えばそれで結構である」との返事を得る事が出来、ハムダニ大尉も「この人夫賃は高すぎる、安い賃金で人夫を雇う様に努力しよう」と登山隊に協力的な態度を示してくれた。

二十七日、ピンデイからスカルドウへわずか一時間の飛行であったが、四発の軍用輸送機の小さな窓からチラリと見えたナンガ・バルバットの姿は印象的。洪水で陸路が断たれているためスカルドウは物資不足で石油と小麦粉は高い買物をしなければならなかった。

人夫賃は一日九〇〇円（三〇ルピー）

スカルドウのレストハウスで二泊の後、ジープ九台を連ねて砂煙を巻きあげる砂漠あり、ごつごつした岩山あり、インダス川沿いの断崖絶壁があるかと思えば、緑に囲まれたオアシスの村ありと言った変化に富んだ半日のドライブでカパルーに到着した時、もう多数の人夫志願者がレストハウスのまわりにたむろしていた。地元の警察官や高等学校のタイピストなど英語の喋れるインテリ連中が、入れかわり、立ちかわりやってきては何かと忠告してくれるのは有難いが、帰り際にはきまって、写真をとってくれとか、日本のタバコをくれとか、乾電池はないかと無心する。とにかく明日の人夫賃が決るまでは一人でも我々の味方が良かろうと思ひ、彼等のごきげんをとり持つておこ
う！

Route Map of Teram Kangri



翌早朝から荷物の重量調整と人夫の選定にとりかかり、賃金は先行した日本隊と同額の一日三〇ルピーですんなり落着いたので一二七名とコック一名を雇った。キャラバンは五月三十一日にカパーを出発して、スルモ、ウオルセ、パロワ、パリットと泊りを重ねてゴマ着、賃金を払って人夫を一旦解雇する。大石と小林が人夫四人をつれて氷河上のルート偵察のため先発する。

人夫のストライキ

キャラバン再開二日目、ビラフオンド氷河末端のモレーンを登ったところで人夫が集って何やら議論を始めた。大きな石の上にカパーからの人夫頭ホルム・アリー、他の石の上にガグルー村の人夫ルスタンが立って交代で演説し、他の人夫等が下にすわっている。

チュミックまで来ると荷物をほおり出して「今日はここまで。雪が例年より多いので一〇ルピーの賃上げをしてくれ」と云う。ゴマ村でキャラバンを再編成した際に人夫の半分以上がゴマ近辺の住民に交代したため、人夫頭の統卒が行きとどかなくなったものと思われる。私は悪名高きバルテイ人夫のストライキを覚悟はしていたものの大幅要求には驚いた。「ゴマからアリプランサまで一〇〇ルピーと契約しておきながら怪しからん!!」と連絡将校が説得に努めてくれたが効なく、要求をのむこととしたが、今後は駄目だと釘をささせる。しかし彼の演説中に突然一人の人夫が大声でヤジを入れたため、大もめにもめた末その人夫を解雇する。

翌日は上天気、白銀の中に青い氷河湖が点在してすばらしい眺めだ。人夫の足どりも快調で、昼前にナラムに着いたので気を良くしていたら、次々に着いた人夫が集まってガヤガヤと云いはじめた。何とまたも一〇ルピーの賃上げ要求とは何事か、ムカツときたが、一応太田に取りつく。返事は勿論「駄目」。人夫とわたりあっていた大尉がやって来て「賃金を払ってやってくれ」と云うのでサンダラスおよび軍手と引き替えに九〇ルピーを払う。サンダラスに

は未練たっぷりの様子なので、おとなしいカバルーから来た人夫達に「明日、もう一日働いてくれ」とさそいをかけるが、雪に弱い彼等には無理な相談の様だ。ゴマの人夫ならば雪には慣れっ子のはずなので賃上げの口実に違いない。雪を知らない熱帯育ちの大尉にはそのことがみ込めない様で「靴を与えないと人夫達はこれ以上進めない」と云う。不本意ながらキャラバンはここまでとし、これから先は二〇名の特選人夫隊と二名の高所人夫でやることにし、大喰いのコック、フセインを解雇する。

ピストン輸送に一ヶ月

六月十三日にアリブランサ・キャンプをビラフォンド氷河の四八〇〇メートル地点に設営。ここは京大サルトロ・カンリ隊のBCと同じ場所で狍犬の様な岩の尖塔を真横に仰ぎ見る位置にある。十六日には五五〇〇メートルのビラフォンド峠にキャンプが建設できたので特選人夫隊を二隊に分けて、ナラムとアリブランサに配置して峠までのピストンにあてる。隊員はルート工作、キャンプの設営維持そして荷上げの指揮をし、高所順応のため行動を自主管理とした。それで調子の良い者が前に出てルートを伸し、体調の悪い者は気兼ねせずに後方のキャンプで休養を取れる様にした。と云うのは、キャラバン中にゴマでの休養を一日短縮して先発した大石、小林がナラムでかなりの顔面浮腫をおこし体力の回復に手間どったため、以後全隊員に「先きが長いのだからあせるな」とくり返し注意した。その効があつてか、BC以上での調子は上々であつた。ただし、人夫達からは「サーブは弱い」とナメられたのは輸送を指揮する場面でややマイナスであつたと思われる。

ビラフォンド峠からはテラム・カンリ連峰やアプサラサス連峰が真正面に見え、テラム・シエール氷河は一部分見えているが、シアチェン氷河は見えない。峠から一時間広い雪原をダラダラと下ると、K12の方角に源を發したロロフォンド氷河に合流する。ここではじめてテラム・シエール氷河のゆるやかな流れが全貌をあらわすが、シアチェン

氷河の様子はまだわからない。ロロ・キャンプは更に下って氷河湖のほとりにできた。

二十六日、はじめてシアチェン氷河を横断してBC予定地を決定。シアチェン氷河は幾条ものアフタスーン・フラッドのため午後は横断が困難になるので、ロロ・キャンプからBCまで一気に荷上げするのは無理と判断されたので、シアチェン氷河との出会いにシアチェン・キャンプを建設してロロ・キャンプを撤収した。

五五〇〇メートルの峠を越えると隊員は全く頭痛を感じなくなったのに、人夫達は頭痛や雪盲等の理由で休む者が続出し、ゴマへ帰りたいと云う者も出て来るありさまで、輸送の能率も中だるみとなってきた。三々四日晴天が続いた後は二々三日天气が崩れて、五〇センチ以上も新雪が積るので人夫に休みを与えなければならぬ。悪天休業は計算に入っていなかったたので、人夫への支給食糧は大幅に不足する結果となり、ゴマからの食糧補給と、減った人夫の補充をする。

BC建設成る

京大サルトロ・カンリ隊の報告によると「ロロフォンド氷河はクレバスの連続」とあったが、今年は雪の多いのが幸いしてクレバスはまだ口を開けていない。そこでジュラ梯子にスキーをつけた即製ソリで、峠を雪のしまっている早朝に出発すれば、三人の隊員で三〇〇Kgもの荷物をシアチェン・キャンプまで引き下す事が可能だ。

七月十日、待望のBC（五一五〇メートル）が予定よりも二週間遅れて完成した。アブドール、アリの他にマハデイとヘダールの二人を高所人夫として追加して、日程の遅れを挽回するため全力をあげる事とした。

日本を出発する際の想定ルートは、

- ① I 峰へ突き上げるプラトールを登る最短コース
- ② II 峰の南稜を経由するコース

③ テラム・シェール氷河側からⅡ峰に登りⅠ峰に至るコース

の三つであったが、神戸大学からいただいた写真は、シェルピ・カンリ峰の六〇〇〇メートルあたりから撮ったテラム・カンリの上部写真であったため、下部の取付き点をどこに選ぶかが最大の課題であった。

シアチェン氷河とテラム・シェール氷河との合流点のアイスピル群通過が労力的に不利と判断して、BCを予定より上流に設置したので③は除外して①か②かの選択となった。①はテラム・カンリⅠ峰の懐へ深く入り込んでいる氷河(テラム氷河と命名)に雪崩の危険が感じられたため安全なルートとは云えず(後に大きな雪崩発生を目撃した)、遠廻りではあるが②を採用と決定した。しかしⅡ峰南稜は下部が切り立っている、シアチェン氷河からの取付点でのルート工作に全精力を注ぎ込む事とした。ここさえ切り抜ければ上部はなだらかな尾根なので、登頂の可能性は高いと見た。

十九日にCⅠ(五六五〇メートル)を建設後、雪壁へのルート工作に専念したが、一旦、工作の完了したルートが多量の降雪のため、これを放棄して再度固定綱を張り直したりしたため、CⅡ(六二〇〇メートル)の建設は二十五日、CⅢ(六四五〇メートル)の建設は八月二日であった。ルート工作は遅々として進まない困難な場所であったが、連絡将校の助力を得て四人の高所人夫を効率良く動かす事ができたため、荷上げは順調であった。

CⅡは氷の斜面を一日がかりで削って一張りのテントを設営するのが精一杯で、まるでヘリコプターにでも乗っている様に落付かない場所であったのに比べ、CⅢは広々とした稜線上で、テラム・カンリⅠ峰、Ⅱ峰、アプサラサス、ノーステロング、マモストーン・カンリ、K12、サルトロ・カンリ、シェルピ・カンリ、ゲント、ホークに手が届きそうだし、チョゴリザ、バルトロ・カンリ、ガツシャブルム等も遠望できる見晴らしの良い所であった。CⅡには隊員一名が常駐してCⅠから上って来た荷物を、CⅢから下りて来た高所人夫に中継して、その日のうちにCⅢに上げてしまいう様に配慮した。

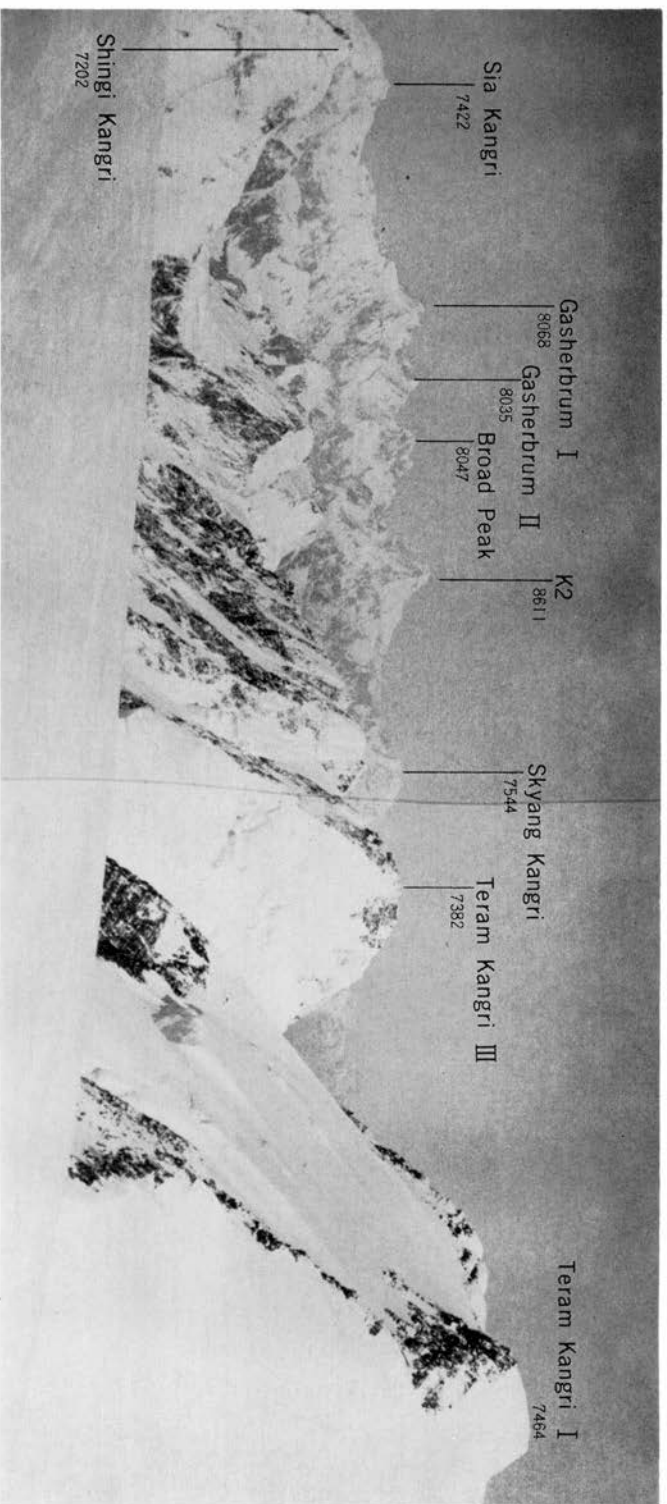
八月四日、市川山岳会のK12登頂の様子をトランシーバーで傍受して「我々もあと一息だ!!」と一同ファイトをかき立てられた。CⅢからは六七〇〇メートルの顕著な三角形のピークをトラバースして、テラム・カンリⅡ峰南稜との鞍部に至り、ここに仮CⅣ(六二五〇メートル)を建設し、翌日六七五〇メートル地点にCⅣを移動する。九日にCⅤを七〇五〇メートルに設営して小林、小高が入った。CⅣには太田、横井、浜地、CⅢには大石、加藤、大庭、私(山下)の配置で万全の頂上攻撃態勢に入った。

I 峰初登頂

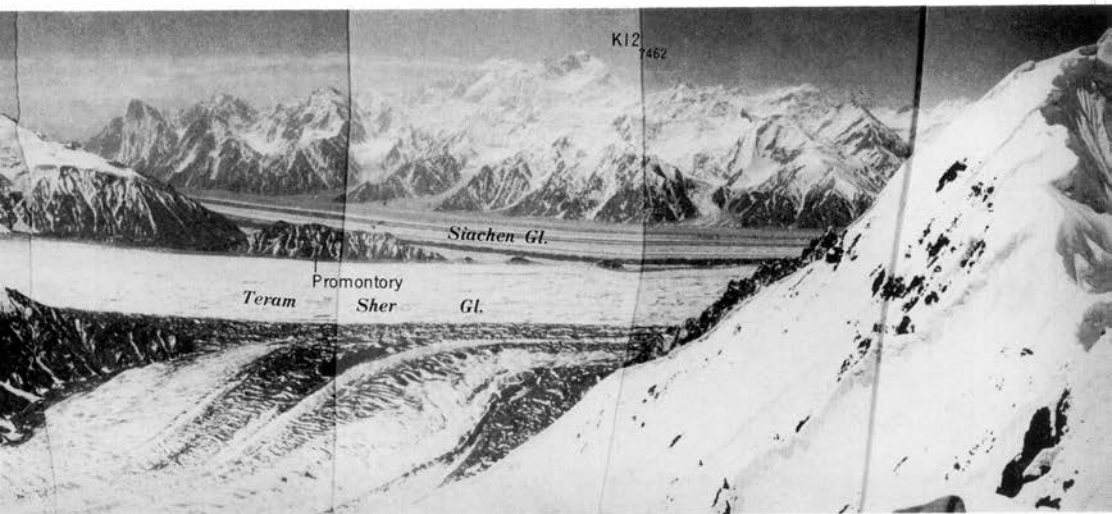
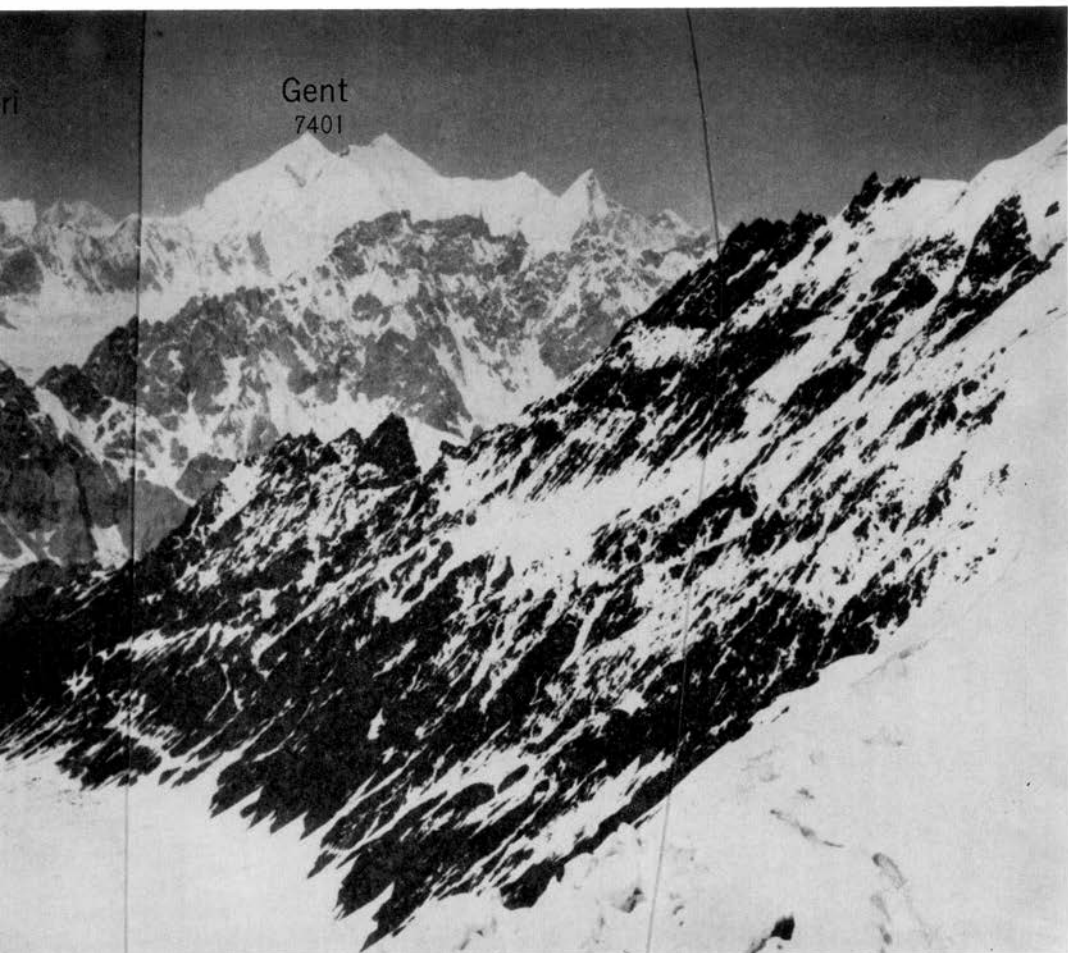
八月八日、五人がCⅣに集結した。眼前にはI峰、Ⅱ峰が迫まる。Ⅱ峰の肩よりシアチェン氷河に向けて尾根はのび、その両側は千メートルも切れ落ちている。

九日、アタック隊の小林、私(小高)とサポート隊の太田、横井、浜地でCⅤ建設へ向う。足首までもぐる雪質で雪庇は右手アプサラサス側に出ている。尾根の傾斜は平均三〇度位。天候は全く安定して来ており、全員快調だ。突如「確保」という声で我に帰った。トップを行く浜地の姿がない。ピンと張ったザイルから、彼がクレバスに落ちたとわかった。七千メートル近くの尾根上にも、まだ出てくるとは全くしつこい。午後になると極端にペースが遅くなった。しかしACは出来るだけ上部へと気持ばかりが先立つ。斜面が多少緩やかになった所にAC(七〇五〇メートル)を建設して、サポート隊はCⅣへと下って行った。

アタックがいよいよ明日であることに私は興奮をおぼえる。小林は時々起きて時計を見ている様であるが、それほどほとんど一時間おきである。私もさかんに寝返りを打った。「おい、起床」と小林に起された。八月十日午前二時であった。二人共に食欲は無く、昨夜多目に作った雑煮を温めて、無理に流し込んだ。三時三〇分にテントを後にした。天気は上々を思わせた。ヘッドランプで足許を丁寧に見ながらコンティニュアスで稜線を進むうち、いよいよ最



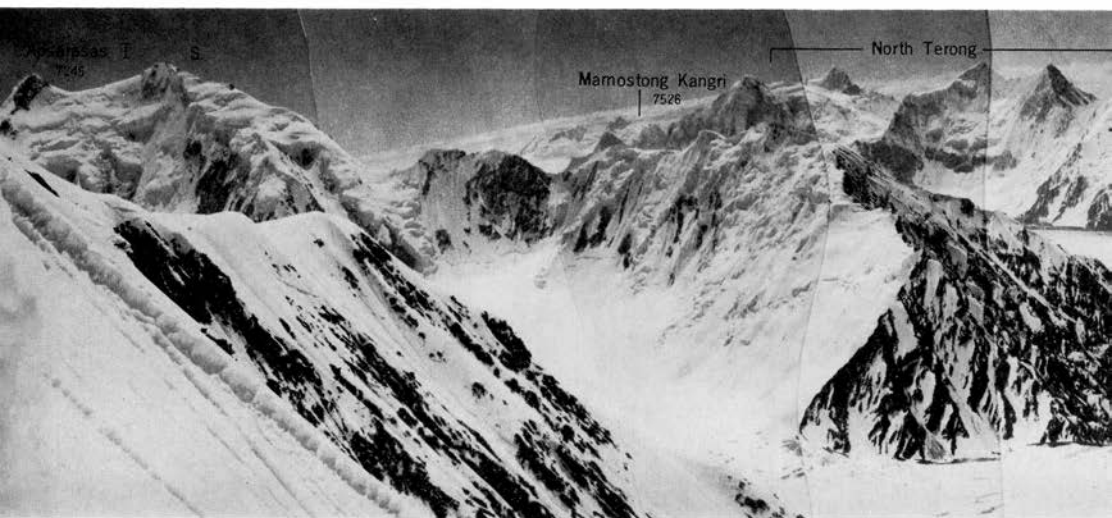
テラム・カンリⅡ峰頂上(7409m)より北望
Looking North from the Top of Teram Kangri II(7409m)

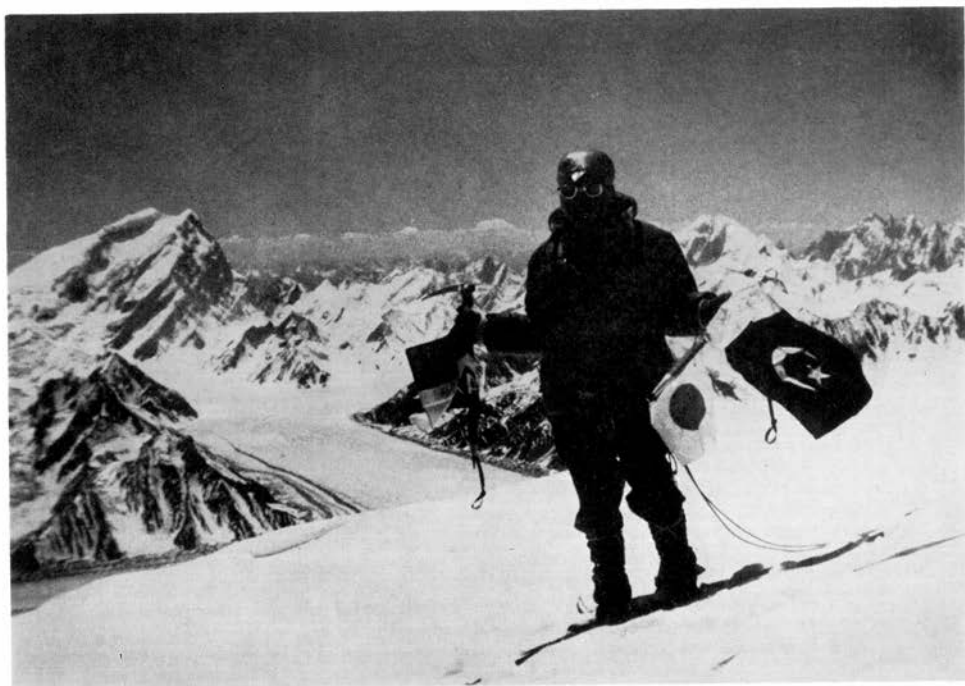


C IIから東南の山々を望む Panoramic South-East View seen from C II(6200m)



C IIより西方の山々を望む Panoramic West View seen from C II(6200m)





テラム・カンリ I 峰 (7464m) の頂上に立つ小高隊員 (後
方左よりサルトロ・カンリ, シェルピ・カンリ, ゲント)
Mr. Odaka on the Summit of Teram Kangri I (7464m)

後の難関と思われる雪壁の下に出た時、ようやく空が明るみ始めた。取りつきから直登する事は無理と考えていたので、昨日目安をつけていた様にⅡ峰直下まで右手にトラバースをして、そこから一気に肩まで登るルートを探った。傾斜は四〇度以上と思われた。

三重の高所靴を履き、羽毛服の上下を着込んでいても寒気が足首から這い上って来るが、風が無いため、雪のしまりが悪くアイゼンの利き方が心もとない。ステップを確実に切り、ピッケルとアイスハンマーを両手に持って、交互に使いながら快調に進んだ。

トラバース地点からは安全を期して隔時登攀で、確保にはピッケルとスノーバーを併用した。やがて岩が露出して来た。もう少しだ!! 小林がトップに立って四〇メートルのザイルを一杯に使えば終わると中国側の丸くおだやかな峰が眼前にせまる稜線に出た。

時刻は九時。シアチェン氷河から吹き上げて来る風は強く、冷たい。足は依然として冷え切っているが、国境稜線を一気に下ると広い雪田があり、そこからの頂きは手のとどきそうに近く見えた。紅茶以外に食欲は無く、すぐ登りについたが、次第に立ち止まる回数が増えていった。

やがて斜面は緩くなり、まわりに高い所は見当らなくなった。十二時〇三分を時計は指していた。雲一つない空、視界は素晴らしい。

十三時、感激のさめやらぬ中に、頂上を後にして、三〇分で最低鞍部に下りつき、Ⅱ峰の肩に向っての上りにかかった。何でもない斜面であるが、ものすごく息が切れ、休むと猛烈な睡魔がおそってくる。

信じられないほどの時間が過ぎ去って、肩まで登り返して来た時には、夕日が最後の明るさを残すばかりとなっていた。急斜面の下りは朝通ったルートとは云うものの緊張の連続であった。C.Vのテントに帰着したのは十九時過ぎになり、帰着の交信のみで食事摂らずにそのまま寝込んでしまった。

十一日、まわりが明るくなって目が覚めた。疲れは残っているが、この足で頂上を踏んで来たのだという満足感に充たされて来た。はてしなく遠い道のりを一步一步進んで得た感激と充実感。テントから出ると、昨日私の足の下にあったテラム・カンリI峰が今日は太陽を反射して眼の上、はるかな所に白く、静かに光っていた。(小高和夫)

続いてII峰にも初登頂

晴れる日と雪の降る日が交互に規則正しく繰り返していた気が、八月に入ってからには晴天が続き、荒天も午後半日位ですぐ回復する様になって来た。I峰初登頂後もなお数日の晴天が確信される状態であった。また隊員の志気も体調も上々で食糧も十分な量が確保されているので躊躇せずに第二、第三の頂上攻撃を決定した。特に我々のために常に協力を惜しまなかった連絡将校のハムダニ大尉とも登頂の喜びを共にしたいと考えたので、ルート工作とCVの補強に一日を費した。

十一日、私は大石、加藤、大庭をCⅢから送り出し、昼すぎにCVから下りて来た小林と小高を迎え入れた。

「御苦労さん、御苦労さん、良く頑張ったなあ、ありがとう!!」

高所人夫のアブドール、アリフ、マハデイ、ヘダールの四人もテントからとび出して来て、パキスタン式に互いに抱き合って喜び合っている。

二人共顔が少しむくんでいる様だが食欲があるので(昨日の朝からほとんど固形物を食べてないと云う)、軟かいものと濃いミルクティーに砂糖をたっぷり入れて飲ませ、水分の補給をする。小高は尿量および尿所見とも正常であったが、小林は十二日の尿量がやや少なく、且つ潜血と糖の弱い反応があったが十三日には正常に復した。

十二日、太田、大石、加藤、浜地はCVから上部の雪壁に二〇〇メートルのロープを固定して、十時半に中・パ国境稜線に到達し、そこから右手にテラム・カンリII峰の頂上まで緩やかな登り下りをくり返した後、十一時十七分に

Ⅱ峰の初登頂を手中に納めた。翌十三日はハムダニ大尉、横井、大庭がⅠ峰の第二登を目指して出発したが、一時間後に大尉は足の感覚麻痺を訴えて一人で引き返して来たため、横井、大庭はⅡ峰の第二登を果したのみでC Vに帰幕した。我々がパキスタン観光省からサイズの連絡を受けて準備して来た高所靴は、連絡将校が交代したために、ハムダニ大尉の足に合わず、彼には不幸な結果となってしまつて気の毒だ。

B C撤収、そしてロストオアシスへ

撤収は早い。十七日にはB Cへの集結を完了したので、十八日はゆっくり休養の予定であつたのが、午後になると多勢の人間がシアチェン氷河を渡つてこちらへやつて来る。アブドールに呼びに行かせた人夫の到着は四日先のはずなのに早すぎる。休日気分のB Cがたちまち戦場の様な忙しさと早変わりして、持ち帰る品物とすてて行く品物に選別して、明朝B C撤収と予定変更である。二三日の小旅行を計画していた我々にとつて、まわりでウロウロする人夫が目ざわりで、予定より早く来たのをほめてもらおうと得意顔のアブドールが憎らしい。

結局、大石、横井、大庭そして私の四人がテラム・シエール氷河とシアチェン氷河の間につき出ているプロモントリ(岬)にある「ロストオアシス」——シプトンの言葉を借りれば「鳥うたい、花咲き乱れる氷河の中にとり残された楽園」——へ寄り道をしていく事になり、他の隊員と人夫は一路ゴマへ引き返す事とした。

十九日、本隊と別れて氷が露出して滑走路の様になつたシアチェン氷河の中央を東の方へと下つて行つた。去る八月一日から五日間、加藤と共に植物と昆虫の調査をして勝手を良く知っている大庭が先導をつとめたが、オアシス着は日もとつぷりと暮れた二〇時であつた。久しぶりの土のやわらかい感触とヨモギの強い香りがなつかしい。

シアチェン氷河探検家のメッカ

ここは一九一二年のワークマン夫妻（米）、一九三二年のダイネリ教授（伊）、そして一九五七年のシプトンの率いるインペリアル・カレッジ隊（英）のキャンプ地となった由緒深い場所で、我々が四番手であるが日本人としては最初の訪問者である。一九六二年の京都大学学士山岳会の加藤泰安氏がサルトロ・カンリ初登頂を果しての帰途、「行ってみたくてたまらぬが、連絡将校が頑として許さず、あきらめるより仕方がない」と記している場所である。

テラム・シエール氷河から流れ落ちてくる雪解け水がたまって出来た湖（去る八月三日に氷が解けてシアチェン氷河へ水が流れ出してしまったため、今は湖底が干上ってしまったが）をとり囲んで多種多様な高山植物が競い咲き、蝶、小鳥、鳴き兔に、大きな角をつけた山羊（Markhor）の群などが見受けられた。そしてワークマンの築いた高さ二メートル以上もあるケルンが丘の上であり、湖のほとりの岩にはダイネリのBCとくつきりと刻まれてあった。シプトンもこれに刺激されたのか、「記念を残したかったが、それは実行に移されずじまいとなった」と述べており、たぶん彼等は日程の遅れから、山登りの方に忙しかったものと思われる。

我々は動植物の調査のため丸一日をここでのどかにすごした後、再び雪のピラフォンド峠を越えて、二十五日にゴマ村で本隊に合流した。

おわりに

一九六二年、京都大学学士山岳会のサルトロ・カンリ隊によってシアチェン氷河側からのテラム・カンリ登頂の可能性が伝えられ、同会の手で何度かの登山申請が、パキスタン政府に続けられていた事と、一九七四年の神戸大学隊もテラム・カンリの登山申請をして許可の取得が成らなかった事から、私は中・印・パ三国の国境に近いテラム・カンリに許可が下りるとは考えていなかっただけに、はじめての許可が我々に下りたことを先ず幸運と受けとめた。その上、何ら事故もなく初登頂できたのは、さして高度な登攀技術を必要としなかったことと、高所活動をする時期が好

天に恵まれたことによる。

今、ふり返って見れば、五五〇〇メートルのピラフォンド峠を越えてシアチェン氷河上にBCを設営するまでの一ヶ月余の輸送が、最も困難であった様に感じるが、京大サルトロ・カンリ隊の資料（加藤泰安氏の筆になる報告書は私にとって常に最良の指針であった）や、一九七四年の京大K12隊の隊長として、かの地に二度目の足跡を印して帰られたばかりの岩坪五郎氏と玲子夫人の親切な助言が得られたおかげである。更に、神戸大学の平井一正氏からテラム・カンリの素晴らしい写真もいただいた。我々の側に何か特筆すべき点があったとすれば、それはフライト待ちを含めて四ヶ月余にわたる長い期間、全くと云って良いほど隊員間のトラブルが無かったことで、ただひたすらに山に登る事に全員が一丸となって集中できた協力の結果であろうかと思われる。

ところが、全く思いもかけない事で帰国後の我々を苦しめた問題として「急性肝炎」がある。隊員の健康に関して、マラリヤと高所障害対策については勉強もし、心がまえもできていたが「肝炎」については全く無知であったため、隊員二名と隊員の家族四名の合計六名に「急性肝炎」の発病をみた事を非常に残念に思う。特に健康な隊員がバキスタンから持ち帰った（と思われる）ウイルスによって、本人は発病していないのかかわらず、その家族が発病しているケースがあることを、今後バキスタンへ行かれる人は注意していただきたい。潜伏期間がおよそ一ヶ月間であるから、帰国後は再感染を防ぐための注意が必要と思われる。

（註）探検小史は全般にわたり、ケニス・メイスン著『ヒマラヤ』田辺・望月共訳を参照した。

カンジロバ・ヒマール紀行

河村 栄 二

西北ネパールを訪れる登山隊や學術調査隊にとって、大きな興味は、辺境のため、未知の山域、低いながら六〇〇〇メートル級の未踏の峰が残されているからであろう。

われわれは一九七三年秋、カンジロバ・ヒマールの登山と、ささやかではあるが、學術調査の旅をした。

われわれの記録を書く前に、カンジロバ山群探検の歴史をふり返ってみよう。

その記録もそれ程古いものではなく、せいぜい百年位前からである。

葉師義美氏⁽¹⁾の最近の調査によると、一八六五年、ナイン・シンとマニ・シンというパンディットがカトマンズを通り、トリスリ川に沿ってチベットに入ろうとしたが官憲に阻止されてカトマンズにもどった。しかしナイン・シンは再びチベットに

潜入することを試みて成功した。

当時は国境地帯の探検や調査はもちろん、国境を越えることは禁じられていたのでインド測量局はインドの現地人に測量技術を教えて、ネパールやチベットへ潜入させた。そのような目で訓練された人々をパンディットといっていた。

おなじパンディットのハリ・ラムはヒンズー教徒であったが、一八七三年にインドのピトラガールを出発して、西部ネパールに入り、ジウムラ、タラコット、ツアルカを経てカリ・ガンダキに出て、それからチベットに入った。

河口慧海師⁽²⁾は一九〇〇年、長いインド、ネパールの旅の後、トルボの峠を越えてチベット入りに成功した。

しかし、ネパール国内に於いて、本格的な地図作製の調査が行なわれたのは、時の宰相、チャンドラ・シャムシャルの依

頼で、インド測量局が一九二四、二七年にかけて、非常な悪条件を克服して実施した第一回ネパール測量で、この成果は一インチ四マイルの地図となり、多くの探検・登山家に利用された^{(2)・(3)}。

インド測量局はその後、一九六二、六三年にかけて、更に詳しい調査を行い、現在の「一インチ一マイルの地図」となり、奥地探検者の多くは、多大の恩恵を受けている。

一九五〇年、ネパールの長年に亘る鎖国が解けるや、五二年には、O・ポリューニン、L・H・J・ウィリアムズ、W・サイクス等⁽⁴⁾の英国の植物学者がカルナリ河上流を広く調査した。五三年、H・ティッヒー⁽⁵⁾・⁽⁶⁾はカトマンズからネパールを横断して、インドのピトラガールに達する長大な旅の途中、ジャグドゥラ谷に入り、いくつかの未踏の峰に登った。

登頂した山は、今まで種々物議をかもしていたが、吉永定雄氏の最近の詳しい資料解析の記述⁽⁷⁾によれば、バサン・ピーク（ギェウトウンバ 五八〇六メートル）、ミルヒベルク（五九九二メートル）、デュイタール・チュリ（ドゥッド・クンダリ 六〇四二メートル）の三峰が正しいようである。

五四年の秋に、G・トゥッチがカリ・ガンダキからバルブン谷を通り、ジュムラからスケットへ旅をした。イタリアの東洋学者である彼はマラー王朝の史跡などについて詳しい記録を残している。次いで、五六年英国の仏教学者であるD・スネルグ

ローブ^{(8)・(9)・(4)・(3)}はネパールガンジからベリ河を溯り、ジャールコット、ティブリコットを通り、ホクスンド湖を経てシエ・ゴンパ、ピジェール、ツアルカ周辺を調査し、カトマンズに達した。最近出版された、吉永定雄氏訳の『ヒマラヤ巡礼』は興味深く、有益な書である。⁽⁹⁾

五八年に、川喜田二郎氏の率いる西北ネパール学術探検隊^{(10)・(11)・(12)}はツアルカ付近を中心とした民族学的研究と、ムクト・ヒマールでの登山活動の後、カンジロバ・ヒマールへの踏査を試みたが、山への接近こそ出来なかつたけれども、広範な地域に亘り、地形の解明と学術調査を行い、その成果は、現在においても高く評価されている。

五九年にはJ・S・ハンフレイズ等は東からカンジロバ山群に入ろうとしたが、目的を達することが出来なかつた。

六一年になって初めてJ・B・タイスン^{(13)・(14)・(15)}が登場するが、彼は既に五二年に西北ネパールを訪れている。しかし、本格的にカンジロバ・ヒマールの測量と登山活動を始めたのは六一年の時からである。彼はその後、六四年、六九年と六〇年代に三回、隊を率いて、精力的に未知の山城の解明に努力を傾注した。

第一回の時はジャグドゥラ谷から主峰へ近づこうとしたが失敗し、マタトウンバ（五七六七メートル、母の山）に登った。第二回^{(16)・(17)}はポカラからカリ・ガンダキ、ツアルカ、ホクスンド

湖を経て、カグマラ峠、カグマラ・レクに至り、ここで主峰への南面からのルートを探ったが不可能であることを知り、遠く西を回り、北面から主峰を攻めようと、ムグ・カルナリのダルブーからラングー・コーラを溯行し、ブクチャン・コーラをつめて、ブルー・ラサ(六一〇メートル)に登った。しかし、主峰は南東八キロの位置にあり、今回も攻略を断念して帰途についた。主峰の登頂こそ成らなかったが、タイソンは、この二回の遠征の成果を地図にまとめて、六七年に発表した。^④

話が少しもどるが、六二年春、英国の女性隊がD・グラビナを隊長として、カンジロバに現われた。そして、ラ・シャンマ(六四一メートル)に初登頂し、他にもツイン・ピークス、カグマラ・レクの第一、二、三峰とトライアングル峰に登った。

^④・^④

六三年には東海大学隊(長沢和俊隊長)^④が、史跡、民俗調査とパトラシ・ヒマールのカンデ・ヒウンチュリの試登を行った。同年秋、同志社大隊(児島勸次隊長)^④はサイパルの初登頂後、二名の隊員は未踏の峻しいラングー・コーラの初通過に成功し、ポカラに抜けた。同じ年の秋、北海道大学隊(安藤久男隊長)^④が、チベット国境近くにあるといわれていた幻のナラカンカールへの踏査を行った。

六七年春、東海大隊(星野紀夫隊長)はシスネ・ヒマールに入り、タウリア・ヒウンチュリに登った。

この年の秋、J・A・ノールディーク隊長の率いるオランダ隊^④・^④が、ホクスンド湖の北方のホクスンド・コーラを溯行して偵察した後、湖の東方の山を試登しているが、どの辺を踏査しているのか明らかでない。われわれの隊も、この山城を調査しているので、後で、もう少し詳しく書くことにする。

一九六五年以来、ネパール国政府は外国隊の国内における登山を禁止していたが、六九年に解除して、新たに三八座を許可した。

六九年春、鳥取岩友会(船木匡隊長)がホクスンド湖にきて、リンモ村の西にある、五五四一メートル峰に登った。

この年の春、タイソンは再びカンジロバの主峰に向かった。三度目の挑戦である。

今回はラングー・コーラからルカ・コーラに入り、カンジロバ北峰の北西稜、北東稜を攻めたが失敗し、南東稜に転進、懸命の登高を試みたが、悪天に阻まれて断念した。^④

この十年近く、タイソンのカンジロバにかけた執念は、たとえ主峰の登頂は成らなくともカンジロバの探検史上に輝く業績を残した。タイソンのプロフィールも詳しく紹介されている^④・^④。やはり、この年の秋、神戸商科大学(伊藤稔隊長)^④がパトラシ・ヒマールのカンデ・ヒウンチュリに遠征したが、失敗した。

七〇年の秋、大阪市立大学隊(常慶和久隊長)^④・^④はカンジ

ロバ・ヒマールの注目の未踏峰、六八八三メートルの主峰に向
った。

前に述べたように、タイソンの三回の遠征によって、主峰周
辺山域の地形は相当に詳しく解明されていた。南及び北からの
ルートはだめ、東からの接近は距離も遠く、未知の所が多すぎ
る。(七三年秋、北里大学隊がホクスンド・コーラをつめて、ツ
オ・カルポカンとセルクドルマのコルを越えて、ジャグドゥラ
・コーラの支谷を下って偵察した所では、氷河の下降が無理であ
るばかりでなく、長大な距離とコル越えの点でも可能性は少な
い。)

そこで、西側のパトラシ・ヒマールのコルを越えてジャグド
ゥラ・コーラに入り、主峰の南面から攻略するという実に奇抜
な着想によるものであったが、それが美事に成功して、十一月
七日、ついに主峰を掌中に収めた。すばらしい初登頂であった。
この秋、富森毅氏⁸⁹・⁹⁰は単身でジャグドゥラ・コーラ付近を
歩いている。

七一年秋には大阪府山岳連盟隊(阿部和行隊長)⁹¹・⁹²・⁹³が
九月四日、ポカラを出発して、ホクスンド・コーラを溯行し、
三十日、B・Cを設営した。そして十月二十五日、ツオ・カル
ポカン(六五五六メートル)の初登頂に成功した。

この山は五八年の川喜田隊の写真に初めて捉えられた第二高
峰で、吉永定雄氏は長年に亘って、この山群と東部の地図上の

空白地帯を文献的に詳細に研究し、相当の確信をもって、第二
高峰への接近ルートを図上に画き、実際に行動をおこして、そ
の基礎調査の正しかったことを証明するとともに、未知の山域
の地形解明の成果を持ち帰ったことは、初登頂とともに、称讃
に値する壮挙であろう。

七二年秋には、東京山旅倶楽部隊(西野廣隊長)⁹⁴が、パト
ラシ・ヒマールを訪れ、十月十八日、カンデ・ヒウンチュリ
(六六二七メートル)の初登頂を行った。帰途、二名の隊員は史
上第三回目のラングー谷の完全通過に成功している。

七三年春、ホクスンド湖西岸に聳える、六六一二メートルの
未踏峰、カンジェラルワに向った日本山岳協会隊(渡辺文仁隊
長)⁹⁵・⁹⁶は、四月二十二日、その頂を踏んだ。

そして、その年の秋、われわれの北里大学隊⁹⁷・⁹⁸・⁹⁹・¹⁰⁰
は、ジユムラを出発し、カグマラ峠を越えて、プンブン谷の源
流を偵察し、初めてプンブン峠、ジャンクシヨシヨシ峠に立ったが、
ホクスンド・コーラにも、ジャグドゥラ・コーラへも下降は不
可能であったので遠くホクスンド湖を回り、ホクスンド・コー
ラを溯行し、十月三十日、未踏のセルク・ドルマ峰(六二二七
メートル)に初登頂した。

その後、二隊に分れ、ホクスンド湖を筏で渡った隊は未踏査
のサガール・コーラの上流とノルブカン周辺を探り、別にマン
ドゥワ・コーラを溯行してきた隊とバガ・ラ上で合流し、ホク

スンド湖の東部及び東南部を踏査して帰途についた。

七四年春には、山形大学隊（亀井英二隊長）がパトラシ・ヒマールのビジョラ・ヒウンチュリ（六三八メートル）を攻めて、四月二十七日、初めて頂に立った。

翌五年秋、カンジロバ・ヒマールの主峰を北面から狙った月稜会隊（滝口明隊長）は、ラングー・コーラから支流のルカ・コーラに入り、北峰の北東稜上五九〇メートル地点に第四キャンプを設営したが、十一月四日、このキャンプを出て間もなく上部に向った隊員一名が転落して、行方不明となったため、登頂を断念した。順調に登高を進めていただけに残念であつたろう。

私達の登山隊の目的は、カンジロバ山群中のハンギング・グレイシャー・ピークスを考えていたが、もし、接近不能であれば、「ネイムレス・ピーク」の登頂を、踏査は未知の地、ホクスンド湖東部及び東南部山城を、そして、診療を通しての奥地住民の医学調査と、環境汚染を知るための一つの指標である毛髪中の金属分析を行うことであつた。

カトマンズからジユムラへ

一九七三年七月三十日に、先発の菊池、武市が、つづいて、残りの河村、矢後、守山、市川が東京を発ち、十七日、カトマ

ンズに集った。例年では九月末でなければ飛ばないといわれていたが、幸いにも、モンズンの小康の合間に、ツインオッタ―三機をチャーターして、九月六日、七日の二日間に二・七トンの隊貨と、シェルパ三名、コック一名、キチンボーイ一名、リエゾン・オフィサー等を含めた一三名をジユムラへ運ぶことができた。

ブンブン・ラおよびジャンクシオン・コル

東京での計画は、ブンブン・コーラをつめてジャンクシオン・ピークとウェッジ・ピークとのコル（ジャンクシオン・コルと仮称）を越えて、ジャグドゥラ・コーラの支谷（ハンギング・バレー）に入り、ハンギング・グレイシャー・ピークス、或いはこの東北に聳える「ネイムレス・ピーク」を登ることはできないか。もし、このコルが越えられないとすれば、ブンブン・コーラを東北につめて、ブンブン・ラを乗越して、いきなり、ホクスンド・コーラの上流近くに下り、そこにベースキャンプを張ることはできないか。もし、前者のコル越えが可能であれば、ジャグドゥラ・コーラ及びそこからのアプローチは未知ではあるが、最短距離で、登攀日数も相当に短縮されると考えた。矢後、守山はシェルパ、ポーターをつれて、先発し、七日目の夜にはユールン・コーラとブンブン・コーラの出合に達した。一つ下の谷から廻り込み、三時間程登ると木組のしっかりした

ヤク小屋がある。そこから三〇分登ると瓢箪の形をした湖に出る。上の湖は藍色に澄み、湖底まで実によく見える。ここに偵察キャンプを設け、一週間近く偵察を行った。

ここから緩やかな大きな河原を行くと、四個の湖が谷に沿って縦列に次々とあらわれる。

これらと離れて東側に一個ある。最上流の湖まで二時間、更に一時間三〇分程つめると、ジャンクション・コルとブンペン・ラへの分岐点近くのモレーンの下に出る。右に行けばブンペン・ラ、左をつめればジャンクション・コルに立てるはずである。しかし、今まで誰れもこの二つの峠には立っていないので、そのアプローチの状況はわからない。

九月十八日、守山はフルバを連れて、ブンペン・ラに向った。分岐点より右手の谷を二時間程つめて、最後の二〇メートルの岩壁を突破して五三二メートルのコルに達した。コルはナイフリッジで掌でつかめる程である。勿論、立つこともできない。このリッジの向側は、上部の三〇〇メートルは垂壁に近く、更に七七八〇メートルをホクスンド・コーラに落としている。

眼前にツォ・カルポカン、カン・ヤジャが聳え、眼下には美しい湖、ツォ・カルポ（白い湖）がみえる。リッジ続きのジャンクション・ピークの登攀は見た所かなりむずかしい。

このコル越えは到底無理であるという結論を得てキャンプにもどった。

ブンペン・ラについて、吉永定雄氏の一説(9)を記してみよう。「ジャグドゥラ・コーラの探検は、まず、この昔のラマのルートを探ることから始まったが、実際には、この河は深いゴルジュが中流に続き、とても越えられるものではなかった。今、そのルートを見つけることは困難であるが、私見としていえば、おそらくこのルートはジャグドゥラぞいではなく、ガルブン・コーラからカグマラ峠を越え、ブンモに出ずに北に上る谷をつめて、ブンペン・ラ（現在は通行不可能）を越えて、ンガンダラとつなぐルートではないかと思う」と。確かに、ブンペン・ラの東面があれ程削られていなかった時代を想像すれば十分考えられるし、私もまた、シエルパを通して、リンモの住民から、そのような話をきいた。

九月二十一日守山、フルバはジャンクション・コルを目指して左手の谷をつめた。モレーンの下を捲いて、氷河にとりつき、途中から、左の雪壁に移り、最後に五〇メートルのもろい岩を一気に登りきった所が五三〇メートルのコルであった。

分岐点より三時間半を要した。コルからジャグドゥラ・コーラへの下降は相当にきびしい氷壁である。この計画の実際面について、常に有益なアドバイスと指導をいただいた吉永定雄氏のツォ・カルポカンより撮った、このコルの北面上部の写真では、なんとか下降できると考えたが、実際にのぞいてみると、隊員だけの通過は可能であると思われたが、隊貨の輸送の面を

考えると、このルートも放棄せざるを得ないという結論であった。

結局、一週間に亘る、ブンブン・コーラ源頭の調査結果は、悲観的な情報ではあったが、本隊にとっては、迷うことなく、速やかに次の行動に移ることができたことを考えると、有意義であったと思う。

往きのキャラバン

隊員、シエルバ等九名とポーター七三名からなる本隊は、九月十二日、折から一しきり強く降り出した雨の中を、三々五々北を目指して動き出した。

ナイケのカルマはもう五〇歳を少し越したと思われるが恐ろしい顔付きに似ず、人目につかぬ所で細やかな神経を使って私達を助けてくれた。

日当は、ナイケは食糧自弁で二〇ルピー（一ルピーは約二六円）、ポーターは三〇キロを背負って一五ルピーで、ベースキャンプまで行くという約束をした。

第一夜はゴチィチャウル・コーラの放牧場の土造の屋根上にテントを張った。

翌日、三七四五メートルのマウラ峠に立つと、一九七二年秋、西野廣隊によって初登顶されたカンデ・ヒウンチュリヤ、ティッヒーやタイスンの記録にみるマタトゥンバ、ドウド・クンダ

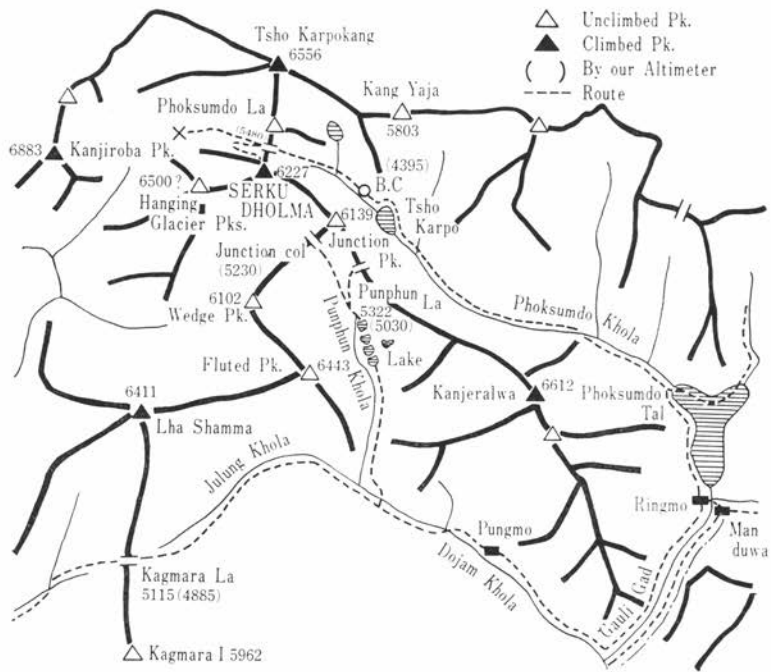
リのすばらしい氷壁が印象的であった。

チャウリコットを通り、フリコットを少し越した所にテントを張った。もう、これから先は、カグマラ峠を越してブンモンに出るまで四〜五日間部落がない。ポーター達は、賃上げとジュムラのポーターを解雇して、フリコットの村人を雇えといってきた。円満に解決をつけて、九月十八日、フリコットを出発した。翌日、一九六一年にタイスンがカンジロボの主峰を南から攻めようとして、溯行したジャグドゥラ・コーラを渡った。丸太と石橋がかかっている。石橋の上に立つと、ゴーゴーと物すごい音をたてて流れ下っているあの奔流は急に眼前から消え、足下のはるか下の岩石の間を流れ落ちていた。高度計は二八二〇メートルを指していた。

九月二十一日、カグマラ峠を越し、ユールン・コーラをどんどん下る。三七〇〇メートル辺りから森林帯に入る。ルートは右岸を飽きあきする程くねくね下る。眼前のカンチュンネの東山稜は、この谷によって鋭くけずりとられて、ものすごい岩壁となっている。ブンブン・コーラより一つ下の小さい谷を越した所をテント地とした。

夜、八時。ブンブン・コーラの偵察に先発していた矢後がポーター一人を連れて現われた。

翌日、偵察キャンプを撤収した。私も、ブンブン・コーラの最初の湖まで行って見たが、広い気持のよい河原で、東はすぐ



セルク・ドルマ周辺概念図

カンジェラルワの岩壁につづき、西南にカンチェンネの氷壁を仰ぐことができた。

偵察隊の貴重な報告により、遠く五日間の迂回路をとることにした。

九月二十五日、キャラバン最後の部落、リンモに到着した。

北に紺碧のホクスンド湖、南にこの湖から流れでるガウリ・ガード、西にカントンパ山群に囲まれたこの村は、段丘の上に土造の家が立ち、白い旗が風になびいていた。ホクスンド湖は、幻の湖といわれるだけに、なんともいいようのない美しさを秘めている。じっと見つめていると、何かしらすい込まれて行くような魔力をもっている。実に幻想的で原住民が「アマ・ツォミ・ギャルモ、母なる湖の女王」と呼んでいるのもなるほどと思われる。

湖の西岸をへつる最初の一時間は岩壁が切り立ち、気が疲れ

る。湖の北端には、ホクスンド・コーラが注ぎ、河原の幅は七、八〇メートルもある程広大である。

九月二十八日、キャラバン最後の日。珍らしく快晴であった。キャンプ地から少し小高い所に出ると、左手眼前に、カンジェラルワ山群の氷の障壁が、濃紺の空に調和のとれた見事な美しさでどこまでも続いている。まさに圧巻である。

ジュムラを出発してから、十六日間、雨また雨のキャラバン

で気が減入りそうであった一同の顔にも、初めて喜色がみなぎった。

大きなモレーンを登りきった所に美しいツォ・カルボ（白い湖）がある。その左岸を進み、広く、明るい河原を歩いて、巨岩の横たわる標高四三九五メートル地点をベースキャンプ地に決め、隊貨をおろし、長いキャラバンを終った。

翌、二十九日、正面にツォ・カルボカンが長大な二つの氷河を従えて屹立し、左手はカンジェラルワ山群、右手はカン・ヤジャ峰に囲まれ、南はツォ・カルボの湖を見下ろす絶好の場所にベースキャンプを設営した。

登 攀 活 動

ベースキャンプを設営した日の夜半から雪が降り出した。大したこともなからうとたかをくくっていたら、十一日間降り込められてしまった。

その間にも、少しでも偵察とルート工作、荷上げを行うために、上部へ向った。

約一時間半程、ゆるやかなホクスンド・コーラを溯行すると、北氷河の切れ落ちた所にある小さな氷河湖に達するが、そこまで行かない二〇〇メートル位手前から左側の谷筋にルートをと

り、急なごろごろした大きな石のつまった谷をつめて、南氷河

例にとりついた。

左岸が殆んど垂直にそそり立つ岩峰近くの氷河上に、十月六日、前進ベースキャンプ（四九八〇メートル）を設営した。そして、その途中の氷河湖近くの岩むろを中継地とした。

十月十五日には五二〇〇メートルのプラトリーに第一キャンプを張り、翌、十六日には、第一の関門である、ホクスンド・ラ（ツォ・カルボカンから派生している南西稜上の、岩稜の頭とセルク・ドルマ間の鞍部、仮称）を運よく突破して、五四八〇メートルのコルに立った。

眼前にはカンジロバ・ヒマールの主峰、左手にはハンギング・グレーシャー・ピークス、そして、セルク・ドルマの北西面のすばらしい景観が展開した。

キャラバンを開始して、三十五日目に初めて目標の山城を見た感激は格別であった。十月二十一日、第二キャンプがコル（五四八〇メートル）上に設営された。

その後の詳しい偵察の結果をまとめてみると、ハンギング・グレーシャー・ピークスの北東稜に取付くことは、その氷壁の状況から無理である。もう一つのルートである北西稜は、ジャグドゥラ・コーラの支流に切れ落ちている末端近くから取付く以外に、ルートは取れそうもない。そのためには、ツォ・カルボカンの大氷原から落ちている、ジャグドゥラ・コーラの支流の長大な氷河を下らなければならない。この氷河はセルク・ドルマの北峰北壁の途中から派生している支稜末端を左に大きく

回り込んで、いったん視界から消え、再び現われた時は、氷河の両側に電車のレールのように二本の大きなモレーンを従えて西に下り、ハンギング・グレーシャー・ピークスの北西稜末端で左に向きを変える。その辺りからは、雪も氷もなく黒々とした岩肌が続き、その奥に六八八三メートルのカンジロバ主峰がどっしりと鎮座している。その東面の氷壁は流石に物凄い。

このコルから、ゆるやかな雪原を下って、前述の氷河に出て、更に下降して、三時間程行くと突然ルートがなくなった。丁度、セルク・ドルマ北西稜の末端付近である。これより下部はアイスフォール、アイスビルディング、寸断されたクレバスがあり、末端部は垂直に鋭く切れ落ち、その下は二〇〇メートル程のスラブ状岩壁となっていた。十月二十三日夕、偵察を中止して、当初目標の一つにあげていたセルク・ドルマに的をしぼり、全力をあげてこれと取組むことにした。

十月二十五日にはセルク・ドルマの北峰北壁下部の五六〇〇のゴブに第三キャンプを、そして、二十九日、北西稜上の五八一五メートルの地点に、雪と氷の斜面をけずって第四キャンプを建設し、守山、武市、アヌーの三名が明日のアタックに備えて留った。この日、上部のルート工作に向った市川とシニルパ二名は北峰頂上に立った。

明けて、十月三十日。予想通り快晴。風はやや強かった。頂上攻撃日の態勢は第三キャンプに登頂隊員以外の隊長以下

全隊員とシエルバが集結し、登攀行動を見守ることにした。第二、第一、前進ベース・キャンプは無人、ベースキャンプは連絡將校とキッチンボーイである。登頂までの状況は、守山の記録で説明する。

「スタートがおくられて八時三十分にテントを出た。リッジ沿いのフィックスド・ロープをたどり一時間程で北峰頂上を踏んだあと、アンザイレンして主峰に向かう。北峰からは一段低くなった個所まで下り、そこから主峰へ雪稜を登ることになる。技術的には難所はないが、雪が深くなり、胸元までの雪を泳ぐようにして登りきると、リッジは左へ曲がり、西風をうけるようになった。雪は風で飛ばされ、クラストした雪面はアイゼンがよく効く。

更に登高を続けて行くと、ピークに立った。眩しくてよく見えないが、まだ先がありそうだ。五〇メートル程先に僅かに高い所がある。そこが真の頂上だ。武市を待ちながら、ピッケルにネパール国旗、日章旗、隊旗を結びつけて、三人そろって頂上に立った。十一時二十九分である。

幸い好天に恵まれ、目の前にはカンジロバ主峰、西にパトラシの山々、東南にカンジュラルワ山群、遠くプタ・ヒウンチュエリ、さらに、グルジャ・ヒマール、チューレン・ヒマール、そして、ダウラギリが眺望できた。登頂時の写真と、三六〇度のパノラマ写真を撮り、一休みした後、ジャグドゥラ・コーラ側

に少し下りてみると、ハンギング・グレイシャー・ピークスの南東面の下部、及びセルク・ドルマとのコルの南東面もまたきびしい氷壁であった。」

登頂隊三名は十三時三十分に山頂を後にした。

われわれの登った山は「SERKU DHOLMA」(セルク・ドルマ)と呼ぶことにした。

住民の言葉でセルクは金の像、ドルマはこの周辺の村人達に信仰の厚い、女神の名前である。

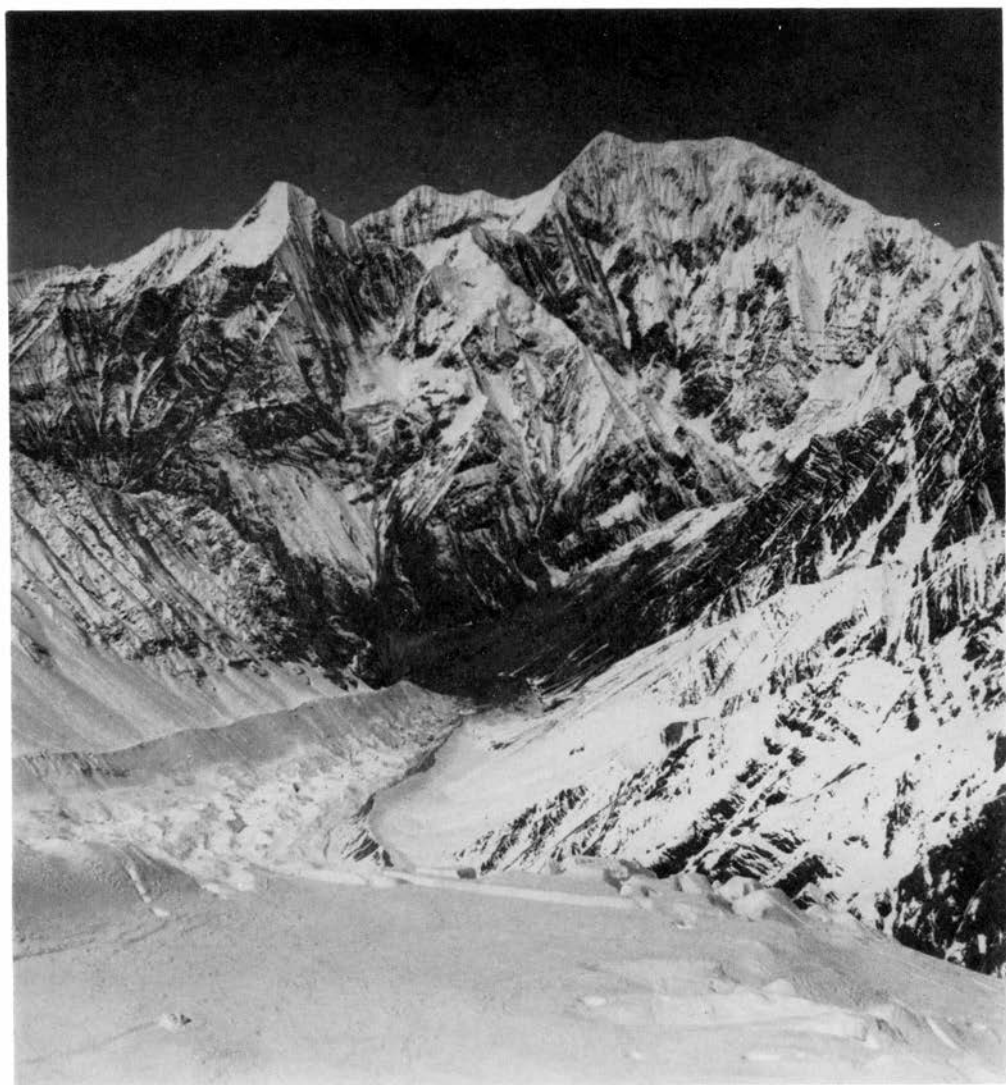
ホクスンド湖東部及び東南部山域の踏査

四十二日間の登山活動を終えて、私達は、十一月十日、四四人のポーターを連れて、B・Cを撤収してホクスンド谷を下り、十一日夕には、ホクスンド湖北端に下山した。

ここで、二隊に分かれて、十一月十三日から二十日まで、湖の東部及び東南部の未踏査地域に入った。

東部の踏査隊(守山、武市)は、両側にポリエチレン製のタックを五個ずつくりつけて浮力をつけた、長さ三・二メートル、横二メートルの筏に、大小二個の真紅のナイロン製の帆を張って、十日間の食糧等を積み込んで出帆した。気温零下十度、水温六度の寒い朝であった。

筏は一たん出発地近くに漂着したが、夜から風向きが変わったので再び筏をくり出し、夜半、東岸に仮上陸した。翌朝早く出



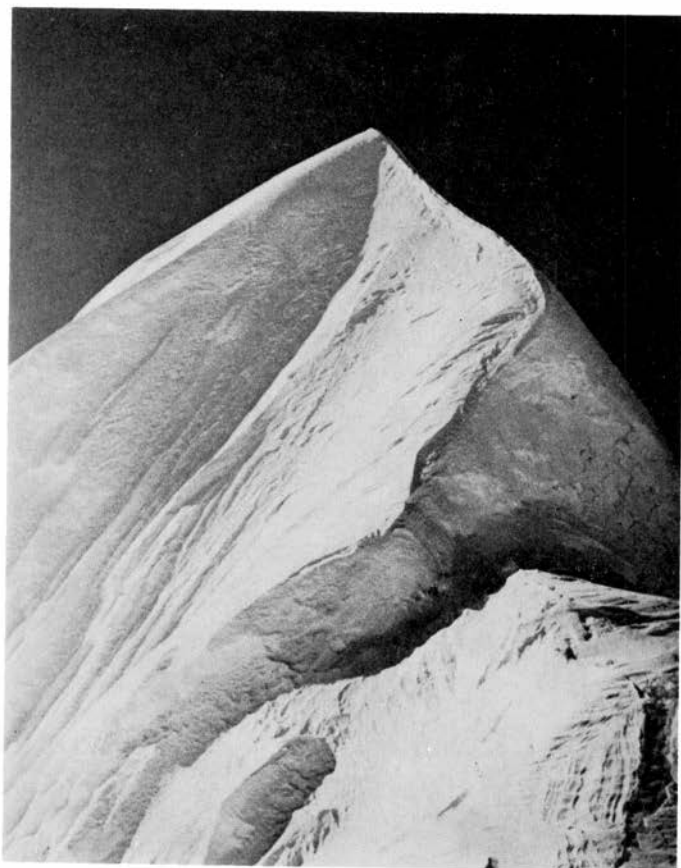
ジャクドゥラ・コーラごしにカンジロ
バ主峰6883mを望む。C 3 附近にて



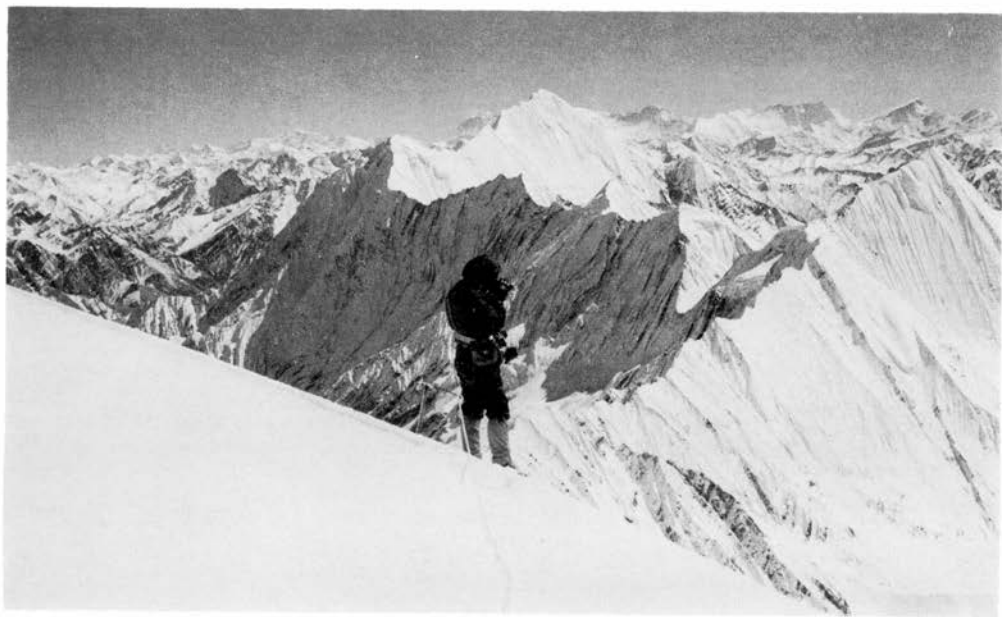
カン・ヤジャ峰からセ
ルク・ドルマ峰6227m
の東面を望む



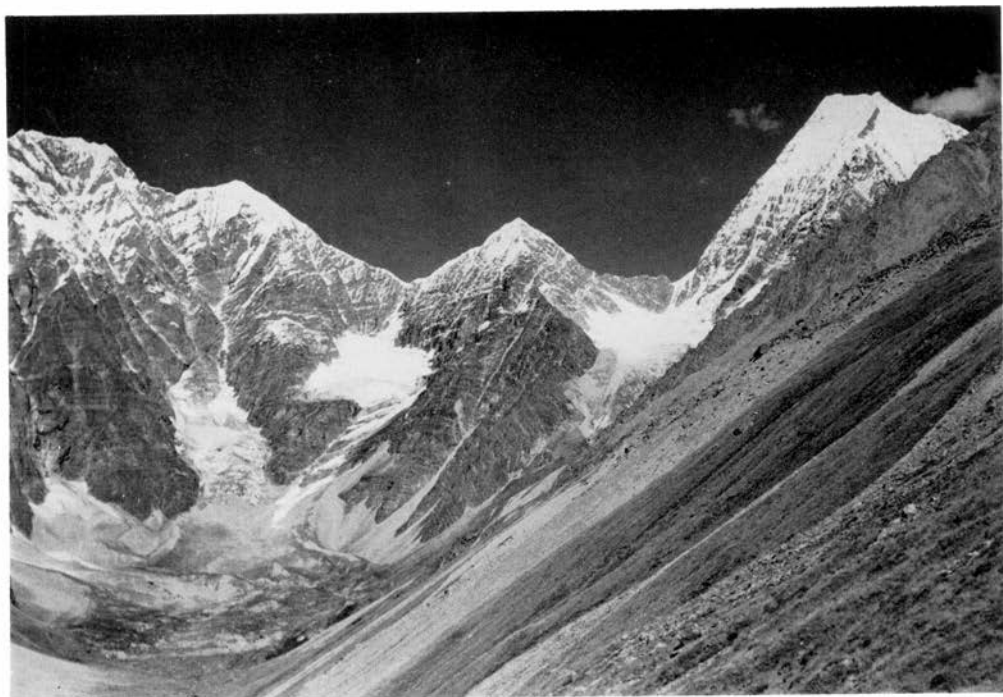
セクク・ドルマ北峰北
壁を登る。C3より写す



セルク・ドルマ北峰からみた主峰北西稜と頂上附近



セルク・ドルマ山頂附近よりみたカンジェラルワ山群と南東の山々



ブンブン・コーラ源頭のジャンクション：ピーク6139m(右)とウェッジ・ピーク6102m(左)



ブンブン・ラ5322mよりホクスンド・コーラ源流のツォ・カルボカン6556mとツォ・カルボ(白い湖)を望む

発して、東岸のサガール・コーラの河口に上陸した。

これから先は、守山、武市の手記で紹介する。

「サガール・コーラは広く明るい感じだ。一時間程歩くと、広い二俣にぶつかった。本谷は右と思われたが、左の谷に入ってみた。三十分程溯った所で、谷は深いゴルジュとなって行手を閉ざしている。右岸の岩壁を登り、前方に五五〇〇メートル位の雪山をみつけた後、デポ地点に引きかえした。翌日、右側の本谷を溯行した。樹林帯を出ると、すぐ深いゴルジュに入り込む。後で分ったが、現地のチベット人達は、細い軌道を通って湖の北端まで行っているらしい。今日は五五回の徒渉を繰り返した。十六日、谷から離れて、岩壁を登ってみると、多くのヤクとチベット人を見つけた。この上にチベットとの交易路があることがはっきりして、ほっとした。このルートに取りついで、北に三十分程行くと小さな峠に出た。ここからは、遙かトーキューの方まで望見することができた。

溯行してきた谷を更に三時間程登ると、周囲は雪をつけた山となり、膝までのラッセルを強いられるようになった。谷はまだ続いている。

デポ地点に下り、ビバークした。翌日、右に五五〇〇メートル位の美しい鋭峰を望みながら谷をつめると、また交易路に出た。

上流にはノルブ・カン(六三〇〇メートル?)が現われてきた。

どんどん溯行するとアイスフォールにぶつかり、それ以上近づくことができなくなった。そこで対岸のピラミッド状ピークに近い五二五〇メートルのゴルに登り、ノルブ・カンをゆっくり眺めた。アイスフォールの上には雪原があり、更に上部は氷河と雪原が続いている。ノルブ・カンの三つのピークは、この雪原を抱くように聳えている。

またコルの南側には大雪原が広がり、その奥には丸い頭をしたカントイガ(五八七一メートル?)がどっしりと坐っていた。

翌日は、チベットから移動してくるヤクの隊商とともに交易路を西に進み、五一〇〇メートルのバガ・ラ(バシア峠、オランダ隊はブグル峠、富森氏はバカン・ラ、私達にはバガ・ラと聞える)上で、河村隊長らの東南部踏査隊と合流した。

本隊は十一月十三日、ホクスンド湖北端で筏隊を見送ってから、西岸に沿って南下し、リンモ村に着いた。その夜、村人総出のお祝いの野外パーティに招かれた。

翌日、リンモ村を去り、マンドゥワアに着いた。ここで踏査に連れて行くポーターを残し、他は全部帰えした。

十五日、矢後は連絡将校とともにジュムラに向って下山し、帰国の途についていた。

翌日、河村は市川、アヌー、ドルジェとポーター五人を連れて一週間にわたる東南部の踏査に出發した。

ドに通じるこの交易路は、マンドゥワ・コーラに沿った広い道である。途中、しっかりした木の橋が架っている所に出た。これを渡ると直ぐ右手に、カンタイガから流れ出る、カンルーン・コーラに出合う。その奥には、馬の鞍の形をしたカンタイガが見える。

暫くすると、道は右岸の岩壁の下をまいて急な登りとなってバガ・ラへ続いている。本谷はここから凍結した三段の滝となる。この登り口の下にテントを張った。

翌十八日、バガ・ラに向って出発した。

四七〇〇メートルあたり雪溪になり、急な道を登りきると、白い旗をたてた大きなケルンが見えてきた。バガ・ラである。峠からこっちに向ってヤクの大群がやってくる。このチベットの隊商の中に守山と武市がいた。全くの奇遇であった。この五一〇〇メートルの峠上から北を見ると実に雄大なチベットの山脈が続き、南東すぐ近くノルブカンがそびえているが、眼の前の岩峰に邪魔されて全容をみることはできなかった。そして、南西に遠くカンタイガが望見された。

翌日、リンモの村人達がツイ・キャンと呼んでいる湖の周辺を調べるため、本谷を横切り、モレーンを登り、二時間程で湖に着いたが乾期のため水がなかった。歩幅で測ってみると南北に六〇〇メートル、東西約三二〇メートルの湖である。この湖水の南には五六〇〇メートル位のピークを中心に、いくつか

の山座が連なっている。

私達はこの美しい山群をツイ・キャン・ピークスと呼ぶことにした。

また、この湖には東から流れ込む谷が二つある。私は初めに南東谷に入って見たが、すぐ凍結した滝に行手を阻まれた。右岸を高まきすれば行けると思ったがやめて東谷に行くことにした。近くのピラミッド状の美しい、五一五〇メートル峰の頂上に登った守山によれば、南東谷を更に一時間も登れば、青い水をたたえた美しい二つの湖、ツォ・ルギアルマに行けたであろうという。現地の言葉でツォは湖、ルギアルマは羊が両背に袋を背負っている姿という意味だそうである。

私はツイ・キャンの東岸を横切り、凍結した東谷を溯行してみた。谷はだんだん広く、明るくなり、ゆるやかなスロープが続いている。この辺はよく陽が当るので雪はない。夏は美しい草原になるであろう。この谷をつめれば、多分、交易路に出ると思われたが、時間がなく四八〇〇メートルの地点から引き返した。

二十日には、カンルーン谷に入った。一時間程して、右岸に取りつき険悪な岩壁をへつって岩峰直下に出た。カンタイガの本峰と思われる南峰は前山に邪魔されてよく見えないが、北峰はよく観察することができた。

まだ、未踏峰として残っているノルブ・カンも、そしてこの

カン・タイガも、比較的楽に登頂できそうである。

再び、マンドゥワァにもどった。ナイケの説明によると、村のすぐ北側の川はシグリ・コーラ、ホクスンド湖から流れてた所にある大滝はツァザア、近くのピラミッド状の雪山がカントンパ、南のすぐ近くの岩峰はカンツェンボ、そして立派なチベットの交易路が東西に村の中をつきぬけている。

帰りのキャラバン

十一月二十三日、私達は所期の踏査を終えて、リンモのポーター三名をつれて帰途についた。カグマラ峠は雪で通れないので、チブリコット経由で行くことにした。ラハ、ルマ、チブリコットを通りパラガオンに入った。ここからは、プタ・ヒウンチュリ、チューレン・ヒマール、ダウラギリ等の山々が落日に燃えて、実に印象的であった。

バラングラ峠を越して、カイガオン、リミに着く。このリミ村からは、往路と同じルートを通り、十二月三日、ジユムラに戻ってきた。そして、十一日までに全員がカトマンズに帰着した。

奥地住民の診療、地方病性甲状腺腫の調査、隊員及びシエルパの医学的検査を行うとともに、環境汚染の基礎的研究の一資料として、住民の頭髮を持ち帰り、金属分析を行なった。切・切
十二月二十日、シエルパ達から、旅の安全と幸運を祈る白い

カタ薄い麻の肩かけをいくつもかけられて、カトマンズ空港を飛び立ち、二十三日、全員帰国した。

私は、私達の登山と踏査の旅を中心に、カンジロバ・ヒマールの探検、登攀、学術調査小史をまとめてみた。

最近、この山城を訪れる人も多く、それだけに、未知の部分も少なくなり、探検的興味は薄れてきたといわれる。

しかし、たとえ未知の地域が少なくなったとしても、未踏の地、未踏の六〇〇〇メートル級の山々がある限り、そしてまた、地球上最僻地に住む人々の歴史がある限り、カンジロバ・ヒマールへの興味は決して失なわれないであろう。

北里大学ヒマラヤ登山隊一九七三年の隊員は、隊長 河村栄二（四十六歳）、矢後和夫（二十六歳）、菊池充弘（二十六歳）、守山栄賢（二十六歳）、市川弘美（二十一歳）、武市守弘（二十一歳）。

連絡将校、B・N・ラナ（二十三歳）、サーダー、アヌー・シエルパ（二十六歳）、シエルバ、ドルジェ（三十二歳）、フルバ・テンジン（三十五歳）、コック、アン・ナムギャル（二十八歳）、キチンボーイ、アン・ニマ（二十四歳）。

参 考 文 献

- (1) 薬師義美・ネパールにおける初期の探検—パンディットの記録(一八六五—一七三) 日本ヒンズー・クシュ、カラコラム会議編『カラコラム』一六八—二二二頁・一九七三年・茗溪堂。
- (2) 吉永定雄・カンジロバ・ヒマール探検登山史年表・ティッヒー著(福田宏年訳)『無名峰の聳える国』付録B、三一八—三二七頁・あかね書房・一九六八年。
- (3) 吉永定雄・カンジロバ・ヒマールのごとども・日本ヒンズー・クシュ、カラコラム会議編『カラコラム』一四八—一六七頁・一九七三年・茗溪堂。
- (4) 薬師義美・カンジロバ山群からサイバル、アピ、ナンパ山群まで・岳人三〇六号・一一〇—一二七頁・一九七二年。
- (5) ティッヒー著(福田宏年訳)・無名峰の聳える国・あかね書房・一九六八年。
- (6) 深田久弥・ヒマラヤの高峰・第五卷・一一一—一三〇頁・雪華社・一九六五年。
- (7) 深田久弥・ヒマラヤの高峰・第二卷・一七一—一九三頁・白水社・一九七三年。
- (8) D. Snellgrove : Himalayan Pilgrimage, Bruno Cassirer, 1961.
- (9) D・スネルグロブ・吉永定雄訳・ヒマラヤ巡礼・白水社・一九七五年。
- (10) 川喜田二郎他・西北ネパールの山旅(一九五八年)・山岳・五年・七六—一六頁・一九五九年。
- (11) 川喜田二郎・ネパール王国探検記・光文社・昭三二年。
- (12) 川喜田二郎・ネパールの人と文化—学術調査隊の記録—古今書院・一九七〇年。
- (13) J. Tyson : Three Months in West Nepal. Alpine J., No. 304, 120—129, 1962.
- (14) J. Cole : West Nepal Expedition, 1964. Alpine J., No. 311, 254—261, 1965.
- (15) J. B. Tyson : West Nepal. Exploring the Kanjiroba Himal. Geographical J., Vol. 133, 328—337, 1967.
- (16) D. Evans : The Jagdula Expedition, 1962. Alpine J., No. 306, 65—77, 1963.
- (17) J. Sarr : Four Miles High. Victor Gollancz, London, 1966.
- (18) 長沢和俊・カンデ・ヒウンチュエリの試登・山岳・五九年・二二九—二三五頁・一九六四年。
- (19) 児島勤次・サイバルの登頂と西北ネパールの横断・山岳・五九年・三〇—五六頁・一九六四年。
- (20) 安藤久男・ナラカンカール紀行・山岳・五九年・一六三—

- 一七七頁・一九六四年。
- (21) 吉沢一郎・ヒマラヤ一九七〇年・岩と雪・一七巻・一〇～二九頁(一四～一七頁)、一九七〇年。
- (22) J. Tyson : Return to Kanjiroba 1969. Himalayan J., Vol. 29, 96~104, 1969.
- (23) 吉沢一郎・カンジロバ山群とタイスン(上)・山と溪谷・三九二号・一五〇～一五三頁・一九七一年。
- (24) 吉沢一郎・カンジロバ山群とタイスン(下)・カンジロバに戻る・山と溪谷・三九三号・一三四～一三八頁・一九七一年。
- (25) サリー・ロワト・(吉沢一郎訳) カンジロバのパイオニア
 Ⅱジョン・タイスンの二つの顔・岳人・三一四号・二一四～二一七頁・一九七三年。
- (26) 神戸商科大学山岳部・稜線山岳会編・西部ネパール・パトラシヒマール遠征報告書―カンデヒュンチュリ―一九七一年。
- (27) 大阪市立大学山岳会第三次ヒマラヤ遠征隊編・カンジロバ・ヒマール初登頂・一九七〇年。ポスト・モンスーン(報告書一九七二年)。
- (28) 大阪市立大学山岳会・カンジロバ・ヒマール周辺の山群―その遠征史と地理的解明について・岩と雪・二二号・五九～七二頁・(アート口絵)一五頁・一九七一年。
- (29) 富森毅・西北ネパールの山旅(上) 『無名峰の登える国』
 にはいる・岳人・三〇一卷・七号・一一八～一二二頁・一九七二年。
- (30) 同・同(下)、冬迫るチベット高原の小村へ、岳人・三〇二巻・八号・一一八～一二二頁・一九七二年。
- (31) 大阪府山岳連盟ネパールヒマラヤ登山隊・一九七一年編・カンジロバ・ヒマール登山報告―ツォカルポカン登頂―一九七二年。
- (32) 阿部和行・カンジロバ・ヒマールの未踏峰・岳人・二九七号・一六九～一七二頁、一六五頁、九頁、一九七二年。
- (33) 阿部和行・カンジロバ山群未知の部分Ⅱ一九七一年秋の登山・山岳・六七年・一～六頁・一九七二年。
- (34) 東京山旅倶楽部・カンデ・ヒウンチュリ登頂・岳人・三一三号・一八八～一九一頁・一九七三年・桑畑茂・グラビア特集・二五頁。
- (35) 日本ヒマラヤ山岳協会編・一九七三年カンジロバ遠征隊仮報告書―カンジェラルワ初登頂―一九七三年。
- (36) 日本ヒマラヤ山岳協会隊・カンジェラルワ初登頂・岩と雪・三三三号・五四～五九頁・一九七三年。
- (37) 北里大学ヒマラヤ登山隊・一九七三年(河村栄二編)・カンジロバ・ヒマール登山報告書(第一部)・一九七四年。
- (38) 河村栄二・カンジロバ山群の未踏峰Ⅱセルク・ドルマに登頂・一九七三年。ポスト北里大学隊の記録・岳人・三三二二号。

一六二〜一六六頁・一九七四年。

- (39) 北里大学ヒマラヤ登山隊・カンジロバ山群の未踏峰Ⅱセルク・ドルマ(特集カラー)・岳人・三二二号・九頁・一九七四年。

- (40) 北里大学ヒマラヤ登山隊・未知のホクスンド湖東部、七三年。ポストモンスーンの記録・岳人・三二三号・一九六〜一九九頁、一九七四年。

- (41) 三島昌夫・河村栄二他・ネパール人の毛髪の金属分析・公衆衛生院研究報告・二三卷・四号・二二七〜二三三頁・一九七四年。

- (42) 山形大学ヒマラヤ遠征隊・ビジョラ・ヒウンチュリ初登頂
―一九七四年ブレ・モンスーンの記録―岩と雪・三九号・六四〜六九頁・一九七四年。

空にただよう峰

—ヘイズ南峰登攀の個人的記録—

松 永 敏 郎

今日は七月九日、時計の針は午後一時を回った。

登攀活動が終ってから既に一昼夜を過ぎたというのに、褐色に焼かれた顔は不精髯の中でふくらみきっているし、半開きの唇は痛ましく割れて血をにじませている。

僕らが、昨日の朝早く、このキャンプサイトにもどって来た時の姿を見た人があつたら、明るい雪の上を場ちがいの幽霊でも歩いて来るかと思つたに違いない。ザイルをつなぎあつたまま、距離のわりに長い時間をかけて、ようやくのことでの安全地帯に辿りついた時には、三人ともへたばり切つていたのである。

とりわけ、僕の体にとっては、今回の登攀は過重な労働だったのだろうか、脈搏もまだ正常ではないし、時々、それも頻繁に深い呼吸をしないと胸の息苦しさが消えないので不安なのだが、真昼間のテントの中に寝て、遠く近くなだれの音を夢うつつに聞きながら、体の限界的な状態が徐々にうすらいでいくのを待っていると、精神までまるで幼な子のそれのようになってくる。頭の中は虚ろで呆然として、何も考えたがらないし、手足の筋肉は緩み切つたまま

だ。ここが十分に安全で、何かに注意を集中したり、判断や命令をくだしたりする必要が全くないことを知ってしまったからだろう。

田村の声が外で聞こえる。

炊事の仕度にかかった彼は、わずか数メートル離れた食料貯蔵所である雪洞へ行くたびに、自分が何を取りに来たのかを忘れてしまっているのを嘆いているらしい。

市村は、なだれにやられた時打った胸が痛むという。この二人の顔も、僕と同様にふくらんでいる。

七月三日、タルキートナの粗末な滑走路わきの物置小屋で、藪蚊に攻められながら、四日間の天候待ちに退屈をもて余していた僕らは、この日の朝ようやくやくにして、装備や、ほぼ二週間分の食料と一緒に、椅子まで外してしまった機内につめ込まれて晴れわたった空へ舞い上がることができた。

重くなったセスナ機は、単調なエンジンの爆音に機体を細かく震わせながら、針葉樹の原生林を越え、鈍色に光を反射する沼沢地帯や草原の上をよぎり、際立って高く、白雪に輝いて空に浮いたマツキンリーの山なみを左手に見送る辺りから、やがて、荒々しく赤茶けた地表に斑らに雪をのせ、その白さの割合をその連なり毎に増していく丘陵の上を一直線に飛び続けた。

中腹から広大な麓にかけて、濃い雲の塊りをまといつかせた山群が近づいて来る。デボラー・ヘス、その右手にヘイズの山々、それをとり囲んでひしめくような名も知らぬ峰と谷の連なり。機はわずかに右へバンクする。

小さな機内に座って大規模な風景を眺めるとおよそスピード感はないのだが、目前にヘイズの山群が広がり、蛇行するシストナ氷河の下流域の代赭色が白く変わり、その流れが不規則に崩れ落ちるクレバス帯の上部で、遡って来た谷は大きく二股に分かれているのが、機体を擦るように飛び過ぎていく雲の下に俯瞰できる。息をのむように雄大で

美しい眺めだ。

分かれた谷の一つは、右手、東方で大きく扇状に広がり、僕らの目標であるヘイズ南峰の南壁が荒々しく崩れ落ちる裾を洗い、そのまま、東稜の最低鞍部にのし上がり、また、三七六メートルの端麗な姿をした無名峰の、北西に突き出された尾根の側面に続いているのだが、その中央部の、ひろびろと開けた雪原には、僕らの期待に反して、大きなうねりとクレバスが散在し、素人目にも着陸は無理だということがよくわかった。

機はエンジン音を一段と高め、南壁に接近したまま急上昇する。凄じい氷と岩の壁が、わずか数十メートルの足元を逆しまに流れると、機内に座っていないながら、自分の手足を使ってでも這い上がりたいような気分になったのだったが、やがて大きく左に旋回して空中に脱け出した機首がたてなおされると、再び谷に沿って進入、その左俣ともいべき、長く直線的のびた氷河上に二本の橈跡を残して滑走し、止まった。タルキートナの小さな滑走路を飛び立つてから一時間二十五分、マッキンリー山塊の北西、アラスカの内陸深く入ったこの山域では、時間的距離はおよそ二倍ということになるだろうか。

パイロットは、そのままの姿勢で横にいる僕に煙草をすすめてニヤツと髯面を崩す。ついさっき、機内で、A・A・Jの最新版に彼の記事があったのを聞かせたので、多分、気をよくしているのだろうが、文章はこうだ、

「クリフ・ハドソンは、われわれと話したり笑ったりしながら、まるで、アクロバットのように飛行機を操った」。やがて、胴中から僕らをはき出してしまったその機影は谷間を抜けて南の雲の中へ消え、昼の日の照り輝く静かな氷原に残された三人は、荷物をかつぎ、といっても、ほんの数メートルを移動しただけで、およそ二週間の自由で気ままな登山のためのベースキャンプを作り出す。

地図上では七〇〇フィート、二一三四メートルのここは、ヘイズの西面と、隣接してその頂きを鋭く空に突き上げた秀麗な未登峰との間に、北北西へ向かって深く切れ込んだ雪の谷である。ヘイズ南峰(四〇五六メートル)は、

バットレス状の岩壁と懸垂氷河の上に高く、藍色に沈んだ空の中、やや右上がりに傾きを見せたドーム状のスカイラインをくっきりと描き、その山頂から左へいったん切れおちた稜線の先、雪の乱反射で燃え立つように輝く山嶺はヘイズ北峰（四二一四メートル）であろうか、それとも、僕らのいるこの氷河の源流からのし上がっていく西稜上部のジャンクションピークかも知れないが、今のところ見分けはつかない。

そしてまた、僕らの立つ氷河の下手を振りかえると、目測でおよそ数キロメートルはあろうか、美しく、重量感に満ちた未登の無名峰がその全容を南東の空に浮き上がらせ、その西側に伸びた山稜は、多分、ヘイズ南峰の東南稜とつながっているのだろう。重厚な雪におおわれた山頂は午後の陽光を一杯に浴びて輝き、その或る部分は、青く硬い光を反射しているのも見える。

食料貯蔵用の堅穴雪洞が完成した。

細かい計画に縛り上げられて窮屈な思いをしたり、それに追いかけられるような山登りではなしに、未登の山域に入り込んだら、気心を知りあった仲間同志、そこで好きになった山を自分達のやりたい方法で登ってみようという意識が強かった今度の山行は、日本から持って来た食料といえ、一缶の緑茶と、友人が差入れてくれた少量の漬物だけだったので、アンカレッジの街で買付けたそれに野菜の不足気味なことが気がかりだが、年少で、食料担当の田村の才覚に頼ることになった。

軽い食事を摂った後、市村と二人、わかんをつけた足馴らしをかねて南壁下部の偵察に出かける。三十歳の彼は、ついでに、上部で使う登攀用具を背負い込み、暑さに袖まくりした僕らは、細いザイルを雪の上に曳きずったまま歩き出す。

ルートは、氷河の右岸から岩壁の基部を巻いて下段の台地に出る。左手の上部には、西南稜と南壁の間に作り上げられた懸垂氷河の末端部が、垂直の岩壁上に数十メートルの厚さの断面を見せているのが振り仰がれる。

ここから上部台地に取付くには、右手に張り出した小さな雪稜に一旦上がり、その基部から複雑な氷壁部を突破しなければならぬが、みた所、何とかいけそうだと思えた。持って来た登攀用具をデポしてもどる。北の風が吹き、雲が全天をおおうようになって、ようやく涼気を感じるようになった。十九時帰着。

この晩のキャンプは散々のていたらくになった。诗情などにはおよそ程遠い雪中の白夜の明るさが不馴れな僕らを苦しめ、おまけに、日中の暑さに裸で作業したのがたたって、背中一杯の日焼けの痛がゆさに攻められる始末、顔に帽子をのせたり、布切れで眼帯を試みたりで、ぶつぶつ言い通しであった。

四日、夜半過ぎて雨。いったん起き出した四時も降り続き、濃い霧が山腹にまとわりついて上部は全く見えない。早目の朝食が済んでからまた寝袋にもぐり込むが、今日は、上部台地へ抜け出る目安をつけておきたいものと思う。九時少し前、天候は依然わるいのだが、体を馴らすために登攀用具をかつぎ上げて出かける。途中、雨は止んだ。霧の低迷する中を、ちょうど二時間ほどで、上部台地の基部から舌先のような具合に突き出された小規模なリッジの上に出る。キャンプから約二五〇メートルほどの高度差があるだろうか。

ここへ来て改めて観察すると、下で見た時に感じていた、大した苦勞なしに乗越せるだろうという予想は簡単にくつがえされて、上部台地への取付きは、僕らの登攀の最初の難関であることがよくわかった。およそ二十階建てのビルディングほどの高さ、複雑にひび割れた雪の壁は、上部台地氷河の膨大な雪の厚みが、みずからの重量に押し出されて下方に崩れ落ちていく断面であり、黒ずんだ氷のルンゼや、ぶらさがるように傾いた氷塔の先端が曇った空の中で静まりかえっているのが不気味である。

十一時過ぎ、登攀用具を体に取りつけるとずしりとした重みが身に伝わる。ルンゼ内部の青氷に蹴こむアイゼンの前爪も、ダブルアックス技法も、いつも登攀の初めに感じる不馴れや不安感と重なって、まったく冴えない。直登し

て、頭を抑えられた壁の下へ中腰で立ったが、右手はセラック側面がかぶさり過ぎて駄目、氷壁から剝離したセラックとの深い裂け目に乱雑に積み重ねられた雪塊の上を苦心惨胆で渡り歩いた末、空中に突き出したような棚に移れずに引返さず。だいたい、これでは数日のうちにこの部分は崩壊して、目の下のデブリの上へ四散するに違いない。登下降のルートには不適當だと判断して、いったん、デポへもどる。

リッジのつけ根から右手へ廻り込むと、下側は急な亡り台になって落ち込み、遙か下方にシストナ氷河の右俣の雪原が広がっている。上にかぶさったセラックの先端がほんの一部でも欠け落ちてぶつかりでもすれば、そのまま、すっとんてしまひそうな傾斜で敬遠したかったのだが、偵察して来た市村の話では、何とか中段までは行けそうだろう。いずれにせよ、可能性のある所へ執ように当って突破するしか方法はないわけだ。リッジから離れば、危険と困難の度合はずっと大きくなる。

先程取付けたザイルを撤収する。楽な作業でない上に、下降に移った田村の頭上に雪塊が崩れ落ち、一瞬ひやりとさせられるには十分。こんな時は、思わず怒鳴り上げるわけだが、考えてみれば余り意味のないことだ。

重量の多いやつがなだれるためか、腹の底へ響く音に追われるようにして、降り出した小雪の中を下降する。

十八時、田村の作る奇妙な味の夕食が済むと、寝袋の上に横になって、のんびりと雑談。雪。温度計はマイナス四度。ちょうど、日本の五月の山のような気分だ。外は総て重い霧の中に沈んで、テントに降る雪の細かい音が続いている。

五日になった。二時、寝ぼけ眼でテントの外へ出てみるが、織い雪が降り、依然、霧が深く立ち込めている。

七時半、上空は晴れ始めたらしく、時折、流れる霧の切れ目に淡く日がさすようになった。

薄く降り積んだ雪は、それでも、この雪原をより新鮮な気配に一変させた。ザイルを結びあった僕らは、その、静

かで穏やかな朝の中へ、ゆっくりした足どりで歩き出す。足下の小さな渦の中で、新しい細かい雪が一步ごとに舞い上がって来る。

午前中は、デボから上部台地へ抜け出るルートを開くために奮闘した。雪壁の割目に押し込まれたような氷のルンゼを這いのぼって、外傾したテラスに上がり、小さな壁を乗越して中段の平坦部に出る。いってみれば、台地から突き出されて一段ずり落ちた大規模なアイスビルディングの屋上になるわけだが、これを慎重にトラバースする。右手も正面も圧倒的に切り立った氷壁で、登攀は不可能だったが、しあわせなことに、その最左端ぎりぎり、半分は向う側の空中へ垂れ下がったような縁へしがみつこうように這い上がって、ようやく、上部台地の西端部に抜け出すことができた。第一関門は突破したのである。

正午を過ぎて、雲量三の快晴。風が無くて暑い。ビスケットを噛りながら見上げると、南壁上部の氷塔群が陽の光に輝き、晴れわたった空は、その輝きを浮かばせながら、むしろ黒く沈んだという表現が向いていよう。無限に深い淵をのぞき込むような無気味にも思える色だ。

南稜は、そう、僕らが登攀のルートに選んだそれは、下部岩壁からのし上がった急峻な雪稜に支えられて、宙空に斜めに押し倒された巨大な胸壁だ。キャンプから眺めた目には傾斜感もなく、何となく安易な気分だったのだが、今、ここで眺めれば、南稜のスカイラインそのものが四十五度近くに見えるし、僕らの立った上部台地も、相当の傾斜で南壁の裾にのし上がり、そのまま、雪をつけぬ壁に垂れ下がっているような感じだ。

壁全体は、中央部から南稜にかけての斜面と、左の岩稜にかけてのそれが、ちょうど、新しい本をおし開いて立てかけた左右のページのようになり、鋭く切れ込んだ中央ガリーを中心にして分けられ、その傾斜のせい、雪はほとんどつけていないように見えるが、膨大な量の雪は、この、スカート状の上部台地に乱雑に積み重なって、見渡す限り累累たるデブリの山だ。壁の上部、スカイラインに近い辺りには想像以上の雪の量があるに違いない。分厚い断層と無

数の氷塔の群だ。

十二時五十分、上部台地を横断して南稜下部に取付くルートを見つけるために、デブリの中へ入っていく。大きく開いてはいないが、波状に刻み込まれたクレバスの危険、特に、デブリの下へかくれた陰險な陥し穴に対処して、僕はテントを出る時から常にザイルを結びあつたままだが、引きずられたそいつがデブリの氷塊に引掛かるのに注意しなければならぬ。なかなかやつかいだ。

先頭を行く田村に、後から声を掛けてはルートを修正し、要所に赤旗を立てながら歩くのが僕の役目だが、感じではどうも前面に深い凹地があるらしく、そうなると、水平気味のトラバースは大分不利なように思えた。

それよりもなにも、僕は歩きながらひどい不安感につつまれてきていた。今のところ、その音は一度も聞こえないが、ここは地形的にみても、大規模なやつが落ちればひとたまりもない、南壁下部のもっとも危険な個所であることを、積み重った凄じいデブリの量が証明しているのに気づいたのだ。僕は、真昼間に、ちょうど腕の底のような場所のこのこ入り込んで来ている自分の愚しさを今更になつて後悔し、恐怖感に襲われて壁の上を振り仰ぐ。

「田村、止まれ。ルートを変えて左へ直角に曲がれ。あの岩の下へ入るぞ、急げ」。

僕は急ぎ、デブリの堅く氷化した、それもひどく不規則な階段を、可能な限りのスピードで登り、クレバスをわたり、ようやくのことで岩壁の陰に入った。

高さはちょうど三メートルほどの岩は両翼をひろげた形でこの急斜面をきり、万が一、上部からのなだれに襲われたとしても、いわば、小型のジャンプ台式に、雪は頭上を飛び越えてくれるし、ここからは、すぐ右手の、中央ガリーのゴルジュを横断してしまえば、もっとも危険な場所を最短距離で通過して、南稜基部の雪壁へ取付けるように思えた。

僕は、急ぎに急いだ一時間半ほどの疲れをいやす安全な場所を手に入れたことで安心していった。

「よし、そこに並んでスタンスを掘れ。ラントクルフトに気をつけるよ」。

最後尾にいた僕は、彼らの数歩下へ立ち止まり、時計を見、手帳に時刻を記入し、胸のポケットにそれを納めて上を見上げた。

突然、白く泡立つ波が、その、横に広がった岩の縁に沿って頭上に飛び出して来た。音は全く聞かなかった。

「なだれだ、伏せろ」。

僕は叫び、ピッケルを突いて駆け上がるとした時、背負ったままのザックに最初の雪の固まりが叩きつけられ、鈍い、地鳴りのような音と混乱の中へ僕自身が吹き飛ばされていた。

ザックがはね上がるように横を流れていく。落ちつけ、僕は自分にいいきかせ、頭は下の方向ながら俯せの姿勢を取ろうとした。市村が僕の左手を追い越していく。

「もっと左へ行け、左へ寄れ」。

大声を上げながら、流動の中で這いずり、自分の腰から下が流れる雪の盛り上がりには翻弄されているのを感じながら、両手を使って流れのへりへ出ようと努める。

止まった。苦しみはない。埋まった腰から下を引き抜いて立ち上がる。彼らはどうなった。

市村は、わずかに四、五メートル先に立っていた。

「市村、ザイルをたぐれ、せい一杯引け」。

田村は埋められてしまったかも知れない。しかし、アンザイレンしているのだから、彼が窒息しちまう前に何とか引き出せるだろう、という自信があった。

市村が猛然とザイルをたぐり出した時、十メートルほど上の、盛り上がった雪塊の上に田村が姿を現わした。僕らは短い言葉でお互いの体の様子を確かめた。

「よし、いったん安全地帯へ下りるぞ。ザックを探しながら行け」。

僕らは急遽下降に移った。それにしても埋められなくてよかった。なにせよ、安全地帯、一時間半ばかり前の、上部台地の西端部へもどることが先決だと僕は考えていた。

「先輩、ピッケルはどうしますか」。

そうだ、僕はピッケルを手にしていなかったのだ。自分では十分に落着いているつもりだったが、今初めて気付いて、やはり、動転しているなと思う。立止り、上を振りかえると、百数十メートル離れたあの岩の下に光るものが見え、ピッケルが、少なくとも一本は残っているのがわかった。

南稜へ取付くためにはこのルート以外にない。とすれば、いま一度必ず来る。ここから下では、ピッケルは是非必要なものではあるまい。急ぐ方が先だ。僕らは、アンザイレンをしたまま、段差のついたクレバスを飛びおり、下降を続けた。田村の眼鏡が流されたのが最大の損失だが、彼の返事では、裸眼でも一応行動はできる由で安心した。なだれは、大量の新しいデブリを旧雪の上に積み上げ、僕らは、足を取られ膝をつきなどしながら、とにもかくにも、その東端から西の端にあたる安全地帯まで下降して来たのであった。

安全地帯、そう、結果からいえば確かに安全だったことには間違いない。しかし、ここで見た凄じい情景は、僕らの脳裏に、本当のなだれの恐ろしさを焼きつけるに十分なものであった。

僕らは、赤旗を立ててその位置をしらせた比較的広いクレバスをわたり、台地の末端部に立った。僕自身、そのままアンザイレンを繰り返して、登攀の出発点であるデポまで引き上げようかという気はあったのだが、まだ、余り馴染みのないこの台地の状況をつかんでおきたい気持ちと、同時に、ここならば安全だろうという意識、いいかえれば、ある種の甘えと欲と、疲労から来るなげやりな気持ちもあつたのであろうか。

「よし、ザックを下ろせ。一休みしよう」。

三人は足下の平坦にザックを置き、互いのザイルを外し、煙草でも一服しようとしていた。陽の光は沈黙した台地の上一杯に照り、汗ばんだ首筋を焼いていた。

その時である。僕の目は、何か、異様な感覚でその情景をとらえて、一瞬呆然とし、立ちすくんでしまったのである。信じられぬ、というより、今まで全く経験したこともない、大規模ななだれの真下に立ってその襲来のさまを眺めることが、ああ、こういうものだったのかというような奇妙な得心感をさそい出していた。

なだれは、ちようど、眺めた限りでは雪のほとんど付着していなかった南壁の左斜面を、海岸を襲う高波のように、白々と奔騰する帯になって、正に、僕らの真正面に崩れ落ちて来ているのだった。

「どっちへ逃げますか」。

市村が聞いた。

「できるだけ左へ寄れ、気をつけろ」。

僕は叫んだ。わずか後数メートルも寄れば、この台地はない。雪の層は西面の空間に切れおちて、とび出せば百五十メートルほど下の下部台地へ垂直に叩きつけられることを僕は承知していた。

なだれの波は、衝撃で高く吹き上げられた雪煙の下を、触手を伸ばす巨大な生物のように這いおりにいた。僕は無意識に数歩ほど離れたザックを取りに行こうとし、足を動かしかけて止める。ここへ来るなだれの波に呑み込まれれば、深いクレバスに叩き込まれるか、下の台地へ一緒に墜落して行くのだろうか。ザックなどはいらぬ。せめて、ザイルを解いていたのは幸いだったなとも、ふと思った。

絶望感が僕の心に広がって来る。

来襲。座り込みたい思いに抵抗して、僕らは立ったまま身構えた。ほんの短い間だったのだろうが、その高い波は様相を変えた。

足下が揺れ、目の前のザックが飛びはねるように動き、雪面に大きな皺が作られた。一瞬、闇が僕らにかぶさり、その暗みの中を、分厚い、数メートルほどの白い壁が、僕らの脇を走り抜け、わずか十メートルほど先の深い巨大なクレバスの中へ吸い込まれているのが目に映った。僕は、その音を聞いたのだろうか。

やがて、呆然とした三人の耳へ真の静寂がよみがえり、わずか十数平方メートルの無瑕の雪上に相変らず日が照り輝いているのに気付く。僕らはようやく自分をとりもどし、本当の恐怖感が改めて全身を走り、身震いする。

ごく近いうちにまた来るぞ。僕は命令する。

「逃げるぞ、田村、大至急懸垂でくだれ」。

「六ミリを使ってフィックスしてしまえ、急げ」。

僕は怒鳴る。号音が響き、第二回目が来る。僕らは上をふり仰ぐ。田村は、ザイルをからませ、苦勞してほどこいてるのだが思うようにいかぬらしい。

「田村、馬鹿野郎、ナイフで切れ」。

最初の懸垂下降到五十メートルはいらぬのだが、あわてている彼の耳には入らぬらしい。

市村が怒鳴り、また、なだれの音が響いた。

僕らは、こういうことになってようやく、午後のこの台地が、なだれの爆発し奔流し、あらゆるものを破壊しつくすことのできる地獄でもあることを、はっきりと悟ることができた。獲物を手にすることのなかった南壁は、今、うかうかと入り込んできたおろかな僕らを見つけて、鋭い牙をむき出したまま咆哮しているのだ。

「田村行け、市村、急げ」。

実をいって、僕は、これほど恐怖で背筋がしびれるまでに感じたことはなかった。彼らがザイルを伝って中段のテラスに下降しきるまでの間、自分が最後までこの危険にさらされている不運をなげいているのである。なぜなら、な

だれの音は僕一人の背中の中真後ろで鳴り続け、そのデブリは、いまのところ、斜面のわずかな傾き加減で、ほんの数メートル先で二手にわかれているのだったが、まんいち、わずかに残された平坦がデブリで洗われた時は、それこそ、たった一人で空中に飛び出して、あの世行きになるわけだったからだ。僕は、もう、後ろを振り向かなかった。

午後三時四十五分、デポにおり立った時は三人ともくたくたに崩れた体を雪の上に放り出し、田村が嘔吐感に苦しんでいただけでなく、僕自身も、出る筈のない吐気に悩まされていた。極度の精神的緊張からの虚脱感がそうさせたのであろうか。

このリッジにも、太陽がちようど真横から当たり、小さななだれの頻発する中を、六時過ぎにベースキャンプに帰りついた。缶ビールを開けてとにかくの無事を祝う。

シヨックは予想外につよく、市村の右胸や僕自身の腰の打撲の程度もわからないので、明日は停滞して休養することに決めた。このことで意気阻喪したくないし、夕食後も努めて楽しい話題をさがし、三人で歌もうたった。

最初、安全であるべき壁の直下にいながら飛ばされてしまったのは、比較的傾斜のあつた下手からの目測で、岩と彼らとの距離を見誤ったことや、僕自身、不注意にも中途半端な所で足を止めてしまったのが直接原因であろう。本流に捲き込まれれば、多分、助かる率はきわめて少なかったろうが、幸運にも、僕らはなだれの左縁を百メートルほど流され、そのデブリを大量にのみ込んだ洞穴のようなクレバスの上、わずか数メートルで止まっていたのであった。

僕は夜中の暮れなずむ薄ら闇の中で目を開けていた。

日中、もっとも危険と思われる個所にうかうかと入り込んでしまった愚行。これは、まったく僕自身の責任に帰す所だ。途中で方向転換をしたことはどう影響したのだろうか。

もし、なだれの圏外にあれば、失敗の体験は当然なかったろうが、逆に考えれば、このことがあつてこそ、実際には未知であつたアラスカのなだれの一端を理解できたのであるし、これからの安全への方策も探れるというものはなかるうか。

それにしても、三人とも、やられなくて本当によかつた。市村も田村もぐっすり眠り込んでゐる。僕は、寝袋の中で目をつむり、ひどい失敗をしながらも生きていられたことに感謝してゐる。

六日の朝八時、快晴の明るさの中で目覚めた。なかなか寝つかれなかつたままに、僕は、これからのタクティクスについて考えを一応まとめることができ、彼らにもそれを話す。

テントの中から外を眺めると、正に躍るような光の氾濫だ。日中の、全く音のない世界が僕ら三人を威圧してゐる。

僕らは、これからの行動パターンを逆転して、昼間は極力休養、夜間を登攀活動にあてることにした。もちろん、なだれの危険を回避するためだ。

二十時。快晴。一点の雲もない。気圧計は七九〇ミリバールを指している。僕らは二十時十五分にキャンプを出、一時間で稜線デポに到着、三十分ほどで登攀を開始、二十三時には、フィックスドロップを利して氷壁部の関門を通り抜け、上部台地の末端に立つた。

なだれの音はまったく聞こえぬ。今こそ、この巨人の冷酷な牙の間をすり抜ける絶好のチャンスだ。僕らは、駆け登りたい気持ちを压えて黙々と堅く凍てついたデブリの上をたどり、南壁の下部のかなめ、細く鋭く切り込まれたガリーの下についたのは、真夜中過ぎ十五分であつた。取り残されていたピッケルは市村の手にもどつた。残念なことに、僕の登攀用のピッケルは見つけることができなかつたので、市村のアイスバイルと自分のハンマーを併用するこ

とにする。

呼吸は歩度に馴れ、僕らは休息なしに登り続けた。傾斜はここで角度を増して来る。なだれで削られ、蒼氷化した溝をいくつか持つ斜面を横断し、岩棚を伝い、スレート状の碎石帯を這うようにして、それでも、急ぎに急いで、稜線へ鋭く突き上げる雪壁の基部に出た。僕は、赤旗を立てながら、上部斜面からこの標識をのぞきこむことはできないだろうと思っていた。

「田村、やれるか」

多分、この斜面では途中で交替することはできないだろう。田村がトップになり、三人がアンザイレンしたまま、この壁を直登する。

およそ、五十五度から六十度、高距三百メートルほどであろうか。下からふり仰ぐと、頭上を登攀する二人の体はほとんど空中へとび出しているように感じられる急斜面だ。ここで一人がスリップすれば、確保しようのないまま三人揃ってふっとんでしまうだろうが、やや左手の、南稜上にぶらさがるように懸かった氷塔が、ほんの少しでも欠け落ちたら絶対避けることはできないし、スタカートで時間を長びかせるのはむしろ危険率が高い。何とか早く、一分でも早くすり抜けることが最良の方法だと思う。僕は心の中で叫ぶ。急げ、もたもたするな、アイゼンを叩き込め、スリップするな。

長い、そして、休息することのできない登攀。気を取られて、彼らにバランスを崩されたくないの、あせってはいるのだが、僕は声を掛けるのを止め、顔のふれる雪面へ向かって吐息を繰り返す。

緊張した同時登攀二時間十五分で、南稜上氷塔群の下部に到達した。時刻は二時半ちょうど、トリデント氷河の源頭の峰々、モフィット、シャンドから無名峰に続く稜線の、鋭い岩稜や厚い雪の層の先端が、かすかに明るみをとらえ、それは次第に確かさを増し、やがて、バラ色とそれに対応する陰影に染め分けられた重量体が、暗紫色の空を背景に

聳え、ひろがって行く。何時まで眺めても飽きることのない山の夜明けだ。僕は座って身動きもしない。

固く、その表面の青く光を放つ氷塔を避けて左へ迂廻する。足下の切れおちたその下方に遠く、シストナ氷河の蛇行する縞模様が、薄く、紫色にけむった空気を透して眺望できる。

連続した雪壁の登攀が続く。緊張する程の傾斜感はないし、両手に持って打ち込むアイスバイルもハンマーも十分に利き、アイゼンのツアッケの蹴込み具合も悪くないのだが、この辺り、二十センチも軟雪を削ると固いブルーアイスに変わり、時には、完全に氷化した斜面に出くわして、前爪は危くそれに引掛かる。僕は最少限度の会話に終始し、ただひたすら攀った。稜線とはいいいながら、すべて雪の壁の登攀であった。

七時四十二分、頂上を望むことのできる、比較的緩傾斜の広い尾根に出た。三人とも、この五時間ほどの気を使った登攀にへとへとにばてていたので、ようやくのこと、この立ったままで歩ける傾斜に辿りつけたことを大いに喜んでた。雪面を切り開いて座り込み、ビスケットを嚙り茶を沸かして飲みながら、この、静穏でこよなく美しい山の景観を満喫する。西側、三三三メートルの未登の尖峰は、斜面の陰にかくれて見えぬものの、とうに僕らの足下になった筈だし、そのむこう、ヘス、デボラーの特徴のある山容が、それを囲む山々に抜きん出て、ややかすんだ光の中で鋭い山頂をみせているが、ほとんど同じ高さにも見える。日を浴びて、輝きに満ちた三七六メートル峰の山嶺は、むしろ、僕らの位置より低い。その右手から背後にかけての無名の山々は、尾根を重ね雪原を抱き、氷河をその山麓にまとわせながら、近みから遠みへ遙かにつらなり、やがて、空の白くぼかされたきわに溶け入り、透明で陰濃い宙空の青さに続いているのである。

九時、僕らは出発する。形のはっきりした稜線は幅広く、ピッケルを杖にした容易な登行に変わったが、小規模なクレバスが随所に現われて来る。日射とその照り返しは暑いくらいだし、軟化した雪に足をとられてひどく歩きづらくなる。クラストが破れて足が落ち込むと、アイゼンには雪の団子が取付いてくるのが、重く、わずらわしいもので

あつた。

田村が後をふりむく。青く乾いた顔が疲労をはっきり訴え、もう、続けて登る気力のないことを教えていた。先程のテラスから大して登ってはいないのだし、考えてみれば、昨夜の八時からの行動だから疲労が蓄積するのは当然でもある。せっかく稼いだ高度が惜しい気もするが、僕らはいさぎよく踵をかえた。

十一時二十分、再び横になり、うつらうつらの仮眠。十五時、西からの霧が広がり出し、東面から押し寄せて来た濃く厚い雲の群と打つかつて混乱を起こし、気象の常態のわからぬ僕は大大心配した。悪化して雪でも降り出したりすれば、一日どころか、それが落着くまでは行動できないだろうし、日がかげり、濃い霧が雪面を這うように僕らを包み込んで来ると、ひどく不安になって、彼らのようにのんびり眠ることができない。シートを被り、体を折り曲げた僕は時間の経過を待ち望んでいる。少し寒い。

十七時、幸い、再び晴れてきた中を頂上へ向かって出発する。雪は固くなり、深く足を捉えることもなくなった。日本の山では今まで見たこともない景観であった。こちらから望む頂上周辺は、比較的緩い稜線のふくらみの頂点に、急峻なアイズビルディングが二重から三重になって、まるで、岡の上に頑強に造り上げられた白亜の城砦のようだ。尾根の両側面は、この氷壁群の下から急激に落ち込んで、トラバースし難いように見受けられたため、僕らは正攻法で、この複雑に入り組んだ氷壁の狭間、右手にのびるルンゼを登攀することに決めた。もちろん、頂上への可能性をもったただ一つのルートだったと思う。

城砦の下に到着した。高く、そり返るような氷壁の根もとで、僕らは登攀用具を体にぶらさげてもう一度上をふり仰ぐ。

トップを市村が攀っていく。高い湿度と強い風の影響なのだろうか、信じられないほどの密度で、氷化したえびの尻尾と板状の珊瑚に似た氷塊がルンゼ内部の全面を覆い、登攀のコンディションは一変した。急な、狭いルンゼ内で

確保しながら、一番後の僕は真上から唸りをあげて飛んで来る氷塊を避けるのに懸命になる。不確実なスタンスでこれが頭に当たったら実に危険だし、取付点の地形から考えて、ここで滑落でもしたら、南壁部の千数百メートルを一気にすつとばされるのだと思うと、緊張で自然に足が震えてくるのだ。

二ピッチ登った。ルートは左へ折れ曲がり、小さな雪壁をいくつか越えて上部のプラットフォームへ何とか出られそうだ。ルンゼが右手、突然空中へ切れてなくなっているのは、この部分の大氷塔もいずれば倒壊し、僕らの遭遇したようななだれの発生源になるのだろうか。

僕と田村はここで目覚ましい情景を見た。

トップの市村は、小規模ながら、えびの尻尾を鎧った不安定な壁を抜け出るために苦闘していた。夕刻の、西に傾いた日の光はちょうど上部のプラットフォームを横に走り、下から見ればスカイラインに当たるその縁のわずかな部分に一線を描き出していた。

「市村、様子はどうか」。

「悪いですが、何とかやれそうです」。

彼の振るうピッケルが日の光にきらめき、やがて、丸くくぐもった体が徐々にのし上がっていき、全身が氷壁の陰からゆっくりと光の中へ出た瞬間であった。彼の体は突然金色に輝きわたったり、めらめらと燃える炎になって周囲に放散したかのように見えた。目をこらすと、その一瞬に彼の姿まで包んだ炎は消えて、濃い藍色の空を背景にした彼の体を中心に丸い虹の輪がくっきりと描き出されていた。

実際にはほんのわずかな時間であったのだろう、彼の姿はたちまちのうちに視界から消えたが、僕は凝然としてその残像に酔っていたらしく、田村の呼び声にあわてて確保の体勢をとったほどであった。

セカンドに行く田村の影は消え、やがて、僕は上からのザイルに引かれてプラットフォームのへりに立った。高度

四千メートルを越え、目前わずか百数十メートルの所に、日に輝き黒い空を背にして立ったドーム状の山頂があった。未登のヘイズ南峰を南稜から初登、魅惑的なその文字の羅列が僕の体の内部でふくらむ。後、ほんの少しの時間と容易な登行に堪えればいいのだ。僕はさりげなく言う。

「何とかやれそうだな、慎重に行けよ」。

風がやや吹き出してくるが、障害になりそうなものは既に見当たらなかった。変哲もない雪の隆起が二ヶ所ほどみえるが何のことはあるまい。僕は、わずか五十メートルほどをコンティニユアスで、その先は、これまで通りスタカートで行くことにする。

時計は二十時少し前だ。僕は小さなクレバスを回避し、またぎ、彼らの踏み跡を忠実に辿って行きさえすればよいのだ。一ピッチを終え、市村は数メートルの瘤を越えた。山頂は陰になって見えない。ザイルの伸びは止まり、動かなくなった。僕は、日影の風の寒さと期待感に身震いする。

市村の声がよく通らぬ。田村が上がった。大きなクレバスが真横に走っているという。僕はその数メートルを登って、再び山頂の見える台地の上に出た。

南峰の頂上は残照を浴びたその西面をひときわ明るく空に削して、正に指呼の間にあつた。高さにして三十メートルか。いや、もっと低い、わずか十数メートルに過ぎないかも知れぬ。僕は思った。

そして、僕の心の中では、先程の登頂への期待感が急速に冷えていった。

クレバスの幅はほぼ三メートル、もつとも近接した部分でも優に二メートルの間隔で、おまけに向こう側の縁は、僕らの立つ台地のへりから二メートルは高く、むき出しになった内壁には、あの、氷化したえびの尻尾が密集し、オーバーハングしたその下部分には十数本の氷柱が垂れ下がっているのではないか。

僕は、左手を見やり、そして右に歩いた。何とか両側面を確かめようとしたのだが、実際には見きわめること

は不可能であった。多分、この山頂に接近する折に見た氷壁のように、垂直に切り立っているであろう。クレバスの底は深く暗く、定かには見えなかった。

長いザイルを引いたまま後ろに下がってふり返ると、山頂は、残照のやや黄色味を帯びた光を反射して、暗い空の中に浮き漂っているかのように見えていた。

いかんともし難し。僕は心中そうつぶやいていた。ひどく古い言葉だ。甲板に雪の塊を盛り上げた達磨船に似た頂稜、僕は海面からその舳先を見上げ、数少ない登攀用具に頭を巡らし、何か、とつもなく突飛な方法でそれを登り切ってしまう空想もしていたのだった。そうだ、たった一人だけ、向こう側に取りつきさえしたら。

「下降して他のルートを探しますか」。

市村が言った。無理なことであった。田村は黙ったままザイルを握っていた。

「ちきしょう、雪さえ続いてりやここだって頂上だっていえるのに」。

そう、雪さえついていけば、息をとめてでも駆け上がってみせる。せめて、クレバスそのものに段差さえなかったなら。

「そうだ。俺たちにとつたら、ここは頂上だと思えばいいんだ」。

僕はそういいながら、なによりも三人が無事にベースキャンプに帰りつくために、彼らの落胆の度合いを可能な限り少くすべきだと考えていた。装備そのものはもちろんだが、技術や体力の点からいっても、既に、これ以上のことを彼らに期待し命令することはできない。そして、それは僕自身にとつても同様なことであった。

僕の目は頂上へ吸い寄せられ、引きはがすことができないうた。何のためにここまで登って来たのだろう。僕は、この、わずかに数十メートルしかない山頂への距離と、遙かな日本への距離を思っていた。なだれに捲き込まれて叫んでいた自分の声、山稜に刺し込んで来た赤い標識旗のはためきの音。意味もつながりもないそれらが僕の脳裏

に広がり、そして消えた。唇は乾き、足の筋肉は小刻みに震えていたのだ。

二十時三十五分、僕は下降にかかった。僕はまたラストになる。

「さあ行け、慎重に行けよ」。

僕は歩き出す。

既に後ろになった十数メートルの高さは、影絵のように僕の頭の中に張りついてしまっている。これでよかつたのだろうか。他に何か策があったのではなからうか。

零時二十分。南稜の最端部で僕はラーメンを煮、三等分してその熱さを腹の中へ流し込み、ザイルを結びあわずに、三百メートルの雪壁を黙ってくだる。

南壁は静まりかえていた。僕はガリーのわきにしたたる水に喉をうるおし、南東の無名峰に新しい朝の日が当たり始めるのを眺め、下降の困難がほぼ終りに近づいているのを感じていた。

あの、死にも狂いになったなだれの跡をくだる。田村の眼鏡が壊れずに見つかった。彼は実にうれしそうに、それを丁寧に拭いて掛ける。さあ、いまま少した。

関門と呼んだ、上部プラトーと下部のリッジを結ぶ雪壁部は崩壊寸前の様相で、下降した僕らが再び登攀を繰り返すことは不可能に近いことを教えてくれていた。

ア。ザイルで最後の僕が空中へ身をのり出した。

ヘイズ南峰への登攀は終わったのだ。空中へ漂うかのような、未登の、わずか十数メートルの頂稜を残して。

僕は今、テントの中にひっくり返ったまま、手首に指を当てて脈の調子をみている。今夜からの計画、この西側に鋭くきり立った無名峰をやるためには、早く回復してくれなければ困るわけだ。

チューレン・ヒマール西稜（一九七五年）

中島 信一

チューレン・ヒマールへ転進

チューレン・ヒマールを未踏の西稜から登ることになった背景には、それなりの理由があった。

明治大学とそのOBで構成する炉辺会にとって、この遠征は一九六五年のゴジュンバ・カン以来、ひさびさのものであった。過去に経験してきた、一九六〇年のアラスカ、マッキンレー登頂は、宿願であったヒマラヤ遠征の礎えとなり、ゴジュンバ・カンの初登頂は、めざす八〇〇〇メートル級のジャイアンツへの足掛りとして、それぞれの遠征が例え独立した個性、意義を保持していたとはいえ、より大きな目標に挑むための道程として、深い関連性を秘めていたことも、また事実である。それらは一九七〇年の日本山岳会エベレスト隊に七名の炉辺会員が参加で

きたことにも通じていると思う。

一九七二、七三年と連続して明大山岳部が起した遭難は、一時的ではあったにせよ学生の登山活動を中断し、学生、OBが原点に立ちもどり、深い反省と地味な研究に本気になって取組まなければならぬ低迷期となっていた。このような実情の中から、やがて若いOBが中心になってヒマラヤ遠征の計画が芽ばえ出してきた。したがって、今回の遠征は、例えゴジュンバ・カンの経験があるとはいえ、もう一度、七五〇〇メートル級の登山にじっくりと取組み、将来ジャイアンツをめざすための基礎となるような山登りを考えていたため、目標とする山は当初から七五〇〇メートル級の、出来れば未踏峰の山を対象にしていた。

ダウラギリ5峰（七六一八メートル）は、この条件を十分に

満たし、特に北面からのルートは未知な面が多く魅力的であった。登頂の可能性については、北極圏単独横断という大計画に取組んでいた植村直己が、その多忙のあい間をさいて、快よく協力してくれ、一九七四年ブレ・モンズーンに西村と長谷川をともなうて、ダウラギリ5峰北面の偵察を行なってくれた。偵察の結果、登頂の可能性は一段と強まり準備にも拍車がかかっていった。しかし、荷物の出荷も終えた十一月になって突然、ダウラギリ5峰北面一帯はネパール国内の事情により、入城禁止措置がとられたため、土壇場へきて転進を余儀なくされ、チューレン・ヒマールをめざすことになった。

明治大学チューレン・ヒマール登山隊は、次の者で構成された。

- 隊長 中島 信一(三十六歳)
 隊員 麻生 惇巨(三十二歳、会計・庶務)
 " 西村 一夫(三十歳、食料)
 " 近藤 芳春(三十歳、記録・写真)
 " 長谷川良典(二十七歳、装備)
 " 町 俊一(二十七歳、輸送)
 " 河野 照行(二十三歳、渉外)
 " 坂本 純一(二十四歳、食料)
 " 和田 耗一(二十二歳、装備)
 " 浜口 欣一(三十三歳、医療)

浜口ドクターは、慈恵医大山岳部OBで、私たちの懇請に応じ、参加していただいた。和田は明治大学山岳部の学生で、他はそのOBである。

ブズンゲ峠で十二日間費やす

隊荷を船便で送ったため、一九七五年一月十七日に町がカル Катタへ向かい、二月二日荷物とともにカトマンズへ入る。次いで長谷川が二十一日に発ち、町と合流し、チューレン・ヒマールへの転進にともなう若干の荷物の梱包替え、整理に当たった。

本隊八名は三月五日、パンコック経由でカトマンズ入りした。すでに先発が雇ったサードーのアヌー以下シェルパ五名、コック、それに政府連絡官らとトラック二台、マイクロボスに乗り、三月八日ボカラへ移動する。

私たちの隊に参加したシェルパ等は次のとおりである。

- サードー アヌー(二十九歳)ナムチェ
 コック アン・カミ(三十二歳)ナムチェ
 シェルパ ドルジェ(三十九歳)ブルテ
 " ペンバ・ノルブ(四十歳)グミラ
 " プルパ・テンジン(三十七歳)ターメ
 " ハクパ・ドルシェ(二十七歳)ザロック
 " ペンバ・ラマ(二十一歳)ジュンベシ

キッチン・ボーイ　ダワ・ノルブ（二十一歳）　ターメ・タン
政府連絡官　N・B・シジャパテ（二十一歳、陸軍中尉）

今年のプレ・モンズーンには、ポカラを基点にキャラバンを

開始する登山隊が多いため、ポーター不足を心配していたが、むしろ予定数を上まわるポーターが集まり、キャラバンは計画どおり、三月十三日にスタートさせることができた。キャラバン開始時のポーターは二三人で、隊荷は約六・五トンである。

ポンデュール、ギジャンを経てクスマでカリ・ガンダキへ入り、ベニからミヤグデイー・コーラをたどり、グルジャカーニの通過も順調にはかどって、三月二十四日ブズンゲ峠（四五〇メートル）の急登手前のダルシン・カルカへ入った。この日

夜半から降雪にみまわれ、二十五日の朝は一面銀世界と化した。ポーターの大半は雪を見て、村へ帰ることを強く希望し出したが、とにかく半数近いポーターを動かし、峠下の三九〇メートルのデポ地まで荷揚げさせることができた。しかし昼過ぎには再び雪が降り出したため、ローカル・ポーターとしてカトマंडズで契約した者（キャラバン中はポーターとして雇う条件付き）十名とシェルパニなど八名が残った以外全員解雇せざるを得なかった。

一週間後の三十一日、若干の荷物を残し三九〇メートルのデポ地まで進み、翌四月一日にやっとのことでブズンゲ峠越え

をはたしたが、大半の荷物はデポ地に残ってしまった。峠越え前の三十一日には、西村が風邪をこじらせ、体調を崩したため、浜口ドクターに付添ってもらい、静養のためダルシン・カルカへ逆もどりするという事態も発生した。

雪どけとともに村からポーターたちが登ってきたため、その後の輸送は急速に進展し、予定より遅れること十二日間、とにかく四月七日にカペ・コーラ源頭のモレーンの末端にBC（四一〇メートル）を建設した。九日には西村も全快し、浜口ドクターとBC入りをはたし、残っていた隊荷もすべて到着した。私たちのBCの対岸にはダウラギリ4峰をめざす大阪府山岳連盟隊（西前四郎隊長）がすでに二月にBCへ入り、本格的な登山活動を展開していた。

C3 建設を前にBCで休養

四月九日、麻生以下三名がC1偵察を行ない、翌十日から荷揚げを開始する。C1は十一日にカペ・コーラ左俣最奥のモレーン上（四七〇メートル）に建設し、麻生以下五名が入った。C2へのルートは距離的に有利なアイス・フォールを突破し、一ツ目岩へ出ることも試みたが、結果的にはアイス・フォールの状態がおもわしくなく、危険なため東大隊などがたどったコース一本にしぼり、ルート工作を進めることにした。ルート工作は荷揚げを円滑に行なえるよう岩壁取付点付近に七メートル



のジュラルミンのはしごを付けるなど念入りに行ない、十四日には西村、近藤がアイス・フォール上のプラトー基部（五一〇メートル）まで達した。この段階で半数づつ交代でB・Cへ下り、一日づつ休養をとる。

第二段階は、C 2（五六〇〇メートル）の建設と西稜へC 3（六二〇〇メートル）を出すことを目標に、十六日から行動を開始した。天候もやっと安定してきた様子で心強い。

十八日、近藤、長谷川、河野、ドルジェが一ツ目岩上のC 2予定地まで達した。C 2までは距離が長いので、荷揚げはプラトーへ出た地点（五三〇〇メートル）にデポジットを設け、逆ボッカも併用した荷揚げ作戦を行なうことにした。十九日、麻生、近藤、長谷川、河野、ペンバ・ラマ、ハクパは、西村以下六名に支援されC 2へ入った。しかし、サポート隊は帰路、町がデポ地付近でヒドン・クレバスに落ち込むという事故に遭遇してしまった。町はクレバスへ十メートル近く落ちたが、アンザイレンしていたことと、西村以下三名もの隊員が近くにいたため、容易に脱出することができた。しかも落ちる姿勢がよかったのか無傷に近い状態で救出でき、自力でC 1へ帰還できたことは幸いであった。

二十日、麻生以下三隊員は西稜へ向け、ルート工作を開始した。西稜C 3へは一ツ目岩をめがけるように急角度で西稜から派生したパットレスを登ることにする。彼らはこの日順調に高

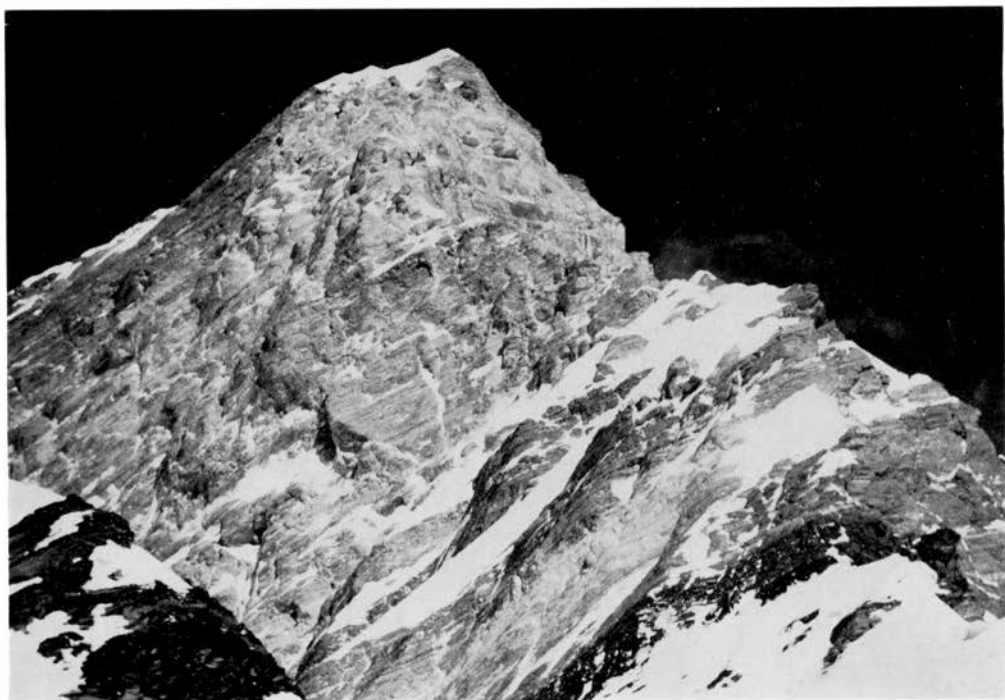
度をあげ、パットレスのほぼ中間にあるピナクル（五九〇〇メートル）まで達した。しかし、これより上部に難所が多く、一段と険しくなるため、ルート工作はさらに難航していった。

二十二日、近藤、河野は大いに健闘し、やっとのことでパットレスをぬげきり、夕やみせまる午後四時に西稜線に達した。西稜までの状態は非常に悪く、荷揚げを開始するまでには、さらにルートの整備、補強になお、時間は費やさなければならなかった。隊員、シエルパの疲労度は日増しに強まり、また体調を崩した者も続出したため、C 3建設を目前にして、ひとまず休養をとることにし、二十五日、全員B・Cに下り二日間の休養をむさぼった。

七千メートルにC 5を建設

B・Cでの二日間の休養は効果的であった。第三段階では、西稜線上にC 3、C 4、C 5と三つのキャンプを建設し、登頂攻撃態勢に入ることである。二十九日、登攀を再開した。

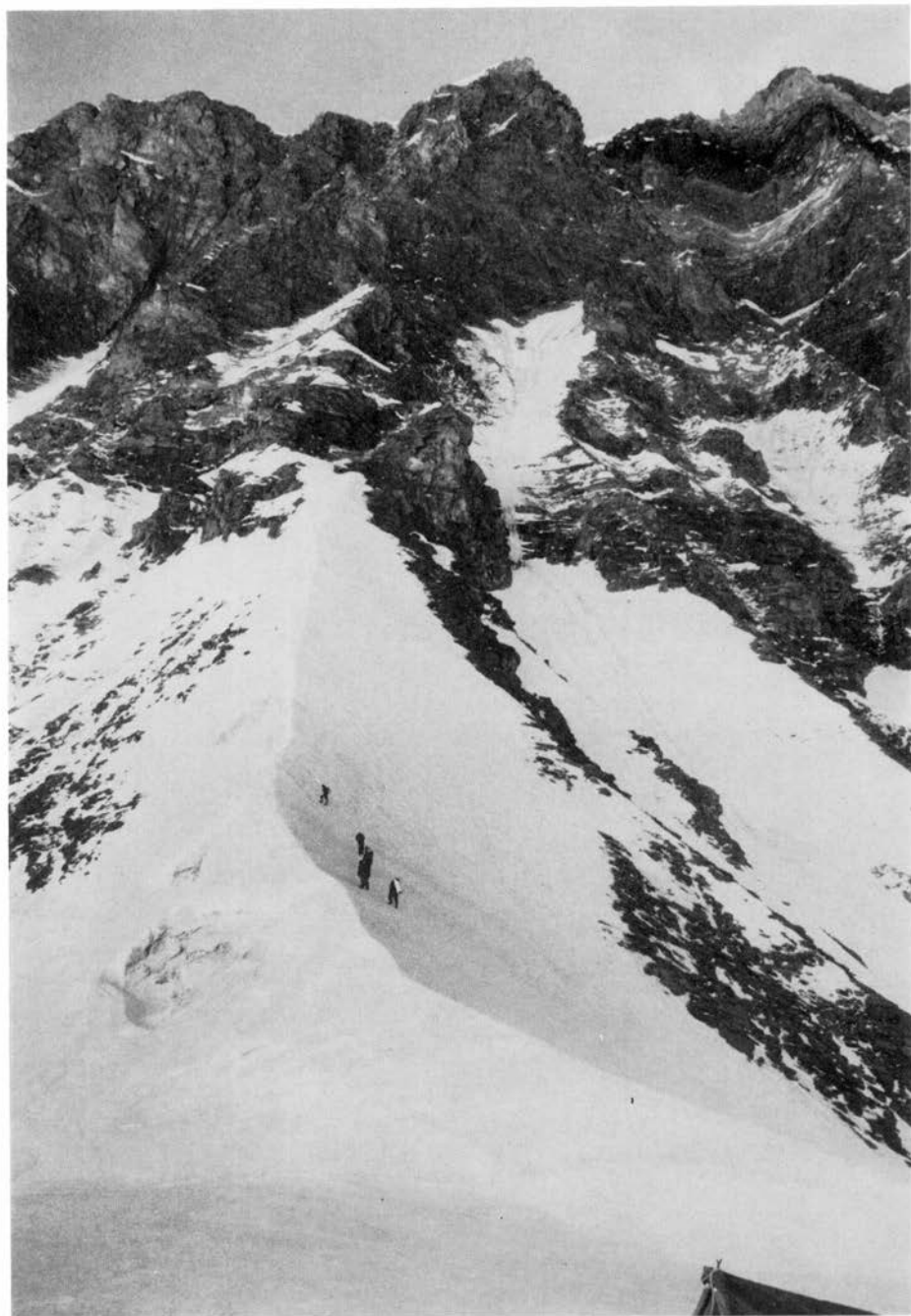
すでに、C 1への荷揚げは完了したもののC 2へはルートの状態、距離の問題などから荷揚げの予定量をはるかに下まわっていた。C 1以上の一人平均の荷揚げ量は隊員、シエルパ、ローカル・ポーターとも十五キロ程度がせいぜいであった。荷揚げを円滑に行ない、登攀に支障をきたさないようにすることは、第三段階の目標達成に欠かせない重要な問題であった。そこで、



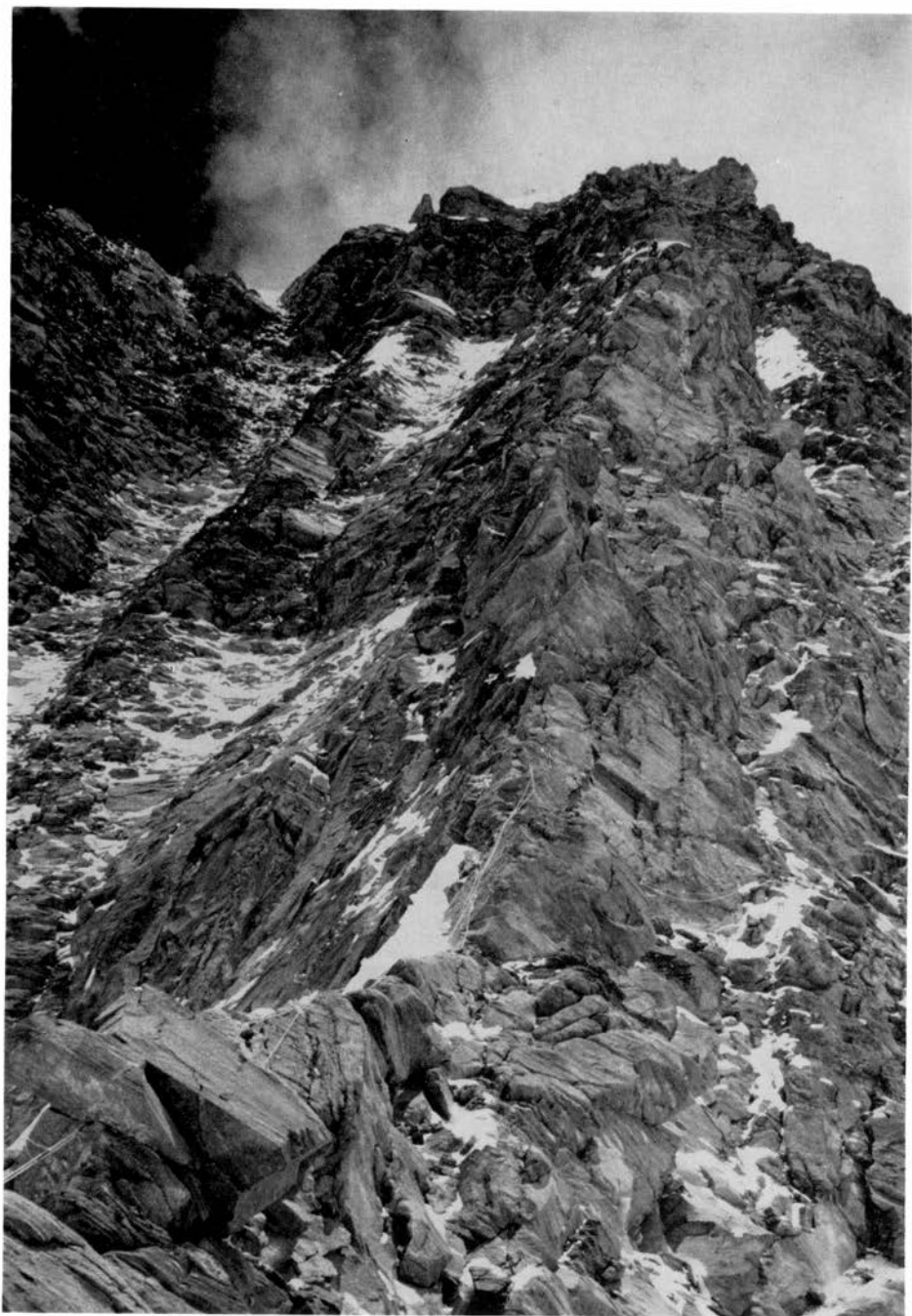
チューレン・ヒマール頂上岩壁



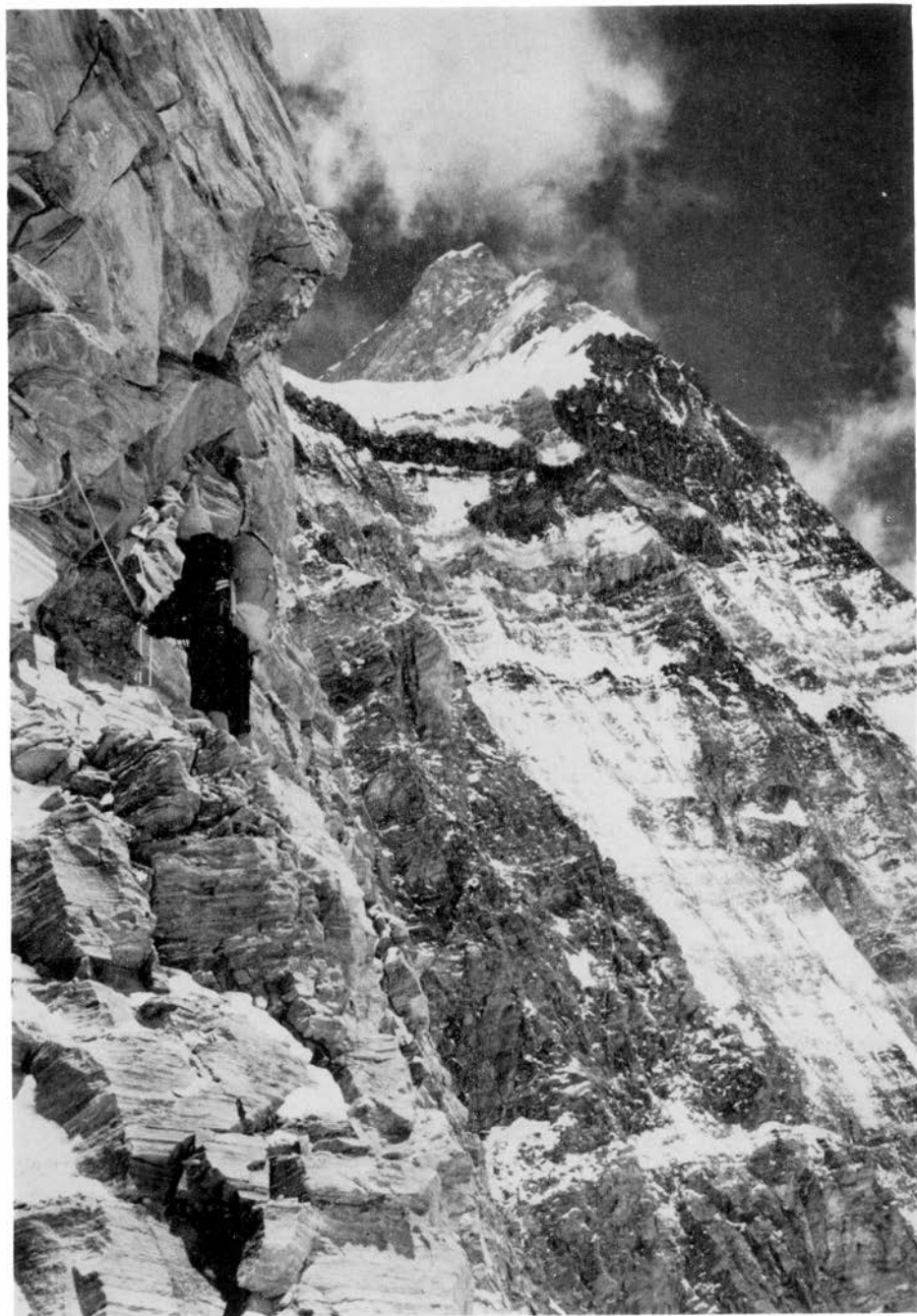
第3キャンプより見たチューレン・ヒマール西稜



西稜へのバットレス全景



西稜へのパットレス上部全景



西稜へのバットレス核心部にて

C2荷揚げを強化するためローカル・ポーターの半数(五名)をC2に上げ、逆ボツカに当たさせた。しかし、それでもなお不十分のため、C2以上の荷揚げ量は必要最少限にとどめるよう修正を加えざるを得なかった。

C2より上部は、ルート工作はすべて隊員が行ない、シエルパは荷揚げに当たらせることにした。西稜に達するパットレスにはジュラルミンや縄ばしごを取付けるなどルートの状態は一段と安全性を増したものの、通過時は常に気をゆるすことができないほど、困難で、いやなルートであった。三十日、私と浜口ドクターを除く全隊員、シエルパはC3への荷揚げを開始し、翌五月一日、待望のC3(六二〇〇メートル)が西稜に建設でき、麻生、長谷川、河野、坂本、アヌーそしてペンバ・ラマの六名が入った。C3はアドバンス・ベースキャンプとしての重要な役割をはたす場であり、このキャンプが立ったことは大きな意義がある。

急峻な氷雪と岩の西稜にフィックスが、ゆっくりとしかも確実に延び出した。C4建設の見通しが立つのを見はからって、三日に長谷川、河野、アヌーをC1まで下らせ、代って近藤、町、和田を最前戦へくり出す。

C4(六六〇〇メートル)は、予定より一日遅れて六日に建設できた。C4は下部イエローバンドの一段上で、雪をけずり四人用テントがやっと張れるほどの狭い場所である。C4建設

は苦しい状態であった。前日には麻生、町、和田とシエルパ二名のほか、第二次攻撃隊要員の近藤、坂本も加わって、ルート工作と荷揚げを行なったあと、麻生、テンジンのサポートにより、町、和田、ハクバの三名がC4入りをはたした。彼らの疲労は日々蓄積していくことは明白だ。それでもトランシーバーに流れる声は張りがあり、逆に私の方が励まされてしまうほどであった。この日(六日)第一次攻撃隊に長谷川、河野、アヌーの三名を選びC1を出発させ、第二次攻撃隊の近藤、坂本、ペンバ・ラマをC1へ下らせた。しかし、C4建設のよろこびもつかの間、六日の晩は強風が吹き荒れ、C1でさえ夜半テントのポールをまげられるなど騒がしい夜を明かすことになってしまった。翌朝、明るくなるのを待って、双眼鏡で赤いC4のテントを確認し安心したが、午前八時の定時交信でC3に被害が出たことを知り騒然となる。C3を守る麻生、テンジン、ドルジェは、昨夜の烈風につぶされたテントで、一睡もせず身を守ることに精一杯の状態を夜を明かした。

七日、他の行動をすべて打ち切りC2の西村に救援行動に入るよう指示し、河野以下シエルパ二名とローカル・ポーター三名がC3へ急行する。麻生からの報告によるとテント二張ともフレームが折られ、烈風でバック・バック四台と行動用ザイル一本、その他若干の登攀具と炊事用具が飛ばされた程度の被害で、今後の登攀にさほど影響のないことが知らされ、ホッとす。

なお、幸運にもバック・バックはC2の近くに落下していたため、西村たちが三台回収できた。

昨日の混乱がまるであつたように八日は無風快晴である。ローテーションの修正は余儀なくされたが、この段階で大幅な変更は好ましくなく、最少限にとどめるよう工夫した。C5の建設が遅れることは明らかだが、町、和田、ハクパは昨日の停滞が休養のたしになったようだ。町たちは、イエローバンド上部岩壁で苦戦したが午後四時過ぎ、これを乗越え六八〇〇メートルまでルートを延ばした。麻生らC3隊も奮起しC4へ荷揚げを行ない、C2に温存していた長谷川はC3へ上った。また第二次攻撃隊はC2へ向かう。

しかし、西稜はきびしくC5予定地の七〇〇〇メートルまでのルート工作は思いどおりには進まなかった。九日、疲労気味の和田とハクパをC3まで下げ、第一次攻撃隊の長谷川、河野をC5のルート工作に投入しなければならなかった。最後のつめに来て彼らを最前戦に出し、さらにアタックさせることは理想的なアタックにはならないが、そうしなければならぬほど、隊員、シエルバの疲労は蓄積していた。さらにサーダーのアヌーは使えなくなり、ドルジェ、テンジンもまったく精彩を欠き、土壇場に来てペンバ・ラマ以外のシエルバは西稜から姿を消してしまい、あとは隊員だけの頑張りしか残されていなかった。

アイス・フォールの雪崩も一段と大規模になり、岩壁の水溜

もやがて流れに変わった十二日、麻生とペンバ・ラマにサポートされた長谷川、河野がC5へ入った。アヌーの脱落で第一次攻撃は二名で行なうことになったが、最終キャンプのC5（七〇〇〇メートル）は雪びの影にひっそりと立ち、アタック態勢がまがりなりにも完了した。C4には麻生のほか近藤、坂本、ペンバ・ラマが入り、C3には町と和田それにC2から上った浜口ドクターとテンジンが、そしてC2には西村以下シエルバ二名とローカル・ポーター一名が待機し私とアヌー以下ローカル・ポーターがC1に控える布陣である。

未踏の西稜より登頂

十三日朝は星が望め、無風である。「では頑張ってください。」午前五時三十分、長谷川と河野は攻撃を開始した。午前十時を過ぎるころガスがたれこめ、西稜はすべて雲間にかくれてしまった。午後一時、長谷川の声がトランシーバーに飛び込む。「頂上直下のルンゼに入りました。あとはガレ状の比較的やさしい岩場を越すと頂上へ通じる雪稜へ出ると思っています。一時間もすれば雪稜へ達すと思います。」午後二時三十分「まだ雪稜へ達しません、もう目の前です。ビバークに好適な場所もこの近くにはたくさんあり心配ありません。もうここまで来た以上、攻撃を続行させてください。」このとき、頂上からの声を期待していた私にとって、若干肩すかしの感があったが、迷うことなく

攻撃続行を命じた。長谷川は「次は頂上から連絡します。」と自信に満ちた声がトランシーバーに伝わる。長い沈黙にはやる心を押えることはつらいものだ。

「ただいま頂上に着きました。河野も泣いています。みなさんありがとうございました。」長谷川の声に沈黙はやぶられ一瞬歡喜したものの、それもすぐ緊張へと移行した。

午後六時三十分、七二〇〇メートルまで下ったところで「吹雪のため視界が悪く、ビバークに好適な岩穴があるので、ここに泊ります。」二人の声は意外に明るく、元気なことは、私たちに安堵感を与えるに十分であった。

十四日は、第二次攻撃を中止し、全キャンプとも長谷川、河野の收容態勢に入った。しかし、三二〇〇メートル用意したフイックス・ロープは、すでにC5までで使い果たしていた。さらに荷揚げを必要最少限に押えたことから、行動用登攀具にもゆとりがなく、C5から上部への支援態勢はさほど望めず、二人のC5帰還を待つ以外に得策はなかった。午後三時過ぎ二人はやっとC5へ帰ってきた。このキャンプには近藤、町、坂本、和田それにペンバ・ラマが出迎えに上っており、彼らは時のたつのも忘れワイ、ワイやっている様子がトランシーバーを通じて感じとられるとき、次の決断をせまられていた。

十五日、全員最後の力をふりしぼり、近藤、坂本、ペンバ・ラマの三名を頂上に向わせた。しかし、ピッチは上らず午後四

時三十分第一次攻撃隊がビバークした地点に到着したところで行動を打切らせた。翌十六日は頂上攻撃を断念させ、全キャンプに第二次攻撃隊を收容後、撤収態勢に入るよう指示した。近藤たちは無事帰還し、ただちにC4、C5が撤収きれ、西稜にはC3を残すのみとなった。十五日のラジオ・ネパールはモンスーンの始まりを伝えていた。この兆候だろうか、チュールン・ヒマールはこのところ顔を見せることが少なくなっている。しかし、さほど天候を気にする必要はなくなっていた。

十七日、隊員、シェルパたちは背負えるだけの荷を満載し、フラフラになりながらも充実感、満足感を顔面に漂わせ、全員無事BCに帰ってきたとき登山は終わった。四月九日から数えて三十八日ぶりのことである。

帰路キャラバンは、七十二人のポーターにより、二十三日から開始し、隊員はドルパタン経由で六月三日にボカラへ帰り、五日カトマンズへ到着した。

あとがき

四五〇〇メートルのブズンゲ峠越えでベース・キャンプ建設が十二日遅れたことは、逆に隊員の高度馴化の面で効果的であった。計画では西稜線に四つのキャンプ（第六キャンプまで）を設ける予定でいたが、登山日数の短縮、荷揚量の軽減をはか

るため、第二キャンプから直接、西稜バットレスにルートを求めることにより、キャンプを一つ減らすことを実践し、この問題を打開した。したがって、登頂はほぼ予定どおり遂行できたが、振り返るに、やはりいくつかの反省点が残る。

計画では、三隊六人から八人の登頂者を予定していたが、実際は一隊二人にとどまった。隊員の高度馴化は比較的順調に進展していたが、最後の詰め段階でローテーションに狂いが生じ三登まで試みる余裕はなかった。これは、第四、第五キャンプの建設が予想以上に難行し、第一次攻撃隊二人は第五キャンプを自らの手で建設し、アタックを行なう結果となり、登頂後七二〇メートル地点でビバークを余儀なくされたことは、理想的な展開ではなかった。七〇〇メートルに最終キャンプを設けることは予定どおりであったが、頂上まで残り三七メートルに予想以上の時間を費やしたことは、ルートの困難さもさることながら、疲労累積にともなう登攀速度の低下もその要因になっていたと思う。

西稜線では、常時七人の隊員が行動できたが、七〇〇メートル前後から上部の行動となると別である。全員がヒマラヤ初見参であることは、当然七〇〇メートルの高度を経験しておらず、この高度の馴化を十分行なうてからのアタックは望めなかったため、登攀速度の減退はむしろやむを得なかったといえるだろう。七〇〇メートル付近の十分な高度馴化がなされる

い状態で七〇〇メートル以上の登攀能力と速度をいかにして保つか。このあたりに、七〇〇メートル級の山を攻撃する難かしさが秘められているように思う。

ビバーク地点は頂上へ向かう途中で確認しておいたため、ビバーク自体さほど不安はなかったが、第二次、第三次攻撃を試みるに際しては非常に不利な一面を残した。即ち、登頂の翌日は二人の収容に全力を傾注しなければならぬため、第二次攻撃は翌々日に延期せざるを得ない。したがって、それだけ余分な負担を背負うことになり、志気にも若干の影響を及ぼすことは否めない。これを支える各キャンプの負担も当然重くなってくる。第二次攻撃隊を三人編成で決行したが、二人編成でこれだけ時間を費やしたのだから、二登の困難さは承知していた。しかし、これは登頂よりもむしろ七〇〇メートル以上の経験をより多くの隊員に積ませるため、敢えて決行したといった方が正しいだろう。

反省する点はこのほかにも多々あるが、隊員、シェルパも含め、全員が終始、良好なチーム・ワークのもとで、気持のよい登山が展開できたことは、まったく幸せであった。

郷土富士考

新井 清

はじめに

富士山は、わが国土の最高峯であり、その円錐形のコーニード火山の美しい姿は、古来より日本人の心の山となつてゐる。富士山に抱くあこがれの念は、詩歌に絵画に彫刻に芸術作となつて示されるのみならず、科学的の調査の最も良く行われている山岳でもある。富士山への信仰にも似た心と郷土愛とが結びついて富士に似た形の山は郷土の名を冠した富士として郷土の誇りとした山々が全国に数多くある。この稿は、それらの諸国に散在する郷土富士の起源、地質上の分類と景観の特色を述べ、郷土富士としての必備条件を探り、神体山や修験道の信仰の山々を論じ、あわせて交通の要路を扼する拠点の郷土富士が戦国乱世には砦や山城と化し、その攻防の跡を訪い、諸国富士巡礼に

よつて得られた知見をもとに、諸般に亘つて小論を試みた。

一、郷土富士の起り

富士山へのあこがれから、郷土に存在する富士型の円錐の山に郷土富士が現われる。国土地理院五万分の一地図「三田」に有馬富士と記載されている円錐の侵蝕残丘が恐らく最も古い歴史を持つ。現在山頂に四等三角点が設けられ標高三七三米だ。この山の北に花山天皇（九六八—一〇〇八）が退位（九八六）落飾されて入られた花山院がある。有馬富士山頂から鮮杉の木立の中に寺の屋根が見え、入山を許されなかつた官女が尼になつた尼寺部落が眼下にある。

有馬富士ふもとの霧は海に似て

波かときけば小野の松風（花山院集）

晩秋から初冬にかけて、この辺りは朝夕に霧がたちこめ北方の小野から松籟を呼ぶ。有馬富士の南に福島大池があり、有馬富士の姿を水面に映す。御製は叙景であつて凡そ千年前に有馬富士は周知されていたと見なされる。鎌倉初期には越前の文珠山が西行法師によつて歌われる。

越に来て富士とやいはむ角原の

文珠がだけの雪の曙

角原富士の名は西行の命名と伝承されるゆえんである。越の大徳と称された泰澄大師（六八三—七六七）の開基で文珠菩薩をまつる堂まで道があり、洞窟二つをくぐつて奥ノ院に達する。有馬富士も角原富士も山裾に古墳があり、山頂付近に岩盤がある共通点が指摘できる。室町末期から安土桃山期にかけて、京の都から比叡山を眺めて、富士山のイメージを重ねる詠草が多く現われる。

ふじのねをここに都の大比叡や

小比叡の雪の明ほのゝ空（言継卿集）

重ねある不二をさこそと大比叡の

高嶺をみてぞ驚かれぬる（文明将軍家百首）
（十五年）

ふじのねのけふりもそれと面影に

立つや小比叡の雪の白くも（後柏原院）

不二のねも都の山は大比叡を

重ねあけつゝむかふ心は（慶長千首和歌）

この様な経過をたどつて後水尾天皇（一五九六—一六八〇）によつて都富士と詠まれる。

みやみや都の不二の空はれて

月もうへなき秋の光を

江戸期に入って富士講の勃興につれ郷土富士が続々登場する。幕末から明治初期に亘つて北海道のマツカリヌプリの蝦夷富士、千島列島の北端、阿頼度島の富士も世に顕われ、名山富士を中心に、千島、北海道、本州、四国および九州にわたつて、高低難易、国名、郡名、島名、庄園名、郷名を頭に冠むつた富士、小富士、片富士が日本列島に綺羅星の様に点在し七十余座を数えるに至つた。

二、郷土富士の分類と景観

郷土富士には富士に似た型式すなわち円錐形であることが地形上の必須条件である。もう一つは富士山の祭神であるコノハナサクヤ姫を祀る神体山としての郷土富士がある。前者がほとんどで、後者は稀少、両方を兼ねた山は富士ノ妹と愛称されている。前者の場合について、ここに地質上の分類と景観をしるす。

(一) 火山の郷土富士

(イ) コニーデ型 成層火山で噴出熔岩が噴火口を中心に堆積して富士山の様な美しい円錐の山体を作る。千島火山脈の千島富士、新知富士および得撫富士は千島に属するコニーデの美しい山である。地図が青色に塗りかえられる時を気永く待つこととして、北海道にこの火山脈が起こした雄阿寒岳は阿寒湖畔から観ると素晴らしく、雌阿寒岳の寄生火山に名づけられた阿寒富士よりも堂々としている。阿寒富士は渡島富士(駒ヶ岳)とともに郷土富士中この二座が活火山である。雌阿寒の噴煙を見おろしながら火口壁を伝う気持はまた格別のものである。雌阿寒は時に爆発するので「登山禁止」になる。折角行ってもあかんだ。駒ヶ岳の火口壁は広く最高点のピナクルの登攀は実に愉快である。蝦夷富士は全く富士山の弟分で高山植物は、ほかに多い。お鉢廻りをしたあと、雪田の畔りのお花畑に寝転んでいるとエゾシマリスが顔を出す。利尻富士は海上から見る姿が堂々としていて、山麓に雪が光る。海岸から正味千七百十八米の登りで熊の必配が無いので夜登りをしたが雨が止んだ朝、美しい虹を見て頂上に達した。津軽富士(岩木山)は鳥海山と良く似ており山頂部にトロイデを寄生させている。弘前方面から見る姿が均整とれて美しく人文的色彩は濃く、南部富士(岩手山)は盛岡から見るのが良い姿で花輪線の中からは左肩がいかつく男性的だが南部片富士といわれる山となる。津軽富士の眺望を海峡の彼方に遠く駒ヶ岳を望むことに尽き、南部富士

のそれは、陸奥の国の山岳展望であり、北方の王者の感がある。那須火山系の会津富士(磐梯山)は猪苗代湖畔から優美な姿であるが、北の裏磐梯から登ると一八八八年の大爆発の余燼とそのすさまじさをしのぶことが出来る。八〇六年の爆発の時に弘法大師が山神の怒りを鎮めに派遣された史実があり、裏と表の登山路の岐れ道に湧く「弘法清水」は丹後富士の「一杯清水」周防小富士の「金明清水」と同じく名にはじない。いずれも微酸性で岩盤からほとばしるものである。日光富士(男体山)の中禅寺湖に山裾を浸した姿はコニーデの成層火山の特色をよく示す。勝道上人の苦闘による開基で「入峯禅定」は初登山記。「船禅定」は中禅寺湖の探検であった。二荒神社の白木の門は八月一日に開かれ勝道上人の壮挙のルートがたどれる。八丈富士(西山)も山脚は太平洋の底に及ぶ。八丈島まで飛行機で飛ばせば一時間とはかからないが、春には相当荒れる海を船にゆられて行くのは流人達の身のうえもしのばれる。水平線はるかに富士山が山頂から双眼鏡でとらえられる。高井富士(高社山)の斜面はスキー場になっているし、信濃富士(黒姫山)はブナ、カラマツの森林におおわれて山上へ登って火山の実感がわく。若狭富士(青葉山)は若狭と丹後の国境となっている古いコニーデの火山で樹林におおわれて青葉山と言う名にふさわしく舞鶴湾が西の峯から見下される。佐世保湾を見下す佐世保富士とともに老書生にとって旧海軍軍港の要塞地帯を山上から眺める気

持は感慨無量である。東の峯に到つて若狭の海岸を遠く越前の岬まで見違かすとき、登頂の喜びがわき溢れた。九州の南端の開聞岳は薩摩富士として有名である。錦江湾の船中から望む姿は美しい。開聞登山口からトベラにサルオガセがまったり、アオキやシャシャンボの太木に南国を感じながら、洋上の桜島の噴煙を見て山を巻きながら登る。山腹を一巡すると巨岩の山頂で開聞神社の奥宮の小祠が岩盤上に在る。火口は岩石でうずまわっている。トベラとシャリンバイの密林には野猿がすみボスの「開聞太郎」が岩上で国見をしている。ピスケットを見せて呼ぶとかたわらへ来る野猿と食事をするのも楽しい。

(四) トロイデ型 鐘状火山で熔岩の流出の動きが少なく裾野が広くないのを特徴としている。諏訪富士(蓼科山)は郷土富士の中で一番高く二五三〇米である。頂上の肩の辺りから急に傾斜が増してトロイデだと感じる山である。温泉と高原と湖が揃ってバス道路、ロープウェイですっかり物見遊山化したのがヒュッテも立派になり身軽に登れる。早春の頂上で八ヶ岳を眺めるのが好きだ。越後富士(妙高山)もトロイデに属する。野尻湖上から眺めると裾野が長くコニーデに分類しても良さそうだと思うが、この山も燕温泉から登ると二重式の火山が判然とする。地獄谷に硫気が立ちこめ、岩場があり行者山の面影が残っている。北側には雪渓があり、湿原がある。妙高と火打山を結ぶ山行は初夏がまことに佳い。室生火山群の大和富士(額井岳)も

高さは八二六米であるが、この山の近くにスズラン自生の南限地があり、初夏は香りに満ち、秋は野の錦の中に大和国原を統べて大和富士の名にそむかない。多武峰は呼べば応じる指呼の間に在り、万葉の初瀬の山は隠国の小丘を重ねている。山辺の里はこの山の東麓にあって、山部赤人は故郷の富士の裾に眠っている。同じく室生火山群の伊賀富士(尼ヶ岳)は丸い頂の草山は長閑で、ヒバリが山頂近くまで嘔りワラビが芽を出す頃「春山浅酌」は素敵だ。室生火山群にはカブト岳やヨロイ岳があつて春秋にはしころの色模様を変える特異の山々であり、トロイデ火山の王国である。伯耆富士(大山)も出雲では出雲富士と言う。裾を日本海岸まで延ず姿は中国第一の名山である。この山は松江城の天守から眺めるのが趣がある様に思う。大山寺口から大山寺社へ詣で元谷道を登ると大山の北壁がクローズアップされて来るのは豪壮だ。尾根道の六合目へ取り付いて登る。大山キヤラボクの純林は遠くから見るとハイ松の様に見える。美事なものである。頂上の眺望は巡礼行は霧で駄目だった。九州の九重高原の山々も室生火山群と同じで九重火山群はまたトロイデ王国である。豊後富士(由布岳)はやや開析され東西の二峯頂があり西が高く三角点がある。東西の岐れのコルをまたえと呼ぶ。万葉集に詠われた名山だ。三月下旬大雪の日に登ると鎖場は少し緊張を要した。珍珠富士(湧蓋山)も由布岳の翌日登ったが、丸いドームの雪の頂上から見た九重連峯の素晴らし

さを忘れかねて、翌年同じ季節に大船山や阿蘇の峰々に遊んだ。富士巡礼行は温泉が麓に多いので、山へ登っては出湯に泊る旅ができる。

複式火山中の寄生火山である北海道の美瑛富士はコマクサの群落で足の踏み場がないほどであったし、榛名富士(榛名山)は榛名湖の眺めが佳く佐世保富士(烏帽子岳)は山頂の熔岩を見て火山を認識した程である。

(ハ) アスピーテ型 裾野が広く、標高が低いもので富士山に成り得ないものが多い。アスピーテ・コニーデとされる上田富士(飯士山)は越後の湯沢駅正面から国道を横切り、橋を渡って滝になっている川に沿って登ったが梅雨の増水で渡渉の繰り返えしで能率あがらず、数日後に岩原口から岩原スキー場に来て軽く登った。苗場山と谷川連峯のすぐれた展望台である。

(ニ) 円錐型で火山以外の郷土富士

(イ) 残丘地形の山。基盤の地層が侵蝕され抵抗の強い岩石層が残丘となったもので、玄武岩や花崗岩の山がある。北海道のマルセツプの町はそれから北に見える北見富士(一三〇六・五米)は印象的な円錐で美しく肩がなだらかな残丘で頂上部は広く天塩岳の絶好の展望台である。マルセツプから十三キロ、奇城岩のピークを見て、十三ノ滝、近くで自転車置き、川を廻行し尾根に取り付くまで急斜面を攀じる。サワグルミやハルニレの樹皮が無惨にはがれ、熊の糞が点々とし獣の臭いを再々嗅

ぐ。笛を吹きながら尾根を伝うのも踏跡は熊のものであった。緊張の連続のあげく、帰路に川床で仔連れの熊に不意をつかれ、杖を構えて睜目した。仔熊が立上った母熊にまわりついて、その狂猛な一撃をまぬがれ得たのは幸運であった。生物好きの賜物と感謝している。南方のルベシベ側に同名の北見富士(一二九一米)がある。ルベシベと層雲峽を結ぶ国道の四五号線停留所が登山の出発地である。円錐型のエゾマツ、トドマツの繁茂した残丘である。地図の登山路は全く消滅していて無加川の支流の廻行である。禁猟になってエゾシカはこの辺りに姿を現わし農家のビートを食い荒らしている。カラマツを畑に植えて家を釘づけにして離農する住民が増え、この辺りも同じであり、老夫婦と馬と犬のひっそり住む農家に荷をあずけて登山した。年に一組か二組位いの登山者が来て登頂に失敗してむなしく帰るといふ。体力は還暦を過ぎて急に低下しているが、沢筋を伝い、水の無くなるまで詰めシダ類から下生えのササに変る辺りで廢道に出て登頂した。木の間に見た雌阿寒岳の頂きと青空に立ち昇る噴煙の印象は忘れ難い。

音威富士(四七七米)は天上線と宗谷本線の分岐駅「音威子府(オトイネツ)」のプラットフォームから円錐形に黒々と見える。北大演習林研究所から美深営林分署へ廻って、入山許可書と腕章を貰う。天塩川に落ちこむ音威富士の川を廻行するよりも最近川沿いに出来た林道を選ぶ方が楽なので、車の通れる

カーブの多い山道を登り最後にネマガリタケのブッシュを分けて登頂する。小鳥と蝶の多い、低いが静かな山だ。天塩川に沿う村落風景と西南面の天塩山脈の美しい峯々の眺めは佳い。東北地方の三春富士(片曾根山)と加美富士(葉菜山)も共に侵蝕から残された五〇〇米余りの小山であり、葉菜山という名は葉師如来を祀ったのでこの名がある。関東地方では房総と常陸に小富士、富士、藤山および男体山の名を持つ山は、すべて郷土富士に数えられる。火山の日光富士と塩谷富士の他は皆準平原の侵蝕で造られた残丘であり、南側に三〇〇米の断層崖を持つ久慈の男体山は秩父古生層の地盤の上に花崗岩が抵抗して残った山だ。滝川の岩壁に懸る「袋田大滝」は低山地にある滝として高さ水量とも特筆に値する。中部地方では二二六八米の標高を持つ安曇富士の有明山は花崗岩の山で平安朝からの月の名所で歌枕の風雅の山だ。W・ウエストン師夫妻と石田吟松画伯が道連れになってこの山へ登り画伯の興味深いスケッチが遺されている。山頂の社も今は朽ち山道が荒廃しているのは惜しい。安山岩の山地に流紋岩の混入した角原富士も奇岩に富み、尾張富士も濃尾平野の中に目立つ残丘である。近畿の近江富士は古生層の上に角岩花崗岩が重なり美しい松の円錐の姿の中に露頭が見える。近江の国が陥没して湖となり、その土で富士山が盛り上り、余った土が近江富士となったという伝説は興味深い。雪の日のこの山の姿は松の緑に映えてまことに美しく、山頂の

岩に座して琵琶湖が展げ、そびらに雪の屏風を連ねる比良の嶺を眺めるのは楽しい。紀州富士も結晶片岩中に古い火成岩の露頭が目目され、岩のところでは磁石が狂う。山頂から眼下の紀ノ川の流れと蜜柑山の晩秋の風景を見るのがことに佳い。西へ移って、山陰本線の石見大田から石見国府へ向う列車は温泉津を過ぎ、日本海の岸近くを走り、石見福光、黒松の海水浴場辺り弓なりの岸の向うに富士型の山が岸に裾を延ばしているのが車窓から見える。この山が浅利富士で高さ二四六米に過ぎないが、万葉集(巻二―三五)柿本人麻呂が「端隠る屋上の山の雲間より渡らふ月の惜しけれども……」と長歌に詠じた山である。江津の駅から一キロ、麓から二十分で登れる小山。頂上三角点は地藏堂前に在って堂の裏を北へ廻ると安山岩の露岩があり、樹林は日本海の岸まで達している。涼風は心持よく、東に三瓶山から遠く大山、西は奈良朝の都野津(江津)石見国府の辺りを見ていると太古の人になった感がある。児島半島の南北分水嶺と言っても三〇七米の小山に過ぎないが讃岐、備前、備中の三国の見晴し台である。周防小富士(龍岳)も瀬戸内海の展望台で山中に奇岩が多い。獅子岩というのはライオンがうづくまる如くであったが、指一本で動くとの説明の「動き岩」というのは、突いても引いても動かなかった。夫婦岩というのは「同じ形をしている」との解説があった。「凸凹があつてしかるべきだ」と一緒に登った物理と化学の学者はフンガイした。瀬

戸内海に浮ぶ小島はなべて花崗岩質の山頂を持つ山々であり、広島湾上の似島の安芸小富士は近年の山火事で中腹以上に焼棒杭となった樹木が痛々しい。山頂から厳島が見え江田島は指呼の間にある。安芸片富士は生口島にあって中腹までミカン山である。向いの因島に因島富士の白滝山があって花崗岩や安山岩を彫刻した五百羅漢が山中に累積されている。山頂から瀬戸内の往来する船が手にとる様に見える。伊予小富士は安山岩の二八三米の小山で松山港との間に定期便が通っている。長閑な島で子規の句そのままの景だ。鶏鳴いて小富士の麓桃の花

阿波富士は一二二米の堂々たる風姿を吉野川の川岸から見せる。阿波山川から川田川の橋を渡って登山路に入る。早春の頃に中腹の梅林の白梅が咲き、池畔には残雪があつて仲々趣きがある。戦後大錫杖塔が蔵王権現堂の境内に建立された。山頂に大師像とお宮がある。車道を降りると山腹に鉄分の多い鉱泉があり、滝がある。川田川に沿う山道は川床よりはるかに高く四国渓谷の特徴が良く表われている。三極が栽培され、手漉和紙の工房がある。伊予富士は石鏡連峯の一峯で西条から加茂谷に沿い川来須がバス終点。右岸の林道を辿る。川床は次第に遠くなり桂谷を右に見送る。加茂谷、桂谷という名は王朝の伊予国府の役人が京の都をしのんで付けたものである。寒風峠の営林署の小屋に泊って、頂上へ雪のピークを幾つもトラバースして達する。讃岐富士は丸亀の城と同じ様にちんまりとした山

で何の奇もない松林の小丘である。丸亀駅から歩いて往復二時間。帰りに山の左肩から丸い春の月が浮び出た。九州の糸島富士は三六五米の玄武岩の小山。糸島半島の要の姿の優しい古墳の丘である。その西麓に船越と南麓に加布里の船泊りする良湾があつて、万葉集卷十五巻に遣新羅使人が可也山に鳴く妻恋い鹿の声音を聞いて玄海灘を往く旅の苦しさを歌っている。筑前前原(ちくぜんまいばる)の町には古い火見櫓が町角にあるのが大いに気にいる。山頂は遠く壱岐島、眼の下に姫島を見る。筑紫富士の浮岳は同じ筑肥線の福吉駅の駅の踏切りを渡ると、女岳と十防山を左右にしたがえて、前山をはべらせ中央に堂々たる山容を示している。麓の里は花霞して筑紫の春は今盛りだった。山麓の浮嶽神社は郷社と思えぬほど立派だし、古木と巨岩の山頂の奥宮も階を踏んで昇る。戦後に始めて紙一つ山道に落ちていない清浄な神体山を知って嬉しかった。平戸の小富士は江戸港と反対側の古江湾の先端の可愛い円錐の丘である。アングスの花の咲く大瀬の一軒の農家の背戸から、タブの樹林の中を登る。径らしいものは無いが、トベラ、シャシャンボ、椿の茂る尾根へ出て半島の先端の一番高い場所へ出た。蕨がからみ苔むした平岩に坐って、小富士が古江湾の自然の造った目標の山である実景を見た。入宋した明庵栄西(一一四一一一一二五)が禅と茶を帰朝してもたらししたのは、この古江湾の奥の千光寺であった。茶の実を播いた最初の地の碑がそこにある。

(四) 地塁と盆地床の郷土富士 近江と山城を分つ境界となつた比叡山は地塁地形の代表的な山で、古生層の上に花崗岩が乗っている。近江側の小比叡付近は古墳の地で山城側の四明岳には平将門がその上に座して都を眺めて野望を抱いたと伝える将門岩がある。地主の日枝の神を祀る神体山であり、伝教大師(七七七一八二二)以来の天台学問所であり、僧兵集団の本拠であり、戦闘の山であり、今は観光の山に変容しつつある。播磨富士の笠形山も千ヶ峯へと延びる山形は盆地床と考えられている。この笠形山も比叡山と同じ様に樹木は繁茂し、ここから姫路城改修の際に大桧の心柱を切り出したのである。水にめぐまれ山岳密教の寺院が造られ、僧兵集団を持ち武家兵団と衝突する運命を荷うところまで類似している。

(五) 褶曲地形 東北の朝日主脈と並ぶ麻耶山系は大八州造山運動による褶曲山脈として地質学上注目されており、越富士(鷲ヶ巢山)一〇九三米はその中の一峯である。荒川峡の勝景を麓に持ち山は幽寂で初夏になお残雪がある。郷土富士中出色の存在だ。

三、信仰の山としての郷土富士

山麓に古墳があり、美しい湖沼と清らかな流れ、山の頂きに露頭の見られる山々は素朴で大らかな古代日本人の山の信仰の場であった。死者を盤境(古墳)に葬り、清らかな流れでけが

れを去り、山上へ昇華した死者の荒魂を巨岩をシンボルとして祭ったのである。そこに輪廻思想は無い。仏教渡来後にその影響下に起った修験道は本地垂迹説にささえられ山岳密教と結ばれてわが国独特の行場山を出現させた。地主の神々のみ記った神体山は麓に里宮があり、山頂に奥宮がある。神と仏を山頂に有するものは神仏分離以後で権現の称は神仏混淆の名残りである。

(イ) 神体山 薩摩富士の開聞岳は最も純粹の神体山である。枚聞神社は山麓の美しい朱の宮居であり延喜式に和多都美神を祀るとし「和名抄」に作開聞とある。古事記の海幸彦山幸彦の伝承の地であり、ロマンスの井戸が社近くにある。本殿のそばに開聞岳は聳えて、山には洞窟があり、山頂に巨岩があり小祠が祀られている。池田湖に写る姿、海上からの眺めはまことに薩摩の歴史と自然の座標であるとの感が深い。近江富士もまた古代信仰の美事な遺跡の山であり、三上山の北麓の御上神社は延喜式の名神大社に属する。山麓の古墳地帯は湖東から蒲生野に亘って居り、山上の巨岩と奥宮がある。「近淡海国之安国造」(ちかつおうみのくにやすくにのみやつこ)の一族が蟠踞した土地で銅鐸の出土が著しいので知られている。車窓からも機上からも湖東平野の要として認識される。ついで、丹後富士は由良川の左岸に裾をひく由良ヶ岳の名称であり山麓の三庄大夫屋敷跡は古墳の台地である。由良神社の本殿から仰ぐ由良ヶ

岳は神々しい。丹後掾であった曾祢好忠はこの地を愛して、由良の門を渡る舟人かちを絶え……の歌を遺している。山上から小式部の詠んだ大江山も呼ばえん様に眺められる。巨岩の上に奥宮が由良水門に向って鎮座されている。近年海水浴客で賑わうこの小さい漁村（宮津市に編入）の人々は郷土の富士をこよなく愛して四月下旬に日を決めて、老若男女うちつれてこの山へ登っている。病者のために「一杯清水」を汲んで家に持ち帰る。産湯から死に水まで由良ヶ岳の賜物としている。山と人の関係はまことに密接だ。筑紫富士と浮岳神社も前章に触れたように筑前福吉の人々は筑紫富士に仕える如くである。美しい山を美しく保つのは土地の人々であって、山を汚すのは心無き登山の徒であろう。越前富士の麓には日野神社があり、祭神は継体、安閑、宣化の三帝である。山上には奥宮があり日本海の一角が見え、白山の姿が一きわ優れている。山を越えて味真野へ降るのは紅葉の頃が佳く、越前手漣紙の里の大滝は近い。その他の神体山を挙げると富士権現社と尾張三奇祭の一つに数えられている石あげ祭の行事がある。安曇富士の有明山と有明神社。伊豆富士と浅間神社は郷土富士を名実ともに顕わすものである。日光富士と二荒神社。生瀬富士と男体神社は山上の巨石を男体権現のシンボルとしている。権現を名乗るのはやはり中に世に仏教の影響と見做してよい。二月十五日の祭りの日に女人禁制とするのも同じである。会津富士と警荷（いわき）神社。

津軽富士と岩木山神社。北海道の本島には神体山の郷土富士は皆無であるが、奇しくも、利尻島即ち利島山の富士は里宮があり山頂に立派な奥宮の祠があり幣（ぬさ）も新らしく島民の心掛けがしのばれる。最北と最南の利尻富士と薩摩富士がともに神体山であった。

(四) 谷川富士考 上越国境の耳二つと上州の里人が呼んだ双峯のうち手近かのピークに薬師如来が祀られ遠くのピークに浅間の神を祭って前者トマノ耳を薬師岳、後者のオキノ耳を谷川富士と呼ぶのが正しいと言うことを藤島敏男、森喬両氏の一九二〇年踏査の「上越境の山旅」と題する紀行文を読んで知った。

山麓に浅間の神を奉じた谷川神社があり郷土富士と呼ばれる条件を備えているのである。一九五四年の山日記「本邦主要山岳高度表」に谷川岳（耳二つ）薬師岳、谷川富士と併記されている。十年後の山日記には谷川富士（一ノ倉岳）、谷川岳（トマノ耳）と記され沖ツ島ならぬオキノ耳は飛んで仕舞い、（利尻山が利尻岳になったり妙な工合である）富士と名のつく山は登らねばならぬと決めているが徒然草の石清水八幡宮の里宮だけ詣る愚を真似ては物笑いになるので昨夏土合山の家に泊り中島喜代志氏に疑問の諸点をただした。「昭和五年西黒沢より尾根を伝いオキノ耳の神祠を拝した。永録二年と三年の銘がある神鏡があった。願文を刻し「岩本郷：某云云」とあったのを覚えていた。その帰りは天神尾根から谷川温泉へ降って里宮へ詣で

た。トマノ耳には薬師の祠はすでに移されて無かった。一ノ倉岳が谷川富士とされたのは明治四十三年に越後の人夫を連れて越後側から登った測量部員が誤認してこの名を与えたのである。本来谷川岳の名は谷川本谷の源頭につけらるべき名である。この山の精通者の氏の答えは明解である。肩の小屋にも一泊して耳二つと一ノ倉岳を訪ねた。オキノ耳の神祠は現在岩壁に長方形の穴をうがち白木格子がはめられ漆喰で周囲を固めてあった。高須茂氏の私信によると「オキノ耳の頂上より晴れた日には富士が眺められます。このことは富士講の人々は良く知っています」とあって、浅間の神をここに祀る由縁が氷解したのである。地図や案内記のあやまりは恐るべきもので識者が踏査の上で証明されても迷った方向へ流れて仕舞う。「真田幸村も本当の名は、信繁といった。幸村というのは俗書に見えるだけで良質の史料には全く見えていない……どんな出鱈目を書いても、本になると權威を持つようになる。恐ろしいことだ」と言う高柳光寿博士の嘆きを銘記したい。

(八) 行場山 役小角以来修験道の面目は回峯修行を第一として行場山を廻るのである。比叡山は登山バス、ケーブルカー、空中ケーブルと至れり尽せりの交通機関によって物見遊山の場と見られる。しかし、東塔西塔および横川のいわゆる三塔をめぐる十六谷には細々と続く径があって山を廻って素足に草鞋ばきの回峯修行僧のあることを知って貰いたい。比叡山には石鐘

山の如き長大な鎖場も無く、御岳山の爆烈火口壁や地獄谷の硫氣を吹くガレ場も無い。おだやかな壮年期の山である。けれどもその回峯の戒律の厳しさは石鐘や御岳山の悪場にいどむよりも難かしい。読経と作務を果した上に三年不断行道という修行はすさまじいものである。天台密教といい真言密教というが最澄も空海も若き日にこれらの修業を吉野と大峯で成し遂げている。二荒山を開いた勝道の初登攀の労苦を空海はその「性靈集(しょうりょうしゅう)」に「沙門勝道山水を歴て玄珠を堂(みかく)の碑井びに序」の撰文をのせているが、神護景雲元年(七六七)から天応二年(七八二)の間に三回におよぶ登頂の試みが詳細に記されている。下野国の講師に勅任された学僧が成したのである。二荒神社の木戸が開く日、勝道の登攀をしのんで日光富士に巡礼すべきだ。津軽富士の岩木山は神仏分離後に三峯三所大権現の信仰は富士講に近い姿となった。山伏風の修験者は出羽三山に多く、津軽の「お山詣」の衆は幣帛と竹筒を持って、参して早朝に山麓を出発する。岩木山神社の里宮に集まって、そこから登るのが本道になって賑わう。山頂の神祠のまわりは奉納された色とりどりの幣でうずまる。竹筒の酒は開帳された大国主命の神像に甘茶の様に注ぐのである。行場山として四国には阿波富士の高越山があり、山岳宗教である真言宗に属する。古来は女人禁制であったが現在は祭祀短期間だけである。表口の中腹にある「女人堂」はかつての戒律を示す建物であ

る。若狭富士の青葉山も真言宗で松尾寺は西国三十三ヶ所巡礼の一つ。西峯から東峯にかけて行場である。洞窟くぐりと鎖場があり、角原富士は洞穴くぐりが二ヶ所ある。豊後富士の由布岳と越後富士の妙高山には鎖場があり、かつては行場山であった名残りをとどめている。

四、城塞としての郷土富士

北斎の画いた富士山は中腹から急傾斜になってダイナミックな表現である。富士山の等高線を基底から高さに応じてプロットして断面図を作ると北斎式の型となる。その側面の特異な双曲線は城の石垣積みと同じだと言われる。中腹以上が急に垂直に近くなるのだ。富士山は天然の城塞であり、富士に似た山は交通の要所を占め、頂上に平坦地があり、樹木が山腹をおおい、水が有ると、山岳宗教の拠点となり、あるいは、物見場所となり、恒久化すると砦や城となる。山城と近江の界をなした都富士の比叡山は天台宗のメッカとなり転じて政情の変化とともに山寨となり僧兵集団を養なった。播磨富士の笠形山も僧兵がこもり、伯耆大山も同じである。応仁の乱の後に各地の豪族が郷土富士に城を築いた例は多い。ここでは戦国時代に織田、毛利両氏に狭まれた播丹の将の拠った郷土富士に残る悲史を語ることにする。

(イ) 比叡山 京の都の丑寅の方角に当るので良山(こんざん)

の名がある。御所から見ると四明岳と水井山を結ぶ嶺線に木立が望まれる。王城鎮護の嶺に聳える玉体杉であり、ここで玉体の加持が行われた。四明岳から急坂が一本修学院へ引かれているのが雲母坂(キララザカ)一名勅使坂で、山法師はこの坂を神輿を担って下り、山門の不平を朝廷に強訴した。この坂道の途中に南北朝の陣所跡があり、四明岳直下に「千種卿戦死の地の碑がある。四明岳には『将門岩』の他に『純友岩』もある。大比叡の三角点へ寄って杉林の道を阿弥陀堂の前の納骨堂へ進んで『スウイス日記』『ハイランド』の著者、スイス人の夫人と可愛い二人の坊やの冥福を祈って合掌する。根本中堂を拜して、山門の大道を坂本へ下る。山門と寺門の攻防路であり、元龜二年(一五七一)九月十二日、坂本を中心に比叡山を取り囲んだ織田信長は將兵に命じて、根本中堂、山王二一社、三塔、僧坊残らず焼き払い、山居の僧俗、兒女らを捕え一人も余さずことごとく殺して了った。坂本は明智光秀の本拠とした。

(ロ) 高城山 丹波の篠山はデカンショ節で知られているが、この城跡に立つと丹波富士が眉に迎る。この円錐の山は丹波路と摂津、但馬を結ぶ路との交点に在る。応仁の乱後丹波の豪族波多野氏はこの山に陣地を構築して高城(たかしろ)と号したのが山名の起りとなり、八上郷に在るから八上高城とも称した。丹波守護職として丹波、但馬から摂津の一部まで進出した。波多野秀長からその子秀経の代には鉄炮戦術による防備を加

え、頂上に本丸（四五九米）、急坂になる三〇〇米等高線から二の丸、三の丸、岡田丸、右エ門丸と石垣を高く積み城壁と射撃口のある防御堀を巡らせ、三の丸、二の丸の入口には防門を作り、さらに尾根筋には曲り角ごとに出丸を設け池を掘り、糧道の地下壕を秘めた。天正三年明智光秀は丹波攻略の命を受けて亀岡から篠山へ進攻して来て、この高城を攻撃した。迎え撃つのは侍従波多野秀治である。天正三年から七年まで前後十一回の猛攻を光秀は加えたが城は抜けなかった。糧道の秘路を発見した明智軍はこれを絶って兵糧攻めの持久戦に変えた。一方、播磨に向った羽柴秀吉は三木城に別所長治を攻めてこれも城が堅固で容易に屈しなかったので兵糧攻めに転じた。八上城も兵糧がとぼしくなり、光秀は母を質として秀治兄弟を安土に送ったところ信長は秀治らを磔にした。城兵は光秀の母を同じく磔にしたのである。丹波富士へは二月に私は登った。時雨がきて上衣を濡らしたが大手の尾根から頂上を目指すとして石垣の跡、苔の台地、十歩か二十歩にそれらの跡を見つけて畏怖の感を持った。亭々たる老杉は北風に梢を鳴らし、芝は未枯れて本丸の頂きは石組の中に波多野秀治公表忠碑が仰がれ「英風千古」の銘を刻した表忠碑建設記の碑が近くにあった。それによると正親町天皇即位の大札は秀治と毛利元就の献金によると記してあった。

(ハ) 笠形山 笠形寺は勝道上人の開基の名刹で中世以降僧兵

を養って播州地方の一勢力となり信長の中国攻略の先鋒羽柴秀吉は三木城攻略の余勢を駆って笠形寺を攻めた。信長の衣鉢を継ぐ千成瓢箪の大将はやはり焼打ちの挙に出た。秀吉に焼き払われた笠形寺は往時の盛況は山の中腹にかけて石組の跡、井戸の趾に、比丘屋敷、比丘尼屋敷、僧兵館の地名にしのみのである。秀吉は姫路を根拠地としてなお西へ進んだ。

(ニ) 常山 備前富士である。建武中興の頃、石見国に任じられた左馬助上野頼兼は丹後国に転じ右京大夫となった。その子孫上野氏は備前児島半島を領有して常山に築城した。標高三〇七米に過ぎないが、山頂部は広大で二峯に別れ大きい井戸には湧水が溢れ出た。備中に進出して来た毛利元就の季子小早川隆景は備前常山城を囲んだ。兵力の差、攻撃は後に明の大軍を碧蹄館の戦で打敗った名将である。落城の運命であった。四百年前の戦の跡には現在巨大なテレビ塔が北の峯に立ち、南の峯の本丸跡に三角標石が淋しく草の中に傾いており、上野肥前守高德公の碑がある。その本丸の石階の手前、桜の植えられた広場の一隅に宝篋印塔二基が石組の上に並び、手前の両側に三十四基の小さな五輪の墓が侍るが如く連らなっている。「常山女軍之碑」がそばにあって奥方鶴姫とともに討死にした侍女と部将の夫人達の奮戦を伝えている。これらの墓は隆景が建立したものと土地の古老は語った。天正十年（一五八二）羽柴秀吉は備前に入り竜王山に陣して高松城を攻めた。「時はいま天が下し

たる五月哉」と光秀が愛宕山で吟じた時である。秀吉は高松城を水攻めにした。毛利の救援軍も動けなかった。本能寺の変、講和談判、山崎の合戦と続くのである。

結 び

富士山は日本列島の歴史と自然の座標であるとするならば郷土富士は郷土の歴史と自然の座標である。日本人の富士への讃仰を郷土富士の巡礼によって再認識することが出来たのであるが、選暦の年に都富士から登り始め四ヶ年を費して尾張富士で一先ず終了である。この巡礼によって郷土富士のみでなく、体力と時間のゆるす限り筆者は他の山へも登った。妙高山へ登れば火打山。伊予富士のついでに石鎚山。九州へ行けば九重、阿蘇という調子で青年時代には及ばないが、四十代、五十代の頃よりも山行が増え喜び限りない。これから登路を変え季節を別にして、さらに郷土富士巡礼を続ける決心である。この小文は巡礼の山旅によって得られた自然と歴史の知見による郷土富士研究の予報である。

『栗駒山紀行』とその解題

はじめに

秋田、岩手、宮城の県境に聳える栗駒山（二六二七・七米）は、古くから奥羽の名山として著名であり、修験道が介在した山岳としてながい歴史をもつ。

『栗駒山紀行』は、江戸末期の文久二年（一八六二）にかかれた栗駒山の登山記であり、著者はその東南麓、栗原郡一迫・大川口邑主であった上遠野秀宣カドノヒコシゲである。

栗駒山については、仙台藩の地誌、例えば『奥羽観蹟聞老志』（注一）などにその記載が多々みられるが、単独の登山記とみなされるものは、現在この『栗駒山紀行』が唯一のものである。菅江真澄は文化十一年（一八一四）この栗駒山に登山し、『駒形日記』（注二）を残しているが、それは残念ながら未完の記載に

柴崎 徹

終っている。このような意味で、この『栗駒山紀行』は山岳史の上からも貴重な文献であろうと思われる。

この『栗駒山紀行』は、現在仙台の斎藤報恩会の蔵本になっている。しかし、その出所や蔵されるまでの経緯については分明でなく、また郷土関係誌『報恩会時報』や『仙台郷土史研究』等にも、この『紀行』についてふれた記事を目にしないのである。私はこの『紀行』に興味をそそられ、幾度か著者の生地や縁りの地を訪ねたが、それでもこの『紀行』の存在は知られていなかった。

そんな訳で、ここでははじめに『栗駒山紀行』の全文を紹介することとし、続いて著者上遠野秀宣の略歴、『紀行』の内容、『紀行』からみた山名、などの問題について、私なりの解題を付したいと思う。

上 遠野秀宣 『栗駒山紀行』

△凡 例▽

一、かなづかいは、現代かなづかいをを用い、読み易いように若干の句読点を加えた。

一、原本には、著者による注はなく、「〔 〕」はすべて訳者注である。

一、ひらがなルビは著者の付したるもの、カタカナは訳者によるものである。

一、原本にある七葉の図版は、原本にできるだけ忠実に掲載し、便宜上、第一図、第二図というふうな図版番号を付した。

思いたつ心の色はあさくとも、高き深山に踏登を路けわしくば、杖をたのみ、足いたまば草鞋のひぼ〔ひもの方言〕しめよと、文中の九日大川口〔栗原郡一迫町大川口〕なる草の屋を旅衣袂すずしくいて行かし。心は過にし二十年あまり先のとし、秀宜十九才といえる冬の頃、心ならず病をうけていと心地あしく、身もまかるべきほどになりしに、栗駒山の神にねぎごととして、いとあやしきことありて、次の年の卯月のはじめに病いえて、いと心地すずしくなりしとき、御山の土ふみて広前にまからんとねぎごとせしも、浮世のわざの事しげく、この二十年あまり神の恵の礼を申さずありしかば神慮いかが思召らんと

恐れもあれば、この度思い立ち、奥州と羽州との境なる栗駒山にぞ登らんとなしける。

朝まだき、空はれて日影長閑く風もなければ、鞭うつ駒のいとはやく、同じ郡なる真坂村〔栗原郡一迫町真坂〕をうち過ぎ、北沢〔同郡一迫町北沢〕かた子沢〔片子沢、聞老志の傍児沢・栗駒町〕などいえる村里にかかり、嶋廻〔栗駒町島廻〕というにて駒の足をやすめ、三ノ迫なる岩ヶ崎村〔栗駒町岩ヶ崎〕にぞいたりける。

この処に黄金寺〔曹洞宗熊野山黄金寺〕といえる禪寺ありて、遠つ御祖のしるしの石あれば、立ちよりてあかの水たむけて、それより駒をば乗りすて足鞋のひぼしめて、西に向いていなか路十五六里ほど行かしかば桑畑〔栗駒町沼倉桑畑〕という山里にぞいたりける。

この処は栗駒山の麓にて、山高くして谷深く、雲近くして水遠く、左も右も山に又山をかさね、谷に又谷ありて、朝には里に見なれぬ鳥なき、夕にはましら〔さる〕の声さびしくきこゆる所なり。この所より馬の足きかぬよしにて馬返しとも申なり。須川〔一関市須川温泉〕といえる湯元へ行くにも、いでわの国秋田に山越えするにも、強力というて里人をたのみ、荷物などおわせてこそ行くところなり。此所にて晝夜をあかさばやと思ひて、旅人の宿する家をたづねてやどりける。何事も里にはかわりたる事のみぞおし。

桑畑にて夜を明し、明れば二十日という朝まだき、ものしたためて、

うき世をばよそにへだてて住宿の

庭に見なれぬ鳥の声々

二十丁ばかり行けばたも山〔栗原郡栗駒町玉山〕といえる二ツツ家居ある所あり。くわばたよりもなお山ふかし。田もすこしあり。畑などいささかばかりみえければ、

ここもまたうき世はなれぬしには

垣ねにひらく朝顔の花

これより山にのぼりて林の中なる山路をたどり行けば、秋田に行く路にいづるなり。此路を三四十丁ゆけば、きわきの小屋といえる秋田越のたすけ小屋あり。立いりてみれば、かやぶきの小屋に人の住みて、山の奥なれど井戸などもありてかしぎには事かかねども、小屋のうち畳などもみえず。土のうえにわらこもを敷たるばかりにて、又は板しきたる所もいささかみえたり。御山にもうずる人は、この所にて水などしたためてゆく所のよし。馬の足きかぬ所なり。

心より住めばすまなくむ水も

うき世にとおき山の奥には

これより馬こそその小屋と申は、十丁ほど山の奥にて御山よりは十五六里もへだちたる所なり。人跡たえて鳥の声もなく、かやにてふけるあやしき小屋のうちに、かしぎの品々みえたるは

人たすけの小屋ゆえ、人の住むとはみえたれど、ものとえどこたえもせず。かけいの水はとおく流れて、軒端より草ふかく、峯に残れる雪のあるゆえか風さえししみじみと冷たくて、御山は見上るほどに高くみえたり。

行なやむ人をしばしのなさけにて

たすくる草の庵なるべし

この小屋より五六丁ばかり行きて、秋田路とふたつにわかれ、右なる路に鳥居の草むらのうちに見えたり。心うれしく、この所にてわらんじなどはきかえて行くともみえ、はきすてしわらじのいとおおくあり。ここにてわれらもみなはきかえ、草むらわけて二丁ほどゆけば、御沢というて沢川のいとあらく、大なる石川にて水音たかく、石の大なることはことばにのべがたき程なり。

ぬぎすつるこれも浮世の草わらじ

しばしはちりをはなれゆく身に

御沢のいり口にて人々と諸共に水ごおりをとりて、ちりにまじわる身をきよめ、むつのねぎよくはらいたまいとねぎごとし

山河に身をばひたして六根の

きよきこうべをきよめてしがな

此より御沢がけとて表口のもうで場なるよし。河の中なる石より石に飛はねて行くこと石はね八里とはいいいとも、十四五里

もあるらんと思われる。しだいしだいに河の石高く、山のなかばまで石づたえに登りゆく。

山あいの石に石をば重ねつつ

いく重も高き川の水

しだいに登りゆけば、川の水の上二たつにて、左りは御室の前に行き、右は川のはじいとひろけれどゆきてかえりし人なしというて、いと恐るべき所なるよし。天狗なども住たるよしなり。くわしくは恐れはばかる所なればしるさず。いずれに行かぬがよしと思ふべし。左の川に登りゆけば、川のはばいとせまく一丈ほどもあるらんと思われる。石いよいよ高く、飛はねてゆけば川の源にて、登りつめて行けば、はしご滝という所にいたる。いとけわしく屏風をたてたるごとく石ははしごの如くかさなり、高さは十丈もこれあるべし。石と石とのあいだを水は流れて、滝の白玉飛ちりくるを身にうけて登りゆく。そのけわしき中々筆にしるしがたし。曾て心のあしき人などは、この所にて身はちぢまり、或は身ぶるい、心地あしくなりてもと来し路へかえるよしなり。いと奇々しき滝川なり。

雲井よりかけわたしたる浮橋の

むかしもかくや栗駒の滝

山川の石をかさねし滝津瀬は

さながら雲に在るこちする

はしご滝というに登り行けば、川のはばはいとせまくて流れ

もほそく、二三丁ゆけば小川の流れふたつありて右と左より流るるなり。左の流れは御室の下なる雪の中より流れいで、右なるは大日だけの下より流るるかと思はるるに、この流れはいとあやしき流れなれば必ずしもむまじき水なるべし。

忘れても右をばくむな広前に

登り行身の水のながれを

左の小川の中をゆけば、此辺は平らかにして、はしご滝を登りてよりは谷ふかくしてたいらかなる所なり。所々に雪ありて木もみえず、草も一尺ほどより高き草もなく里に見なれぬ草のみなり。御路地などいえる所はいと奇々しきまでにたえなるけしきの所なり。

冬としも思はるるかな夏の日に

とけ残りたる山あいの雪

雪ふみわけてゆけば御室の下にして、去年の雪はいとかたく氷のごとくなりて残り、八尺あまりのあつみに二丁ほど四方残りあり。それより雪のうえをわたりて壺丁ほど登りゆけば、峯のうえにていとおいなる巖石の立たるさまなになたとえん、天神のつくりおき給いし神わざのいとくしきありさまなり。巖石の並びたちたる下に洞穴ありて、ふかさは弓丈ばかりなれども、そのうちに石の御堂たせ給うて、石の灯ふたつばかりあり。左の方に弓丈二たげばかりへだてて、大なる巖石の下に清水あり。この清水の冷しく甘きことは、いかなる清水も及ぶ

まじきほどなり。かかる高嶺に清水のわきいづること奇々しくも、天一生水の性理を感じて涌いでしものなるらんと、いとかたじけなさの身にあまりて、口すすぎて手にむすべば、なつも忘るるばかり身毛もよだちて、五の臟六の腑のはらわたもいと涼しくぞ思わるる。

天神の神わざならで誰がまた

かかる高嶺に水を得ましや

六つの根きよく身をはらいて、洞穴に向い奉りて、過こし二十年あまり先の病をいやし給わりし札を申奉りて、二たび三度ぬかづきて、

思わずも袖に涙のかかるかな

くくしき神の恵みうけ得て

麓の方を見渡せば白雲いくえとなく棚引、ただ雲の上に登りしこちせられける。

神ならぬ身さえ心にきようばかり

雲より雲をふみわけてゆく

それより立たる巖石の下をつたえて、右にゆくこと二丁ばかりにして峯のうえにいづる所あり。これよりは霜ふり松というがいとおおく、山石南花、山どうだんなどしげく生そらえてあれど、雪のいとおおくつもれるゆえか、たけのびずして五尺にたらず、下にはばかりはえひろごりいく。ましが枝に枝をかさねてはいひろごり、枝は地をはいて行くこと一本の松も七丈八丈

づつ枝をのばしたり。この松の枝をふみわけてゆくこと、いとあやしきまでに奇々しきことかぎりなし。

いつの代にふみそめてけんいまもまた

だえず雲ふむ松のかけ橋

この松の枝はびこりし所は、松渡り八里とないていささかも土をふまず、木の枝ばかりふみて行くところなり。そのうちには天狗の相模取場などと里人の呼びとなえし所などありて、姫松の中に弓丈三たけ四方位草も木もなく小石のみありて、内には大なる岩石などもあり、いとあやしき所など所々にあり。それをとおり行けば大目嶽といえる第一の高ねに登る。この所まで松わたりなり。栗駒山第一の高嶺にして、西は秋田仙北の山々里々眼下に見渡し、東は牡鹿本吉の郡見え、南は玉造賀美黒川の三つの郡の山々〔鬼首から船形山に至る山々のこと〕眼下に見渡さる。その景その興なにとえん。白雲は深谷よりいでて青宵を飛行、鳥雀は声たえて碧巖寂然と静なり。松のいとしげれる中に小き石の御堂たせ給うて、大日と彫り付けたり。むな札には日本第一日宮駒形根大明神と書して、大日靈尊を祭り奉るのよし書きしるしたり。大日は秀宣が身にも一代の守り本尊と思いて、いとうやまいてぬかづき、身の武運をいのりける。

ぬかづきていのるも恐れあまりあり

天照神の宮居なりせば

はしご滝のほとりよりこの大日だけまでのうちは、いと恐れある所にて、年ごとに身のつつしみのあしきものはかきさらわられて、いのちをうしなうものあるよしなり。きょうは日よりのよきというにもあらねど、雨もふらず風もなく、未の刻ばかりに大日の宮をまかりたちて、これより下り路なり。松もすくなくなりて一尺あまりの青き草〔ヌマガヤのことである〕のみなり。なにといえるやその名を知らず。谷のそこまで一づらにこの草のみあり。しだいに下りて山のなかばに鳥居あり。それより小川流れていづる所あり。この川をつたいて菅丁ほどゆくと、右に少し登り行きて秋田に行く山路にいづる。この道を左にゆけば須川といえる湯元にいづるなり。右に行き、この路を四五丁行きてまた二わかれになる。左に行く路みちは、たも山桑畑にいづる路なり。右に行く路は、新湯駒の湯などいえる湯元にいづる路なり。右に行きて谷に下り峯に登り、石を渡り雪をふみ、そのくるしさを言葉にのべがたき路すぢなり。所に雪はいとおおくあり。申の下刻になりければ、雲うち登り足もとみえず、前なる人は後の人を知らず、後の人は先の人の声をしるべにたどり行く。

浮雲に姿もみえず声のみを

しるべとたどる山あいのみち

浮雲に身をばつつみていづくとも

しらぬ高嶺をきょうの山路

雲たちまよう中に川の水音なしければ、心うれしくいそぎけるに、谷底とみえていとおおくなる木の林にいでたり。林の中は雲うすくて路はかどりけれども、酉の刻になりてようよう新湯といえる湯元につきぬ。湯室の側に石川あり。この川こそ、朝まだき石はねて登りし川の流れの末なるよし。湯守なる人に向いて、この所より石はねて登らばいと路ちかからんとききしかば、この所よりたどりゆけば路の中にいとけわしき所あり、そのうえ滝壺ありて登り行かぬるよしにはなしける。温泉は白き色にて硫黄の気あり。ゆあみして旅のつかれをやすめ、この夜はこの草の屋に一夜をこそぞ明しける。明れば二十一日と申に、朝早くものしてこの屋をたちいで、二十丁ばかり行けければ行者ヶ滝とて左の方に滝あり。この滝のけしきいと妙なり。温泉の前なる川の流れ、岩石のかさなりて、弓丈ばかりの所よりいとけわしく水の流れ落ちるありさま、二十丈もありぬべし。深き谷底までひと落しに白浪玉をとばし、岩石は苔なめらかにして、霧ふかくいとどしく日の影のうすき所とみえて、滝のなかばにたえず白雲のおりいるごとくみせるなり。この滝のうえをとおりて駒の湯への別れ路にて、左はこまの湯、右はたも山に行く路なり。しばし行きてまた二つの路あり。左はたも山、右は拍傍に行くみちなり。右に行きてまた谷に下りける。ここにも谷川ありて石おおく、山と山との中を流れ、日影のみえぬ所とみえて大なる石小なる石共に苔おおく滑らかにして、水色

解題

一、著者上遠野秀宣のこと

淡白くして少し赤し。川源はここも魔所なるべきか、いずれにあやし。向うの岸に行くに橋もなく、いと大なる杉の木の根がえりになりて、かなたのきしよりこなたの岸にたおれたるを岩づたえに行きてこの木をつたわり、ようよ向うの岸に行き、それより高嶺に登り行く。この所をば拍傍越と申よし。峯まで登り、なかねづたいに行けば、きのう行きすぎる四方辻の秋田路へいたりける。この路を行きとおして文字村〔栗原郡栗駒町〕といえるにいたりける。新湯よりこの文字村まではいなか路にて四十五里ほどの山路のよし。文字村より細倉〔細倉鉱山〕といえる鉛山にいたり、この所より川口村〔栗原郡一迫町川口〕にさしかかり、清水目村〔同町清水目〕なる明昌院は曾て相知る所なれば、この所にて一夜を明し、明れば二十二日というに大川口なる草の屋にたどりつきぬ。

この度の路づれ人は、従弟どち〔達〕なる十二才の男の童にて上遠野市松、家の僕には渋谷得女、菅原源三、秀宣と共に四人にて、つががなく宿に帰りし悦びは何にたとえん。二十年の願事一時に達して胸中の浮雲はたちまちはれわたり、闇夜に明月をみるがごときことなりかし。かくいうは、ことし文久二世という文月二十二日、上遠野氏なる藤原秀宣しるす。

此後はいかがみるらん山踏に

まつ一たびの路の記ぞこれ

歌十七首外一首合十八首

上遠野伊豆秀宣は、仙台藩栗原郡一迫大川口邑主である。上遠野家は伊達家の準一家に叙せられた家柄である。

『伊達家臣略譜』（注三）等によれば、伊達家十五世晴宗（貞山公政宗の祖父）の子で平岩城家の嗣となつた親隆が、その子隆秀をもって岩城郡上遠野の地に封じ、上遠野氏を名乗らしめたのがその祖とされ、さらに二世伊豆高秀の代、由あつて政宗卿に仕え、一家に準ぜられ玉造郡下目〔玉造郡岩出山町下野目〕に八百石をもって住した、となつている。

さらに、『風土記御用書出』（注四）によれば、その後栗原郡三迫平形村〔栗原郡金成町平形〕に移り、さらに元禄十二年（一六九九）、第四世内膳常秀の代に大川口村に御所替になつてゐることが知られる。秀宣は隆秀から数えて上遠野家第十世にあたり、秀宣の六代前から大川口を領したことになる。采地は『書出』では六十八貫百六十文、『栗原郡誌』（注五）には八十二貫四十二文と記されている。上遠野家は代々兵法武術に秀でた家柄であつたらしく、一門からは多くの武芸家、兵法家が輩出している。

秀宣は文政七年（一八二四）、岩出山支藩（一万四千六百石）

第八代邑主伊達正宗^{はつむね}秩の二男として生れた。名を秩寅^{はつたけ}といつた。父宗秩はその治世四十六年、岩出山支藩中興の名君とうたわれた人であり、秩寅は妾妻との間に生まれた子であったといわれている。岩出山は学問所^{がくもんじょ}備館を有し、仙台藩に朱子学をもたらし佐久間洞巖以来、学問の気風の高かった地であったから、秩寅も幼年期その影響を強く受けて育ったに違ひなからう。こうして、やがて上遠野家第九世伊豆徳秀の養子となり、大川口の館に移り住むのである。この年月は分明でないが『紀行』の記事からすると、少くとも天保十三年（一八四二）以前のことであつたらうと思われる。この年は、天候極めて不順で迫川が各所に氾濫し収穫石高を著しく減じた年であつたが、この冬秀宣は大川口で病に臥せ、ようやく翌年の春になって回癒したのであり、すでに、大川口にいたことが明白であるからである。そしてこのとき、秀宣は栗駒山の神に願かけて回癒したことから、登山の志を抱くのである。

秀宣が妻りゅう（墓碑銘には童子とある）を迎えたのは、この数年あとのことと思われる。りゅうは荒巻村土族星某なる者の三女であり、二人の間には、栗駒に登山する文久二年（一八六二）までに少くとも一男四女が誕生しているようである。このうち長男藤太は嘉永六年（一八五三）生、三女かよは万延元年（一八六〇）生、四女たけは登山の年に生れていることが岩出山実相寺にある墓碑銘から知られる。

こうしたなかで、安政三年（一八五六）九月、秀宣三十三歳の折、養父伊豆徳秀が逝去し、秀宣が上遠野家第十世を継ぐのである。

当時は天下の情勢が急を告げ、幕藩体制は根底から揺れ動いていた時代であつた。そのことは中央から隔たった陸奥の仙台藩にさえ不穏な影をなげかけていたのである。仙台藩では、藩政をめぐって佐幕派と尊攘派とに二分し、その争いが藩の経済的な行ずまりとともに三百年に亘つた藩の体制をゆるがしていた時代であつた。秀宣は采地の諸事にあたる一方、混迷を深める宗藩のおもむきのため、仙台府城にも頻繁に出向かねばならなかつた。上遠野家を継いで間もない秀宣にとつて、この時代は多事多難な時代であつたといえよう。

秀宣は、病氣回癒後二十年もの歳月、栗駒登山をなしえなかつたわけを、『紀行』の中にただ一行「浮世のわざの事しげく」とのみしたためているにすぎないが、ここには先に述べたように、秀宣にその機会を許さなかつたそれなりの諸事情があつたことが認められると思う。秀宣が常に登山の事を気にかけていたことは、つづいて「この二十年あまり神の恵の礼を申さずありしかば神慮いかか思召らんと恐れもあれば」としていることから窺えるのである。

秀宣が栗駒山に登山し、ようやく永年のおもいを遂げるのは文久二年旧七月のことである。この夏登山を敢行した背景に

は、秀宜自身この機をのがせば生涯登山できぬかも知れぬという、さしせまった状況におかれていたことと、永年のおもいを遂げて、禍根なく激動の時代に身を置こうとした気持が強く感じられるのである。『紀行』の中で大日岳頂上において「大日は秀宜が身にも一代の守り本尊と思いて、いとうやまいてぬかづき身の武運をいのりける」としるし、末尾に「此後はいかがみるらん山踏にまず一たびの路の記ぞこれ」と咏んだ秀宜の胸の内には、この登山が最初で最後のものになるかも知れぬという感慨が、秘められているように思われてならない。

この年、文久二年はそちこちで生ぐさい事件が相次いだ年であった。仙台藩でも、佐幕派と尊攘派との確執が最高潮に達した時期であった。京都の事情を探索していた学者岡千仞、宿老遠藤允信（栗原郡一迫川口邑主）らが相次いで帰仙、藩公伊達慶邦に尊攘を説いたのもこの年である。しかし、翌文久三年（一八六三）一月、尊攘派が失脚し、藩政は佐幕派に握られることになるのである。二月藩公は近衛公より攘夷一決により速やかに上洛すべき内勅をうけて仙台を発するが、この時携えた建白書は、佐幕派の中心人物、のちの養賢堂学頭大槻磐溪の起草になる開国を主旨たるものであった。このときから仙台藩は、のちの命運を内蔵したといわれる。上遠野秀宜は尊攘派に組みし、重要な役割をなしたようである。しかし、彼の動静については、現在のところ残念ながらほとんど分明でない。わず

かに、慶応四年二月、大政復古の大号令が発せられ、藩公に入朝の勅命が下った際、勤皇派によつてものされた建白書を秀宜が代表して携え、登城していることが知られるのみである。

これより前、慶応二年（一八六六）秀宜は仙台藩三席子弟教導幹事を任せられている。三席とは藩の一家、準一家、一族を指すが、それらの子弟は藩校養賢堂には通学せず、勝手に置かれていたものを、藩の将来を担う指導者として十分な教育が欠かせないとする見地から急速設置されたものである。教導教授はかつて昌平校に学んだ岡千仞であり、幹事や助教には三席中四十歳以上の学事熱心者があつたが、これらの人々は、かつて岡千仞の私塾に学んだ者やその教育思想に共鳴した者であつたようだ。秀宜は当時四十三歳であつたが、なかでもこの教導に情熱を注いだよう、腰弁当で上遠野邸から片平丁の茂庭邸の仮学校に通つたことである（注六）。

こうして慶応四年（一八六八）、戊辰の年を迎えるのである。仙台藩におけるその概略を述べると、一月、鳥羽伏見の戦が起るや、仙台藩に会津追討の勅命が下り、三月には奥羽鎮撫使九条総督らが松島に來航、仙台に入る。四月、こうして藩公は会津征討に出陣を余儀なくされる。このとき秀宜は、砲隊大番組隊長として出陣している。閏四月、慶邦は白石で米沢藩主上杉斎憲と会見、会津救解の方策をたて鎮撫府に願願書を提出するが却下。五月、ここに至りついに奥羽二十五藩による列藩同盟

が結ばれ、官軍に対抗して戦うことが決定するのである。こうして戦場は一挙に拡大され、仙台藩将兵はその主力となって各地に参戦することになるのである。この間、官軍側の「奥羽皆敵」としるした密書が発覚したことも主戦論の佐幕を刺激し、奥羽列藩を結集せしめることになったのである。

七月、秋田藩が盟約を廃棄し官軍方につき、庄内藩に開戦したのを機に、いわゆる秋田戦争がはじまる。仙台藩、南部藩が相次いで開戦、岩出山勢は急ぎ白河口からとって返し、中山口から新庄へ入り参戦する。このとき、上遠野伊豆(秀宣)は大川口の手勢を引連れ、一関支藩の兵を指揮して出陣したのである。奇しくもかつて三弟子弟教導の任にあたった柴田中務(船岡邑主)、亘理大吉(佐沼邑主)らも共に戦うこととなったのである。仙台勢は最上、秋田境の雄勝峠で敵を打破り、続いて、湯沢、横手と進撃し、角間川の激戦をへて角館にまで攻め入ったのである。『仙台藩戊辰史』(注七)八月十三日の項に、「柴田中務、上遠野伊豆、石母田備後家臣、庄内藩酒井吉之丞ト兵ヲ併テ角間川ヲ攻ム。敵兵敗走シ我之ヲ追撃シテ直ニ角間川ニ陣ス。」とある。角間川の戦いは、秋田戦争中最も熾烈を極めたものであったが、上遠野伊豆隊の奇襲戦法が効を奏して敵を打破ったとされている。このとき秀宣は大川口の家臣桑折市郎兵衛を失っているのである。秋田戦争は白河口、相馬口の戦況とは対照的に同盟軍側の圧勝がつついたのである。この年、秀宣四

十五歳であった。しかし、九月(明治元年)仙台藩はついに降伏する。この知らせは九月十九日角館にもたらされて、仙台勢はただちに国元に帰還し、まもなく奥羽諸国はすべて鎮定されるのである。

敗戦は、同盟軍の主力となって戦った仙台藩にとって特にじめであった。領地は一旦没収、藩主父子は東京に謹慎、のち旧領の三分の一の二十八万石に削封となった。かつての一門は粟米わずか百三十俵、三席は五十五俵と著しく削減され、その陪臣は除禄の上帰農と決まり、一門以下すべての家臣は極度の生活難にあえぐこととなった。このため仙台藩からは、旧地をすてて主従ともども「北地跋涉」と呼んだ北海道集団移民が相次ぐ結果になるのである。秀宣と縁りの深い岩出山支藩では、邑主伊達邦直以下家中の士三百余名が北海道に渡り、石狩川の地に新天地を求めたのである。この岩出山の北海道移民については、のちに本庄陸男が小説『石狩川』に、そのいきさつと苦渋にみちた移住の状況とを克明に著わしている。こうした中で、秀宣の身内の者もその殆んどが北海道に渡っていったのである。しかし、秀宣自身はそのまま大川口に留まっているのである。彼は、大川口の采地を家臣に頒け与えて帰農させ、主家からのわずかな粟米で戊辰後の数年を過したものであろう。

その後、秀宣は公立長崎小学校(現一迫町立長崎小学校)大川口分教場の校長心得となる。明治八年(一八七五)のことで

ある。学制頒布（明治五年）によって長崎村に小学校が設立されたのは翌年のことであったが、その後生徒数が急激に増加し、教育者が不足したため秀宣が加わったものと思われる。

『長崎小学校沿革史』によると、「七等訓導上遠野秀宣教員トシテ赴任スルヤ盛大トナリ、分教場ノ如キモ生徒増加シ云々」となっている。しかし、この七等訓導という職階は、かつて旧藩の三席子弟教導幹事をば務めた彼に対しては、あまりに不当な待遇であったといわねばならぬだろう。

このように、かつて大藩の準一家に叙せられ一邑主でもあった秀宣にとって、戊辰の役後、賊軍の将として過した歳月は堪えがたいものであったようだ。当時は、薩長土肥にあらざれば人でなし」という時代で、「北地跋渉」組と同様に残留組にもまた、それなりのみじめな時代であったのである。明治十年（一八八七）、西南の役が起ると、秀宣はその鬱憤をはらそうとするがごとく、初老の身も還りみず志願して出征していくのである。このとき五十四歳であった。のちに彼が誌した『西南戦争従軍日記』によると、塩釜で「西討技師」と称する三百名の輩を組織し、その将として九州各地を転戦しているとのことである。

当時、明治政府は奥羽の旧土族に対して、今こそ戊辰の役の雪辱を果せとばかり鼓舞宣伝したのである。戊辰の役の先鋒は薩軍であったから、旧土族は名譽回復の好機到来とばかり勇ん

で出征したのである。こうして奥羽諸国からこの戦いに参加した旧土族は莫大な数にのぼった。それは旧仙台藩からだけで三千余名にも達しているのである。仙台の瑞鳳寺には、今もその時の記念碑と、捕えられ仙台送りとなった薩藩士の墓が残っている。

西南の役から帰還した後の秀宣の動静はあまり分明でない。ひきつづき長崎尋常小学校に勤務したのかどうか、岩出山に移り住んだ時期などまだ確かなことが知れない。岩出山本郷に移ったのち、秀宣はそこで「伯竜子」と号し練武堂という私塾を開き、『兵法雄鑑』などの講義に力を注いでいる。また岩出山八幡神社の祠官にもなっている。八幡神社は上遠野家の氏神で、大川口にも八幡神社が祀ってある。そして明治二十七年（一八九四）十二月十日、秀宣はその波瀾にみちた生涯を、はからずも縁りのこの地で閉じることになったのである。享年七十一歳であった。

秀宣の墓は、岩出山伊達家の菩提寺である曹洞宗諸法山実相寺にある。この寺は、政宗が大崎葛西の一揆を平定した後の天正十八年（一五九〇）八月、徳川家康下向の際止宿したことで知られる寺である。秀宣の墓は、岩出山伊達家一世 弾正宗泰（政宗の第四子）の墓の隣に位置し、石柱には「故大講義兼祠宮上遠野秀宣墓」と刻されている。「大講義」なる碑銘は、教育に携わって生きた秀宣の生涯に、いかにもふさわしい文字に写る

のである。

一方、一迫大川口の上遠野家の館跡は、一部畑地となっているものの原形をとどめて残っている。往時のおもかげを偲ぶ庭園、桜樹、古池、火薬庫跡、炉跡などもみられ、南面に拓かれた水田からは、旧馬場の桜並木の根株がいまもでてくるそうである。また大手門を境にして区切った大手東、大手西などの地名がいまも使われている。

また、館跡を西に一丁ほど距った地には、杉木立の中に土地の人が御廟と呼ぶ上遠野家の墓所があり、七世元秀から九世徳秀に至る何基かの墓石が並んでいる。そしてこの丘陵をわずかに登ると、かの栗駒山が一迫の山並の上にまじかに一望できるのである。おそらく秀宣は、この栗駒山の姿を朝夕ながめ、そこに激動する時代に生きる己れをみつめたのではなかったろうか。

上遠野家については、地元大川口の新妻巖氏が現在熱心に調査を進めておられる。また上遠野家に伝わる上遠野家文書は、現在東大資料編纂所に保存されている。その内容の一部は『福島県史』第七巻にも収録されている。

二、『紀行』の記事について

『栗駒山紀行』の記事の特色は、その観察記述がすぐれて正確なことである。登拜路の状況、そこからの地形物、そして山

岳などの描写には、現地の状況が極めて適確に把握され、表現されているのである。著者にははじめて体験する登山でありながら、厳しい連日の行程の中で、よくもこれだけ几帳面に記し得たものと驚かされるのである。そのなかでも特に七葉の絵図は、文章とあいまって著者らの辿った路順を正確に示すように工夫され、また周囲の風物をよくとらえて描かれており、そのみでも貴重な資料になっている。おそらく著者は、現地である程度の素描を行い、それをもとに帰還した後この冊子に丹念に描き直したものと思われ、同時にいく葉かは新たに補筆したものであろう。

この登山は、旧七月十九日から二十二日にかけて、三泊四日になされている。その行程の概要を記すと、一日目、大川口から真坂、岩ヶ崎を経て桑畑泊り。この間岩ヶ崎までは馬を用いている。二日目、桑畑より玉山を経て尾根路を辿り、御沢掛けで頂上に達し裏掛けで下山し新湯泊り。三日目新湯より行者ノ滝に下り、そこより峰越しに文字村に出て、細倉、川口を通り清水目泊り。四日目、大川口帰還、となっている。往路を岩ヶ崎經由としたのは、それが当時栗駒山へと通常のルートであったことと、登山にさきだつて、岩ヶ崎ぎんがさき黄金寺にある先祖の墓に詣る目的があったためであろう。また帰路文字經由をとったのは、このルートが御山から大川口まで最も短絡につながりであったためであろう。栗駒山における、登り表掛け、下り裏掛け

の登拝順路は、江戸時代にはすでに仙北地方の人々の御山参りに定着していた登り方であった(地図参照)。

次に「紀行」の記事の諸事項について述べる。

一日目、秀宣らの立寄った曹洞宗熊野山黄金寺は、政宗の第六子宗信以来、当邑主代々の墓のある寺である。上遠野家はかつてこの岩ヶ崎の隣村平形村を領したが、その時代の菩提所がこの黄金寺であり、今も十九基の墓のこっている。

第一図に「石川」とかかれているのは三迫川で、現在、この上流に栗駒ダムができており、二日目の行程に記されている「タモ山」すなわち玉山はこのダムの湖底に沈んでしまっている。

二日目、そこから御沢に至る尾根路に、「キハキノ小屋」と「馬コソノ小屋」と呼ばれる二つのたすけ小屋(避難小屋)があったことが記載されておりはなはだ興味深い。いずれも無人小屋らしいがひとつには井戸まで掘られていた様子で、両方も水飯や宿泊が可能であったようだ。あるいは登拝者の集中した夏場だけの小屋であったかも知れない。

第二図左上に描かれている「文字村ヒツカ森」とかかれた山は、文字三山のひとつ櫃ヶ森(六一五・九米)であり、左上に描かれた「鬼首アラユ山」と記されている山は、荒雄岳(九九五米)である。ここに描かれたそれぞれの山容は、若干の誇張があるものの、よくその特徴がとらえられているといえよう。

第三図の鳥居附近に描かれたカヤトは、現在世界谷地と呼ば

れている湿原のことである。また、鳥居は現在もこの地に建っている。この図の「御山カクノコトクニナ、メニ見ユル」と説明のある山岳を描いた部分は、栗駒山の主稜線の描写で、大日岳から御室を経て虚空蔵山、大地森に至る部分を圧縮した形に描かれており、なかなか見事である。

このあとに記されている地名は現在もそのまま使用されているものが多い。「御沢」「石はね八里」「ハシゴ滝」「御室」「松渡り八里」「天狗の相撲取場」などそうである。しかし、「御路地」なる地名は伝わっていない。この地は現在ただ単にお花畑と呼ばれているところを指すものと思われる。

第四図は、御沢を中心に前図以後の御山の様子を描いたもので、著者らがとうとう御山の奥深いところに達しえたことを顕示するがごとくに、唯一の鳥瞰図となっている。

第五図および第六図に破線で描かれている雪渓は、栗駒山で最も遅くまで残る「御室の雪渓」である。この雪渓の春の雪形が栗駒なる山名の発生になったといわれている。「紀行」には「雪ふみわけてゆけば御室の下にして、去年の雪はいとかたく水のごとくなりて残り、八尺あまりのあつみに二丁ほど四方残り。」とその雪渓の状況が記されている。

御室は駒形神社奥宮が祀られているところで、「巖石の並びたちたる下に洞穴ありて、ふかさは弓丈ばかりなれども、そのうちに石の御堂たたせ給うて、石の灯ふたつばかりあり。」と

秀宣は記している。

かつて、菅江真澄は秋田側から大日岳に登り、尾根路を辿ってわざわざこの駒形根祠に詣で、「陸奥栗原郡駒形根神社、石室向南、勅宣駒形大明神という札を内に納たり。岩高八丈、窟内高一丈二、三尺深一丈七、八尺横亘一丈五、六尺駒形岳雪溪、また伊奈瀬川の水源、牡鹿郡曾波神山、栗原郡二ノ迫文字村独活ガ森、櫃椀岳、中ノ森など見たるかた」と図説説明にかきしるしている。文化十一年（一八一四）のことである。

一方、最高峰の大日岳には、「日本第一宮駒形根大明神」と棟札を掲げ、大日靈尊を祀っていたことが知れる。

秀宣らは、ここを末の刻（午後二時頃）に発ち、約四時間かかって酉の刻（午後六時頃）新湯に下っている。さすがの秀宣もこのあたりの地形をよく理解しえなかつたらしく、新湯のある湯沢をば朝に辿った御沢の下流と錯覚し、湯守にたしなめられているのは面白い。新湯は現在建物はなくなっている。

こうして、秀宣らは無事に登山の目的を遂げ帰路につく。途中、清水目村の明昌院に一泊しているが、この明昌院という修験院は、『書出』によると上遠野家の氏神の八幡社の別当寺となっており、当時は小山東之進という修験者がいた。秀宣が「清水目村なる明昌院といえる修験者は曾て相知るところなれば云々」とかいてはいるが、この小山東之進のことであろう。おそらく、栗駒山の神に祈願し、秀宣の病氣回癒の仲介をなしたので

この小山東之進という修験者で、秀宣は、いちはやく登山成就の報告をなすべく、ここに立寄ったものと思われる。小山東之進は、慶応四年戊辰の役で戦死しており、この明昌院もいまは残っていない。

この栗駒登山の同行者は、『紀行』の末尾の記事によって、秀宣の他、従弟の当時十二歳であった上遠野市松、それに渋谷得女と菅原源三であった。このうち渋谷得女は、得女とかくが男子で、のちにエンメイ様と呼ばれた人物である。源三も得女もともに上遠野家の臣で、その子孫はいまも大川口に住んでおられる。

『紀行』からすると、この四人以外の同行者は記されておらず、先達、強力などは雇わなかつたようである。しかし、天気にも恵まれたとはいえこの登山が極めて円滑に進行していることから考えると、得女あるいは源三のいずれかが、この登山以前に下調査に出掛けていたことが推察される。秀宣が多忙な中からわずかの期間を見出して登山したらしい様子が随所に窺えるが、登山が一回で成功するためにも、下調査の必要があったのではなかつたらうか。

とにかく、この『栗駒山紀行』は、真澄の残した記事とあわせて、当時の栗駒登山の様子や御山の状況を知るうえで、欠くことのできぬ文献であるといえるだろう。

三、『紀行』からみた栗駒山名

栗駒山という山名は、山岳全体の総称であって、栗駒山と呼ぶ具体的な山嶺はない。これは蔵王山の場合と同様のことである。

現在の行政区からすると、栗駒山は宮城県、岩手県、秋田県の三県にまたがるため、それにあてはめて、栗駒山は宮城県、酔川岳は岩手側、大日岳は秋田側にそれぞれ固有の山名であるかのように一般にいわれているが、このことは、『紀行』等の記事から再考されねばならないように思われる。

『紀行』の第五図を見ると、御駒ヶ嶽と大日岳とがそれぞれ別の山名として記載されていて、記事の内容もそのようになっている。このことは、栗駒山全景縮図と記された第六図でさらに明瞭に示されている。すなわち、栗駒山の最も高い北の山嶺が大日岳であり、御室のある部分が御駒ヶ嶽であったことがわかるのである。

『栗原郡旧地考』（注八）によれば、「此御山を栗原郡の鎮とも仰ぎ尊むべき御山にして、いと高き山嶺は大日嶽と云、西にはなれて数丈の巖壁そびえたる所にしても岩ぐらありて此所を奥の院と世俗に云いならわせり。其の奥院の所則雪解け、残る駒形ならで鞍かさの程なりける。さてこの解け残る雪なん誠に駒形根也ける。実に千載不窮の靈地にして、仰ぎ尊とまさらんや、

云々」とあり、この内容は秀宣の描いた図とよく一致している。

旧秋田領で、この山を特に大日岳と限定した固有の呼び方をしたのではないことは、秋田側から登って誌した真澄の『駒形日記』から明らかなことである。ここには、この栗駒山を指す山名として、栗駒山、駒岳、駒形山、駒箇岳、酔川嶽、駒形峯、大日岳、駒形岳、など多様な記載がみられるが、ほぼ、山岳の東西をとわず同じような山名が使われていたことは興味深い。このうち大日岳は山岳の総称としてよりは、やはり狭義の山嶺名として使われていたようである。

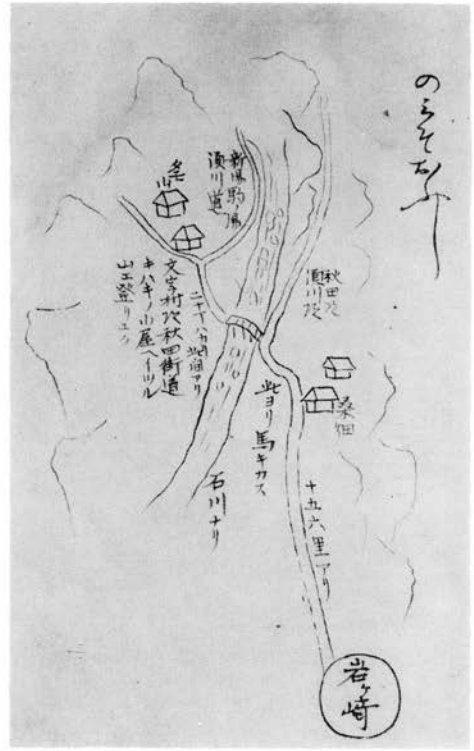
このように、大日岳なる山名は、山岳全体を指す総称としてではなく、最高山嶺に固有の名称であったことは明らかである。そしてこのような例は、東北地方では飯豊山とその最高山嶺、大日岳との関係においても見い出されるのである。

旧仙台領のうち、山岳の北東面にあたる磐井郡一帯では、この山の総称として須川岳、あるいは酔川岳が古くから用いられていた。

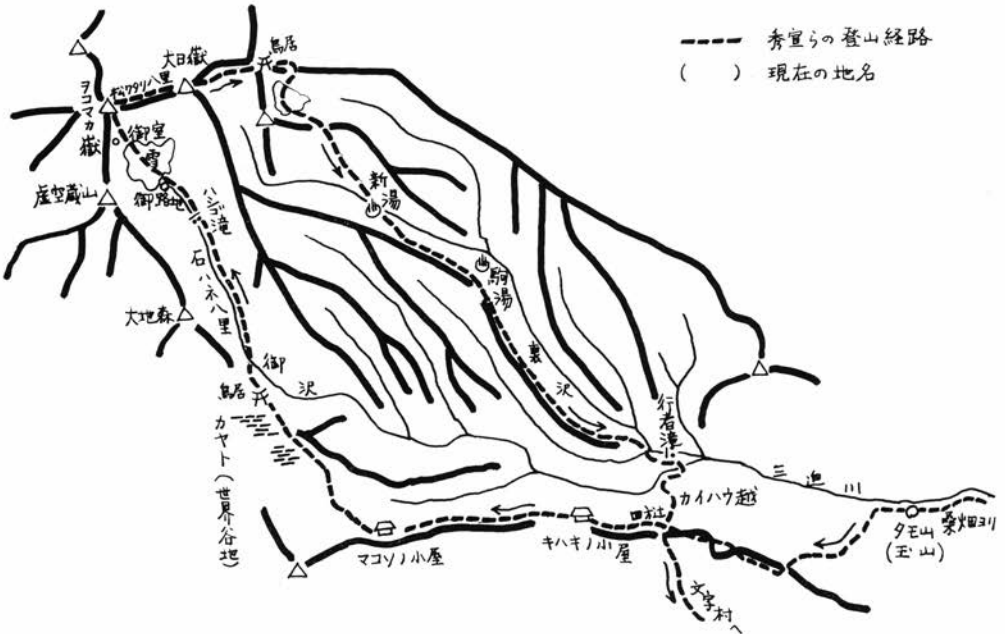
『岩手の山岳』（注九）所収の「酔川温泉之図」などをみると、ここにもやはり総称としての須川岳のほかにその山嶺名として大日岳が記されている。秀宣は第六図の端に、「須川タケト云」とこの山名があたかも具体的な山嶺名であるかのような記載を行っているが、「ト云」という表現は他の山には付されていないから、彼が曖昧ながら記したとみるべきである。



第 2 図

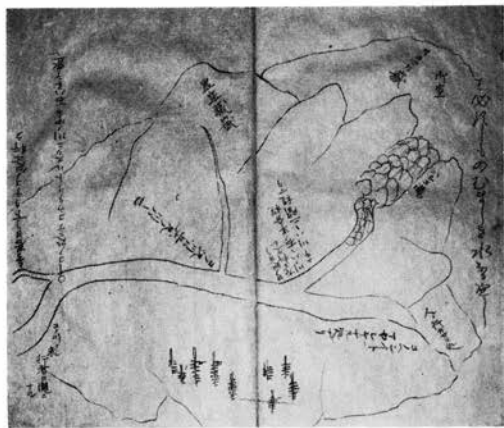


第 1 図





第 3 図



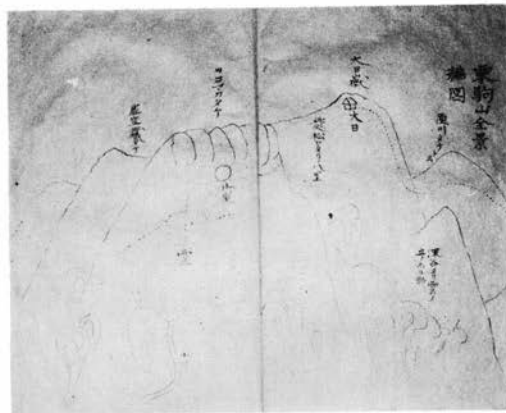
第 4 図



第 5 図



第 7 図



第 6 図

雪形による単なる駒ヶ岳から、栗駒山とあえて栗の字を付したことに關しては、先の『栗原郡地名考』に、「此御神の鎮り座山と栗駒山というのは、いかなる義ぞと思うに実にも思わゆる事もいまだ考えず。されど誠にいわじ栗原郡の栗の字と駒形根神社の駒の字とを合せてや、後の昔人や云い初けん」とあり、栗原郡の栗の字に由来するとの説をのべている。駒ヶ岳は雪の多い東北地方には方方にある山名であるため、その紛らわしさをふせぐ意味で、栗の字を旧山名に冠したことは十分考えられることである。いずれにしても、この山の古い山名は、農事と深く關係した駒形の雪形の出る山という意の駒ヶ岳ないしは駒形山であったのは確かであろう。御室に祀られている駒形根神社は式内社であり、里官は栗原郡沼倉村（現栗駒町）にある。

資料

注一、佐久間洞巖『奥羽観蹟聞老志』寛保元年（一七四一）『仙台叢書』より。

注二、菅江真澄『駒形日記』文化十一年（一八一四）『菅江真澄遊覽記』東洋文庫より。

注三、桜田憲章『伊達家臣略譜』昭和三年。

注四、『風土記御用書出』安永七年（一七七八）『宮城県史』25より。

注五、『栗原郡誌』栗原郡教育会刊、大正七年。

注六、宇野景介『鹿門岡千仞』昭和五十年。

注七、下飯坂秀治『仙台藩戊辰史』明治三十五年。

注八、岩崎綱雄『栗原郡地名考』弘化四年（一八四七）。

注九、『岩手の山岳』岩手県教育会刊、昭和十年。

追悼

三枝守博氏（一八八六—一九七五）

三枝さんのお宅へ初めてうかがったのは大正十年頃、初夏の頃だったと思う。当時、私は成蹊中学校の学生であったが、担任の芳野先生が三枝さんとは特に親しい間柄であったので、石原巖君と私を連れて中野の三枝氏邸に連れて行って下さったわけだ。そもそも私を山好きにして下さった方々の一人、芳野先生（芳野赴夫君の厳父）からは、三枝さんのことをたびたび伺っていたので、石原君も小生も文字通り勇躍、胸をとどろかせながらお供した次第である。三枝さんはさっそく、『山岳』や『高山深谷』の、また御自身、写真がお得意であった関係から、昔撮られた立山をはじめ日本アルプスの写真をつぎつぎに見せて下さり、われわれはただ、感激と喜びに時のたつのも忘れて、ついに夜分になってしまった。

長次郎や嘉門治、品右衛門、さらに百瀬慎太郎さんの話も出るし、雄山沢あたりの雪渓を登っておられる写真など、事細かに話して下さったりした。

嘉門治を連れて歩かれた時の話に……嘉門治が熊の穴から熊を追い出そうとして穴に入り、格闘の末、組打ちになり、足をかまれてたので、以来ビッコになった。嘉門治がおかしな歩き方になってしまったのを見て、「山を歩く時はあのような歩き方がいいのだろうと思ってその真似をして歩きましたよ……辻村君なんかもね……」なんていう話を伺ったのもこの時だった。当時のことだから草鞋を運ぶ専任の人も当然必要で、同伴の人数が多人数のため食糧も運ばねばならないし、大袈裟に言えば、山の中の大名旅行とでもいうところだ。古いモンブランの初登山の頃の絵を見てもこんな状況が見られるが、洋の東西を問わず、古い時代はこんな登山であったのだ。

三枝さんはわれわれとちがって御家柄もよく、したがって育ちも良かったから、学校は一橋を卒業されてから会社勤めなどされたこともなく、山登りと写真に凝っていられる結構な身分であった。

明治の元勳、大隈重信公とは御親戚であるとのことだから、お話を伺っていて、如何にも紳士の容貌と貴公子然たるものがあったのが、中学生のわれわれにもわかるのであった。もっとも、日本山岳会の創立当時の方々は高頭さんにしても加賀さんにしても高野さんにしても、裕福な方々が多かったから、そのような上品な雰囲気、山岳会の伝統の一つとして残っているが、これは尊い先輩の残して下さった賜物だと思ふ。特に三枝さんは典型的な温厚紳士であった。

日本ばかりでなく、英国山岳会などでもその例に洩れず、会

員の中で、「われわれは登ることと食うことしか考えないのだ」などと言って、特別のマークを作ったり、メニューを作って理事会の前にこのグループが食事を共にしたりして楽しんでいたのだから、特権階級の遊びとして当時、うらやましがられたのも、それこそ、うらやましい話だ。

三枝さんのお宅にお邪魔した時、可憐な少年であった一人息子の守維君も御祖父の影響よろしく山好きになり、しかも山とはきつてもきれぬ鉱物学の泰斗として、今日、斯界に重きをなしておられ、よきアルパイン・ファミリーをかたちづくっておられた。三枝さんはその晩年まで、山の魅力に抗しがたく、令息に付き添われて低山の逍遙をつづけておられた。誠に麗しい、山が作った尊いアルパイン・ファミリーであった。

亡くなられる一年前の年次晩餐会に、ぜひ御出席いただきたいと思って、お願いに上ったところ、欣然、御快諾下さり、「会報は面白く読んでいますよ……」などという嬉しいお言葉の後、お宅を辞したのも、小生にとっては誠に楽しい一時であった。

晩餐会では勿論、乾杯の音頭をとって下さり、ほとんどの当夜の出席会員が初めて拝眉の榮を喜ぶ様であったのも、山岳会ならではの光景であった。年次晩餐会は伝統を誇る、わが日本山岳会の重要な年中行事の一つだが、三枝さんの御出席によって当夜は一段と光彩をそえたのであった。

(成瀬岩雄)

山岳史懇談会における三枝守博さん

図書委員会ではかねてより日本山岳会の歴史をかんがえ、先輩会員諸氏の山における足跡をうかがう集まりをつくりたいと計画してきたが、その第一回として、昭和四十八年三月二十九日、三枝守博名誉会員をお招きして『山岳史懇談会』を開くことができた。

三枝さんはあらためて御紹介するまでもなく、本会の最長老で、いわゆる探検時代の日本アルプスに多くの記録をのこされた方である。初期の『山岳』には「日本北アルプス縦走の記」(四年一号)、「後立山連峰縦断記」(六年一号)、「越中アルプス縦断記」(六年一号、七年二号)などを発表され、すぐれた山岳写真をのこされている。また小島鳥水、高頭仁兵衛、高野鷹蔵、中村清太郎の諸氏とともに明治四十二年の赤石山脈の探索に参加された方である。一月のはじめ、私たちの計画をおつたえしたところ、氏はころよく受けてくださって、われわれのまえにそのお元気な姿をみせてくださった。参会者三十二名、氏の談話を中心に、登山史をめぐっているいろと質疑応答がかわされ、有益な楽しい集まりであった。

お話の一部を紹介するとつぎのとおりである。

私の山登りは明治三十六年の木曾御岳からはじまるんです

が、「太陽」に出された小島鳥水さんの「甲斐の白峰」を読んで、とても行きたくなりまして、鳳凰と白峰北岳にのぼったのが大きな山にのぼった最初でした。明治三十七年のことです。

このとき、足ならしに御殿場口から富士山にのぼりましたが、幸いに甲府に知人がいて芦安の村長さんに紹介され、案内人夫を二人やとしました。米をどのくらい持っていったらいいかときましたら一升ぐらいでいいだろうということでしたが、甲州峠の一升は三升にあたるということを知らなかつたものから、たいへんおどろきました。野呂川をさかのぼっているとき、うしろからきた外国人の宣教師と一緒にいった。ウェストンさんの友人でA・E・ウェップという方でした。あとで山岳会に入会した人ですが、この方と一緒に白峰にのぼったわけです。鮎差の小屋をへてあの粗末な御池小屋に寄りましたとき、その入口の板にウェストンさんが鉛筆で一週間まえに白峰にのぼった旨を書きつけておられました。北岳の頂上ではあいにく天候がわるく眺望にめぐまれず残念でした。そのときは鯉沢に下って帰りました。

こんなことから山登りに憑かれはじめ、小島鳥水とはいったいどんな方だろうと想像したりしていました。そのうち「文庫」という雑誌に小島さんがいろいろとお書きになられていることを知りまして、神保町の古本屋で「文庫」を探しあつめまして、鳥水さんの登山記を読むようになりました。しばらくして私は体をこわし、麴町の病院に入院したことがありましたが、そこで戸塚英之介という高野鷹蔵さんの学友と知りあい、山岳

会が創立されることを聞きまして、入会した次第です。三十九年の春のことでした。そんなわけで小島さんや高野さんとずっとご懇意にさせていただき、私の生活のなかで山の比重はますます大きくなりまして、「すべてが山」という調子になってしまいました。

「山岳」にはじめて発表いたしました文章は「日本北アルプス縦走の記」(第四年第一号)というもので、これは四十一年七月に白馬岳から五竜岳まで歩き、鹿島槍の北面を下ったときのもので、白馬の頂上の小舎に泊ったとき、大黒鉾山に行くという人と会いまして、それでは一緒に行こうということになり、縦走をしたわけです。途中、雷雨にあたりして時間がかかりまして、大黒鉾山については明け方の一時でした。鉾山といっても銅を掘っているのかいのかわかりませんでした。が、ともかく当時としては留守番夫婦がいるだけでした。白馬から尾根づたいに歩けるということがこれで実証できたわけです。

ぜひ申しあげておきたいことは、ゴリュウザンという名前のことです。同行した案内人の松沢菊一郎(細野の猟師)に山の名前をききましたら、ただゴリュウというだけでどんな字を書くのかわからないということでした。後立山もゴリュウザンと読むことができるわけですが、私は記事の中で「五竜」という字をあてて書いておきました。宛字のつもりで書いたものが、その後の地図に「五竜岳」と記載されることになりたいへん恐縮しています。こんなことから当時でもいろいろと文句が出てしまいました。小島さんからは、だいいち五竜なんて伝典にも

ないなんてお叱りをうけましたけれど、そのうち小島さんから手紙をいただいて仏典に五竜という字があったとお知らせいただいたこともありました。私は申訳ないとおもっておりますが、正しい名前がありましたら直していただきたいと考えております。

それから、これ御存じですか。(ネクタイピンの白い石をしめして)これは高瀬川の湯俣でとれるあられ石なんです。あの噴湯丘からとれるものですが、後立山縦走の前年に、横沢頼藏と燕岳に登り、この石の話をききましてわざわざ出かけたほどでした。しかしその当時とてもほとんど採集されてしまっていて、かんとんに得られたというわけでもないんです。葛の湯に泊ったとき、だれかの紹介で大町の数学の先生に会いまして、三つ四ついただいて、こんな風に細工して永く愛蔵していただきます。

三枝さんのお話は、つづいて本会の創立発起人である小島・高頭・高野の諸氏との交友や初期山岳会運営の実態について、あるいは辻村伊助、辻本満丸、中村清太郎諸氏の思い出におよんだ。さらに当時の山旅のありさま、武井真澄作製になる会員章にまつわるエピソード、はじめて使用した天幕のことなど、興味ぶかい歴史的事実をたしかめることができた。

とりわけ氏のお話のなかで、登山史上の新事実を発見しえたのは、この会の大きな収穫であった。三枝さんは小島鳥水の「甲斐の白峰」(『太陽』明37・2)を讀んで、北岳をめざした

とのことだが、明治三十七年の北岳登山は日本登山者によるはじめての記録にほかならないであろう。御池小屋にウェストンの筆蹟を見出したのお話もおもしろいし(ウェストンは第二回目の北岳登山)、高松誠・伊達九郎両氏の記録以前に、氏の足跡がしるされていたことは、日本登山年表にあらたな一行をくわえることにほかならない。

・会報「山」三三四号、三三五号より転載。

略 歴

明治十九年四月二十九日 東京に生まれる。旧名威之介。東京高等商業(一橋大学の前身)に学ぶ。中村清太郎氏と同期。

明治三十九年三月 日本山岳会に入会。会員番号三十五番。明治四十三年より幹事をつとめ、大正八年六月より昭和十六年まで評議員として会務に尽力された。昭和四十五年四月、名誉会員に推挙された。

主なる山歴として、明治三十七年夏の白峰北岳登山をはじめ、同四十年槍ヶ岳、同四十一年七月、白馬岳から五竜岳までの後立山初縦走、同四十二年七月、小島鳥水、高頭仁兵衛、中村清太郎氏らとともに、甲州歟沢より悪沢岳、魚無河内岳、西河内岳をへて赤石岳に達する記録的な登山をおこない、八月には五竜岳より鹿島槍ヶ岳をきわめた。同四十三年七月、辻本満丸氏らとともに爺岳に登り鹿島槍を往復、針ノ木峠までの後立山縦走を完成、さらに中村清太郎氏とともに薬師岳、双六岳、槍ヶ岳へと縦走し、上高地へ下った。同四十四年七月、加賀正太郎氏とともに大町から針ノ木峠をこえ立山に登る。探検時代の日本アルプスにみかずかずの足跡をのこした。『山岳』への寄稿は「日本北アルプス縦走の記」(四年一号)「白峰及赤石山脈縦横記」(五年一号)、中村清太郎、小島鳥水らと共同執筆。「後立山連峰縦断記」(六年一号、

中村清太郎、辻本満丸と共同執筆）「越中アルプス縦断記」（六年一号、七年二号、中村清太郎と共同執筆）のほか、すぐれた山岳写真を数多く発表した。

昭和五十年七月五日、逝去。

（近藤信行）

中原繁之助氏（一八九二—一九七五）

今では中原さんを知っている人は、関西の古い山仲間を除いてあまりないかも知れない。私の山登りより一時代さきから始め、山登りとしては関西の大先輩の一人でした。あまり派手な山登りはしなかったけれども、山登りについては真面目で、かつ熱情を持った人でした。日本山岳会へ入会されたのは、記録では、榎谷徹蔵氏の紹介と記録されているようですが、本人は生前、加賀正太郎さんの紹介で入会したと言っていました。明治四十四年と記されていますから、北野中学を卒業し三高へ入学された年に当ります。数え年二十歳ですから、ずいぶん若い頃に入会されたものです。

中原家は大阪の旧家鴻池家の分家であって、古くから大阪町人十人衆の一人とされてきました。大阪中之島の朝日ビルの東側の川に面した敷地は中原家の旧所在地で、代々この堂島川畔

に住んでおられたのでした。私達が親しくなった頃には、香檳園の南端の夙川の川尻の海岸に面したところに、二千坪の敷地を持った広大な屋敷に住み、庭番の男衆が三人、女中が七人いる、誠に大変な屋敷でした。この中原家の更に分家として榎谷家があったのです。古い山岳人でしたら、かならず知っている榎谷徹蔵さんは、その頃の榎谷家の当主でした。当時甲陽中学の絵の先生で、山岳画家として有名であり、かつ山の漫談家として定評がありました。山のパステル画では特に優れた才能の持主でした。私達の若い頃には榎谷さんの山の話聞くのが楽しみの一つでした。あまり面白く聞かせるので「山岳講談」と悪口を言う人もありましたが、山の知識の豊富な人でした。中原さんの山登りはおそらくこの榎谷さんによって、更に多くの影響を受けられたものと想像出来ます。

中原さんの山登りは、北野中学時代に、当時中学の先生であった中江先生につれられて、白山へ登ったのが初めてと書いています。目的は植物採集であったようですが、これが中原さんの山へのきづなになったようです。

大正十三年の八月から約一カ月あまりかかって榎谷さんと共に雌阿寒岳（カムイヌプリ）、摩周山、アトサヌプリ、サオロ岳等を登山、当時の旅行はほとんど馬で歩き、尻に豆が出来たという苦労話を聞いたことがあります。北海道の山々がまだあまり登られていなかった時代のことです。

大正十四年三月から約一カ年、ヨーロッパに留学、その間、スイスの山歩きをされています。榎さんのアイガー・東山稜登攀

から、二、三年後の頃だったでしょう、多くの写真や地図を持って帰ってきました。

RCCの発会は大正十三年で、二年ほどのちに役員の変更が行われ、中原・津田・水野が担当することになりました。庶務と会計を担当し、骨おしみをしない人でした。なかなかの頑張り屋で、RCCが初期に開発した、播州雪彦山にも数度出かけ、ロッククライミングの新しい登攀なども一緒にやりました。RCC報告・第二輯の印刷は、当時中原さんの関係されていた印刷業の中村盛文堂、当時あれだけ立派な出版が出来たのは、氏のお蔭だったでしょう。

昭和六年に日本山岳会関西幹事の名称が、関西在任理事と変更されました。そしてその第一号に、中原繁之助・加納一郎・津田周二が当ることになりました。関西の役員として、たびたび東京へ出向き、実にこまめな世話をされたのです。

その二年ほど前、昭和四年に山岳図書の出版を目的とした「黒百合社」を実弟中江喬三氏と共に創立し、藤木九三氏の「屋上登攀者」を皮切りに、後記のような数々の山岳図書が出版されたのでした。利益を計算することなく、どうにか採算が取れればいいと計算し、当時として安い価格だったと覚えています。

昭和十年に日本山岳会関西支部が正式に発会、支部ルームが堂ビル前大阪貯蓄銀行の三階の一室に設置されてからは、一日に一度はかならず支部ルームに立ち寄って事務処理をされました。たゆまず、地味な事務を気持よく引受けて、その勤勉さには誰もが一目おいていました。

戦後間もない昭和二十二年頃だったか、中原さんが五十六歳のときに、脊髄ゼンカリ炎、いわゆる小児マヒにかかられました。水野祥太郎君が主として見ていましたが、彼曰く「小供のときに懸かるはずの病気を今頃かかるのだから、如何に深窓に育ったかがわかる」……勿論冗談まじりではあるが、そんなことを言っていました。年取ってからのこの病気は非常にめずらしく、よく頑張り通して、その回復状態を詳しく水野君に話し、小供からは聞けなかった病状を知り得て、大変な参考になったと彼は話していました。

中原さんはかなり世間知らずと見られるところがあり、またまがったことが嫌いでかたくななところもありました。そのためまたまた人々から誤解されたり、あるいは敬遠されたこともありましたが、それは家柄とそだちがそうさせたもので、本当は根からの親切で気のやさしい、人間味豊かな人です。つきあえばつきあうほど味のある人でした。

京都大学在学中に、あまりにも真面目すぎるので、女丈夫と評されていた母堂から「たまには芸者遊びでもしたらどうか」と小遣いももらい、設営されながらも、ついに遊ぶことをしなかったと誰からか聞いたことがありました。

茨木猪之吉さんとはどこが気が合ったのか、茨木さんは大阪に来られるごとにならず中原さんと会い、私もたびたび一緒に食事をしたこともありました。親切に面倒を見ていたのではないかと思えます。

中原さんとおつきあいして、およそ五十年、その間、毎日逢

っていた頃もあり、しばらく疎遠になったこともありましたが、五十年間交わらない交流でした。親切で真面目で、日本山岳会役員として、古くはRCCの世話人として本当によく尽くされたのでした。

数年前、関西在住の会員からも名誉会員を出したいと、評議員会へ意見を出したのですが、それが実ったものか、昭和四十九年に名誉会員として推薦されました。折悪しく十月頃から病床に就かれ、十二月の年次晩餐会には出席出来ず、代理に名誉会員章を受領し、十二月九日入院中の夙川香雪病院を訪れ、名誉会員章をお手渡ししたのでした。非常に喜びようで、後に家族の方に「山の勲章をもらった」と嬉しそうに言われたそうです。それから数日後の十二月十五日の未明に逝去されたのでした。名誉会員章を生前にお渡しすることが出来てよかったです。病名は胃ガンと肝臓悪化とのことでした。

略 歴

明治廿五年（一八九二年）六月大阪中之島二丁目において生まれる。大阪愛珠幼稚園・愛日尋常小学校・第三高等小学校・借行社高等小学校を経て北野中学校に入学。

明治四十四年（一九一一年）加賀正太郎氏の紹介で日本山岳会に入会、会員番号二七六番。

大正五年七月 京都第三高等學校卒業。大正八年七月 京都帝国大学工学部機械二学科卒業。

大正八年十月 川崎造船に入社、一等雇支給。翌九年二月退社。大正九年四月 服部金太郎氏八女雅子さんと結婚。大正十年 安田商事株式

会社へ入社、翌十一年七月退社。

大正十三年八月 榎谷徹蔵氏と共に、北海道旅行を行い、雌阿寒岳（カミスプリ）・摩周山・アトサスプリ・サオロ岳等登山、当時としては探検登山に近いものであった。

大正十四年 RCCに入会。

大正十四年三月～十五年一月までヨーロッパへ留学、その間欧州アルプスをグリンデルワルトを中心に歩く。大正十五年 RCCの理事となる。大正十五年 大阪中村盛文堂（印刷会社）の重役となる。

昭和三年七月 RCC報告第二輯（津田周二編輯）を中村盛文堂より発行、山岳図書刊行のきっかけとなる。

昭和四年 RCC報告第三輯（中村勝郎編輯）を同じく中村盛文堂より発行。

昭和四年 黒百合社を創設。昭和八年まで山岳図書の発行を続ける。黒百合社から出版された山岳図書につきのものがある。『屋上登攀者』藤木九三著、『山岳征服』三木高岑著、『ヒマラヤに挑戦して』パウアー著伊藤應訳、『詩集 雲表』藤木九三著、『山野スキー術教本』水野祥太郎著、『アルプス伝説集』山上雷鳥著、『チロル伝説集』山上雷鳥著、『岩登り術』水野祥太郎著、『山岳スキー術要諦』高橋健治著。

昭和六年三月 RCC報告第四輯（西岡一雄編輯）を中村盛文堂より発行。昭和七年十二月 RCC報告第五輯（中村勝郎編輯）を大阪活版所より出版、この頃大阪活版所の重役を兼務。

昭和七年～昭和八年および昭和十六年～昭和二十年 日本山岳会理事。

昭和二十一年～昭和二十四年 日本山岳会評議員。

昭和四十九年十二月 日本山岳会名誉会員に推挙せらる。

（津田周二）

伊藤英三郎氏（一八八九～一九七四）

伊藤さんは大正六年（一九一七）七月、本会に入会され会員番号五四二という、古い会員の一人であった。享年八十五歳（昭和四十九年十一月二十一日逝去）という長命の方であり、従って同氏と山登りを共にされた人たちも早急には探し出せぬので、昭和四十二年十二月一日開催の年次晩餐会の席上、永年会員になられた当時の記録（会報『山』二七一号所収）にもとずいて略歴を述べ、哀悼の辞にかえた。

伊藤さんは明治二十二年十月十五日、兵庫県印南郡今市村（現在の高砂市伊保町今市）で生まれた。東京帝国大学英法科、ハーバード大学大学院卒業後、日本銀行に就職、松本支店在勤中の大正元年頃、信濃山岳会設立に関与し、また大正十二年頃、日本銀行山岳部を設立した。

主な山歴は、明治三十五年の富士山にはじまり、明治末葉から大正初期にかけ、関西、九州、関東の山々を登った。また大正六～七年頃、日銀松本支店に勤務していたので、北アルプスを広範囲に登った。大正十～十二年頃、在米中、アパラチアン・マウンテン・クラブを時々訪問し、マウント・レニア、ロングス・ピーク等に登ったが、レニア山では下降に最短時間のレコードを作り、サートィフケットをもらっている。

本会は会員在籍五十数年に及ぶ伊藤さんの遠逝に対し、心か

ら哀悼の意を表し、御冥福を祈る。

（望月達夫）

山田 力氏（一九〇四～一九七四）

昭和四十九年七十歳で遠逝された山田力さんは、会員籍四十八年にわたる古い会員であった。御遺族から得た資料に基づいて記すと、山田さんは日本銀行々員当時、すなわち大正末期頃、盛んに山登りをし、特に東京附近の低山、大菩薩連嶺には足跡があまねく、現存の五万分の一図には数多くの朱線がひかれていたという。日銀山岳会（昭和二十七年頃まで本会の団体会員）の委員も勤め、その会誌『岳樺』にはしばしば紀行、通信等を寄せている。本会へ入会したのも、その頃のことである。また、その後の日本通運時代には、日通山岳会の代表委員として後輩の指導にあたった。

戦後、家族の疎開先の鈴鹿市から遠くない御在所岳や、東京へ帰ってから行った尾瀬から日光、旧鹿沢附近、槍ヶ岳焼岳等へは、子息敏男氏も同行した。また日通退職後、片手間に勤めた水産新聞社で出張の際、普段着のまま立山へ登ったり、礼文島へ渡ったり、八甲田山へ登ったりなど、山をあこがれる気持は、青年時代と少しも変わらず、昔日の山の上さや小屋の主（特に長蔵小屋、旧鹿沢の紅葉館、発唾天狗の湯の主人等）の話を、

折にふれてよくしたという。

勤務先の山岳会に属した他は、日本山岳会のほかどこにも属さず、終生日本山岳会に限りない愛情を抱いていた。

自然に対しては謙虚でさからうことなく、晩年は庭いじりと読書に楽しみを見出し、自然を愛することでは誰にも負けないと漏らしていた。山岳に関する蔵書もかなり有し、最後まで手離さないよう努力したが、その中でも『山岳』だけは逝去まで所蔵し続けたという。

在籍五十年に垂々とする山田さんの御逝去にあたり、その冥福を心から祈ってやまない。

略 歴

明治三十七年（一九〇四）九月十六日生。日本銀行勤務を経て

昭和二年三月から合同運送・国際通運・日本通運等に、昭和二十七年四月迄勤務して退職した。

大正十五年二月 日本山岳会入会（会員番号九五五）紹介者は藤島敏男、木暮理太郎、柳直次郎の三氏。

昭和四十九年（一九七四）七月十六日、心筋硬塞のため死去。

（望月 達夫）

小林義正氏（一九〇六～一九七五）

はじめて小林さんにお目にかかったのは、多分昭和二十六、七年ごろではないかと思う。藤島さんに「たいへん山の本に詳しいひとがいるから紹介しよう」と言って、丸善で引合わされたような記憶がある。私が約二年半の神戸勤務から帰京したのは昭和三十一年四月で、その頃から深田さんとの交際も繁くなるのと相呼応するように、小林さんとも丸善でよくお会いし、山の本の話に多くの時を過すようになった。そんなことから昭和三十四年六月（一日から六日まで）深田、小林さんと三人で丸善でヒマラヤ文献展覧会をやるような結果となった。その出陣目録は小林さんが深田さんと相談して作り、その書物の多くは深田さんの蔵書であてられ、小林さんのがそれにつき、私のもを使ったのはほんの僅かだったように思う。

小林さんとの付き合いも次第に深くなり、昭和三十五年六月、たまたま私が早池峯へ行こうとしたとき、たしかその前年だかに早池峯へ行った小林さんから、岳集落の泊めてくれる家の紹介をもらって行った。（当時はまだ民宿などなかったのだ。）紹介された家は都合がわるくて泊まれなかったが、別の家に一泊できて、目的を果たして帰るさに、私は「こけし」の気に入ったのを見つけたので買って帰り、些かの謝意をこめて小林さんに届けた。それから約一ヵ月後、私が札幌転勤となり、お別れ

の挨拶もかねて丸善を訪れた七月上旬、偶然買物か何かで一緒だった家内共々、小林さんに三国屋へ案内されてうなぎを御馳走になった。こけしのお返しに気持ちこめられているかと思っただが、小林さんには、そんな義理がたい一面が、その後もしばしば感じられた。札幌へ行くとき紹介された丸善札幌支店の高沢光雄君は、私が在札三年間で山へ同行回数之最も多い友人となり、三十六年十月には小林さんと私の紹介で日本山岳会へも入会し、現在北海道支部で活躍している。

深田さんが藤島さんらの日本山岳会仲間たちとの付き合いが深くなり、昭和三十五年四月には評議員に選ばれ、更に三十六年四月に図書委員会の委員長になると、小林さんも委員の一人にかつぎ出された。小林さんの日本山岳会入会は昭和七年九月（会員番号一三七八、紹介者は角田吉夫、藤島敏男氏）で、すでに会員としても古顔のほうだし、もし会務に関係するとするならば、もっと早くても然るべき人だったが、どちらかというところ慮っぽい性質で、おそらく丸善での仕事も極めて多忙だったせいもあってか、『会報』などへ折々は寄稿されたことはあったが、日本山岳会の委員になったのはこの時がはじめてであったようだ。小林さんの気持のなかには、山の本のことならということと、当時住居もすぐ近くだった親しい深田さんの強い徳連があったからだと思像する。想像すると書いたのは、当時私は札幌にいて、その経緯をよく知らないからだ。

爾来小林さんは四十二年まで図書委員として大いに尽くされたが、更に四十三年に深田さんが副会長になった後は、小林さ

んが図書委員会の委員長として病に斃れるまで（四十九年）前後十四年間も、日本山岳会図書委員会のため貢献した。当時の思い出の一端を図書委員の一人だった山崎安治君が『山』三八号に綴っているが、またこの時代は小林さんは頼まれれば『山岳』にも書評や追悼の筆をとるのを辞さなかった。（『山岳』54年に伊藤隼氏の追悼、60年に『日本百名山』の書評、64年に山崎『日本登山史』、安川『近代日本登山史』の書評がある。）

小林さんの業績のなかで『山と書物』正統二巻の著述を逸することはできない。山の書物を誰よりも愛し、その蒐集に尽力し、かつ研鑽おこたりなかった小林さんの快心の作であつたろうと思う。『学燈』、『アルプ』、日本山岳会報等に古い頃から書いていた書誌学的な考証や随筆の類が加筆補正されて集められ、一部は書きおろしの文もあり、豊富に挿入された山岳書の写真版と相俟って、まさに小林さんならではの、瞠目に足る著作であった。その時まで山の書物について、これほど精細に書かれ、しかも山の書物に対する著者の愛情がこれだけ横溢したものは現れたことなく、おそらく今後も容易に生れることのない貴重な文献であろう。

小林さんが青年時代、よく山へ登ったことを私は知らないが、高沢君が調べたところによると、丸善山岳部の創立後二年にして刊行された『嶺』第一年（昭和六年刊）の編集担当が小林さんで、『仙丈から白峰へ』の紀行文があり、その他、古葉椰子のペンネームで多く執筆し、その前後数年間で最も山登りに力を入れた年代であったと言う。また『嶺』第六年（昭

和十二年一月刊)には、すでに「ヒマラヤ主要文献の展望」(『山と書物』では「ヒマラヤ古文献の小展望」と改題)を掲載し、付録として一九五〇年の文献をリストアップした「ヒマラヤ関係文献類聚」がつけられた。私は学生時代、無論まだ小林さんを知らぬころに、当時としては珍しかった右の文献類聚を、永いこと大切に蔵していたことを思い出す。

私がただ一度山でお会いしたのは、昭和三十四年一月のこと、万場の今井屋で偶然泊り合わせ、翌日は二人の子供さんを連れられた小林さんと、西御荷鉢の頂きから遠く近ちの山々を指呼して山岳展望を楽しんだときで、藤島さんの文章にもこのされている(『山に忘れた。パイプ』一三七ページ参照)。その藤島さんの著書を何としても作らせようと相談し合ったのが、ほかならぬ小林、深田さんで、多摩丘陵に新築後間もない小林さんのお宅へ、藤島、深田さんとの三人が訪ねて、話し合い、かつ小林さんご自慢の書庫を見せて戴いたことが、まだ昨日のことのように思い出される。

「九山山房」の山房開き(昭和三十五年十月二十九日)には藤島、小林さんと三人で招かれ、その来客名簿の第一ページに小林さんは、「書物の谷間に身をおく、これ人生の最大の慰安なり」と記したが、山房を閉す会が諏訪多君らの主唱で催された昭和四十八年二月四日には、小林さんの健康もかなりわるくなり、だいぶ無理をおして出席されたようだった。その後、日本山岳会の会合などへも殆んど出席されず、同年十二月下旬に図書委員会が主催した「近代登山の先駆者たち展覧会」にも、種

種貴重な意見を述べられながら、遂に会場へは来られず、ずっと療養生活をおくられ、昭和五十年十二月十四日還らぬ人となった。六十九歳という享年からいって、まだまだ山の書物を愉しんで戴きなかったし、日本山岳会としても小林さんに期待するところが少なくなかっただけに、惜しんでも惜しみきれぬものがある。

小林さんの質の高い蔵書は散佚することなく、愛書家の手に納まったことは、小林さんの心情を知る一人として、よき所を得たの感が深い。去る二月二十日、図書委員会の主催で小林さんを偲ぶ会を開いたとき、小林さんが最も大切にしていた「高山深谷」の全揃いが、故人の遺言として御遺族から日本山岳会図書室に寄贈されたことを、特に記しておきたい。

略 歴

明治三十九年三月七日 東京・神田に生まれる。芝中学時代より山に親しみ、中部山岳をはじめ日本各地の山々に登る。

昭和五年三月 専修大学経済科卒業。丸善株式会社に入社。以後一貫して同社経理部に勤務。取締役経理部長、監査役をつとめた。昭和四十八年三月、同社退社。

昭和七年九月 日本山岳会入会。紹介者、角田吉夫・藤島敏男。会員番号一三七八番。昭和三十六年以降、図書委員、同委員長をつとめた。

著作『山と書物』正統二巻。

昭和五十年十二月十四日逝去。

(望月達夫)

村尾金二氏（一九〇三～一九七五）

昭和三年三月東京商大（現一橋大）を卒業した村尾さんは、山岳部在籍中最もよく山へ登った一人であり、昭和二年三月には針ノ木越え、立山行をやったこともある。その時代の山仲間には吉沢（一郎）、近藤（恒雄）さんたちだったから、昭和八年三月、日本山岳会へ入会した時の紹介者が、すでに会員であった吉沢さんなのはごく自然だが、もう一人の紹介者が茨木猪之吉さんだったことには、次のようないわれがある。

大正十四、五年ごろの話、村尾さんは夏休みに郷里金沢へ帰るのに、常念、槍、三俣蓮華、黒部五郎、薬師、有峰という行程を選び、大きな荷を背負って一人鳥川沿いに登って行った。村尾さんはもともと軀からだが小さい。途中で道連れになった茨木さんは、こんな小さな男が、これから一人で有峰まで、幾つもの山を越えてゆくことにいささか危惧の念をいだいたようだが、村尾さんはいかにも山馴れた様子で、ぼくはこの辺で野宿して行きますからと別れわかれになった。やがて茨木さんが忘れかけたころに、無事郷里へ帰った村尾さんの消息がわかった。

爾来両氏の交友は深いものとなり、特に両氏共すこぶる左ききの方だったから、その親交は茨木さんの最期まで変ることがなかった。

悼 追

いったい村尾さんという人は、物ごとの表面に出るのがごく

嫌いな性質たてで、万事がひかえ目だし、お酒が入ると相好が崩れて、時に賑やかになることもあったが、平生はまことに静かな人であった。

山岳会入会後は時々小集会などへ出席したらしいが、昭和十六年二月に幹事に選ばれて図書と岳駢連絡を担当したことと、同年五月三日、田町の「つかさ」で行なわれた有志晩餐会の世話人を角田吉夫さんとやったことが記録に残っているが、そのほかは役員などあまりやっていない。

しかし山登りの方は戦中戦後の数年を除いて、学窓を去ってからも病にたおれる直前まで、実に長年月延々と続けられた。一橋の仲間以外では青木昇さんとよく行ったようだ。昭和三十四年一月、私が藤島（敏男）さんに誘われて西上州の山へ行くとき、フトしたこと村尾さんにも声をかけ、それが藤島さんとの最初の山歩きとなった。両氏が親交を結ぶようになったのは、村尾さんの無類な人柄にあったと思う。交友はさらに深田（久弥）、川喜田（壮太郎）、川崎（精雄）、笠原（藤七）さんへとひろがって、これらの人たちや柿原（謙一）、小林（重吉）君を交えた山歩きが十数年も続いた。近藤さんとは二百回以上も同行したようで、その間常に良き山、良き友、良き酒について語り、藤島さんとは八十数回に達しているというから、ただごとでない。藤島さんの著書に添えられた「登山譜」を見ても、村尾さんがどんな山へ行ったかが、ほぼ判る。深田さんとは郷里が同じ北陸で、しかも同じ年齢でもあったから「キューヤさん」「キンちゃん（時にはムラさん）」と呼びあう程にウ

マが合い、山の宿での一夕など、お互いに酩酊放歌したこともあった。深田さんの最期にも茅ヶ岳で一緒だった。

こうした交友関係もあって、この十数年間は日本山岳会の小集会、年次晩餐会、現地集会、有志閑談会、紅葉会などへ村尾さんはよく顔を出し、会員のなかにも年を追って友人が多くなり、日本山岳会でのクラブライフを実に堪能していたように見受けられる。昭和四十八年から二年間監事を引きうけたが、「役員なんていやだね」と言いそうな同氏にしては、やはり日本山岳会だからという考えがあったからであろう。

昭和五十二年二月に近藤さんと伊豆の長者原へ行ったのを最後に、どうも少し元気がなく顔色が冴えないので、藤島、近藤さんらがうるさく言って、七月末頃国立ガンセンターへむりやり入院させたが、もう手おくれだった。そして胃癌のため九月二十七日に遂に還らぬ人となったが、奇しくも親しかった川喜田さんの祥月命日と全く同じ日であった。

村尾さんは『山岳』第六十七年に真田昌孝さんの、会報『山』三三〇号に川喜田さんの追悼文を書いている。「アルプ」一二三号に載った深田さんの思い出と共に、いかにも村尾さんの人柄のじみ出ている文章だし、一橋関係の『針葉樹』や針葉樹会報に多く残されている文章にも佳いものが少なくない。

私は学年で言えば十年の後輩になるが、初めて一緒に登ったのは昭和八年夏の小槍で、十年十月には小林と三人で北岳バツトレス第四尾根を登ったことがある。村尾さんがハダシになって攀じた「マツチ箱」は同氏が初めてだったようだ。戦後にな

ってますます同行の機会が多く、数えてみると四十回ぐらいになる。それだけに永別に際しての悲哀落胆は筆紙に尽くせるものではない。

私の永く接してきた村尾さんの山登りは、一言で云えば全く無理のない、実に自然のもので、枯淡な味が感じられた。それは、ひとつには村尾さんの無欲恬淡とした性格にもよるが、ただそればかりでなく五十年以上にわたる豊富な山登りの経験がもたらした、達人の境地といったものによるのである。

村尾さんの一橋仲間での愛称は「ペンちゃん」であった。昔のウィンドヤッケを着、指なし手袋をして歩く姿がペンギンに似ているからであったと言う。そのペンちゃんは、今や「法雲院清月金峯居士」となりかわってしまった。

略 歴

明治三十六年（一九〇三）五月十一日、金沢市で誕生。

大正十一年四月、石川県立金沢一中を経て東京商科大学予科入学、創立

間もない山岳部に入る。昭和三年三月、東京商大卒業。

昭和三年四月、日本陶器に入社し、同八年十月退社。

昭和八年三月、日本山岳会入会、会員番号一四三五、紹介者は茨木猪之

吉、吉沢一郎両氏。

昭和八年十一月、鈴木弘会計事務所に入り、同十四年九月に退所。昭和

十四年十月、石油共販に入社し、同十八年六月名古屋支店勤務、十九

年シンガポール転勤、二十一年二月帰国、二十二年三月同社退社。

昭和二十三年四月、石油荷役入社、取締役総務部長、健康保険組合理事

長等を歴任。昭和三十五年、公認会計士資格取得。

昭和五十年（一九七五）九月二十七日 死去。九月二十九日文京区海蔵寺で行なわれた葬儀には、山の友人を代表して藤島名誉会員が弔辞を讀んだ。尚、長男統一氏も本会々員（会員番号七三六二）である。

（望月達夫）

中司文夫氏（一九〇一～一九七五）

ちょうど十一年前の今月今夜、昭和四十年十月九日の夜、中司さんが書いた原稿が会報二四五号に掲載されている。「二つの思い出」という表題の小文だが、めったに原稿など書かない中司さんにしては珍しく、またその書かれた内容からいっても貴重な原稿であると思った。そして中司さんが珍らしくペン握られたその夜から十一年目の同じ日の夜、ぼくは山岳会のルームで、中司さん追悼記を書かねばならない。ペンを握りながら悲しみとともになんか不思議な因縁のようなものを感じるのである。

追悼
丹念に「会報」や「山岳」を調べてみたわけではないから、確かなことは云えないが、中司さんが日本山岳会関係の印刷物に寄せられた原稿らしい原稿といえ、この「二つの思い出」と「山岳」二十八年三号に発表した「毛猛連山行」くらいではないだろうか。昨年「会報」三六二号で望月達夫氏が中司さんに哀悼の意を表しているが、それによると、「毛猛連山行」は昭和八年七月の紀行で、「この山城の登山記録としては恐ら

く初めてのものであろう」とある。

昭和八年七月という時、中司さんが山岳会に入会した月である。紹介者は辻本満丸、岡田元の両氏、会員番号は一四六一番であった。そして昭和十一年十二月の定例理事会で、津田周二、西堀栄三郎、高橋文太郎、加藤誠平の諸氏と共に新理事に選任され、中屋健式君と二人が「会報」の編集兼任となった。

「会報」六三号から六九号（十二年九月）までの編集兼印刷者は中司文夫となっているが、七〇号からそれが角田吉夫と変更されているのは、中司さんが十月九日に日支事変で召集されたからであろう。この召集は中司さんにとって痛恨きわまる出来事であったろう。というのは、それから五日後の十四日には上高地においてウェストン師のレリーフの除幕式が行なわれることになっていたからだ。

ウェストン碑が現在の位置に決められたのは、その年の六月で、建設地点を決めるため、中司理事は楨さんや黒田理事やレリーフ製作者の佐藤久一朗氏らと共に上高地を歩き回った結果あの位置に決定されたのである。そして上高地から帰京すると間もなく日支事変がぼつ発したのだった。

ウェストン碑にまつわる中司さんの因縁がもう一つある。それは戦争末期、あのレリーフをとりはずしに行ったことだ。この時は故茨木猪之吉さんと交野武一君、それにとりつけた時の松本の石屋さんという顔ぶれ。松本の飛驒屋に集まって秘かに練った慎重な作戦計画に従い、取りはずしたレリーフを交野君が毛布に包んで背中に負い、敵陣を突破する気持で無事虎の門

のルームに持ち帰ったことを中司さんは前記「二つの思い出」の中に書き、故茨木さんと交野君の功績まことに大きいと讃えている。

こんなにウェストン碑との因縁が深かったにも拘らず、中司さんはついに一度もウェストン祭に出席する機会がなかったことを残念がっていたが、それは中司さんの健康と無関係ではなかった。中司さんは戦後の二十二年一月、金沢へ転勤、間もなく胸を病んで片肺をなくされ、長い闘病生活を余儀なくされた。そんなことで金沢転勤以来、三十四年社会保険城東病院の事務長となって東京に帰られるまで、山岳会ともつい疎遠となっていたのである。

再び会の集会などで顔を合わせるようになり、ぼくは中司さんの元気なカムバックを祝福せずにはいられなかったが、それが長く続かなかつたのは残念でならない。

千恵子夫人から伺った話だが、健康を回復し、東京に戻ってからの中司さんは、夫人を連れて山歩きをすることを唯一の楽しみとしていたという。特に上高地はかつての思い出もなつかしいのか、年に、三、四回も出かけることがあった。早池峯山や瑞籬山も好きで一緒に登られたそうだが、肺が一つしかないため余り高い山へは登れなかった。

四十九年の十一月には八方尾根を第三ケルンまで登ったが、これが最後の山旅となった。「八方山荘から眺めた雲海の美しさが、今でも忘れることができません」と云われてぼくは胸が詰まった。千恵子夫人の眼には、あの美しい雲海の中に中司さ

んの顔がいつまでも微笑んでいるのかも知れない。ご冥福を祈る。

略 歴

明治三十四年二月二十七日 高知県に生る。

昭和二年三月 東京帝国大学文学部社会学科卒業。五月 三井信託株式会社入社。

昭和八年七月 日本山岳会入会。十二年一月 理事に選任。十月 応召

(内地勤務)。

昭和二十二年一月 三井信託金沢支店長。三十四年十二月 社会保険城東病院事務長。四十一年 菱重印刷株式会社入社。五十年三月 同社退職。

昭和五十年七月八日 社会保険船橋中央病院にて死去。七十四歳。

(渡辺公平)

伊集院虎一氏 (一八九九—一九七五)

伊集院虎一君は大正末期から昭和初期にかけてよく山に登った。その後は勤務先の海外生活が長く、したがって故国での登山からも遠ざかることになった。同君の主だった登山を挙げると、大正十一年三月に槍ヶ岳に登った。積雪期の日本アルプス登山としては初期の方であろうが、一行の顔触れも今となってはなつかしい。一行は同君の他、松方三郎、大島亮吉、早川種三、佐藤文二、田中薫、松方義雄、榎有恒、佐藤久一朗の九名



名誉会員 三枝守博氏
Morihiro Saegusa (Hon.mem.)
(1886-1975)

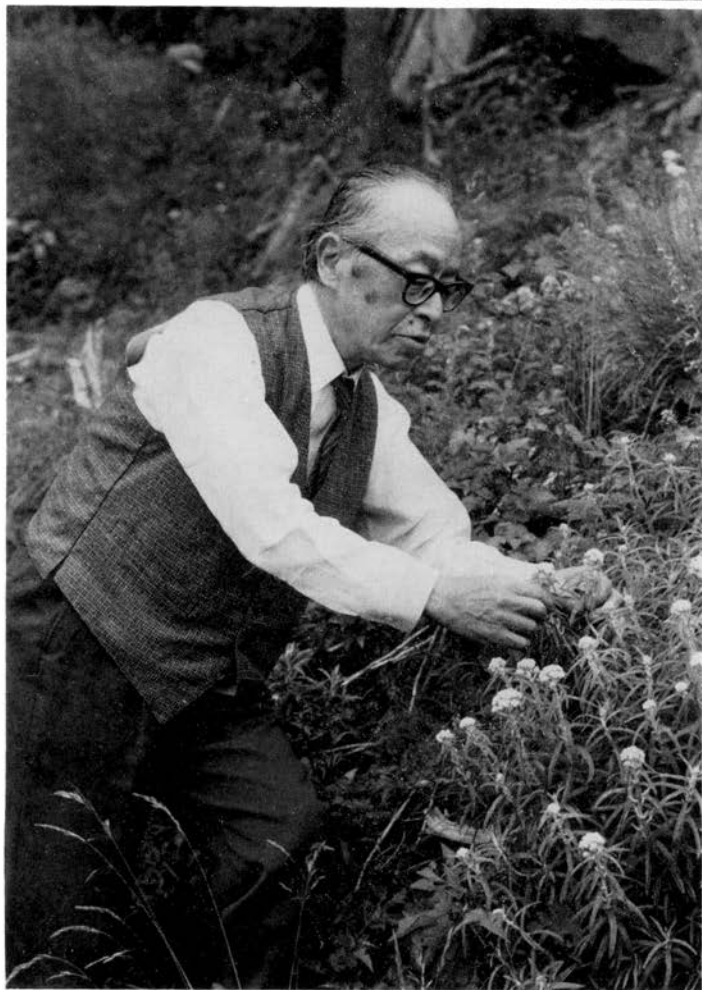
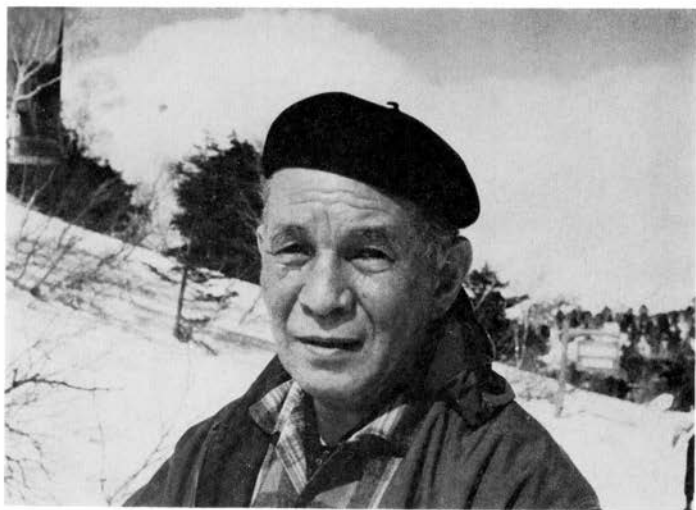


名誉会員 中原繁之助氏
Sigenosuke Nakahara (Hon. men.)
(1892~1974)



小林義正氏
Yoshimasa Kobayashi
(1906~1975)

伊集院虎一氏
Toraichi Ijuin
(1899~1975)



佐藤達夫氏
Tatsuo Sato
(1904~1974)



山田力氏
Tsutomu Yamada
(1904~1974)



伊藤英三郎氏
Eizaburo Ito
(1889~1974)



中司文夫氏
Fumio Nakatsukasa
(1901~1975)



村尾金二氏
Kinji Murao
(1903~1975)

であった。三月二十六日、牧から入山し常念乗越、中山峠、二ノ俣池、槍沢を経て同三十日早朝、槍ヶ岳頂上に立った。帰途は上高地、徳本峠を経て島々に出たのであった。また昭和四年二月には同君をはじめ松方三郎、斎藤長寿郎、青木勝、早川種三、佐藤久一朗、榎有恒など一行十三名で富士山に登った。風雪と寒気の厳しい中の登山であったが、九合目附近で引き返した。また同君は六華倶楽部会員の関係上、よく若い宮様方の登山を案内した。大正十四年夏には、山階宮藤鷹王、竹田宮恒徳王兩殿下の燕、槍の登山に黒井倂次郎、佐藤久一朗兩君と共に案内随行し、昭和五年夏には北白川永久王、朝香宮孚彦王、同正彦王三殿下の燕、槍、穂高縦走に黒井倂次郎、佐藤久一朗兩君と共に案内随行した。昭和十年、勤め先、横浜正金銀行よりロンドン支店勤務を命ぜられ爾後三カ年滞在した。その間、巴里滞在の日銀藤島敏男、北大教授山崎春雄兩君と共に冬はスイス、グリーンデルワルトにスキーに出掛けたと聞く。昭和十三年英国より帰朝、同十五年同銀行天津支店、翌年北京支店に転勤終戦に至った。北京では伊藤恩、渡辺兵力兩君と交誼があったようである。伊集院君は松方三郎、板倉勝宣兩君と共に学習院の山仲間であったが、戦前、近衛歩兵聯隊に入営していた頃、私の家が近いのでよく遊びに来た。銀行入社後、人事課の計算によると役員になるまでには六十年はかかりそうだなと言っていた。在世中同行の副頭取までなつてよかつたと思うが、同君には天性人並外れたおおらかさがあり、そのうえ国際的な教養を身につけた尊敬すべき友人であった。

昭和二十年六月 本会入会、会員番号三九〇二。
昭和五十年十一月十八日死去。享年七十七歳。

(横 有恒・佐藤久一朗)

佐藤達夫氏（一九〇四～一九七四）

戦前の内閣法制局というところは、法律や官制制定のためにはくぐらねばならぬ関所で、その官吏は各省から選りぬいた俊秀ぞろいだから、他省の役人にとっては手ごわい相手であった。

佐藤氏は大学を出て三年ばかり内務省に勤めたのち、法制局に入り、戦後までずっと勤めて最後には長官となった。

私が外務省に勤めていた昭和十年（一九三五）前後には、官制改正ごとにお百度をふんで氏と渡りあつた縁で親しくなり、その頭よさと人柄とはすぐわかつたが、植物にくわしいことは知らなかつた。当時の部長金森徳次郎さんは明敏で、八宗兼学多趣味の士であった。氏もまた山草の大家と知つたのはずつとあとのことである。

佐藤氏は終戦直後のマックアーサー時代に新憲法制定の衝にあたつて大変な苦勞を重ね、その後も立法事務を管掌して大いに働いた。昭和三十七年人事院総裁となり、人情味を加えた勸告を議会と政府に示して公務員から評価された。

氏はこのように優れた才能にめぐまれた能吏であつたが、い

つこう鋭角をあらわさず、冷静な判断と的確な論理によって人を納得させ、その間にいささか飄然たる趣をただよわせ、心おきなくつきあえる人柄であった。

私はその後、同氏とは内外にかけちがって接触する機会がなかったが、戦後はいろいろな場合に顔をあわすことが多くなつた。二人の話題は山のぼりや高山植物についてであり、私が聞き役にまわるのが常であった。

氏は九州久留米の中学、明善校時代から碩学牧野富太郎氏について植物を学んだ早熟の学徒で、役人時代には暇があると山野を跋渉して採集につとめ、栽培を楽しんだ。法制局長官をやめて多少閑になってからは、好きなみちに没頭し、植物で大先輩の武田久吉さんと松方三郎君との紹介で日本山岳会々員となつた（会員番号五九一九）。盛んに採集観察の旅に出かける一方、その成果をまとめて、味深い文章と精緻な密画を盛つた本を著わして、好事家に珍重されている。氏はまた植物に詳しい天皇陛下のよきお相手として、本田正次博士などと共に陛下を囲んでのお話は、まことに興味ふかく聞いていて楽しいとは、いつも陪席した元侍従長三谷隆信さんの直話である。

私も氏にたのまれてスイスの店やアンカレッジ空港で求めた山草の種子を贈つたところ、早速まいたら立派に成育したと知らせてくれた。また礼文島で実生の高山植物を育てていた篤志家を紹介して、直接種子を送るように世話して欣ばれたこともあった。

いづれ間もなく閑地につかれたら、異彩ある本会会員とし

て、思う存分草木との交りを楽しみ、すぐれた文章や立派な画入りの本を世に出してわれわれを喜ばしてもらえらること期待していたのに、在職中忽然としてなくなられたのは、残り惜しくてたまらない。昭和四十九年九月二十六日、青山葬儀場における佐藤家と人事院主催の告別式は簡素をきわめ、故人自筆のヤマハギの素描を印刷しただけのスッキリしたお礼の挨拶状をいただいた。まことに故人にふさわしい最後のお別れであった。

因みに氏の父君は内務官吏の最長老として重んぜられ、数年前百一歳の高齡で逝去された。決して怒らず感謝の日を送り、食事をつつしむというご当人の心掛けによることながら、令息夫妻の日常手厚い孝養が与って力があつたことを知り、ますます氏に対する敬慕の念を深うするのである。

略 歴

明治三十七年五月一日 福岡県浮羽郡浮羽町に生まる。

大正十年 福岡県立中学明善校第四学年修了。第五高等学校、東京帝国

大学法学部政治科卒業。

昭和三年 内務省に入る。昭和七年三月 法制局参事官。昭和十六年十

月法制局第二部長。昭和二十年十一月 法制局第一部長。昭和二十一

年三月 法制局次長。昭和二十二年六月 法制局長官。昭和二十五年

三月 国立科学博物館評議員。昭和三十七年九月 人事院総裁。昭和

三十九年三月 日本山岳会入会。紹介者、武田久吉、松方三郎。会員

番号五九一九番。

昭和四十九年九月十二日 在職中、逝去。享年七十歳。

(日高信六郎)

図書紹介

山で会った人

ほか(全五冊)

松方三郎著 松方峰雄編集 A5判
平均二六〇ページ(『アルプスと人』
のみ一五三ページ) 一九七五年十
月〜一九七六年二月 築地書館刊
定価一〇〇〇〜一八〇〇円

松方さんの生前における幅の広い、多面的な活動ぶりはよく知られているところだが、その本当の姿については、われわれのような若造はもとより、ごく親しい人達でさえ、あまり正確に纏んでいたとはいえないのではないだろうか。本書を読みながら、最初に思ったのはこのことである。

松方さんが亡くなって、早いものでもう三年たってしまったが、このほど、松方さんの長男で、同じく本会会員である松方峰雄氏の編集により、五冊のエッセイ集が刊行されたことは、大人・松方三郎氏の全体像を理解しようとする上で、貴重な手がかりを与えてくれる。

五冊の題名を刊行順に記せば、次のとおりである。

『山で会った人』(一九七五年十月刊)

『手紙の遠足』(一九七五年十一月刊)

『山を染しもう』(一九七五年十二月刊)

『アルプスと人』(一九七六年一月刊)

『民芸・絵・読書』(一九七六年二月刊)

このうち、『アルプスと人』は、一九四八年に岡書院から出版された同名の旧著を新版にして加えたものであるが、その他の四冊は、松方さんが生前に書かれた数多くのエッセイのなかから、編集者が選んで、新たにまとめたものである。

さすがに山に関連したものが多く、『アルプスと人』を加えて全部で三冊、社会とか国際関係の問題、ジャーナリズムに関連したものが一冊、文化、とくに民芸・美術に関連したものが一冊だが、全部で五百数十点のなかから各巻平均三十点を選んだだけに、珠玉のエッセイばかりである。過去に新聞、雑誌に発表されたものがほとんどだが、松方さんが関わっていた分野とメディアは多岐にわたっていたから、読者の立場からすると、はじめて目にするものが多い。したがって、このようにまとめられたものを読むことによって、松方さんのスケールの大きさ、広い視野、文化、歴史に対する深い造詣、登山に対する愛着、これらが一体となった独自の魅力を改めてよく知ることができるし、松方さんの一貫した考え方やものの見方を一層よく理解することができる。

私が松方さんにとくに親しく接したのは、エベレスト登山のときと、『山岳』一九七〇年、七一年に成田安輝氏の『進蔵日誌』上・下を掲載したときである。そもそもこの原稿が陽の目を見

ることになった契機は、松方さんが、成田氏のことについて、『週刊新潮』の揭示板欄でよびかけたことであった。松方さんのこういった面での貢献は実に大きなものがあった。私自身としては、成田氏の評価をめぐって、松方さんのチベット論をうかがい、John MacGregor の『Tibet-A Chronicle of Exploration』の読後感、とくに河口慧海スパイ説について話しあったのをなつかしく思い出す。

松方さんのエベレスト・ベースキャンプへの旅に同行したことも、私にとつてのなつかしい経験である。松方さんが、あの旅によって、体を痛められたことは間違いないであろうが、あれは、やはり、引っぱり出されて行ったというよりも、自らの選択であったと私は思う。

松方さんは、山や旅の紀行をあまり残していないし、このエッセイ集でも、それらを見ることができないのは残念だが、カトマンズのホテル・クリスタルの窓からニューロードを見下して北京を想い出しておられたことや、準備の合間をぬって、ヒラリー夫妻やハルカ・グルン博士宅を訪ねたことなどを今でも鮮やかに想い出すことができる。

島田巽氏の近著に『山・人・本』があるが、松方さんの場合にも、山と人と本が三位一体になった世界を深く愛していたということができよう。『アルプスと人』が古典としての意味をもつのも、それが、『アルプスの登山と人』といった狭い意味でなく、アルプスを取巻く一つの世界からは、実に沢山の学ぶべきものがある」という思想が全篇を貫いているからである。島田氏とい

えば、エベレスト登山の際に、松方さんは、島田氏から『Shipton "That Untravalled World"』の最終章の「コピーを送られて、ホテルのなかで楽しそうに読んでおられた。私もそれを読ませてもらい、シプトンとボーディオンの意見が相違する部分をどう考えるかとか、シプトンやティルマンの登山観について話し合って、毎日が楽しかった。結局、松方さんは「登山は、自然へ入り込むための恰好の手段であり、他にも同じような欲望を満足させてくれる活動の形態が多くあるかもしれない」というところに、力点をおいていたように思われる。そのへんのアドベンチャーに対する松方さんの考え方の一端は「海からの山」（『山を楽しもう』所収）他随所に見ることが出来る。松方さんは、今度はフェゴ島に行ってみたいと言っていたのに、この希望はかなえられなかった。

松方さんの文章はきわめて平易で、何気なく書かれているが、きわめて含蓄があり、密度が高い。借りものの概念や言葉を使うことを好まず、洗練された自分の言葉を大切にしていた。口調はやさしく、おだやかで、このエッセイ集を読んでも、まるで、山小屋のいりりでも囲みながら、じかに語りかけられているような、ある暖かさや親しさを覚える。しかし、事実を客観的に観察し、ほんものにとせものを見分ける眼力は正確で、きびしい。「登山入門」（『山を楽しもう』所収）のなかに、最近における山での遭難の多発や自然への敬虔な気持の喪失、といった一般的な声に対して、「しかし問題は敬虔さとか謙虚さという倫理の面での問題ではなくして、事実そのものに正面か

ら取組んで、それを正しく秤量し、解釈し、対策をたてるという具体的な現実の問題で、むしろ科学の分野の問題なのではないか」と述べている。松方さんは、それこそ論陣をはったり、他人を説き伏せたりすることを好まなかったが、こういったことをさらりと見破るところに、松方さんの発想のユニークさがあったように思われる。これは山についてだけではなく、「経済復興」という雑誌に寄稿していた自然保護や社会問題、風俗に関する松方さんのエッセイ（『山を楽しもう』、『手紙の遠足』などに所収）は、きわめて鋭い文明批評となっており、社会的発言としても極めて重要なものということができる。松方さんが、身のまわりのどんな小さな事柄にも愛情のこもった目を注ぎ、幅広い角度から深く洞察し、納得のいかないものについてはノウと言いつつ、将来の展望を模索し続けていたのを知ることが、きわめて興味深い。山について松方さんが書き残したぼう大なエッセイも、こういった視点から見直してみると、われわれが見落していた問題がいかに多いかに気付く。

松方さんの山登り観は、登山は文化的な行為である。山岳会は自由人の集まりなのだ」ということに尽きると思うが、松方さんの表現では、好きだから山に登る、楽しいから集まる、それでいいじゃないか、皆大人なんだし……」ということになる。しかし、この単純な言葉のなかにこめられている意味の深さが、最近の日本山岳会のなかではだんだん通じなくなっているのではないだろうか。時代が変わった、ということは簡単だが、それですむ問題ではない。

松方さんは、「日本山岳会―回顧と展望」（『山を楽しもう』所収）のなかで、二代目に属する世代として、クラブ・ルーム、山日記、会報、の三つについて述べているが、三代目としては何が語れるか。多分、ヒマラヤを中心とする登山とか自然保護の問題とかがハイライトになると思うが、現状は、ただ親の遺産をくいつぶしているような気がしないでもない。

松方さんは、山を開かれた世界のなかに解放した功績者の一人である。このエッセイ集を読んでいると、そこに、たくさんの伏流がかくされているのを知ることができる。それを探しながら、地表に汲み上げるのは、われわれの仕事である。

松方さんは、これだけ多くの文章を残しながら、自分の過去のことを語っているのはひとつもない。四冊の約一二〇点のエッセイのほとんどが一九六〇年代に書かれており、一九七一年八月に入院されて以降のものも三点含まれているのにも驚く。亡くなる直前まで、多くの人に出した手紙だけでも大変なもので、最後の最後まで、新鮮な好奇心をもち続け、世界中を旅行し、山に登り、人と語り、本を読み、思索し、自分の言葉を研ぎ、人々にメッセージを送り続けた。しかも、そこに悲壮感はまだたくなく、淡々と自然そのものであったところに松方さんの非凡さがあるような気がする。

各巻に、殿木圭一氏の親切な解説がついており、理解を助けてくれる。本を愛した松方さんの本らしく、松方峰雄氏の編集もていねいで、本づくりに心が配られている点がうれしい。追悼集『松方三郎』（共同通信社刊）とともに、折に触れて、

編いてみたい本である。

(中島 寛)

今西錦司全集

全十卷

編集・伊谷純一郎・上山春平・梅棹
忠夫・吉良竜夫・桑原武夫・森下正
明 四六判平均五〇〇ページ函入
各巻に付録月報付 一九七四年九月
〜一九七五年六月講談社刊 定価各
巻二六〇〇円

この全集をどう紹介していいか、いささか戸惑いを感じる。こういう性格の全集であると一口にいえぬ内容なのである。第一巻には今西氏自身が「全集の刊行にあたって」と題して書いているから、それによって一応のところはわかるが、それだけでは不十分である。

「全集」と銘打っているが、内容はだいたい「著作集」である。そして、それらを項目別に並べるのではなく、原則として著作の年代順にしたがっている。とまあ、これでこの全集の内容が説明したことになるが、それでも一向にはっきりしない部分がある。それは今西氏の業績あるいは生活にも関わってくることであるが、学者としての今西錦司の全集であるのか、あるいは

登山家としての今西錦司の全集であるのか、そのへんのところははっきりしない。「全集」であるから、「今西錦司」という人間が中心であって、内容が科学論文であろうと、紀行であろうと、エッセーであろうとどうでもよいはずであるが、どうも普通の学者や文学者の全集とはニュアンスがちがう気がする。この全集とほぼ同時期に出版された『深田久弥・山の文学全集』と比べると、そのちがいはすぐわかるであろう。「深田久弥・山の文学全集」の場合は、深田久弥氏の山に関する業績を中心に編集されている。この全集の内容は統一されており、はっきりしている。山関係でなくとも、多くの文学者の全集をみて、学者の全集をみて、あるまじりがある。

これに反して、この今西氏の全集はちがう。本屋の店頭でも、生物関係のところにあったり、山関係のところにあたりす。どうも坐りにくい性格の全集である。今西氏が著作するにあたって、これは生物学、人類学、登山関係という風にかけて書いておられるのであろうが、こうして全集にまとめてみると、一つのトーンにしたがって書かれているように思われる。第一巻の「生物の世界」にしてからが、これは生物学あるいは哲学に関する本であるのか、エッセーであるのか、とらえにくい。これは今西錦司氏の特異な美学のなせるわざともいえる。このどちらかといえば、生物に関する論文の多い全集を『山岳』において取り上げる理由も、このへんにあると思う。著者が登山家であるというだけで、山に無関係な著作をとり上げることはない。今西氏の場合には、山と学問とが微妙につながっていて、

一つの見事な美学として存在しているように思われてならない。「生物の世界」ばかりでなく「生物社会の論理」「人間以前の社会」「ニホンザルの自然社会」などという学術論文にみられる、個性的な文体は、堅い、無味乾燥なものどちがって、今西氏のいう「論理の美」意識につらぬかれている。これは他の学者にはめつたにみられぬものである。これはまさに天才的といってもいいかもしれない。

ぼく自身は今西錦司氏のこの「論理の美」に魅きつけられて、一登山者の身であり、生物学には全くの素人でありながら、長い間、これらの著作に親しんできたものである。そして、この全十巻の全集を前にして、それらの著作にふれたときの強い感動を思い出している。以下、各巻の内容を掲げてみる。

第一巻 「生物の世界」「山岳省察」「山と探検」

第二巻 「草原行」「遊牧論その他」その他「内蒙古の生物学的調査」から、また「人類の誕生」から二、三の論文を掲載

第三巻 「ヒマラヤを語る」「カラコラム」その他「北と南——

垂直分布帯の成因をめぐって」と「山の生態学」の二文章

第四巻 「生物社会の論理」その他「論理」をめぐる諸論文として、九篇の論文

第五巻 「人間以前の社会」「人間社会の形成」その他生物社会と人間社会に関する六篇の論文

第六巻 「常緑広葉樹林」「御崎馬の社会調査」「都井岬のウマ」「村と人間」

第七巻 「ニホンザルの自然社会」と題して九篇の霊長類研究

に関する論文、「ゴリラ」「アフリカ研究序説」

第八巻 「日本山岳研究」

第九巻 「私の自然観」「自然と山と」「そこに山がある」「カゲロウ」

第十巻 「私の進化論」その他進化に関する論文六篇と「人類学への回顧と展望」「私の履歴書」の二つの文章を掲載している。最後には「主要著作目録」を掲げ、全集のまとめとしている。

これらの内容を一つ一つ思い浮べてみても、その表題の専門的な感じとはちがって、素人にもなじみやすいものである。ぼく自身はこれらの論文をほとんど全部読んでいたので特にそういう感じをうけるのかもしれない。思うに、この全集は「今西学」を内容としたもので、山でも生物学でもない。ちょうど「柳田国男集」が民俗学と一口に呼べるものではなく「柳田学」が内容であるように。しかも、この二つの全集に共通するのは、土着の思想である。西欧的な教養を身につけていながら、むしろ土着的な思考方法を展開し、独自の世界観を築き上げたのである。柳田の場合でもそうであるように、今西氏の論文にかかっている具体的な事柄よりは、その底に流れる方法論あるいは世界観が見事なのである。どの分野の人が読んでなじみやすい秘密はそのへんにあると思う。反対に、なじみにくいとしたら、今西氏の独特の文体によってかかれた方法論のせいであるともいえよう。一歩ちがえば、ひとりよがりともいえそうな、

ぐいぐいとひっぱっていく文体は、とても他人にはまねはできない。むしろ、まねをすれば失敗するにきまつている。第八巻の解題で吉良竜夫がかいてるように、「論文が提示する客観的事実とその認識のしかたに抜群の新しさがあり、緊密な論理構成がそれにともなっているのだから、強い自己表現との間にバランスのとれたレベルの高い作品にはなりえないからである。」

今西氏の文章には全身的なものがあって、それらがねばり強い論理展開となっている。なれないものには、くど過ぎることもうけとれ、自己主張が強すぎるともうけとれるだろうが、科学論文とは無味乾燥なものだと思っただけにとつては、ひじょうに魅力的であった。学問とはこういうものなのかと、あらためて知らされたのであった。「生物の世界」の序で「この小著を私は科学論文あるいは科学書のつもりで書いたものではない。それはそこから私の科学論文が生まれ出すべき源泉であり、その意味でそれは私自身であり、私の自画像である」と述べているが、このことがじつに新鮮なひびきを持っている。そして、この「自画像」は「生物の世界」ばかりでなく、この全集のすべてにみちあふれているのである。

この全集のどの一冊をとっても、今西氏の強い自己主張につらぬかれており、今西ファンにはたまらない魅力である。ただこの中で、どれが好きかといえば、山関係では「山岳省察」、生物関係では、「生物の世界」、探検関係では「草原行」が好きである。これらはすべて初期の著作であるが、やはり今西学の

源泉がわかるような気がして好きなのである。そうかといって「日本山岳研究」の諸論文もおもしろいし、「生物社会の論理」や「論理」をめぐる諸論文、たとえば「F・E・クレメンツ——その学説の批判」とか「生活共同体の認め方」などを讀んだときの感動も忘れない。「遊牧論その他」だって、「人間以前の社会」だって、好きである。こんなことをいったらきりが無い。どれもこれも忘れられないのである。

この全集に不満といえば、「生物と戦争」など掲載もれとなった文章のことである。大興安嶺探検の報告として米國地理学会誌に書かれた英文なども、今西氏の業績をみる上で重要なのでぜひほしかったと思う。ファンの立場からいえば、二十代の文章だってほしい。完全な全集でない以上、これらはどうしようもないだろうが、いずれはまとめてほしいと思う。

各巻には、編集委員による解題が付いており、また今西錦司氏の山に関する業績などはすでに知られていることではあり、個人的な感想を述べて紹介としたが、いわばこれは蛇足であって、今西錦司全集全十巻が発行されたという事実だけを述べれば足りたはずである。それほどこの全集の存在は大きく、重いのである。単に山とか探検とか生物とかに関わるだけでなく、ぼくらの世界観につよく迫ってくるのである。

(水野 勉)

高所登山研究

編集・日本山岳会 A5判二五〇ペ
ージ 一九七五年五月 山と溪谷社
刊 定価三〇〇〇円

はアルピニストの精神を根底とした酸素非用論の方を好ましく思っているように見られる点が面白い。

「八千メートル峰登山のタクティクス」松田雄一（一九五八、五九年） 一九五六年のマナスル初登頂の体験をもとにした八千メートル峰登山のオーソドックスな戦術論。その戦術論は今もってタクティクスの基本として生きており、タクティクスを学ぼうとする者は一度は目を通さねばならないものである。

「高所順応と高山病」W・ブレンデル（一九六五年）（加納巖・訳）中島道郎・補 高所順応と高山病についての生理学的論文。基本的知識が明解に理解しやすく論じられている。

「マカルー南東稜における高所順応」橋本篤孝、原真（一九七〇年） マカルー南東稜に参加した両医師の高山病と高所順応についての体験論。戦術と関係づけて分析考察されている点が参考になる。

「高度障害による遭難例」村井葵 自らの体験をベースにして一九六四年から七四年五月までに起きた高度障害による遭難例を収録している。高度障害の恐ろしさがよくわかる。

「高所登山の諸問題」原真（一九七三年） 高所適応の問題を概念と用語の整理を混じえて、歴史的に、生理学的に、体験的に論じ、最後に適応の方法を実践的に考察している。登山家であり戦略家であると共に医師である著者の強みを遺憾無く発揮した示唆に富む論文である。

「登山家の精神病理学的考察」Z・リン（加藤和美）浅見正夫

図書紹介

五年前、私にとって初めてヒマラヤ遠征に参加する時、高所登山についての勉強はもっぱら各遠征隊の報告書に頼っていた。勿論まとまった研究書などはなかった。近年、海外遠征経験者の急増にともない、有志による高所登山の研究や論議が非常に活発になってはいるが、それでもまだ研究書の出版までには至っていなかった。世界一の経験者数を有するわが国である。経験内容は十分揃っているはずであるが、それでいて研究書が出版されなかったことは寂しい限りであったが、このたびようやく山と溪谷社より「高所登山研究」が出版された。

編者は日本山岳会高所登山委員会の金坂一郎、原真、浅見正夫、池田常道の諸氏である。この種の研究書を待望していた一人として本書の紹介をさせてもらおう。

内容を目次順に追っていくと、

「エヴェレストと酸素」深田久弥（一九五四年） エベレスト初登頂に至るまでの酸素使用の是非論争を紹介している。著者

・共訳) ポーランドの男女登山家グループに五年間にわたって続けた精神医学的、心理学的実験研究をまとめた珍らしい論文である。国民性の違いが大きそうだが、内容的には興味深いものがある。日本でもこのような実験が待たれる。

「ヒマラヤ登山のタクティクス再考」高橋善教(一九七四年)
八千メートル峰パリエーション・ルート時代の幕開けの一つとなった一九七一年マナスル西壁登攀の内容を数字的に分析し、他隊のそれと比較・検討しながら、パリエーション登攀のタクティクスのあり方を考察している。タクティクス論にまではまとまっていなかったが、パリエーション・ルートのタクティクスを考える時の参考にはなる。

「酸素補給と酸素器具」和田豊司(一九七四年) 酸素の性質、製造方法から酸素機器についてをわかりやすく説明してくれている。高所登山には酸素が不可欠でありながら、今までまとまったものがなかった。この論文は酸素の教科書として絶好のものとなる。

付録「高所の体験と意見——ヒマラヤニストへのアンケート調査」日本二三人、海外三八人のヒマラヤニストに高山病と高所順応に関して七項目のアンケート調査をしている。自らの体験に基づく意見は非常に参考になるし、どれをとっても興味深い内容を含んでいる。

以上の如く、高所順応と高山病を中心にしたユニークな論文が勢揃いした。

わざわざ書くまでもなく、高所登山は高度との闘いである。高山病を克服し高所に順応してこそ、日頃の実力が発揮出来るし、タクティクスが役に立つのであって、順応なくして登山なしと言いつてもよい位のウエイトを占めるものである。したがって高所登山を目指すものにとっては、高所順応の知識は絶対に不可欠なものである。本書はその基本を学ぶのにもってこいのテキストとなっている。

しかしやっかいなことに、高所順応には個人差がかなりある。それは体質と性格との両面から来るものであろう。基本通りいかない所に高所順応のむずかしさがある。

私を例にとると、マナスル西壁、ダウラギリI峰サウスピラーの両遠征において、基本パターンからほど遠い行動をとったにもかかわらず、高山病に苦しまされたことはない。マナスルの時は、初めてのこともあり、動けるメンバーが少なかつたこともあって無我夢中で登ったことでもあったが、二度目であるダウラギリの時は、個人差と経験の強みを考慮に入れて、初めから基本パターンを無視した行動をとった。だが、通常言われている四〇〇〇メートル、六〇〇〇メートルの高度の壁は一切感じずに済んでしまった。

反面、初経験者に対しては基本といわれる三日乃至四日行動、一、二日休養のローテーションで登らせたが、それでも五二〇〇メートルのキャンプでは相当数の隊員が高度の影響で苦しんだ。勿論、そのローテーションで充分順応出来た隊員も多かったが。

そんな経験から、高所に順応するまでの行動ローテーションは個人別に作るのが最適だと思うのだが、残念ながら、まだ高所順応の問題は個人差を追求する所まで解明されてはいない。現状では、基本をよく咀嚼しやくした上で、現場では応用問題として臨機応変に処理していくしかなさそう。応用問題が多過ぎる所に高所登山の難しさがあるわけだが、そうかといって基本問題を軽視していいわけではない。何事でもそうであるように、基本がしっかりしていてこそ応用問題が出来るのである。基本を見直し、しっかりと身につけること、それが本書出版の意図であり意義であると思う。

なお、この後、高所登山の総合テキスト第二弾、第三弾として「エクスペディション研究」「氷雪技術研究（仮題）」が用意され、最終的にはハンディな教科書作りを目ざしているという。楽しみなことである。

（小原和晴）

覆刻 日本の山岳名著 解題

企画編集・日本山岳会 A5判 二
八〇ページ 函入 一九七五年十月
大修館書店刊 『覆刻日本の山岳名
著』付録

日本山岳会が昭和五十年度に創立七十周年をむかえて、その記念企画として今回『覆刻日本の山岳名著』とその解題書他を編集したことは、山の愛書家にとって永らく待望されていたことだけに、山岳知識の啓発と近代登山の先駆者たちの研究に役立つこと多大であろう。その刊行までの経緯と準備については、近藤信行が会報「山」三六四号に書かれていたが、その出版の基本的理念は、後世につたえるべきすぐれた著作を選んで、その初版原本の形態を忠実に再現することを原則として進捗したという。覆刻著作の選定とその考証、著作権者と原出版社との覆刻許可の交渉、初版原本の入手等いろいろ煩瑣な仕事を円滑にすすめることができたのは、日本山岳会の伝統と權威の賜物と思う。

今回選定された十八巻は、古くは明治二十七年発行の『日本風景論』から昭和十五年の『山岳省察』までであるから、今でもその一部は山岳全集や選集に併載されているが、さてその初版原本となると、すべて今日では稀覯本であって、古書の市場値段も高く、愛書家にとって文字通り高嶺の花となっている。全十八巻の中、明治年間に出版されたものが四点、大正期のものが三点、昭和前期のものが十一ポイントであって、昭和五年度にかぎり五点が発行されており、出版社別にみると梓書房ものが七点あるのは異彩である。

今回の『覆刻日本の山岳名著解題』は、日本山岳会が初めて編集した山の本の解題書であって、次記の解題書目の通り、内容豊富に解説されている。

〔解題書名と執筆者〕

志賀重昂 『日本風景論』

高頭式編 『日本山嶽志』

小島鳥水 『日本アルプス』全四巻

鹿子木貞信 『アルペン行』

田部重治 『日本アルプスと秩父巡礼』

横山 有恒 『山行』

冠松次郎 『黒部谿谷』

大島亮吉 『山 研究と随想』

板倉勝宣 『山と雪の日記』

藤木九三 『雪・岩・アルプス』

武田久吉 『尾瀬と鬼怒沼』

辻村伊助 『スウィス日記』 『ハイランド』

小島鳥水 『水河と万年雪の山』

伊藤秀五郎 『北の山』

木暮理太郎 『山の憶ひ出』全二巻

今西錦司 『山岳省察』

Walker Weston: Mountaineering and Exploration

in The Japanese Alps

島田 巽

作品解題十七篇は「著者および著作物について、その時代的背景、日本の近代登山史における諸問題をめぐって、自由なたちで執筆した」という趣旨に準じて綴述されているが、その執筆者の中には、著者と同郷の人、血縁ある人、同窓か生前の著者に師事された方々が多いので、各篇とも考証のゆきとどい

た解説で温い筆致で綴られている。

各篇を繰り返し読んで、私の感想を断片的ながら述べてみよう。解題『日本風景論』の文中に、著書の種本としてテムバレン、メースンの Handbook for Travellers in Japan 第三版が登場するが、これと同じ説明が解題『尾瀬と鬼怒沼』にでてゐる。この考証が正規に発表されたのは、小島鳥水が『山岳』第三十年一号（昭和十年）所載の「王堂テムバレン先生」に書かれたのが最初ではなかったかと思う。解題『日本山嶽志』の久保田全は新潟県小千谷の住人で、著者の同郷に在って大平巖と高頭式の研究に永らく尽瘁されているだけに、なかなか濃厚な内容である。

解題『山 研究と随想』の本郷常幸は慶応の登高会のメンバー、解題『山と雪の日記』の板倉勝正は著者の愛甥であって、いずれも恰好な執筆者といえよう。前者の岩波書店の発行することになった経緯について、小林勇の随筆集『夕焼』（昭和四十九年）の一篇『断片松方三郎』ののっている、松方が大島亮吉の遺稿出版の依頼に岩波茂雄を訪問した際、もう一人の同行者として、その後『先蹤者』の編集に精根を傾けた豊辺国臣をあげていること。それから解題『山行』の中で、本書が横有恒の処女出版となったのは、松尾峠の遭難でうけた凍傷のため湯河原で療養していた際、スイスにおける登山と松尾峠の遭難報告を一本にまとめるよう、鹿子木貞信からすすめられたのが、本書発行の要因であるという著者から聞いた直話、この二つの挿話は私は初めて耳にする内容である。

宗教界の師弟関係にみかけるように、山の世界でも数奇な邂逅が優れた登山家を誕生させている。解題「日本アルプスと秩父巡礼」と解題「山の憶ひ出」に披瀝されている田部重治と木暮理太郎の明治三十八年の出会い、それから解題「日本山嶽志」に綴られている当時小学校の訓導であった大平晟と高頭式との明治二十一年頃の出会い、わが近代登山史上特筆すべき記録としてこの二篇の中で紹介されている。

春田俊郎の解題「尾瀬と鬼怒沼」は著書の解題とは別に、十ページにわたって日本博物学同志会の活躍と武田久吉父子の略伝が綴られているが、アーネスト・サトウと武田久吉との業績を同頁に懇切に紹介した文章は、十年位前までは余り試みられなかった筈である。

初見一雄の解題「北の山」には著者の登山家として、教育者としての業績が讃えられているが、詩集「風景を歩む」（昭和五年）の詩人伊藤秀五郎についても紹介を加えてもらいたかったし、また北海道早期登山の案内書「北海道の山岳」（昭和六年）の編者出版元の田中三晴（登高会のOB、大登会の常任幹事）と晴林堂の思い出はなつかしかった。

今回の覆刻山の名著の中で、もっとも原典復元が期待されていた本とせば、ウエストンの「Mountaineering and Exploration in The Japanese Alps」や小島鳥水の初版本「日本アルプス」全四巻であろうか。ウエストンの原著は版元のジョン・マリ社にも保存本が一冊しかなかった由。しかし今回の覆刻版の出来映は期待にこたえて上々の絶品で、八十年前の感触を十

分味あわせてくれたものと思う。島田巽の五頁にわたるウエストンの年譜はスイスの登山歴、聖職の調査も加えて完璧を期している。

解題「日本アルプス」は先に雑誌「アルプ」に連載した近藤信行の「小島鳥水―山の風流使者伝」とともに鳥水研究の結晶であって、文中に「山水無尽蔵」の発刊は、これに続く「日本アルプス」の出版の三番的的存在であったという解説は目新しい。雑誌「太陽」（明治二十七年二月）に発表して、探検時代に鳥水の存在を認識せしめた「甲斐の白峰」に戯文という副題がついているが、武田久吉が「山岳展望」（昭和四十年三月）に「甲斐の白峰―後日物語」を載せてからは、この鳥水の匠気ある創作も戯作のとり扱いをうけることが常説となってしまうものか。

本書の巻頭には島田巽の「山の本とその時代」小林義正の「日本近代の山の書物」（「山と書物」正統より再録）を載せて、昭和二十年まで、逐年出版された山の本を紹介している。また巻末に十三ページをついやして、今回の覆刻刊行の経緯と経過を詳述しているが、今後の覆刻刊行に極めて参考になる内容である。

（坂戸勝巳）

Nothing Venture, Nothing Win

by Edmund Hillary, Hodder
and Stoughton, London, 1975

サー・エドマンド・ヒラリーの自叙伝が右のような題名で刊行された。直訳すれば「虎穴に入らずんば虎児を得ず」という古諺に当るだろうが、いささか古めかしく、邦訳の題には向きそうもない。自伝の題にしては、少し風変わりとも思えるが、読んでゆくうちに、これこそヒラリーがなしとげた数々の偉業の内側に存在する強固な信条であることに思い至る。つまり、この自伝は、一方において著者の半生をつぶさに物語っている点で興味ふかいものであると同時に、その半生にあれだけのアドヴェンチュアを敢行した著者自身の原動力となってきたものは何かを、鮮明に示しているといつてよい。

半生の物語りという一面では、ヒラリーが一九一九年七月二十日にオークランドで生まれた折から筆を起して、およそ一九七三年、つまり五十四歳ころまでの行動について語られているし、祖父の時代の話にまで溯っている。このあたりのことは、ヒラリーの最初の著作 High Adventure (邦訳『わがエヴェレスト』)のなかで、冒頭の「修業時代」と題する一章に簡単に触

れられていたが、この本では少年時代から青年時代にかけて、父の本業であった養蜂の仕事を手伝いながら、ニュージールランドの山々で鍛えられてゆく過程が、六つの章にわたって詳述されている。その間には大戦による応召中のことも当然記されているが、その時期を挟んで次第に山登りに打込んでゆく青年ヒラリーの姿に接することができる。とくに一九四八年、信頼される僚友ハリー・アイヤースとのマウンント・クック南山稜完登については第六章で詳しく述べられている。

一九四九年に訪欧の機会にめぐまれ、はじめてオーストリアとスイスの山々を訪れ、三人仲間て精神的に登り歩いた話(第七章)、ついで、ヒマラヤへの第一歩として、ガルワールのムクート・パールバートに挑んだ話(第八章)、ついで一九五一年のシプトン隊のエヴェレスト南面偵察に加わることができ(第九章)、やがて一九五三年にエヴェレストの頂きに立つに到るまでの話(第十章)が次々と語られる。はじめてのヒマラヤでの実り多い日々をおえてラニケートの町へと戻ってきた一九五一年の夏日、シプトンから遠征隊への参加を求める電報が待っていたときの喜びは、『わがエヴェレスト』にも簡単には触れてあったが、ヒラリーにとつての大きな運命の転換ともいえるだけに改めて詳述されているのを読むと特に強い印象を受ける。

一九五三年のエヴェレストの折、シプトンが隊長だとばかり思い込んでいたヒラリーにとって、ジョン・ハントが隊長に選ばれたことは驚きと失望の事件であった。「シプトン抜きでエヴェレストなど考えられるものか、軍人などまっぴらだ」と本

気で参加をやめようと考えたと、今回の本では卒直に記している。二十年の歳月を隔てたので、著者もこのように当時感じたままを公けにする気になれたのであろうが、そのハント隊長にカトマンズで初めて対面してから後は、だんだんその人柄がわかってくる、ときに理解できぬ面はあっても、敬服すべき人物だと感じるようになる。そこまでの過程がそのままに記されているあたり、なかなか味わいがある。

このエヴェレスト初登頂のあと、サーの称号をうけて当惑するヒラリーの後日譚(第十一章)も面白いが、大歓迎を受けた英国から故国へと帰る途次、オーストラリアに立寄る一幕がある。音楽を学びにシドニーに留学中のルイズ・マリィ・ローズ、ニュージーランド山岳会長をつとめたローズ氏の愛娘に求婚を申し入れるため、色よい返事を得たヒラリーの喜びが文章のなかにみなぎっている。それだけに、本書執筆のあと、あの不幸な航空事故というヒラリー一家をおそった悲劇を想起せずにはいられないのである。

以上のほか、さらに南極大陸横断とか雪男探検とか、大きなアドヴェンチュアは次々へと語られて尽きないが、本書の第十五章から終章までの四つの章には、それらの探検の記録とはいささか趣きを異にした記述がみられる。それは、ある意味では私がかき上げた本書のもつ二つの面のうちの一つ、つまりヒラリーのアドヴェンチュアを支える原動力について、触れている部分ともいえる。否応なしに世界的な有名人となってしまうヒラリーにとって、負わねばならぬ重荷は相当のものだった

にちがいないが、自らの社会的責任を果すことを至上の命令と心得て献身する姿は、読むものを感動させる。とかく成功に酔うとハイ・ブライウになりがちな有名人たちとは違って、澄み切った責任感がこの著者のなかにある。

たとえばネパールでシェルパの村に学校を建て、また病院を開設するといったあの周知の努力、そのための資金を仰ぐための東奔西走、さらにはそれら援助者の好意に酬ゆるための講演旅行と、この著者のエヴェレスト以後の社会的活動の多忙さには目をみはらされるものがある。一九六一年末から六二年までの一年間に米加両国八十の都市で晩餐会に招かれて行なった講演は一〇六回に及んだし、その上、テレビ、ラジオ、記者会見その他の講演まで引受け、「疲れる仕事だが面白かった」という著者には学ばべき点が多い。ニュージーランドの素朴な家庭に育ち、信仰心の厚い社会の雰囲気を感じていることが、強く影響していることも感じさせられる。

本書の終章のなかに、ヒラリーが学校や病院の建設の仕事のためにネパールを訪れるたびに、多くの変化を目にすることに触れている。その一つの例に日本とネパールの合併企業がエヴェレストを眺める絶好の地にホテルを建設する計画が始まった折の話だが、この工事のためにシェルパの農耕地をつぶして小飛行場をつくるというので、ヒラリーはシェルパたちのために反対の先鋒となる。このため「日本の新聞などで、飛行場建設を妨害するものとして非難されたが、日本の登山家たちからは、かなり激励的な支持を受けた」と記している。学校、病院を建

設しているヒラリーにとって、商業的な企業の進出、それに対しシエルパの村の将来を考えずにはいられない気持が、ここに強くにじみ出ているので、「日本の登山家の支持」云々と記されているのに、わずかな慰めを感じはしたものの、いささか苦い読後感を味った。

右のことが記されている終章には、さきにも述べた本書の題名に凝縮された著者の強いアドヴェンチュア精神が繰りかえし説かれている。折あらば、さらに虎穴に入って虎兎を得ようとする強い姿勢が、最後のページに至るまでみなぎっている。邦訳も出る予定と聞いているので、ぜひ一読をすすめたいし、ヒラリー精神ともいべきものを、本書の中から吸収して欲しいとも願うものである。

(島田 巽)

会務報告

昭和四十九年(一九七四)七月~昭和五十年(一九七五)十二月

◇七月理事会 七月五日(金) ルーム

出席者 今西、織内、板倉、伊倉、近藤、浜野、望月、金坂、山崎、高遠、三枝

▽議事・報告

- 一、ダウラギリIV峰登山(桜門山岳会)推薦の件
- 二、東海・岐阜支部役員改選の件
- 三、高所登山研究の件
- 四、図書・山岳委員会報告の件

(詳細は「山」三五五号参照)

◇九月理事会 九月十二日(木) ルーム

出席者 織内、板倉、伊倉、春田、宮下、浜野、松丸、大倉、山本、丹部、田村、今井、望月、高遠、三枝

▽議事・報告

- 一、「高所登山研究」出版の件
- 二、会費値上げの件
- 三、現地小集会の件

(詳細は「山」三五三号参照)

◇十月理事会 十月四日(金) ルーム

出席者 今西、織内、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、神崎、松丸、原、大倉、山本、田村、婦山、望月、山崎、高遠、三枝

▽議事・報告

- 一、ナンダ・デヴィ遠征申請の件
- 二、明大エベレスト登山推薦の件
- 三、七十周年記念事業の件
- 四、山日記、山岳編集委員会報告の件
- 五、青年・婦人懇談会報告の件
- 六、集会、図書委員会報告の件
- 七、高所登山研究会の件

(詳細は「山」三五四号参照)

◇十一月理事会 十一月八日(金) ルーム

出席者 今西、中屋、織内、板倉、伊倉、松丸、大倉、丹部、田村、浜口、山崎、金坂、高遠、三枝

▽議事・報告

- 一、酸素補給用エコノマイザー装置特許認可の件
- 二、会報担当者変更の件
- 三、三田前会長長紫綬褒章受賞の件
- 四、山岳研究所報告の件
- 五、指導委員会報告の件
- 六、山岳・山日記編集委員会報告の件
- 七、青年懇談会報告の件
- 八、海外連絡委員会報告の件

(詳細は「山」三五五号参照)

◇十一月評議員会 十一月九日(土) 第三利根川ビル

出席者 今西、中屋、織内、山崎、望月、金坂、渡辺、林、津田、村山、藤井、藤島、佐藤、島田、大塚、堀田

▽議事・報告

- 一、会費値上げの件
- 二、名誉会員推薦の件

中原繁之助氏を推薦

- 三、会務報告の件

- 四、山岳研究所についての報告の件

(詳細は「山」三五五号参照)

◇支部長会議 十二月六日(金) ルーム

- 出席者 今西、中屋、織内、板倉、伊倉、伊藤(北海道)、柴田(秋田)、佐藤(岩手代理)、後藤(山形)、藤島(新潟)、大沢(山梨)、山本(静岡)、松井(岐阜)、中田(富山)

- 一、創立七十周年記念事業の件
- 二、会費値上げの件

(詳細は「山」三五六号参照)

◇一月理事会 一月十日(金) ルーム

- 出席者 今西、織内、板倉、伊倉、近藤、宮下、松丸、浜野、原、山本、丹部、田村、浜口、望月、山崎、金坂、渡辺、堀田、小原、藤井、高遠、三枝

- ▽議事・報告

- 一、中原名誉会員逝去の件
- 二、ナンダ・デヴィJOINT計画の件
- 三、上高地山岳研究所の件

(詳細は「山」三五七号参照)

◇二月理事会 二月七日(金) ルーム

- 出席者 今西、織内、板倉、伊倉、近藤、浜野、神崎、松丸、山本、丹部、田村、浜口、大倉、今井、山崎、高遠、三枝
- ▽議事・報告

- 一、山岳研究所第二次募金の件
- 二、事務局岩佐氏退職の件
- 三、七十周年記念事業の件
- 四、総会日程の件

- 五、第II次RCCカラコルム登山隊推薦状交付の件

- 六、ナンダ・デヴィ遠征計画の件

- 七、集会、図書委員会報告の件

- 八、山岳編集委員会報告の件

- 九、指導、医療委員会報告の件

(詳細は「山」三五八号参照)

◇三月理事会 三月十四日(金) ルーム

- 出席者 今西、織内、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、神崎、松丸、大倉、丹部、田村、今井、望月、山崎、佐藤、金坂、高遠、三枝

- ▽議事・報告

- 一、事務局市村洋子新任の件
- 二、常務理事懇談会報告の件
- 三、役員交代の件
- 四、七十周年記念事業の件

- 五、日印合同婦人ヒマラヤ登山隊カメラット峰遠征の件
- 六、集会委員会報告の件
- 七、海外連絡委員会報告の件

(詳細は「山」三五九号参照)

◇三月臨時理事会 三月二十五日(火) ルーム

- 出席者 今西、中屋、織内、伊倉、近藤、宮下、浜野、神崎、松丸、山本、田村、大倉、今井、望月、山崎、金坂、高遠、三枝

▽議事・報告

一、昭和50年度事業計画案および収支予算案の件

二、定款一部改正案の件

三、役員、評議員候補者案の件

(詳細は「山」三五九号参照)

◇四月理事会 四月十五日(火) ルーム

出席者 今西、織内、板倉、伊倉、近藤、浜野、神崎、松丸、大倉

山本、田村、佐藤、望月、山崎、金坂、高遠

▽議事・報告

一、昭和49年度収支決算の件

二、総会提出議案の件

三、会員章(JACマーク)登録の件

(詳細は「山」三六〇号参照)

◇昭和五十年通常会員総会 四月二十三日(水) 東京湯島第三利根川

ビル

出席者 今西会長以下九十二名(他委任状一、〇三六通)

▽総会次第

一、会長挨拶

二、会務報告

三、物故会員に対する黙祷

四、昭和四十九年度事業報告および収支決算、財産目録報告

板倉勝正

伊倉剛三

五、監査報告(右、承認)

六、定款一部改正の件

(右、承認)

今西錦司

七、昭和五十年事業計画および収支予算案の件

板倉勝正
伊倉剛三

(右、原案どおり承認)

八、昭和五十年役員および評議員選任の件

昭和五十年度の役員として次の各氏を選任した。

△理事▽ 会長今西錦司、副会長織内信彦、近藤信行、原真、大

倉昌身、山本良三、浜野吉生、神崎忠男、田村宏明、浜口欣一(以

上再任)、副会長望月達夫、皆川完一、小倉董子、山本健一郎、高

遠 宏、黒石 恒、田村俊介、橋本 清、浅田治男、大森久雄(以

上新任)

△監事▽ 林 和夫、太田 敬(新任)

△評議員▽ 藤島 玄、津田周二、島田 巽、堀田弥一、小原勝

郎、田口二郎、今井田研二郎、佐藤テル、今西寿雄、中田清兵衛、

村山雅美、藤井運平、大塚博美(以上再任)、浜野正男、折井健一、

橋本誠二、松丸秀夫、山口節子、宮下秀樹、丹部節雄(以上新任)

九、昭和五十年除籍の件

十、支部報告

秋田(柴田)、山形(村上)、新潟(藤島)、静岡(山本)、山梨

(大沢)

十一、七十周年記念事業の件

(詳細は「山」三六〇号参照)

◇五月理事会 五月十六日(金) ルーム

出席者 今西、織内、望月、近藤、原、大倉、山本(良)、浜野、神

崎、田村(宏)、皆川、小倉、山本(健)、高遠、黒石、田村(俊)、

橋本、浅田、大森

▽議事・報告

一、理事の任務分担の件

支部・会員担当(望月副会長)、総務担当(浜野、高遠)、財務(山本(健))、山岳編集(近藤)、会報編集(大森、山日記編集(皆川)、山研運営(小倉)、集会(神崎、浅田)、海外連絡(田村(俊)、田村(宏))、指導(田村(宏)、大倉、浅田)、医療(浜口)、自然保護(山本(良))、青年懇談会(大倉、橋本)、婦人懇談会(黒石)、図書(山本(良))、書評(大森)、遭難対策(橋本)、高所登山(原)、学生部指導(浅田)

二、常務理事選任の件

浜野吉生、高遠 宏、山本健一郎、近藤信行、小倉董子、山本良

三、大森久雄の七氏に決定

三、山岳研究所運営の件

四、七十周年記念講演会の件

五、新旧役員交歓会の件

六、ウェストン祭の件

七、芝浦工大カラコルム(バルトロ・カンリ)登山推薦状交付の件

八、七十周年記念事業「覆刻、日本の山岳名著」出版の件

九、青年懇談会、指導委員会報告の件

(詳細は「山」三六一号参照)

◇六月理事会 六月六日(金) ルーム

出席者 今西、織内、望月、浜野、高遠、山本(健)、近藤、小倉、山

本(良)、大森、大倉、田村(俊)、神崎、橋本、田村(宏)、浅田、

林、小原、浜野、折井

▽議事・報告

一、常任評議員互選の件

小原勝郎、佐藤テル、浜野正男、折井健一、宮下秀樹の五氏に決

定

二、山岳研究所運営の件

三、武蔵大学・ドングリ山の会カラコルム合同遠征隊推薦状交付の件

四、エベレスト日本女子登山隊帰国と歓迎パーティーの件

五、各委員会メンバー決定の件

(詳細は「山」三六二号参照)

◇七月理事会 七月十日(木) ルーム

出席者 織内、望月、浜野、高遠、山本(健)、小倉、山本(良)、皆

川、大倉、黒石、田村(俊)、神崎、橋本、田村(宏)、浅田、小原、

折井

▽議事・報告

一、山岳研究所運営の件

二、山研建設資金不足分の募金の件

三、名誉会員三枝守博氏、元理事中司文夫氏逝去の件

四、七十周年記念講演会開催期日の件

五、北海道支部長変更承認の件

六、青年・指導委員会報告の件

七、山日記編集委員会報告の件

八、図書、学生、自然保護委員会報告の件

九、婦人懇談会報告の件

十、海外連絡委員会報告の件

(詳細は「山」三六四号参照)

◇九月理事会 九月五日(金) ルーム

出席者 今西、織内、望月、浜野、高遠、山本(健)、近藤、小倉、山

本(良)、皆川、大倉、黒石、田村(俊)、神崎、橋本、浜口、林、小

原、折井、宮下

会 務 報 告

▽議事・報告

- 一、エベレスト登山(明大隊)許可の件
- 二、ナンダ・デヴィ準備委員会の件

三、学習院カラコルム登山隊および稲門山岳会カラコルム登山隊推薦
状交付の件

- 四、指導、集会、図書委員会報告の件
- 五、海外連絡委員会報告の件

- 六、山岳編集委員会報告の件
- 七、山岳名著覆刻の件

八、「高所登山研究」出版の件
(詳細は「山」三六五号参照)

◇十月理事会 十月三日(金) ルーム

出席者 今西、織内、望月、浜野、高遠、小倉、山本(良)、大森、皆
川、大倉、黒石、田村(俊)、神崎、橋本、浅田、佐藤、浜野、折
井、宮下

▽議事・報告

一、日本K2登山隊(日本ヒンズークシユ・カラコルム会議)推薦状
交付の件

- 二、年次晩餐会の件
- 三、昭和五十年取支算中間報告の件

四、UIAA大会出席報告の件

- 五、ナンダ・デヴィ準備委員会報告の件
- 六、日印女子登山隊準備状況報告の件

七、七十周年記念講演会の件
八、七十周年記念支部行事の件
九、前監事村尾金二氏、駐ネパール大使小林春尚氏逝去の件

- 十、集会、自然保護、図書委員会報告の件
- 十一、会報、山日記編集委員会報告の件

(詳細は「山」三六六号参照)

◇十一月理事会 十一月七日(金) ルーム

出席者 今西、織内、望月、浜野、高遠、山本(健)、近藤、小倉、山
本(良)、大倉、田村(俊)、神崎、田村(宏)、小原、浜野、折井、宮
下

▽議事・報告

- 一、ナンダ・デヴィ遠征計画進捗状況の件
- 二、カメット遠征計画進捗状況の件

三、年次晩餐会の件
四、山岳編集委員会報告の件

- 五、山岳研究所運営委員会報告の件
- 六、自然保護、医療、集会委員会報告の件

(詳細は「山」三六七号参照)

◇十二月理事会 十二月六日(土) ルーム

出席者 今西、織内、望月、浜野、高遠、山本(健)、小倉、山本(良)、
大森、皆川、大倉、黒石、神崎、橋本、小原、浜野、折井

▽議事・報告

- 一、本会ルーム家賃値上げの件
- 二、年次晩餐会の件

(詳細は「山」三六八号参照)

◇小集会

▽第三〇九回 昭和四十九年八月三十日(金) 岸記念体育館
女性マナスル登山隊報告 黒石 恒氏

▽第三一〇回 昭和四十九年九月十日(火) ルーム

ジャズ報告 橋村一豊氏

▽第三一一回 昭和四十九年九月十五日～十六日 上高地

支部懇談会

▽第三一二回 昭和四十九年九月二十日(金) ルーム

日大ヤルンカン登山隊報告 鳥海昭二郎氏

▽第三一三回 昭和四十九年十月二十日(日) 丹沢・塔ノ岳・大山周

辺

丹沢集中登山(詳細は「山」三五五号、三五六号参照)

▽第三一四回 昭和四十九年十一月二十日(水) ルーム

会員放談会

▽第三一五回 昭和四十九年十二月十五日(日) 高尾山

モチツキ大会

▽第三一六回 昭和四十九年十二月二十日(金) ルーム

忘年会

▽第三一七回 昭和五十年一月十四日～十五日 八方尾根中大山荘

スキー親睦会

▽第三一八回 昭和五十年二月二十日(木) ルーム

ヒマルチュリ登山隊報告 戸張至聖氏

▽第三一九回 昭和五十年三月十五日(土) 第三利根川ビル

昭和四十九年度入会者オリエンテーション

▽第三二〇回 昭和五十年五月十九日(月) 日仏会館

映画会「三極に挑む」

▽第三二一回 昭和五十年六月二十一日～二十二日 上高地山岳研究所

現地小集会(詳細は「山」三六三号参照)

▽第三二二回 昭和五十年八月二十日(水) ルーム

明大チューレン・ヒマール報告 長谷川良典氏

▽第三二三回 昭和五十年九月十日(水) ルーム

専大ヒマル・チュリ報告 小味秀純氏

▽第三二四回 昭和五十年九月二十日(土) 私学会館

日本女子エベレスト報告 久野英子氏他

▽第三二五回 昭和五十年九月三十日(火) ルーム

都岳連ダウラギリ報告 雨宮 節氏

▽第三二六回 昭和五十年十月十八日～十九日 葎科山

現地小集会・集中登山

▽第三二七回 昭和五十年十月三十日(木) ルーム

静大テラム・カンリ報告

▽第三二八回 昭和五十年十一月二十日(木) 湯島会館

会員会議(詳細は「山」三七〇号参照)

▽第三二九回 昭和五十年十二月十九日(金) ルーム

忘年会(詳細は「山」三六八号参照)

▽第三三〇回 昭和五十年十二月二十一日(日) 綾瀬・観音寺

モチツキ大会(詳細は「山」三七〇号参照)

◇主なる行事および集会

▽講演会(青年懇談会) 講師 横 有恒氏

昭和四十九年七月六日(土) ルーム

▽穂高酒沢合宿(青年懇談会主催)

昭和四十九年八月十一日～十七日 「山」三五三号参照

▽第七回高所登山委員会

昭和四十九年九月十四日～十五日 住友電機工業(株) 六甲山荘 出

席者三十九名。「山」三五五号参照

- ▽第六回山岳圖書を語る夕べ(図書委員会主催)
昭和四十九年九月十八日(水) ルーム
講師 望月達夫氏。出席者二十二名。「山」三五四号参照。
- ▽カールコム研究会(青年懇談会主催)
昭和四十九年九月二十四日(火) ルーム
講師 吉沢一郎氏。「山」三五四号参照。
- ▽第八回高所登山委員会
昭和四十九年十月五日(土) ルーム
「高所登山研究」の出版について。「山」三五九号参照。
- ▽現地支部懇談会、記念山行
昭和四十九年十月十二日~十三日 中房温泉、燕岳。「山」三五六号参照。
- ▽インド・ヒマラヤ研究会(青年懇談会主催)
昭和四十九年十月十五日(火) ルーム
講師 井口邦利氏、清水春美氏。「山」三五四号参照。
- ▽第七回山岳図書交換会(図書委員会主催)
昭和四十九年十月十九日(土) ルーム 「山」三五四号参照。
- ▽第十七回もみじ会(静岡支部主催)
昭和四十九年十一月九日~十日 二軒小屋泊、転付峠越え、千枚岳登山、寸又峽。「山」三五五号参照。
- ▽雪崩シンボジウム
昭和四十九年十一月十三日~十五日 岸記念体育館、ルーム 「山」三五八号参照。
- ▽第九回高所登山委員会
昭和四十九年十一月十七日(日) 名古屋原病院 「最近のヒマラヤを検討する会」。「山」三五九号参照。
- ▽講演会「ナンダコット登山をふりかえって」(青年懇談会) 講師 浜野正男氏
昭和四十九年十二月三日(火) ルーム 「山」三五六号参照。
- ▽昭和四十九年度年次晩餐会
昭和四十九年十二月七日(土) 京王プラザホテル 出席者三十三名。「山」三五五号参照。
- ▽第十三回「この一本」展
昭和四十九年十二月七日(土) 京王プラザホテル 「山」三五六、三五七、三五八、三五九号参照。
- ▽映画会「マナスルの白い影」
昭和五十年一月二十三日(木) ルーム
- ▽名譽会員・三田幸夫氏紫綬褒章受賞記念パーティ
昭和五十年二月八日(土) 湯島会館 「山」三五九号参照。
- ▽第十一回秩父宮記念学術受賞式(久留米大学ネパール医学調査診療隊の「ネパールの医療事情に関する研究」に対し)
昭和五十年三月十四日(金) 東京銀行クラブ。「山」三五九号参照。
- ▽第十回高所登山委員会
昭和五十年三月十五日(土)
「七〇〇〇米峰登山を検討する」。「山」三六二号参照。
- ▽第三回山岳史懇談会(図書委員会主催)
昭和五十年三月十九日(水) ルーム
「松高山岳部とその奥又白周辺記録」 講師 今井田研二郎氏。出席者三十名。「山」三六一号参照。
- ▽名譽会員・神谷 恭氏を偲ぶ会
昭和五十年三月二十九日(土) 湯島会館 「山」三六〇号参照。
- ▽第一回海外登山研究会(指導委員会主催)

昭和五十年四月二十三日～五月四日 ネパール・ヒマラヤのトレッキング 「山」三六一号参照。

▽関西支部創立四十周年記念懇親会

昭和五十年五月十七日(土) 神戸摩耶ロッジ 「山」三六一号参照。

▽木暮理太郎翁碑前懇親会

昭和五十年五月二十四日(土) 金山平 「山」三六四号参照。

▽第十五回登山技術講習会(青年懇談会・指導委員会主催)

昭和五十年五月二十四日～二十五日 谷川岳 「山」三六三号参照。

▽第二十九回ウェストン祭(信濃支部主催)

昭和五十年六月一日(日) 上高地 「山」三六二号参照。

▽創立七十周年記念宮城支部行事

昭和五十年六月十四日(土)～十五日(日) 船形山 「山」三六一号参照。

▽エレベスト登頂祝賀会(エレベスト日本女子登山隊)

昭和五十年六月二十日(金) ホテル・ニューオータニ 「山」三六一号参照。

▽創立七十周年記念北海道支部集会

昭和五十年七月七日(月) 札幌雪印パーラー 「山」三六五号参照。

▽穂高湖沢集会(青年懇談会主催)

昭和五十年八月十日～十六日 「山」三六五号参照。

▽アルパータ登頂五十周年記念会

昭和五十年九月六日(土) 農協ビル 「山」三六五号参照。

▽静岡支部設立二十五周年記念集会

昭和五十年十月四日～五日 山伏岳・静岡市東海軒ホール 「山」三六六号参照。

▽創立七十周年記念講演と映画の会(東京)

昭和五十年十月二十日(月) 九段会館 講師 榎 有恒氏、小西政継氏 映画「マナスルに立つ」。「山」三六六号参照。

▽第八回山岳図書交換会(図書委員会主催)

昭和五十年十月二十五日(土) ルーム 「山」三七二号参照。

▽創立七十周年記念講演と映画の会(大阪)

昭和五十年十月二十八日(火) 毎日ホール 講師 榎 有恒氏、中島道郎氏 映画「マナスルに立つ」。「山」三六七号参照。

▽第十八回もみじ会(静岡支部主催)

昭和五十年十一月八日～九日 山住神社、竜頭山、常光寺山。「山」三六七号参照。

▽創立七十周年記念福岡・東九州・熊本三支部合同集会

昭和五十年十一月十五日(土) 大分県九重町 「山」三六七号参照。

▽創立七十周年記念晩餐会

昭和五十年十二月六日(土) 京王プラザホテル 出席者三〇七名 「山」三六七号参照。

▽雪崩シンポジウム(パネルディスカッション)

昭和五十年十二月十一日(木) 岸記念体育館

▽海外登山界との交流

▽本年度は三十カ国六十団体と情報および機関誌の交換をおこなった。

▽UIAA(国際アルピニスト連合) 一九七四年度総会に牧野文子、神原達会員が出席(昭和五十年七月一日～七日、ユーゴスラビア・デルニツェ)。(詳細は「山」三五二、三五四号参照)

▽英国女流登山家のJ・ダンシース女史を囲んで、スライドと話を聞く会を開催(婦人懇談会主催)。昭和五十年九月二日(月) ルーム。(詳細は「山」三五三号参照)。

告 報 務 会

▽UIAA (国際アルピニスト連合) 一九七五年度総会に佐藤テル評議員が出席 (昭和五十年九月四日) 六日、オーストリア・オーバータウエルン)。(詳細は「山」三六五号参照)。

◇その他のトピックス

▽岡山大学山岳会ダウラギリV峰登山隊 (榎木栄一隊長ほか十二名) 昭和五十年五月一日初登頂に成功。

▽明治大学ヒマラヤ登山隊 (中島信一隊長ほか八名) 昭和五十年五月十三日チュールン・ヒマール西稜初登攀に成功。

▽日本女子エベレスト登山隊 (久野英子隊長ほか十四名) 昭和五十年五月十六日登頂に成功。

▽岩手大学山の会マルピチン登山隊 (笠原潤二郎隊長ほか八名) 昭和五十年八月二日中央峰初登頂に成功。

▽静岡大学山の山テラム・カンリ登山隊 (片山一隊長ほか十名) 昭和五十年八月十二日初登頂に成功。

▽「山岳」第六十九年 (一九七四年度) 昭和五十年十一月刊行。(編集代表・担当理事 近藤信行)

▽会報「山」第三四九号と三六六号を発行。編集者・山崎安治、大森久雄。

▽「山日記」一九七五年版を刊行 (一九七四年十二月)。編集代表・松丸秀夫。

▽「山日記」一九七六年版を刊行 (一九七五年十一月)。編集代表・皆川完一。

▽「高所登山研究」(日本山岳会編)を刊行 (一九七五年九月・山と溪谷社)。

▽創立七十周年記念出版「覆刻日本の山岳名著」全十八巻二十二冊を刊

行 (一九七五年十一月)。企画・編集・日本山岳会。編集委員・島田巽・小林義正・山崎安治・近藤信行。刊行・大修館書店。

◇名誉会員

名誉会員として中原繁之助 (会員番号二六七番) 氏を推挙、昭和四十九年十二月七日の年次晩餐会の席上で「名誉会員章」が贈呈された。「山」三五五号参照。五十年度には名誉会員として伊藤秀五郎 (会員番号一〇八七番)、西堀栄三郎 (会員番号一一三六番) 氏を推挙、昭和五十年十二月六日の年次晩餐会の席上で「名誉会員章」が贈呈された。「山」三六七号参照。

◇永年会員

在籍五十年に達した二木信次 (会員番号九一〇番)、早川種三 (会員番号九二三番)、三田幸夫 (会員番号九二四番)、吉沢一郎 (会員番号九三〇番)、広瀬 潔 (会員番号九三二番)、岡田喜一 (会員番号九三三番)、中原万次郎 (会員番号九三七番)、八木橋豊吉 (会員番号九三九番)、山井基福 (会員番号九四〇番)、馬場忠三郎 (会員番号九四九番) の十氏に対し、昭和五十年十二月六日の年次晩餐会の席上、「永年会員章」が贈呈された。「山」三六七号参照。

◇物故会員

この期間に逝去された会員は次のとおりである。謹んで哀悼の意を表す。

氏名	会員番号	逝去年月日
齋藤 晏	七六九九	四十九・五・五
山田 力	九五一	四十九・六・十九
湯本 武雄	三六七六	四十九・八・十五
坂本 肇	六二二六	四十九・八・三十

佐藤 達夫	五九一九	四十九・九・十二
本多 紀元	二二一四	四十九・十・八
山口季次郎	四一三	四十九・十・十七
小俣 武男	六五八七	四十九・十・二十二
福田嘉四郎	一五四一	四十九・十一・十
伊藤英三郎	五四二	四十九・十一・二十一
水野善一郎	四〇一四	四十九・十二・六
中原繁之助	二六七	四十九・十二・十五
秋山 英二	五〇三三	五十・二・五
渡辺 利雄	一三〇三	五十・二・二十四
三枝 守博	三五	五十・七・五
中司 文夫	一四六一	五十・七・八
氏家 民雄	六四七二	五十・九・六
村尾 金二	一四三五	五十・九・二十七
小沢利一郎	一〇一八	五十・十・二十一
西井 常造	四二六	五十・十一・五
石田 吟松	六七三	五十・十一・六
伊集院虎一	三九〇二	五十・十一・十八
小林 義正	一三七八	五十・十二・十四

一九七五年度役員

会長 今西錦司
 副会長 織内信彦、望月達夫
 常務理事 浜野吉生、高遠 宏、山本健一郎、近藤信行、小倉童子

理事 山本良三、大森久雄
 皆川完一、原 真、大倉昌身、墨石 恒、田村俊介、神崎 忠男、橋本 清、田村宏明、浜口欣一、浅田治男
 監事 林 和夫、太田 敬
 常任評議員 小原勝郎、佐藤テハ、浜野正男、折井健一、宮下秀樹
 評議員 藤島 玄、津田周二、島田 巽、堀田弥一、田口二郎、今井研二郎、今西壽雄、橋本誠二、中田清兵衛、村山雅美、藤井運平、松丸秀夫、大塚博美、山口節子、丹部節雄
 支部長 大塚 武(北海道)、笠原潤二郎(岩手)、柴田均三(秋田)、後藤辭次(山形)、伊達篤郎(宮城)、伊藤弥十郎(福島)、藤島 玄(越後)、奥原敦永(信濃)、大沢伊三郎(山梨)、山本朋三郎(静岡)、樋口敏二(東海)、松井辰弥(岐阜)、中田清兵衛(富山)、小林雄次郎(石川)、今西壽雄(関西)、織田 収(山陰)、末松大助(福岡)、野口秋人(東九州)、三谷孝一(熊本)

會務報告

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXX 1975

Issued in December 1976

Contents

* translated in English

Transitions of my Climbing—from Japanese Alps to Overseas Expeditions	Kinji Imanishi.....	7
Memoirs over my Mountains	Yuko Maki.....	17
*High-Altitude Pulmonary Edema	Michio Nakajima.....	8
For 70th Anniversary of JAC	Shinrokuro Hidaka.....	41
At Hakone in Dense Fog—Several recollections	Yukio Mita.....	52
On “Rokkon Shojo” (may I be purified)	Soichi Tsuji.....	65
Searching for <i>Nothofagus</i>	Kaoru Tanaka.....	59
Half a Century with the Japanese Alpine Club	Ichiro Yoshizawa.....	72
A Report on Rebuilding of Kamikochi Mountaineering Reseach Institute	Yasuji Yamazaki.....	81
*Himalayan Notes 1975	Zenpei Katayama.....	1
*Everest, Pre-monsoon 1975 by Japanese Women	Eiko Hisano and Junko Tabei.....	4
*The First Ascent of Dhaulagiri V	Shosaku Takeda.....	10
The First Ascent of Dhaulagiri IV and Accident—concerning the cause of the disaster	Tetsuya Nomura and Shiro Nishimae.....	126
*K 12 : The Ascent and Accident	Goro Iwatsubo.....	12
*The First Ascent of Teram Kangri, 1975	Kiyoshi Yamashita.....	13
*Churen Himal West Ridge 1975	Shin'ichi Nakajima.....	16
*The Ascent of Serku Dholma, 1973	Eijio Kawamura.....	18
A Peak floating in the sky	Toshiro Matsunaga.....	199
A Note on Alpine Aerial Photography—“The Himalayas from the Air”	Keiichi Yamada.....	158
On Various Mt. Fuji, in Japan	Kiyoshi Arai.....	229
“Kurikomayama Kiko” (Journal of Mt. Kurikoma) and its Bibliographical Notes	Toru Shibazaki.....	242
In Memoriam		258
Book Reviews		275
Club Proceedings		289

Editor : Nobuyuki Kondo

Editorial staffs : Yasuji Yamazaki, Ichiro Kanesaka,
Hiroshi Nakajima, Ryozo Yamamoto, Sadao Karibe,
Jusetsu Setsuda, Hiroshi Takato

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: Sakura Bldg., 1-6-1 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo.

(April 1975—March 1976)

President: Kinji Imanishi

Vice-Presidents: Nobuhiko Oriuchi, Tatsuo Mochizuki

Honorary Secretary: Yoshio Hamano

Honorary Editor: Nobuyuki Kondo

Honorary Librarian: Ryozo Yamamoto

Honorary Treasurer: Ken'ichiro Yamamoto

Auditors: Kazuo Hayashi, Takashi Ohta

Committee

Yoshio Hamano	Hiroshi Takato	Ken'ichiro Yamamoto
Nobuyuki Kondo	Nobuko Ogura	Ryozo Yamamoto
Hisao Omori	Kan'ichi Minagawa	Makoto Hara
Tsune Kuroishi	Masami Ohkura	Shunsuke Tamura
Tadao Kanzaki	Kiyoshi Hashimoto	Hiroaki Tamura
Kin'ichi Hamaguchi	Haruo Asada	

Council

Teru Satoh	Tatsumi Shimada	Kenjiro Imaida
Ken'ichi Orii	Jiro Taguchi	Toshio Imanishi
Haruki Miyashita	Seibei Nakata	Masami Murayama
Yaichi Hotta	Hiromi Ohtsuka	Hideo Matsumaru
Unpei Fujii	Masao Hamano	Setsuko Yamaguchi
Katsuro Obara	Shuji Tsuda	Sadao Tanbe
Gen Fujishima	Seiji Hashimoto	

Chairmen of Local Sections

<i>Hokkaido:</i> Takeshi Ohtsuka	<i>Iwate:</i> Junjiro Kasahara
<i>Yamagata:</i> Kanji Gotoh	<i>Akita:</i> Kinji Shibata
<i>Fukushima:</i> Yajuro Itoh	<i>Miyagi:</i> Tokuro Date
<i>Shinano:</i> Norinaga Okuhara	<i>Echigo:</i> Gen Fujishima
<i>Shizuoka:</i> Tomosaburo Yamamoto	<i>Yamanashi:</i> Isaburo Ohsawa
<i>Toyama:</i> Seibei Nakata	<i>Tokai:</i> Keiji Higuchi
<i>Gifu:</i> Tatsuya Matsui	<i>Ishikawa:</i> Yujiro Kobayashi
<i>Kwansai:</i> Toshio Imanishi	<i>Fukuoka:</i> Daisuke Suematsu
<i>San'in:</i> Osamu Oda	<i>Higashi Kyushu:</i> Akito Noguchi
<i>Kumamoto:</i> Koichi Mitani	

Himalayan Notes 1975

by Zenpei Katayama

Climbing in Himalayas extended its area to Pakistan and India in the second year of Karakorum's reopening and the opening of Indian Inner Lines. Remarkable ascents, however, were accomplished more in the Nepal Himalaya such as Chris Bonington's Everest Southwest Face (post-monsoon), Austro-German's Yalung Kang South Face by nine members (pre-monsoon), and Polish Makalu South Face by solo (post-monsoon) ascent clearly imprinted us the age of variation routes on eight-thousanders, although the difficult Lhotse South Face is left.

Bonington's quick and perfect ascent by selected fourteen members shows us an important scale for evaluation of climbing, i. e., to judge results with the combination of the volume of materials input for expeditions. It has become an important factor and will be more vital from the preparation how to overcome the overcrowded peaks in the limited climbing season. In this respect, Messner and Habeler's sudden ascent of Hidden Peak in Alpine style was fresh enough to let Bonington's expedition be regarded a classic one.

1975 was International Women's Year. Junko Tabei of Japanese Women's Everest Exp. and Phantog of Chinese Everest Exp. stood on the highest summit in pre-monsoon. Polish women at Gasherbrum II and III in Karakorum also accomplished marvelous climbs. The combination of various climbing styles and expansion of climbing records in 1975 will lead diversification of Himalayan climbing in the future.

Everest Southwest Face

Bonington's Everest Southwest Face was the greatest ascent in 1975. And its most serious matter of concern was how the party overcome Rock Band above 8000m. He finally neglected the snow field on the right and chose the route to left. Another noteworthy factor may be Bonington's basic attitude in organizing his expedition. In his "EVEREST SOUTH WEST FACE", written after his abortive attempt in 1972, he criticized three expeditions for Southwest Face, in addition to his own, and implicitly noticed his rechallenge. He says that JAC '70 party was strong and well organized but was not so strong enough to aim for the summit by two routes. And finally, Southeast Ridge route was given priority only for the

aim to get the summit. Dyhrenfurth's International Party '71 was weaker than JAC party but attempted simultaneous approaches by West Ridge and Southwest Face. Moreover, the bad weathers disclosed the party's weak relationships. Herrligkoffer's European International Party '72 was separated into British group and German-Austrian group, although aimed only by Southwest Face. Bonington concluded ambitious and egoistic talents rather than easygoing climbers would break through difficulties to the summit. In his second challenge, selected all British fourteen climbers including six veterans on Southwest Face were chosen and thoroughly attacked by Southwest Face.

Yalung Kang and Makalu

Austrian have attempted quick attacks by eleven numbers against eight thousanders. The ascent of Yalung Kang South Face by German members may be a brilliant result of their ambitious climbs for years. On May 9, 12, 13 nine men respectively stood on the summit. Leader, S. Aeberli who succeeded in the ascent of Lhotse Shar in '70 says to concentrate Kangchenjunga East Face in the future.

Makalu South Face by Yugoslav party was the highlight in post-monsoon. Twenty-one members, led by A. Kunver succeeded in their second attempt on Makalu. Two on Oct. 6, 8, and on 11 th, Dovzan made the first solo ascent.

Women's Active Climbs

Junko Tabei (35, housewife and mother of a son) became the first woman stood on the summit of Everest on May 16. (see detailed report on p. 6). Eleven days later, on May 27 nine Chinese also reached the summit by North route. Woman deputy leader, Phantog (37, Government Official, mother of three children) was included in them. The Chinese Party built BC (5000 m), C1 (5500 m), C2 (6000 m), C3 (6500 m), C4 (7000 m), C5(7600 m), C6 (8300 m) and C7 (8680 m) on North route. Thirty-six women were included in the party. Although attack team was consisted of three women and fifteen men, two women and seven men retired from C5. Phantog is a veteran climber who was one of the eight women made ascent of Mustagh Ata (7546 m) in '59 and also climbed Kungur Tjube (7595 m) in '61.

In Karakorum, ten-man and seven-woman Polish party led by Wanda Rutkiewicz made the first ascent of Gasherbrum III (7952m) by two women and two men on Aug. 11. GII (8035 m) also was climbed by six from two routes on Aug. 1, and on 12 th, H. K. Syrokomska (38) and Anna Cezrwinska (27) made the first

women pair ascent of eight thousander.

Dhaulagiri Group

Dhaulagiri IV (7661m) was climbed by Osaka Pref. Mountaineering Association Exp., sixteen-man party led by Tetsuya Nomura. Two summiters, Shiro Kawazu and Etsuro Yasuda were missed on their descent on May 9. Kamoshika Dojin Exp., fourteen members led by Kazuyuki Takahashi, made a marvelous eleven men ascents in October. Ten expeditions had challenged and at least fourteen were killed there.

DV was climbed by Okayama Univ. Exp., fourteen-man party led by Eiichi Umeki, on May 1. Summiters were Masaaki Morioka and Tsering.

Churen Himal (7371 m) by West Ridge was climbed by Meiji Univ. Exp., ten-man party, led by Shin'ichi Nakajima. Yoshinori Hasegawa and Teruyuki Kono made the ascent on May 13. All the Dhaulagiri Peaks were climbed. But no variation climb has been succeeded yet here.

Karakorum

Messner and Habeler's Alpine style ascent on Hidden Peak (8065 m) might have matched with the sanguine climate of Karakorum. Four Austrian also climbed Hidden Peak by South. Gasherbrum II was climbed by new Southeast Ridge by French party in June. In August Polish party made ascents of both GII and III. Active climb in Gasherbrum Group will trigger more quick attacks there.

Japanese expeditions attacked in peripheral areas. In Eastern Karakorum, Shizuoka Univ. Exp., thirteen-man party led by Hajime Katayama made the first ascent of innermost Teram Kangri (7646 m) on Aug. 10. Kasuo Okada and Yasunobu Kobayashi saw panorama of mountains in China from the summit. Ichikawa Mountaineering Society Exp., eight-man led by Yoshihiko Yamamoto made the second ascent of K12 (7468 m), on which Kyoto Univ. party made the first ascent in '74 but two summiters were lost on their descent. Shigeru Kawana, Sueo Ohta and Masaru Takeyama stood on the summit on Aug. 4.

In Western Karakorum, Kampire Dior (7143 m) was first climbed by Hiroshima Yama no Kai Exp., six-man party led by Keiji Enda. Sakae Mori, Yoji Teranishi, Yasuhide Hayashi and Kazunari Takami stood on the summit on June 14. Malubiting Central (7260 m) was climbed by JAC Iwate Pref. Section Exp., ten-man party led by Junjiro Kasahara. M. Onodera, H. Atsumi, T. Takahashi and K. Mori stood on the summit on Aug. 2. Laila (6986 m) was climbed by Hekiryō

Mountaineering Club Exp., nine-man party, led by Tomiyasu Ishikawa. R. Baguchi and K. Sakai stood on the summit on Aug. 9. Kyoto Karakorum Club Exp., eight-man party led by Shin'ichiro Hotta, climbed Purian Sar (6293 m) on Aug. 7 by seven members.

More than forty expeditions rushed towards Karakorum in 1975. At least thirty-two parties passed through Rawalpindi Airport. Although climbing center seems to have been shifted from Nepal to Pakistan, many confusions and troubles such as in entrance procedure, shortage of flights, strikes of porters etc., have been continuing in Pakistan in the second years since the release of Karakorum.

Japanese were still very active in Himalayas in this year. In addition to mountaineering expeditions in Nepal, India and Pakistan, many trekkers visited these countries. As described above, diversification in climbing style has steadily been proceeding. Nepalese and Pakistani Governments began to revise their climbing codes responding to these changes.

Besides climbing activities, we must note that UNESCO's South Asian District Conference in Kathmandu in autumn. Problems on human life and environment, such as ecological system in mountainous area, land utilization, problems of population explosion etc., were eagerly discussed by attendants from many countries. These problems which are closely related to climbing activities in Himalayas should carefully be viewed their directions in the future.

Everest, Pre-monsoon 1975 by Japanese Women

by Eiko Hisano and Junko Tabei

Soon after we finished making the report on Annapurna III '70, we began to discuss on the next expedition for eight thousanders. We chose Everest in 1971, since there are plenty of documents on past expeditions and many experienced climbers in Japan. In July 1972, Nepalese Government announced to give us the permission to climb Everest in pre-'75. Four reconnaissance members visited Nepal in March-May, 1974. Hot disputes were aroused whether or not members should walk whole caravan course. Finally, we decided to walk for training. (Hisano)

Acclimatization

Only two had experienced 7-thousander and six had climbed 5-thousander out of 15 members. We took 40 days for caravan and walked 380 km. Also practiced acclimatization during the march. We stayed at Thangboche (3800 m) in the earliest two weeks in March and exercised hikings up to 4500 m-4900 m three times. Although all members safely reached BC at 5350 m, three became sick and were obliged to descend 1000 m lower place, for a week.

Two weeks were spent for settling C1 above Icefall. Fourteen times in turn climbed up and down between 5350 m and 6000 m. Although the lifting was very useful for acclimatization, we were very lucky that no serious accident happened in the Icefall. C2 and C3 were so smoothly settled that some members could not acclimatize the height sufficiently. Members who adjusted to the height quickly were likely to do overwork and it seemed to be accelerating their acclimatization.

Lhotse Face, between C3 and C4 was very hard for us. Originally, we had planned to use 60 oxygen cylinders for the route making. Actually, however, we merely consumed oxygen 0.5 litter per minute during sleeps at C3 on account of the delay of gear lifting. Both members and Sherpas worked there without oxygen. Only four members could stay at C4. And route between C4 and South Col was developed by Sherpas. Members reached under Yellow Band at our highest. It was because high winds on April 30 prevented us to change members at C4 and on the next day, Sherpas at C4 developed the route to South Col. We were obliged to spend for a week to clear the damages of snow avalanche at C2. Therefore, only attack team reached South Col. We are now at least satisfied that all the members except for doctor experienced the height of C3 (6900 m). We could have sent four teams to C4. But we could not so. We had little time and the mountain was too huge to do so. (Tabei)

Snow Avalanche

We were assaulted by a snow avalanche at C2, at 0:30 on May 4. Seven members and 22 Sherpas, and three reporters slept there. The scale of the avalanche was great enough to run over crevasses and collapsed five tents on the plateau and reached West Ridge side. If our tent site had been located a dozen meters lower at usual tent site, all the 32 members at C2 must have been buried under the snow. When settling C2 we firmly believed that the place was safe enough from avalanches. Since we found dusty ruins of the Spanish Party the year before, we moved up the site to the higher plateau.

Two member's, two reporter's and a Sherpa's tents out of nine at C2 were buried under ice blocks. Two and five women members respectively slept in two tents. Suddenly, terrific sounds were heard and the next moment, huge blocks carried our tents down for a dozen meters. Only Watanabe who at once fled from her tent was caught in ice blocks. Four other members were lying upon one another under the snow in tent. Other two in another tent were trying to cut open inner sheet by their teeth under the snow. Sirdar Ang Tsering, on the other hand, could not sleep in his tent. At the moment he heard unusually terrific sounds in the darkness, he woke up fellow Sherpas and tried to protect frames and poles. Huge ice blocks went by their heads. When the fall down stopped, they went out from their tents and soon heard cries of Watanabe not so far. Sherpas immediately cut open our tents and rescued all that being buried. Some of us might have been crushed to death if their rescue had delayed. At 6500 m of altitudes was we feel choky even staying quietly. I saw various colors in my eyes and almost abandoned my life.

The avalanche was a very shocking incident for us. But I was reassured and felt it sufficient when I was told all were safe. In the next morning, I decided to myself to continue the climbing. (Tabei)

Ascent

Left C6 (5:30), at South Peak (9:40), on the Summit (12:30), at C6 (16:30) and returned to C5 (21:30) were the record of Tabei and Ang Tsering on May 16. We woke up at 3:50 at C6 and lit gas heater. I had two cups of coffee for breakfast. Ang Tsering had 8 mm movie and a camera, a pack of biscuit and thermos. Tabei brought two cameras and transceiver. Oxygen was adjusted to 3 litter. Ang Tsering led first. I followed him with 20 m of main rope. Russels of knee depth snow began from the exit of tent. Snow became deeper on thin ridge. I took turns of rassel on the way. Rocks appeared but still hard to walk on thin and soft rocks mixed with snow. The rocky section continued for seven pitches of length. South peak was reached at 9:40. Half buried cylinders were remained in the snow. We changed cylinder there. Ang Tsering left 150 atm and I left only 40 atm. Then communicated with leader Hisano at C2. Ate biscuit and tea still a little bit hot.

Once we had to descend steep ridge. At a very thin part, we had to saddle with my neck over Tibetan side and feet over Nepalese side and the sharp knife-edged ridge was just in front of my breast. Steadily, we sidled very slowly. Hillary's Chimney stood on the bottom of the thin ridge. During the climb there, when I saw our C2

far below my foot, I became almost mad with the keenest tention. Again steep ridges covered with hard snow continued above the Chimney. Every step became hard. I happened to think over 37 climbers who once climbed there. Matsuura, Uemura, Hirabayashi, Ishiguro and Kato, these five Japanese also climbed here. Climb and rest, I moved my legs. I shall reach the summit soon if I continue the climb. When I stepped into a soft snow, I saw mountains on Tibetan side. Suddenly Ang Tsering cried, "Mrs. Tabei, we are on the summit!". I need not climb furthermore. At last I have come the top. It was 12:30. Six and a half hours have passed since we started from C6. Clouds were drifting over Nepalese mountains but clear sky above Tibetan side. I saw big panoramas of Jannu, Makalu, Lhotse, Nuptse, Ama Dablam, Kangtega, Tamserku, Taweche, Gauri Sankar, Cho Oyu, Gyachung Kang under my eyes. (Tabei)

Expedition, money and human relationship

Although self financed parties are increasing, many still now depend upon donation. Two thirds of Himalayan expeditions are said Japanese parties. Now, overseas expeditions have become no more than private hobbies. We were confronted the rise in price during preparation and each member prepared ¥1,800,000 (US\$ 6,000). We seriously feared additional expenses. But luckily, we could have income when coming back Japan and paid back ¥500,000 for each. At a glance ¥1,800,000 is too much, but I think it is not expensive for the experiences on Everest.

Leader thoroughly grasp members completely rely upon their leader, and mutual assistance among members; is such relationship merely an ideal? Although I have experienced three times as expedition leader, reality was always far from the ideal. Socially matured women's group, or a group with frequent acquaintances among members seem to be required for expedition. The club members gathered seeking only for a target is not enough for mutual reliability. Although some pointed out that relations were much better than in Annapurna III expedition, I still cannot fully satisfy the human relationship in this party. (Hisano)

time table

January 29, 1975	Started from Haneda
February 9	Caravan began from Kathmandu.
27-March 12	Stayed at Thangboche for acclimatization.
March 16-18	BC was built.
21	Route making began in the Icefall.

April	3	C 1 (6050 m) was settled.
	8	C 2 (6400 m) was settled.
	13	C 3 (6900 m) was settled.
	27	C 4 (7600 m) was settled.
May	4	Snow avalanche assaulted C 2.
	11	Watanabe and Ang Tsering started from C 2.
	13	Watanabe descended from C 4 because of the shortage of oxygen.
	14	C 5 on South Col (7985 m) was settled.
	15	C 6 (8500 m) was settled.
	16	At 12:30, Tabei and Ang Tsering stood on the summit.
	17	All members safely returned to BC.

members

Leader; Eiko Hisano (41), deputy leader; Junko Tabei (35), members; Michiko Manita (33), Fumie Nasu (33), Yuriiko Watanabe (32), Masako Naganuma (27), Teruyo Hirashima (26), Reiko Shioura (28), Yoko Miura (33), Fumiko Arayama (25), Yukiko Naka (27), Yumi Tanaya (25), Setsuko Kitamura (25), Sumiko Fujiwara (26); doctor; Nasako Sakaguchi (29). Sirdar; Ang Tsering, Twenty-two Sherpas, ten local porters, two cooks, four kitchen boys, two mail runners. Seven reporters and seven Sherpas for reporters. And a liaison officer. Total 77 members.

High-Altitude Pulmonary Edema

by Michiro Nakashima, M. D.

The victims of high-altitude pulmonary edema are increasing among us, Japanese mountaineers, in proportion to increasing population of high-altitude mountain climbers year by year. The high-altitude pulmonary edema attacks the victims at not so high altitude as supposed by the adjective "high", that is, it is observed at 2900 m above sea level in Japan. In this small article after introduction of 4 typical cases, some considerations on symptoms and signs, pathogenesis, therapy and prevention of the high-altitude pulmonary edema are presented, intending to reduce the number of victims of this disorder.

Cases :

Case 1; A 30 year-old Sherpa male, attacked by this disease with cough, sputa, dyspnea and then confusion at Camp-I 5950m of Yalung Kang, Nepal in April and then at Camp-IV 7550 m again in May 1973, recovered when brought down to Base-camp 5210 m: (Saito, 1975)

Case 2; A 43 year-old Japanese female, suffered from this disease with loss of appetite, vomiting, fever and then coma at Kumjung, Nepal, 3750 m in Oct., 1975, hospitalized by plane. (Author)

Case 3; A 19 year-old American white boy, suffered from this disease with coma but without any respiratory symptoms at a ski field 2700 m in Colorado, U.S.A., twice with an interval of 2 years, Feb. 1972 and 1974, hospitalized by car. (Lakshminarayan, 1975)

Case 4; A 30 year-old Japanese female, fell victim to pulmonary edema with chill, dyspnea, cough then coma on the top of Mt. Kisokoma, Japan, 2900 m in Aug. 1972, hospitalized by a rescue party. (Kitahara, 1973)

Symptoms and signs:

Many reports have mentioned that cough, sputa (often hemosputa), shortness of breath on exertion, dyspnea, chest pain, fever, disturbed sleeping, loss of appetite, nausea, vomiting, somnolent or confusion or coma and so forth were common symptoms of high-altitude pulmonary edema. These symptoms are not only of high-altitude pulmonary edema but of so-called "mountian sickness" itself. It does not always appear with all of these symptoms but usually lacks some of them even without respiratory symptoms like a boy in Case 3.

Some cases reveal high fever and leukocytosis with symptoms above. In such cases, it is very difficult to distinguish it from acute pulmonary infections (pneumonia). Roentgenograms show diffuse or uneven densities and fullness of hilar blood-vessels. Electro-cardiograms reflect the pulmonary hypertention, that is, right axis deviation, clock-wise rotation, inverted T in lead V_1 - V_5 and peaked P are the typical electro-cardiographic features of the pulmonary edema.

Pathogenesis:

It should be understood that the high-altitude pulmonary edema is not an independent disease but a partial appearance of whole body edema which is usually seen on mountaineers ascended high altitude. Once the symptoms of pulmonary edema appears on victims, edema has already occurred in brain, meningeal membrane, subcutaneous or other body's tissues at the same time. Hypoxic stimulus brings

human body contraction of arterioles and venules, and increases permeability of capillary walls. Thus, in the lung, hypoxia causes pulmonary hypertension and then transudation of intracapillary fluid to alveolar interstitial space. On the other hand, the fluid draining function of interstitial lymphatic system is disturbed by serial mechanisms originated from hypoxia. Cold temperature and fatigue are another inducing factors (Houston, 1960).

The constitutional susceptibility edema is another important factor. The liable individuals can be easily suffered from this disorder repeatedly as seen in the Case 1 or Case 3.

Therapy and prevention:

The most important and effective measure to high-altitude pulmonary edema is to bring down the victim to lower altitude as quick and low as possible. The administration of oxygen, digitalis, furosemide, and corticosteroids with electrolytic fluid transfusion should be considered as the supplementary remedies.

The most considerable preventive counterplan to high-altitude pulmonary edema is to ascend a high mountain slowly without excessive body movement. The mountaineers with liable diathesis should take special care when they ascend to susceptible altitude again.

First Ascent of Dhaulagiri V

by Shosaku Takeda

The Okayama University International Cultural Exchange Council sent its first Himalayan Expedition to Nepal from February to June in 1975. The expedition was composed of the scientific research party and the mountaineering party.

The former made researches in parasitology, geology and agriculture. The latter successfully made the first ascent of Dhaulagiri V, a virgin peak of Dhaulagiri range in the Western Nepal.

To reach the summit we thought it most favourable to access the route by a twig ridge which leading up to White Peak (6,400 m.) on the southeast ridge, through the Tsaorabong Glacier from the source of the Myagdi Khola. Then we sent our preliminary party consisting of three members from February to June in 1974. They succeeded in climbing White Peak and precisely observed the southeast ridge of DV.

According to their reports we made a plan and prepared necessary equipments for our mountaineering.

Members: Leader: Eiichi Umeki (37).

Climbing Leader; Shiro Sadakane (36).

Member: Ken Ishihara (34), Genzaburo Yamasaki (32), Hideo Ogura (29), Masaru Kono (31), Shigeo Aoki (28), Hiroshi Hiratsuka (27), Kenji Kawaguchi (26), Masaaki Morioka (26), Norikazu Ichikawa (25), Haruhisa Kuroda (23), Hiromichi Mizohata (22).

Doctor: Yasuhiro Yumoto (38).

On January 12 in 1975, two of our members started for Kathmandu to get food and equipments.

All the members of our expedition assembled in Kathmandu on February 4, 1975. We employed the following Sherpas there.

Sirdar: Nawang Samden (39).

High-Altitude Sherpa: Ang Putar (35), Lopsong (32), Pemba Tsering (30), Pasang Temba (27).

Low-Altitude Sherpa: ten.

Cook: Danu (22), Pasang Kyu (39).

Two kitchen boys, Two wood cutters, Two mail runners.

Sonam Gyalchen, Sirdar was appointed as our liaison officer, since Nepalese Government officials were unavailable this year because of the Coronation.

On February 12, we transported luggages to Pokhara by truck. We left Pokhara with 230 porters on February 16. We arrived at the junction of the Myagdi Khola and the Tsaaurabong Khola, via Hyangia, Naudhara, Kusma, Beni, Darbang, Sibang, Muri and Bogara.

Our temporary base camp was established at the junction on March 1.

To the Tsaaurabong glacier after climbing a rockwall

There stands an almost vertical rockwall (1,000 m) on the route from temporary base camp. An icefall at the end of the Tsaaurabong glacier appeared on the upper part of the rockwall. We found the Rock Band on the right side of the rockwall, which was easy to ascend. At the Rock Band in the middle of the rockwall, we established Deposit Camp (4,400 m). We got to the Tsaaurabong glacier through the icefall which was continuously crumbling. When we climbed over the icefall, we could look up the wonderful Dhaulagiri V. Base Camp was established

on the glacier at an altitude of about 4,900 m on March 14.

From the twig ridge to White Peak

We advanced our route to the twig ridge of White Peak on the Tsaubong glacier. The lower part of the ridge was a gentle slope but the upper part was a steep dip of about 60 degrees. On March 22 Camp I was made up at a broad place (5,400m) which spread on the foot of the ridge. We established Camp II on the foundation made of snow on the steep slope (5,900m) on April 3.

On April 12 we succeeded in the ascent of White Peak.

To the summit through the southeast ridge

There were three snow peaks like big lumps on this ridge. The last peak was the top of Dhaulagiri V.

The right side (Tsaubong Khola side) of the ridge was a vertical snow wall and the left side (Konabong Khola side) was a little gentle slope. On April 20 we established Camp III at the foot of the first peak at an altitude of 6,400 m.

Our final Camp IV was established near the second peak at an altitude of 7,050 m on April 26.

The ridge leading from Camp III to Camp IV was rather wide, but the ridge near the summit becomes steeper and narrower.

In the early morning on May 1, 1975, Morioka and Pemba Tsering started for the summit from Camp IV. Ishihara, Kuroda, and Ogura supported them by fixing ropes as high as possible to the summit. The two of our members could reach the summit just at noon. At last we made the first ascent of Dhaulagiri V! The supporters had set the ropes as far up as 7,480 m right below the summit, so the members who attacked the summit safely reached Camp IV at 5:00 p.m.

On May 11 all the members descended to temporary base camp. We returned to Kathmandu on May 23.

K 12: The First Ascent and An Accident

by Goro Iwatsubo

The Kyoto University Karakoram Expedition to K12 was composed of Seiichi Kanayama, Shinichi Takagi, Tsutomu Ito, Satoshi Oku, Pakistani 2nd Lieutenant

Zaffar Iqbal as liaison officer and me as leader. Flying columns composed of scientists were also present. They included Dr. Hitoshi Kawai (psychiatrist) and Dr. Reiko Iwatsubo (Dentist and my wife) who administered free medical treatment to villagers and carried out research at Goma, the nearest village to our Base Camp. Dr. Susumu Nohda (Geologist) joined the scientific Expedition to the Northwest area organized by the Government of Pakistan and later did research around the Base Camp.

On July 25, 1974, we set up Base Camp at 4700 m on the right bank of the Grachmolumba Glacier. Camp I at 5200 m and Camp II at 5700 m were set. After crossing a great crevasse using a rope ladder, we reached a col in the northwest of K 12. Camp III was established at 6200m, with Camp IV at 6700 m on the ridge.

On August 30th, Takagi and Ito started from Camp IV. To avoid wasting time in rockclimbing on the ridge, they traversed an ice slope to the Siachen Glacier side and set their course along the snowy ridge which we called "short-cake". At 5:40 p.m., they reached the summit of K 12 (7473 m), then descended to about 7200m for a bivouac that night. The next day they were trapped by bad weather. This information was relayed to me at Camp II through transceiver.

In the morning of September 1st as sight became clear, they began to descend. But snowy wind and mist soon enveloped them, and they could continue their descent only by retracing their own foot inprints. They informed me that one of them had lost his crampon and a boot, and at 6:30 p.m., while traversing an ice slope, they had slipped and were at the moment hanging on the rope from an ice piton. This was our last contact with them. On the 3rd, the rescue party reached Camp IV, but neither of them was found. We had to conclude that they had slipped down the ice slope to the Siachen Glacier.

First Ascent of Teram Kangri in 1975

by Kiyoshi Yamashita

We, Shizuoka University Karakoram Expedition 1975, climbed Teram Kangri (7,464 m) which was discovered by Dr. T.G. Longstaff in 1909, and next year, was triangulated officially by Mr. V.W.B. Collins of Survey of India.

We got a cable intending to grant a permission of Teram Kangri on February 24, 1975. Overcoming personal barriers, members gathered to climb Teram Kangri

were as follows; Their average age was 35.

Leader: Hajime Katayama (50) (Professor of Shizuoka University), Subleader: Kinya Ohta (40) (Teacher of primary school), Members: Atsushi Ohishi (37) (Research Assistant of Shizuoka University), Hitoshi Kato (35) (Selfemployed), Takayoshi Yokoi (31) (Public Servant), Shoichi Mochizuki (30) (Engineer), Yasunobu Kobayashi (29) (Engineer), Kazuo Odaka (29) (Engineer), Shunji Ohba (27) (Teacher of high school), Katsuo Hamaji (26) (Teacher of high school), Asaji Kokue (47) M.D., and the author (37) (Engineer). Although some of the members had been disappointed because the permission was not for Gasherbrum III, I highly evaluated of the early issuance of permission and the value of Teram Kangri which is located in the area where no one ever visited. But, the letter of permission with newly attached regulations astonished us. The new regulation demanded us a two thousand dollars royalty (which was later discounted to a half) and wage of 30-40 rupees per day and meal allowance of 10 rupees per day for low-altitude porters. a double soaring from actually paid in the previous year.

Unfortunately, the liaison officer originally assigned to us was sick, and accordingly was replaced by someone else in Rawalpindi. The replacement caused a week delay. On May 21, Captain Hamdany (22) was appointed. He helped us much to proceed clerical matters and to purchase foods. On May 27 we finally could fly to Skardu.

After two days stay at the rest house of Skardu, we prove to Khapalu with nine jeeps. The rest house of Khapalu was surrounded by a lot of volunteers for local porter. Wage was set at 30 rupees, and we hired 127 porters and a cook. On May 31 we left Khapalu and 8 days after we passed the moraine at the end of the Bilafond Glacier. At Chumik they dropped the cargo and asked 10 rupees of wage increase because the snow was much deeper than average year. The Captain got angry and began a persuasion speech. When listening, a porter cheered him. That caused a big trouble and finally we were obliged to hire the porter.

On June 9 we walked into the Bilafond Glacier. The weather was fine. We got to Naram before noon. The porters again gathered and started a meeting. Again they demanded 10 rupees of wage increase. After negotiation with porters, we agreed to end the caravant there, and decided to reemploy twenty selected porters and two high-porters. On June 13 we built a camp at 4,800 m where A.A.C.K. Saltro Kangri Expedition (1962) had built their base camp on the Bilafond Glacier. Three days after, we could build a camp on the Bilafond La (pass) at 5,500 m. We

divided selected porters into two groups, each ten were stationed at Naram and Alibransa and did a piston transportation to the pass. From Bilafond La we could face Teram Kangri and Apsarasas, but could seldom see all of these peaks at the same time. One hour's walk down from the pass we reached the glacier from K 12 and we built Lolo camp near the small lake on June 22. We crossed the Siachen Glacier on 26 th and decided the place of the base camp. Since it was not possible to cross the Siachen Glacier in the afternoon due to the flood, it seemed difficult to transport to the B.C. from Lolo camp. On June 27 we built a Siachen camp at the junction of the Siachen Glacier, and closed the Lolo camp.

On July 10 we finally built the Base Camp at 5,150 m. While we were in Japan, we planned three possible routes, (1) the shortest course to the col between Teram Kangri I and III, (2) by the direct ridge to Teram Kangri I, (3) by the south ridge via Teram Kangri II to Teram Kangri I. Since we had photographs of the upper part only, where to start was left undecided, and left for the route finding party. First of all we chose the number three route. We thought if we chose a good point to climb on the south ridge of Teram Kangri II, which was steep in the lower but level in the upper, we could have a good chance of reaching the summit. On July 14, we completed the gathering of all supplies at the Base Camp. We built Camp I at 5650 m on July 19, and begun to make a route on a 200 m steep snow wall. And, by a day's cutting the ice wall, Camp II was built on July 25. Camp III was built on a wide ridge at 6450 m on August 2, and from there we could see Teram Kangri I.

From Camp III we took the route traversing the significant peak 6,700m and passing the col between Teram Kangri II. We built a temporary Camp IV at 6,250m on August 6. Next day, we moved Camp IV to 6,750m. On August 9 Camp V was built at 7,050m, and Kobayashi and Odaka entered there as an attacking party. Next day, it looked like the weather would be perfect. At 2:30 they started for the summit from Camp V. At 9:00 reached the ridge which separated Pakistan and China. Then the very summit of Teram Kangri I was reached at 12:03. They could see mountains of 360 degrees panorama. They safely returned to Camp V at 19:00.

On the other hand we decided to send more attacking parties. On August 11, I saw off Ohishi, Kato and Ohba from Camp III, and welcomed Kobayashi and Odaka who came back from the summit. Two looked tired but showed good appetite. On August 12 Ohta, Ohishi, Kato and Hamaji left Camp V. After fixing ropes for 200 m on the snow wall, they reached the ridge at 10:30, and reached the summit of

Teram Kangri II (7,409 m) at 11:17. Next day Yokoi and Ohba reached again Teram Kangri II by the same route.

On August 17 all members returned to the Base Camp. August 18 was scheduled the evacuation, but in the afternoon we saw a lot of porters passing the Siachen Glacier. It was scheduled to be four days later. Anyway, the Base Camp turned into a battle field selecting stuffs to be brought back and to be left. The schedule was postponed to shut the Base Camp in the next morning. Four members, namely Ohishi, Yokoi, Ohba and I (Yamashita) took a little excursion to the "Lost Oasis" at the promontory between the Teram Shehr Glacier and the Siachen Glacier—as E. Shipton said "This beautiful spot is a paradise for any mountaineer. Here, at nearly 16,000ft., one finds grass in abundance, lakes, ibex, many birds and gloriously-coloured flowers." The other members and porters went down to Goma.

On August 19 four of us separated from main party and walked down to the center of the Siachen Glacier. Ohba, who made a research in insects and plants from August 1 to 5 with Kato, took the lead. At 20:00 we arrived at the oasis. It was gorgeous to touch soil and plants.

This was popular spot where in 1912 H. Workman (U.S.A.) visited, G. Dainelli (Italy) in 1930, and in 1957 Shipton (England) visited. Ours was the fourth. In 1962, T. Kato of A.A.C.K. gave up the visit on his way back from Saltro Kangri, after strong denial by the Liaison Officer. Surrounding a lake (water was gone out on August 3) alpine flowers bloomed. There were a lot of butterflies, birds, rabbits, and markhurs. A big cairn built by Workman was standing on the hill. On the rock near the lake the words saying "the Base Camp of Prof. Dainelli" were engraved clearly. Shipton said that he wanted to carve a sign, but he must have been busy in climbing due to his delay. After spending a full day there, we left on the morning of August 21 to Goma and merged to the main party on August 25.

Churen Himal West Ridge 1975

by Shin'ichi Nakajima

Churen Himal West Ridge (7371 m) is formed with the severe precipice, the snow ridge like a keenest knife-edge and was the untrodden route. Therefore we continued hard to climb.

We, Meiji University Churen Himal Climbing Party, left Pokhara on 13th of

March together with about two hundreds and forty porters shouldered total over the six tons of luggages.

Our caravan smoothly marched along Kari-Gandaki and Miyagydy-Khola streams, but we had heavy snow on 25th of March, when approaching very near to Base Camp. We took for twenty days to pass over Busuken-Pass (4500 m) and could build the Base Camp (4100 m) on Kaphe-Khola source up to 7th of April. Churen Himal appeared the quite overhead at the First Camp (4700 m).

Toward the Second Camp, we were avoiding the ice-falls and were researching for the precipice down from the south ridge. We advanced toward the west ridge base on the snow-field where are the ice-falls with the crevasses in anywhere. We built the Second Camp (5600 m) on the rock named Hitotsu-me-Iwa (means one eye's rock).

We had hard times to climb the precipice that always keeps off the snow, but we at the breath climbed the section where slopes sharply dropped down toward the west ridge. We built the Third Camp (6150 m) on the precipice.

We fixed ropes little and stagely in order to approach the west face. We could build the Fourth Camp there (6500 m) on 5th of May after finishing ice-snowcuttings. When we hammered pitons into the rocks and ices, the sounds echoed as though a megalosaurus roaring and we were on its back. We could succeed to send two members as the first attackers to the Final Camp (7050 m).

On 13th of May at 4.00 p.m. we could catch Hasegawa's husky voice through tranceiver, "just stand on the summit", and at the moment we were very delighted ourselves, but we could not see the top of Churen Himal being covered with thick clouds. We kept silence for a while, but soon we were obliged to change our intentions.

Being passed the cruel night on the summit, they came down to the Fifth Camp where their supporters were eager to see them.

The Ascent of Serku Dholma and Exploration of The East and Southeast Areas of Phoksumdo Tal, 1973.

by Eiji Kawamura, M.D.

The Kitasato University Himalayan Expedition arrived in northwestern Nepal after the 1973 monsoon season and subsequently carried out the first successful ascent of Serku Dholma in the Kanjiroba Himal. As an additional part of its programme, the expedition also surveyed the hitherto unexplored east and southeast areas of Phoksumdo Tal, and also conducted a medical study of the living conditions, ailments, etc., of people living in remote areas.

Of these many activities, the successful ascent of Serku Dholma (6227 m) and exploration of the two areas of Phoksumdo Tal are described in this report. Our expedition included the following persons: Eiji Kawamura (leader), Kazuo Yago, Mitsuhiro Kikuchi, Eiken Moriyama, Hiromi Ichikawa, and Morihiro Takechi, B.N. Rana (liaison officer). Sherpas: Anu (Sirdar), Dorje, Phurba Tenzing, Namgyal (cook), and Ang Nima (kitchen assistant).

28 September: We reached the proposed Base Camp site (4395m.), located about 40 minutes' walk from Tso Karpo, and established it the next day.

6 October: We established our Advanced B.C. on the south glacier at an altitude of 4980 m. We established Camp I at 5200m on 15 October, and then Camp II (5480 m) at the top of Phoksumdo La on 21 October.

25 October: Camp III (5600m.) was established by us.

29 October: Moriyama, Takechi and the Sirdar established Camp IV on the northwest ridge (5815 m).

30 October: The three members who were at Camp IV succeeded in making the first ascent to the summit.

10 November: With 43 porters we left Base Camp.

13 November: Early in the morning, Moriyama and Takechi boaded the raft with 10 days' supplies for two and a cargo of expedition equipment. The two-man party aboard the raft arrived at their destination, which was the mouth of the Sagar Khola in the valley to the east of the lake. And they were entering an

unexplored area.

13 November: The main party proceeded along the western shore of the lake and then moved southward. After passing Ringmo, the party arrived at Manduwa.

16 November: Kawamura, Ichikawa, the Sirdar, Dorje and five porters set off Manduwa, and explored the southeastern part of the Phoksumdo Tal about six days.

23 November: We began our return trip, and arrived in Jumla on 3 December.

世界の屋根に挑むOXYGEN EQUIPMENT!

(高所用高性能酸素機器)



製造元 ● L'APPAREIL MEDICAL
DE PRECISION S.A. FRANCE

極東総代理店 ● 三井物産株式会社

発売元 ● 三井物産スポーツ用品販売株式会社

人間みなスポーツマン

三井物産スポーツ

本社：東京都千代田区神田駿河台3-4 龍名館ビル 〒101
☎03(255)6731(代) 大阪営業所：大阪市北区金屋町1-8
〒530 ☎06(353)8071(代)

※お問合せは三井物産スポーツ用品販売(株)本社スキー用品第2課・等々力(☎03-407-2155)まで。

「恐怖の岩壁」に闘魂を燃やした若者達のドラマ!

ジヤヌー北壁

小西政継著

ヒマラヤにそびえ立つ「恐怖の峰」ジヤヌー
登攀不可能といわれていたその北壁に挑み
苦闘の末、大量16人登頂の快挙をなしとげた
小西政継隊長みずから綴る感動の手記!

合判 本文二七二頁
写真(カラー五頁・モノクロ二四頁)

価一八〇〇円

ヒマラヤ《人と辺境》全7巻 諏訪多栄蔵編 ¥一六〇〇から
¥二四〇〇

ヒマラヤの高峰 全3巻 深田久彌著 望月達夫・諏訪多栄蔵 雁部貞夫編集
① ¥四八〇〇
② ③ ¥五八〇〇

処女峰アンナプルナ 最初の 八〇〇〇米峰登頂 | エルゾグ著 近藤 等訳 ¥二二〇〇

アンナプルナ南壁 ポニントン著 山崎安治訳 ¥二〇〇〇

わが山々へ ボナッティ著 近藤 等訳 ¥一八〇〇

大いなる山の日々 ボナッティ著 横川文雄訳 ¥二〇〇〇

ヒマラヤ―その探検と―(第2版) メイスン著 田辺主計訳 ¥四〇〇〇
登山の歴史 | 望月達夫

日本登山史 山崎安治著 ¥三三〇〇

(定価変更がある場合は、ご了承ください)





40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案
 1952年日本山岳会マナスル偵察隊
 全装備納入以来高所用天幕専門
 製作・海外遠征隊には各方面より
 御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント 吉田喜義商店

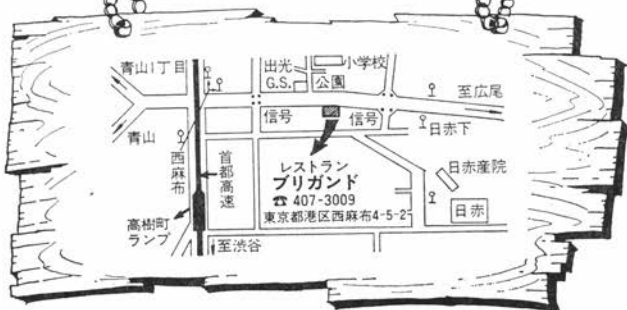
東京都杉並区桃井1丁目3番3号
 電話 東京 (399) 2548 (398) 8469 (夜間)

Restaurant FONDUE Brigand STYLE

山賊フォンデュ



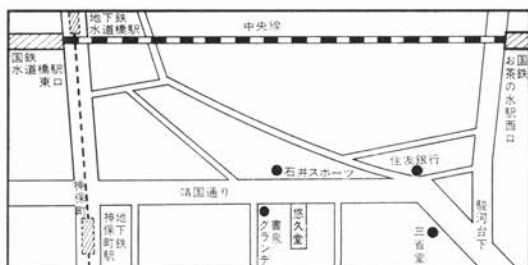
ブリガンドの意味は「山賊」。
 自然を愛する勇者です。
 ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい。



山岳書・動植物書

古本の買入と販売

関係者の御相談もどうぞ一地方出張も致します



(有)悠久堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-3

☎03 (291) 0773・0920

保 険 は 愛 で す 。 力 で す 。

まごころの共栄火災です



共栄火災海上保険相互会社

本社 東京都港区新橋1-18-8 平105 TEL(03)591-6431(大代表)

数々のエクスペディションで実証された高性能、高品質

ガンター羽毛服



海外遠征隊重装備用

羽毛服 A

色：紺・赤 サイズ：L・M
総重量：1,050g
価格：L ¥38,000 M ¥37,000

パンタロン

色：紺・赤 サイズ：L・M
総重量：610g
価格：L ¥22,000 M ¥21,000



国内の冬山登山向

羽毛服 B

色：紺・赤 サイズ：L・M
総重量：850g
価格：L ¥33,000 M ¥32,000



本格的クライマー向
行動用

登攀用羽毛服

色：紺・赤 サイズ：L・M
総重量：550g
価格：L ¥23,000 M ¥22,000

ニッカ

色：紺・赤 サイズ：L・M
総重量：420g
価格：L ¥18,000 M ¥17,000

●主要販売製品

羽毛服、パンタロン
登攀服、ニッカ
アンダーウェア、ベスト
フード、ミトン、シューズ
シュラフ各種



株式会社

ガンター

東京都世田谷区野沢2-20-1 ☎03(410)8808

豊かな

生活環境を築きあげる……………

(建 材)

- カーテンウォール
- アルミ自然発色NKカラー
- サッシ ドア
- 用途別サッシ ドア
- 各種間仕切

(機 器)

- NKフィルター
- 各種浄水・廃水処理装置
- 熱交換器 装置
- 熱交換器用フィンチューブアライрон
- ウエルフィン

(電 機)

- 電気洗濯機
- 冷凍ショーケース
- 冷蔵ショーケース
- オープンショーケース
- ウォータークーラ

日本建鐵株式会社

取締役相談役 早川 種三

東京都千代田区大手町 2-6-2 〒100

TEL 東京 (03) 270-6511(大代表)

ニッチの

登山・ハイキング シリーズ

※ 登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- | | | |
|--------------|----------------|--------------|
| ①奥歩蔵 武甲・雲取 | ②八幡平 岩手山・駒ヶ岳 | ③金剛山 葛城・岩奥山 |
| ②奥多摩 大菩薩 | ④霧ヶ峰 白根山・翠利山 | ④六甲・摩訶 |
| ③奥秩父 | ⑤霧ノ平 | ⑤北沢連山 |
| ④群馬・高尾 秋川溪谷 | ⑥妙高山・戸部 野尻湖・黒尾 | ⑥大峰・吉野 |
| ⑤中央山塊 | ⑦奥アルプス北岳 | ⑦大台ヶ原 大杉谷 |
| ⑥富士・五湖 三ツ峠 | ⑧中央アルプス | ⑧赤田・青山 室生寺 |
| ⑦甲斐 熱田・瀬戸原 | ⑨奥アルプス南岳 | ⑨鈴鹿連峰 徳石所・伊次 |
| ⑧奥日光 奥鬼怒 | ⑩北アルプス | ⑩大山・基山 |
| ⑨尾瀬 銀山岳 | ⑪加賀白山 白川郷 | ⑪三郎山 竜泉洞 |
| ⑩軽井沢 妙高山 | ⑫越前・朝日 | ⑫林吉台 三鈴岳 |
| ⑪伊豆半島 大島 | ⑬大雪山 霧立沢・然別岳 | ⑬九郎山 久住高原 |
| ⑫三浦半島 鎌倉 | ⑭雄・穂高 アルプス総走 | ⑭栗駒山 駒馬岳 |
| ⑬奥ヶ原 霧ヶ峰 | ⑮立山・剣 黒部峡谷 | ⑮霧ヶ峰山 |
| ⑭奥日光 霧ヶ峰 | ⑯奥日光自然歩道 I | |
| ⑮八ヶ岳 翠利山 | ⑰奥日光自然歩道 II | |
| ⑯奥日光 鬼怒川 | ⑱奥日光自然歩道 III | |
| ⑰奥日光 善妻 安達太良 | ⑲入道山 守屋山・高遠 | |
| ⑱奥日光 華厳山 | ⑳岩手・奥甲 清津峡 | |
| ⑳上高地 奥谷岳 | ㉑越後三山 奥只見・善機山 | |
| ㉑奥日光 霧ヶ峰 | ㉒立山 木曾谷 | |
| ㉒奥日光 霧ヶ峰 | | |
| ㉓奥日光 霧ヶ峰 | | |
| ㉔奥日光 霧ヶ峰 | | |

定評ある著者陣容!
全56巻
定価各450円



雷鳥マークのカラー表紙
に衣替えして新発売!!

※ 保存用には
日本登山地図集

I 中部山岳・信州篇

II 関東・上越篇

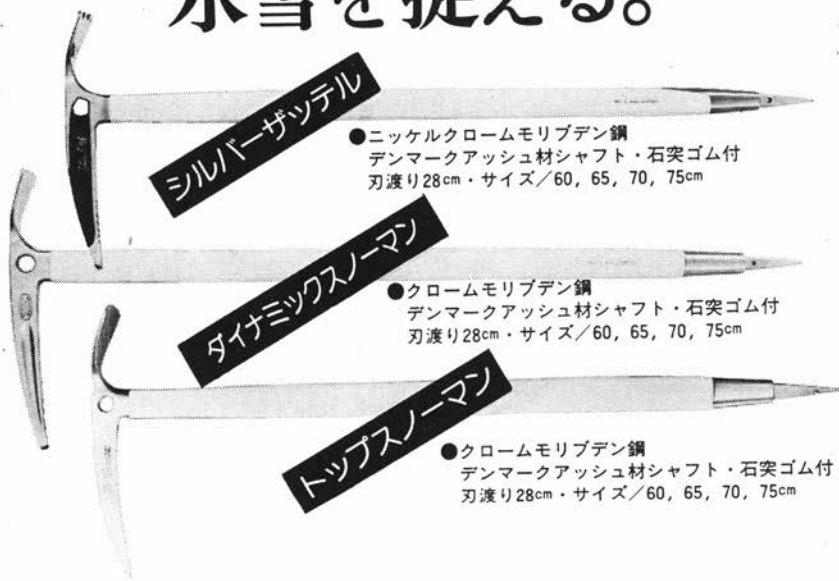
をどうぞ—定価各4,800円

地図の日地出版

本社 東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261) 5126
支店 大阪市南区安堂寺橋通り3-60
大阪 06 (252) 7421

雪山を愛好する岳人達へおくる、トップの氷壁登攀用具。

氷雪を捉える。



シルバーザッテル

●ニッケルクロームモリブデン鋼
デンマークアッシュ材シャフト・石突ゴム付
刃渡り28cm・サイズ/60, 65, 70, 75cm

ダイナミックスノーマン

●クロームモリブデン鋼
デンマークアッシュ材シャフト・石突ゴム付
刃渡り28cm・サイズ/60, 65, 70, 75cm

トップスノーマン

●クロームモリブデン鋼
デンマークアッシュ材シャフト・石突ゴム付
刃渡り28cm・サイズ/60, 65, 70, 75cm

雪に刻む。



10本爪軽量アイゼン

●氷壁登攀用、厳冬期用
ジョイント部チタン鋼使用

株式会社 ニュートップ

最新刊 **ブルーガイド海外版** ②4

ネパール・パキスタン ヒマラヤ・トレッキング

ネパール・ヒマラヤとカラコルムの高峰を巡るトレッキング・ガイドの決定版!!
世界の岳人の憧れエヴェレスト、アンナプルナ、K2など12のコースガイドと
カトマンズや山の村、トレッキングの方法などを徹底ガイド…… 定価1380円

大好評
既刊!

ブルーガイド海外版 ①6

ヨーロッパ・アルプス

ハイキング、登山コースにスキー場を紹介。わが国最初のアルプス案内… 定価680円



新版 山を考える

本多勝一 四六判 / 980円

きたぐにの動物たち

本多勝一 A5変型判 / 980円

山のパンセ

串田孫一 A5変型判 / 1500円

若き日の山

串田孫一 A5変型判 / 1500円

心の歌う山

串田孫一 A5変型判 / 1800円

上高地の大將

木村 殖 B6判 / 980円

谷川岳ヒゲの大將

高波吾策 B6判 / 980円

剣岳の大將 文蔵

佐伯文蔵 B6判 / 980円

山菜記《正・続》

片岡 博 B6判 / 正880円・続920円

はるかな尾瀬

朝日新聞前橋支局編 B5変型判 / 1500円

炉辺山話

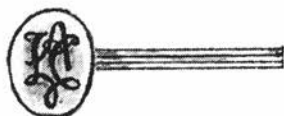
岡 茂雄 四六判上製 / 1300円

実業之日本社

東京銀座1-3

振替東京1-326

日本山岳会の記念品・バッジを作ってます。



株式会社 **ラマーノ** 中川 武

〒102 東京都千代田区三番町24三番町ハイム ☎ 03(262)0525

CGV-6136

滋養強壯に 新グロメント

- 虚弱体質
- 肉体疲労、栄養障害、
食欲不振時の栄養補給に。



山岳名著選集



遙かなる天山

天山に魅せられた
探検家セミョーノフ伝

アルダン・セミョーノフ著*田村俊介訳*A5判*二、五〇〇円

ロシアで最も著名な地理学者であり、「ロシア探検家の父」と謳われたビョートル・ペトロウッチ・セミョーノフの伝記である。セミョーノフは一八五六、五七年の二回にわたって、中央アジア探検を行ない、異種族の度重なる襲撃下をコザックに守られながら天山山脈の奥地へ入りこんで探検を続けた。また、セミョーノフに続くロシア探検家群を綴る。

パミール・シムクローアの城塞

田村俊介編*A5判*二、五〇〇円

長い間、ソ連領パミールは世界に門戸を開きざしていたが、一九七四年、国際パミール・キャンプが開催され、その雄大な全容を現わした。本書は、その際のレーニン峰遠征登山記に加え、パミール全般の地理や探検史について記述し、諸々の資料を収録した。パミールに関する書物の少ないのが因で、本書は、パミールを志す人々のよき参考となろう。

エヴェレスト登頂記

ジェームス・アルマン著*丹部節雄訳*A5判*二、五〇〇円

本書は、一九六三年ノーマン・テイレンフアースを隊長とするアメリカ・エヴェレスト遠征隊登頂の公式記録であり、記録係ジェームス・アルマンの執筆によるものである。世界の屋根ヒマラヤに君臨する世界最高の巨峰にどのように挑んだか、物量と科学調査にもとづいた詳細な記述があり、山岳関係者の中で貴重な登頂記録と評価される好著である。

冬のアイガー北壁初登攀

トニー・ヒーベラー著*横川文雄訳*A5判*一、二〇〇円

水い間アルピニストの限らない夢をかきたて、幾多の生命を奪ってきた真黒な怪奇なアイガー北壁に、四人のザイル・パーティーが挑んだ。一九六一年三月十二日のことである。計画者・ヒーベラーが仲間選びから計画の完成、実行までを克明に記した。冬のアイガー北壁初登攀成功。の全記録である。

ダウラギリ登頂

マックス・アイゼリン著*横川文雄訳*A5判*一、五〇〇円

この書は、一九六〇年五月、地上に残された八〇〇〇m未登峰、白い山・ダウラギリに挑み、初登頂に成功したマックス・アイゼリン指揮によるスイス・ヒマラヤ遠征隊の公式報告書である。偵察と輸送のために小型飛行機を使い、ヒマラヤ登山史に新しい頁を書き加えたこの遠征隊の全記録である。



新発売!

新機構を 随所に備えて

過酷な条件の縦走に…
美津濃大型アタックザック
YRA-1100



本格派の確かなパートナー
(ベルグ®)



YRA-1100 ¥12,000

サイズ: 58×71 cm

容量: 65ℓ

耐荷重: 40kg

生地: 本体=ナイロン(ウレタンコーティング加工)

背面=綿帆布

色: ダークグリーン、ゴールド

MIZUNO



美津濃

全国の主要山岳を網羅。 山岳関係者のための最新基本図書。

■吉沢一郎他編／B4判／縮尺1:50,000

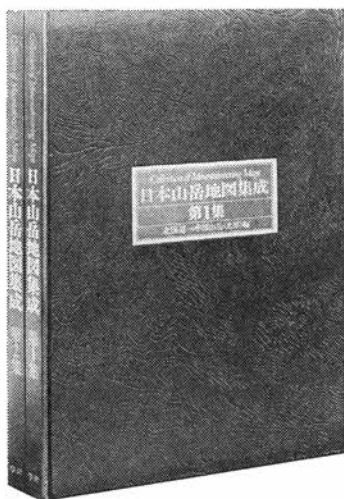
全2集
セツト 書店で発売中

第1集

北海道→中部山岳(北部)編
●B4判・全202P(収録地図54図・
解説及び解説図99P)
北海道14図／東北16図／北関・上
信越15図／中部山岳(北部)6図

第2集

中部山岳(南部)→九州編
●B4判・全190P(収録地図40図・
解説及び解説図78P)
南関・甲信11図／中部山岳(南部)
9図／北陸・美濃3図／紀伊3図
／中国2図／四国2図／九州8図



- 現金価格 24,000円
- 分割払価格 25,200円
(支払期間6ヶ月・支払回数6回)

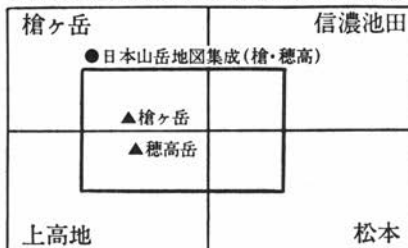
●地形図

●国土地理院、1:50,000地形図200面に含まれる1,500m以上の山岳を1:50,000で収載●等高線表現の4色刷り●1km方眼のメッシュ、コース、山小屋、キャンプ地、水場等を詳細に記載

●解説・図説

●概念図、行程図、主要ルート明細図、宿泊、交通、人文、動・植物、参考文献等を解説・図説●地図集としては類例のない貴重な情報を満載●登山、自然研究、開発関係等の資料に好適

地形図4面必要とする山岳を1面で解説。



学研版 日本山岳地図集成 全2集

●内容見本ご希望の方は
最寄りの書店にご請求ください。

学研 学習研究社・販売局

〒145 東京都大田区上池台4-40-5
TEL (03)720-1111(大代表)

文化と情報を提供して50年

未来への確かな展望と協力が、
ますます大切な時代です。
私達もグローバルな視野に立って
様々な文化交流の
お役に立ってまいります。



紀伊國屋書店

本店・〒160-91 新宿区新宿3丁目17番7号 ☎ (03) 354-0131

東京/本店・渋谷店・日比谷店・玉川高島屋店・アトミック店・新宿住友ビル店・吉祥寺東急店 大阪/梅田店 札幌/札幌店 広島/広島店 熊本/熊本店 福岡/福岡店 岡山/岡山店 川越/川越丸広店 小樽/小樽店 新潟/新潟店 U.S.A./サンフランシスコ店

—祝 70 年—

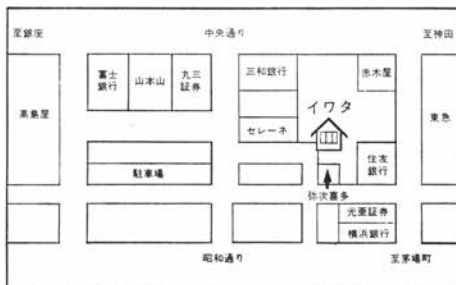
厳しさと友情あふるる溜り場



Mountaineering
& Skiing Goods

IWATA

PHONE(271) 7686, 1718, No.7-13, 2CHOME NIHONBASHI CHUO-KU, TOKYO.



ヒマラヤだけが山じゃないさ。



- 1977 春/夏/秋 **BACKPACKING** (ヨセミテ・バリー)
- 1977 夏/秋 **ICE & SNOW CLIMBING** (Mt. レニア)
- 1977 夏/秋 **BACKPACKING** (カナダ・ロッキー)
- 1977 夏/秋 **ICE & SNOW CLIMBING** (Mt. アサバスカ)
- 1977 夏/秋 **ADVENTURE BUS TOUR** (ワイオミング)

《特別企画》

アメリカ大陸縦断9,000キロ(1977/夏)(アラスカからメキシコへ)

Careless People Start Pollution,
Careful People Can Stop it.

ロッキーツアーズは北アメリカ大陸のウイリダネス
とりわけロッキー山脈に関して、皆様にご満足
のゆくインフォメーションを用意しております。
どんなことでもお気軽にお問合せ下さい。

企
画

株ロッキーツアーズ Rocky Tours, Inc.
〒112 東京都文京区後楽1-1-17
(担当/黒川)
TEL. 03-815-9273

(担当 黒川恵・日本山岳会会員・カナダ山岳会会員)
写真/Mt. アサバスカ

〈国会図書館所蔵〉

深田久彌旧蔵書 (九山山房) 目録

A5判120頁

頒価¥800

(送料¥200)

国会図書館 編集・刊行

丸善株式会社 発売

発行 1976年10月

●ヒマラヤ・中央アジアをはじめ世界の山岳関係書の宝庫である故深田久彌氏の九山山房蔵書(洋書の部)が国会図書館に収蔵されましたが、その全貌を明らかにする詳細な目録。国会図書館の整理番号を付した研究者、山岳愛好者にとっては不可欠の資料。

(お問合せは、東京本店仕入部仕入第三課内線281へ)

丸善

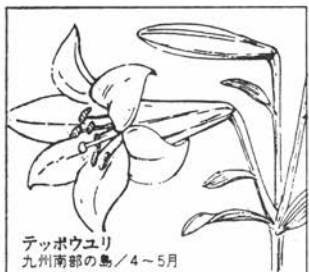
東京・日本橋
振替:東京7-5番

山と溪谷社の山岳図書

登山者のための 気象学 山本三郎著 780	新版登山者のための 地形図読本 五百沢智也著 1200	現代日本の岩場 第二次RCC著 1200	現代ロッククライミング 小森康行著 2500	画文集山の独奏曲 串田孫一著 800	佐貫亦男のアルプ日記 佐貫亦男著 800	グラントジョラス北壁 小西政継著 950	北壁の四十二日 遠藤二郎著 950	マッターホルン北壁 小西政継著 950	日本アルプス 特選100コース 山と溪谷社編 5000	ゼクラン山群 G・レビユファ 近藤 等訳 7800	モン・ブラン山群 G・レビユファ 近藤 等訳 5300	星にのぼされたザイル G・レビユファ 近藤 等訳 7000	ヒマラヤ・トレッキング 五百沢智也著 4800
------------------------------------	------------------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------	----------------------------------	------------------------------------------	-------------------------------------------	---------------------------------------------	-----------------------------------------------	--------------------------------------

バックパッキング入門 菅沢一洋著 1500	クライミング ウオグ・ク ダク・スコット著 岡本信義訳 5800	ザイルを結ぶとき 奥山 章著 950	北壁に死す 原 武 著 750	風に賭ける J・グレイン 吉富 亨訳 980	マカルー西稜 R・バラゴ/Y・セニ ユール 小野尚俊訳 1800	嵐の大地 田村協子訳 1200	第7級 極限の登攀 R・メスナ 横川文雄訳 850	高所医学 M・ウオード 御手洗玄洋十中島寛訳 4500	高所登山研究 日本山岳会編 3000	世界山岳百科事典 山と溪谷社編 3800	イラスト登山入門 横山厚夫・文 松村 充・画 1200	登山読本 横山厚夫著 680	登山者のスケッチ入門 山里寿男著 2200
------------------------------------	-----------------------------------------------------	---------------------------------	------------------------------	----------------------------------------	--------------------------------------------------	------------------------------	----------------------------------------------	---------------------------------------------	---------------------------------	-----------------------------------	---------------------------------------------	-----------------------------	------------------------------------

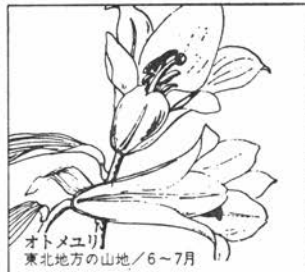
日本全国で 一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月



オトメユリ
東北地方の山地／6～7月



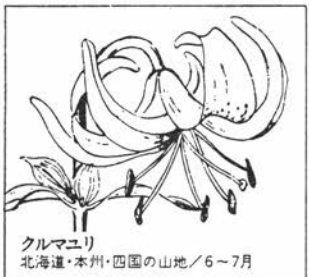
ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月



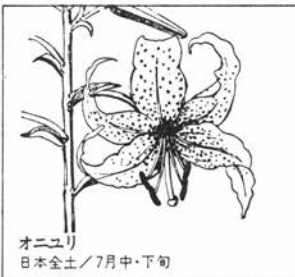
イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上～下旬



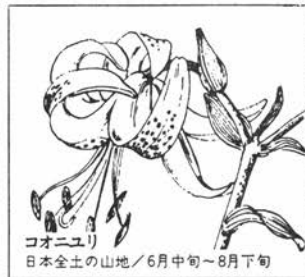
ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月



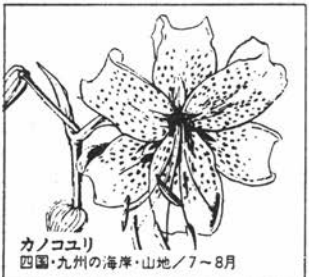
クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月



オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余の店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。

 **協和銀行**

山の本

詩集 山の風物誌 伊藤秀五郎 1,400円

北の山 続篇 伊藤秀五郎 2,700円

マナスル1974 一日本女性マナスル登山隊報告書一
同人ユングフラウ 3,400円

山を見る日 川崎精雄 2,900円

グリンデルヴァルトの山案内人 サミュエル・ブラーヴァン
井手貞夫訳 3,800円

エーデルワイスの詩^{うた} 坂倉登喜子 2,400円

低山高蹤 一神谷恭遺稿と追悼一 2,900円

続ブータン感傷旅行 小方全弘 1,500円

山・人・本 島田 巽 2,400円

山は満員 渡辺公平 2,200円

わたしの草と木の絵本 坂本直行 1,200円

山・原野・牧場 一ある牧場の生活一
坂本直行 1,500円

開墾の記 坂本直行 1,400円

森林・草原・氷河 (第二版)
加藤泰安 2,500円

山に忘れたパイプ (第二版)
藤島敏男 3,200円

遠い山 近い山 (第二版)
望月達夫 1,500円

山日記 一1977年版一 日本山岳会編 950円

■出版目録送呈■お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。

茗 溪 堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1
電話03-291-9442 振替東京8-24723

〔編集後記〕『山岳』第七十年をおとどけたいします。本号は、日本山岳会創立七十周年の年次晩餐会までに完成する予定でおりましたが、もろもろの事情から大幅におくれてしまい、申訳なくおもいます。玉稿をおよせくださった執筆者の方々ははじめ、会員諸氏にふかお詫びいたします。『山岳』編集の前任者望月達夫氏より編集担当をいいわたされてから三冊目にあたりますが、私個人の身辺の変化、編集スタッフの繁忙など、さまざまな要因がかさなって、ついに年をこしてしまいました。

幸甚と存じます。本号では「日本山岳会の戦後三十年」の記録をまとめるべく、望月達夫、折井健一、浜野正男、山崎安治、金坂一郎、松田雄一の諸氏に御出席ねがひ、座談会をひらきましたが、時間的な不足から次号まわしとなりました。

昨春、この記念号のために投稿をのりましたところ、六篇を得ました。おもいのほかわずかな数にすぎませんでしたが、研究・翻訳・紀行などがあって、会員諸氏の山によせる熱情の一端を知ることができました。本号では新井清、柴崎徹二氏のエッセイを採用しました。『山岳』というと、なにか肩をいからしたような、公式的な文章が多いのですが、山と山にまつわる一切のものについて、自分自身の表現を試みてほしいと願ってやみません。その点、松永敏郎氏の「空にただよう峰」はすぐれた登攀紀行としておもしろく読みました。

日高信六郎氏から二つの原稿をいただきましたが、はからずも絶筆となりました。

(近藤)

山 岳 第七十年 (通巻二一九号)

一九七六年十二月二十日発行

価三〇〇〇円

発行所 社団法人 日本山岳会

東京都文京区湯島一ノ六ノ一
さくらビル内 一―一三

電話東京八一三局二二八六番
振替 東京 四八二九番

発行人 今 西 錦 司

編集人 近 藤 信 行

〈編集委員〉 山崎安治・金坂一郎

中島 寛・山本良三・雁部貞夫
節田重節・高遠 宏・近藤信行

印刷 株式会社 技 報 堂

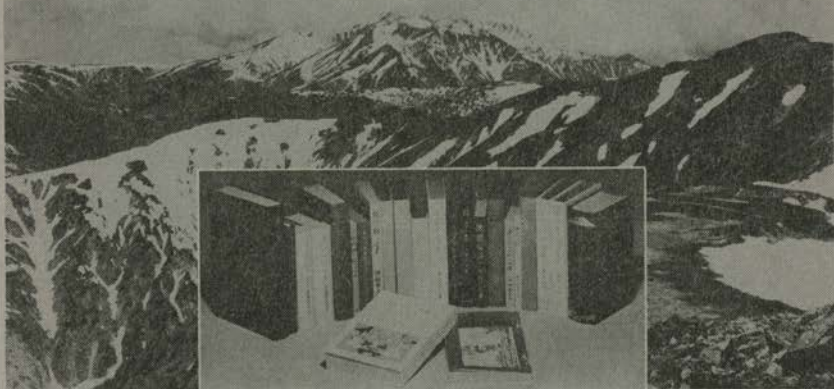
発売所 株式会社 茗 溪 堂

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
電話 東京二九一局 九四四二番
振替 東京二四七二三番

覆刻 日本の山岳名著

企画・編集 日本山岳会

●日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著



推薦者

● 遠い青春との再会
井上 靖

● 登山の気風を伝える
車田 琢一

● 全活人の期待と喜び
渡辺 公平

● 時宜を得た急ぎ深い仕事
西畑 栄三郎

- 1 志賀重昂 「日本風景論」……………明治27年
 - 2 高頭 式編 「日本山嶽志」……………明治39年
 - 3 小島 烏水 「日本アルプス」全四巻 ……明治43年
 - 4 鹿子木員信 「アルペン行」……………明治44年
 - 5 田部重治 「日本アルプスと秩父巡禮」…大正3年
 - 6 横 有恒 「山 行」……………大正4年
 - 7 冠 松次郎 「黒部巖谷」……………大正8年
 - 8 大島 亮吉 「山と研究と随想」……………昭和3年
 - 9 板倉勝宣 「山と雪の日記」……………昭和5年
 - 10 藤木九三 「雲岩・アルプス」……………昭和5年
 - 11 武田久吉 「尾瀬と鬼怒沼」……………昭和5年
 - 12 辻村伊助 「スウイス日記」……………昭和5年
 - 13 辻村伊助 「ハイランド」……………昭和5年
 - 14 小島 烏水 「氷河と萬年雪の山」……………昭和7年
 - 15 伊藤秀五郎 「北の山」……………昭和10年
 - 16 今西錦司 「山岳省察」……………昭和15年
 - 17 Walter Weston: Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps, 1896 John Murray, London
- 別巻 木暮理太郎「山の憶ひ出」増補版 全二巻
解題書(A5判二七〇頁) 斯界研究者16氏共同執筆
■全18点22冊 付・解題書(全巻一括記本)
特典 特別資料II 日本山岳会会報第一号(昭和5年)
第一〇〇号(昭和15年) 覆刻合本進呈

■現金価格190,000円 ■10ヶ月割賦価格204,000円 ■24ヶ月割賦価格223,000円 (割賦価格は実質) (年率15.75%)

The Journal of
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. LXX 1975

